
真剣で兄貴を愛しなさい！

ガン = カタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で兄貴を愛しなさい！

【Nコード】

N8453Q

【作者名】

ガン⇨カタ

【あらすじ】

過酷な放浪の旅から帰国しても、彼の生活は何ら変わる事の無いデンジャラスな物だった。これはオリ主が百代の行動に頭を抱えながらも、川神学園の保険医として学園に尽力する話。章タイトルを付けてみました

第壹之巻「感動の再会を体験す」（前書き）

生徒視点で見ることが多かった川神学院を、教師視点で見るとどうなるのか。

そこに着眼してこの二次創作を書いてみました

感想、宜しくお願いします

4 / 09 修正しました

第壹之巻「感動の再会を体験す」

第壹之巻「感動の再会を体験す」

轟音が鳴り、まるで雷の様に鋭い”何か”が人へと放たれる。
既に視認すら困難な拳が人の限界すら超えて、一種の神の領域
こう側 へと飛び抜けてしまった様な”それ”を放った少女 川
神百代は拳を放った相手を強く睨み付けた。

いつも飄々として居て、何を考えているかも分からないヤツ。
それでもじじいはその子を気に掛け、毎日の様に話しかけている。
それが子供ながらにムカついた、許せなかった。
ある種のヤキモチしていたのである。

(ブッ飛ばす)

小さな子供である百代が考えるべき内容では無いが、彼女の中身は苛烈なソレだ。

気に入らなければブツ飛ばすし、気に入ったなら寛大に。

まさに姉御肌と言えるべき人材の彼女を前に　その居候は淡々と言い放った。

『汗くさ……』

顔を顰め、鼻を摘み、嫌悪感すら剥き出しにした表情を前にして、中身が野獣だろうが何だろうが性別は正真正銘の女の子である百代はブツツンしちまったのである。

それでも何とか道場の中で、試合と言う形に持ち込んだのは子供の残虐さ故か。

ジジイの見ている前で恥をかかせてやる、そんな邪な気持ちを抱いていた。

そして、話は冒頭へと戻る。

振り被られた拳に反応する事も無く、拳は吸い込まれる様に顔面へと食い込んだ。

大の大人ですら一撃で陥落せしめる拳をガードもせず顔面にモロ。百代は口の端を吊り上げる。

勝った、と。己の勝利で総て終わりだと思い

ポリポリと頭を？いて困り顔をするソイツと、目が合った。

その事に目を見開き、驚愕にすら値する事実には背筋に薄ら寒い物が奔る。

顔面に拳を食らっても、ソイツは痛みすら感じていないと言うのか。まさか、効いていないと言う事は無い。だって確かな手応えがあったし、何よりも百代の全力なのだ。

血すら流さないとは、如何言う事だ。

「……おじき」

戸惑う百代とは別に、打ち込まれた側は焦る事も無く心底呆れた様に呟いて、ソイツは私の拳をゆっくりと自分の顔から離す。顔面のだ真ん中を射抜いた筈が、顔の形は変形していない。当たり前前の様に聳える鼻に、無性に腹が立った。

「何だよ、今の！ もう一回やらせろー！」

「今のお前じゃ何度やろうがオレには勝てん。黙って稽古しとれ」

おおさぶい、等とわざとらしく身震いしてソイツは道場を後にした。残された百代が、気に入らないと言う様子でその場に残っていた爺川神鉄心を睨む。顔面ど真ん中を射抜いた渾身のストレートが通じない、それは如何言う事か。

百代の顔がありありとその事を語っていた。

「殴る瞬間、お主の気の流れを変えて、拳の威力を無くしたのじゃな」

「気？ アイツ、そんな事出来るのか」

「元々は医者の子じゃ。父が死に、身寄りが無い所をワシが引き取った」

それから語られたアイツの父と過去の話。

医者の家計として代々繋いでいた【南波】の家。

そして、【南波謙信】の父も優秀な医者だった。だが、己の妻が病で死に、その際に無力だった己の腕を呪い 長く険しい修行の旅

に出たと言う。その際に各地で色々な者と出会い、そして磨き上げた癒しと殺しを伴った世界で最も美しい武、南波流を生み出したとされる。

人の中に流れる気力を己が操ると言う特殊な武である為、それに対抗出来る武は今の所は数える程度しか無いと言う。

そして老衰した謙信の父に代わり、じじいがまだ幼かった謙信を預かったらしい。

それに、とじじいが付け加えて言う。

南波の薬は大変効果が良く、あらゆる傷もたちどころに治してしまう。

南波流も元来は人を癒す為の武だった為に、傷の回復促進など色々な事が出来ると言う。

「南波には神が宿る。あの子の身体にも、わし等では計り知れぬ力が眠って居るのかも知れん。それに、謙信はお主のことを大層気に入っておる」

「アイツが？」

「うむ。『頑丈バカも此処まで来れば、寧ろ美德やの』と」

「あのヤロー！」

その後、道場を出て行った後を超特急で追い掛ける百代。

案外と謙信は直ぐに見付かり、その場で背中に全力のドロップキックを放つ。

あまりに急な事で驚いたのだろう、謙信は前のめりに倒れ込み、その場で何度も咳き込むと己の背中を蹴り付けた百代にウンザリした様な表情を向けた。

「何のつもりじゃ!」

「おい、謙信! 1つ約束しろ!」

ビシリと指を向けて、顔を顰める謙信に百代は堂々と言い放った。
長く、長く、長く続く2人だけの秘密と約束。子供2人の、大事な約束となる。

「私は世界で一番強くなる! だから、お前は世界で一番凄い医者になれ!」

「……はあ?」

もしかしたら、悔しかったのかも知れない。

強くなりたいと願い、鍛えた己の武が意図も容易く破られてしまったという事実が。

だからこそ、せめて相手が世界一でなければ自分を納得させる事が出来ないのだ。

自分の武は この程度では無い、と。

私が世界で一番強くなるから、お前も世界で一番になれ。

もう一度、その言葉を繋ごうとした時、目の前で謙信は腹を抱えて大笑いを始めた。

いつも無口で無愛想なコイツが腹を抱えて笑う姿に呆気に取られたが、笑われて居るのが自分だと気付いて、拳を振り上げる。

「笑うな!」

「面白い女子なの、お前。喧しいだけの小童とは桁が違う」

一頻り笑い終えたのか、まだ肩をピクピクと震わせながらも謙信は顔を上げる。

目尻には涙を浮かべては居たが、その顔は今まで見た事も無い程に穏やかで、優しい物だ。

「分かった、約束だ」

「おう！」

川神の娘、川神百代。総ての者の頂点に立つ、究極の武を目指す少女。

南波の息子、南波謙信。総ての病を切り払う、神の手を目指す少年。2人の友情物語は、此処から幕を開けたのだった。

「と、言う訳だ」

「そんな優しい話では無かったがね」

悦に浸る2人を他所に、他の少年少女　風間ファミリーは困惑して居た。

頼れる姉貴分である百代が突然大声を出したかと思うと、見た事も無い男に突っ込んで行ったのだ。流石に驚きを隠せないでいる。

それもそうだ。まさか、百代にこんな友人が居るとは思いもしなかったのだから。

半袖の黒シャツ。

少しばかり目深に被った帽子。

ダメージジーンズ。

右肩から垂れ下げたバックはパンパンに膨れ上がり、パツと見ただけでもそれなりの重量を伴っている事が分かった。

「久しぶりだな、ヤマ坊。それにシヨウにワン子、京も相変わらずだし、モロ助だって」

そんな男が、人の良さそうな笑みを携えて笑顔を浮かべる。

だが、だがだが、こう言っただけでも誰もその顔を覚えている者は居なかった。

そう言えば居た様な、そう言えばあの時……そんな具合である。

「仕方ないかな。昔は眼鏡だったから」

ちょっと寂しそうにしながらも、嘗ての友人（仮）に会えた事が嬉しかったのだろう。

謙信は手に持った土産袋を各々に配っていった。

眼鏡で、鈍りで、モモ先輩の友達で、お兄ちゃん的なポジションの

ああそう言えばいたなあ……
そんな事を頭の中で微かに思い浮かべ、そして気が付いた。

『ったく。シヨウ、お前は少し喧しかとよ。周りの事も考えてみる』

『ん？ 医学の勉強さね。ヤマ坊が怪我をしても良い様に』

『ワン子は偉いな。オレもワン子みたいに一生懸命やりたかとよ』

『モロ助。変な事せんと、元気に遊んで来い。皆待つとるよ』

『ガクト。身体が強くとも人は寄らん、大事なのは心さね。お前も
中身を鍛えるさ』

『京も一緒に遊べん様になると良かね。オレも、暇が出来たら協力
するさ』

「……………」
ケン兄ちゃん!!!!!!!!!!!!!!」

ほぼ全員が同時にその結論に至ったのか、見事なハモリだった。

そんな風間ファミリーの様子を見て感動したのか、感極まった謙信は両手を広げてLOVE YOUアピール。そんな彼の胸の中に真っ先に飛び込んだのは、キャップだった。

「久しぶりだなあつ、兄ちゃん！」

「ショウ、お前も大きくなったな……背も伸びたし、身体付きも確りして居るし」

バンドナの上から何度も何度もキャップの頭を撫でるその姿。

それを見て、大和も漸く確信する事が出来た。

この風間ファミリーのキャップが最も懐いていた人 南波謙信。

皆は彼をケン兄ちゃんと呼び、どんな怪我でもたちどころに治してしまう兄ちゃんを慕っていたのだ。多分だけでも、あの京と最初に会話をしたのだって兄ちゃんだ。

「久しぶり、ケン兄ちゃん」

「ああ久しぶり。モロ助、変な事は控え目にしろよ？ ホルモンバランスが崩れるぞ」

「久しぶりだな、兄ちゃん！ 10年ぶりくらいか！？」

「大きくなったな、ガクト」。少し見ない内に随分とガツチリした身体になった」

「久しぶり……お兄ちゃん」

「そうだな、京。ヤマ坊は陥落出来たか？ 子供が出来たか如何かチエツクする時はオレの所に来い。3秒以内に男か女か含めて判断してやるから」

「おにいさま あああ！」

「ワン子、会いたかったぞ！ お前は昔から真つ直ぐだったからな、こんな立派に成長してくれて、兄ちゃんも嬉しいよ」

その感触を確かめる様に、1人1人を強く抱き締める。

誰もそれを嫌がる事が無く、寧ろもつともつと駄々を捏ねる子供の様に謙信に抱き付いていった。謙信自身もそれを鬱陶しがる事無く、1人1人を愛おしそうに抱き返している。

「ヤマ坊、お前も随分と大きくなったな……相変わらずコイツ等は元気か？」

「うん、元気だ。久しぶり、ケン兄さん」

そして 直江大和もその1人だった。

いや、実はキャップ以上に謙信に懐いていたのが大和だったのかも知れない。

年上だからと言って威張る事も無く、1日中走り回るファミリーの面倒を見て、時にはちよつと辛口な事を言ってくる謙信を、大和は尊敬して居たのだろう。

「皆元気だな。健康そうで何より だっ！」

ガンツと鉄と鉄がぶつかり合う様な音が辺り一体を揺らす。見れば、謙信の右腕には全力で振り切ったのだろっ百代の美しい右足が受け止められていた。不良ですら一撃で粉碎する剛脚、それを受けても尚涼しい顔をして居られる。

「世界一への前哨戦だ。少しばかり戯れてやるぞ、モモ」

「お前こそ、南波流が鈍っていないか確かめてやる」

謙信の右腕を蹴り、大きくバツク宙。

華麗に地面へと着地すると、強く 強く拳を握る。

それに中てられたのか、謙信も口の端を歪めて旅行バツクを地へと放った。

「はっ！！」

「ふっ！！」

百代の拳を掌で捌き、返しの拳が顎を狙う。が、身体を捻る事でそれを回避し、返礼とばかりに返された回し蹴りが腹部を強襲する。無論、それが決定打にならない事などはお互いに百も承知の事だ。気の流れを変え、足から来る衝撃や威力を緩和し、自身の身体へと響くダメージを0にする。そして、此処から新しい南波流の一手。

「そらっ、返すぞ！」

「おっ！？」

百代の足の気を乱し、神経伝達を掻き乱す。

脳から送られる『動け』と言う命令を阻害した事で、百代はアツサリと膝を付いた。

別に、彼女程の腕があれば気合とか何とか言っつてこんな子供騙しすら無力化しそうではあったのだが、今回の戯れにそこまでする必要は無い。

「拳が鋭くなった。強ち、最強と言つのも嘘では無いか」

「南波の武、やはり強い。まさか触れただけで気まで乱されるとは驚きだ」

謙信が百代の肩に軽く触ると、それまで折れていた筈の膝が嘘の様に立ち上がる。

南波の拳は癒しの拳。

最早それが当たり前となった百代としては、それを今更とやかかく言う事は無い。

だが、見慣れていない者にとっては別だ。

「やっぱりケン兄ちゃんだああああああああつ！！！！！！！！！！」

「そうやって簡単に治しちゃうところとか、懐かしいなあ」

「流石は兄ちゃん！ それなら女子にもモテモテだな！」

「お疲れ様、お兄ちゃん」

「お兄様、私とも！」

「よくよく考えると凄いやなあ……姉さんと打ち合うなんてさ」

ワイワイガヤガヤと騒ぎ立てる後輩達を前に、謙信は満面の笑みを浮かべた。

そんな彼の表情を見て、百代は思う。

昔に比べて、本当に良く笑う様になった。それも全ては、この風間ファミリアがあつたからこそ。謙信にとって、この風間ファミリアは大切な

「モモ、飯でも食いに行こう。久しぶりに蕎麦でも食いたい」

「ん？ ああ、今行く」

大切な、居場所なのかも知れない。

男女問わずとは言え、流石に8人も人数が並ぶ訳にもいかない。と言う訳で奥の部屋へと通され、何故かは知らないがそこで10年もの間連絡すらせずに世界中を歩き回っていた謙信を問い詰める作

業へと移行して居た。

謙信は、膝の上でゴロゴロと転び回る一子の頭を撫でて居た手を止めて、何かを思い返す様に深く目を閉じた。

10年

世界中のあらゆる場所を巡った。

有名所ではアメリカやイギリス、オーストラリアやブラジル。

他にはイランにイラク、アフガニスタンにも足を伸ばしたし、中南米は殆ど自分の足で制覇したと言っても差し支えは無い。

勿論、旅の中で危険な事は沢山あった。

地域の紛争に巻き込まれ、流れ弾が飛んで来る戦場のど真ん中を突っ切る事もあったし、病気の子供を背負って数十キロ先の病院にまで歩き通した事だってあった。

追い剥ぎに遭遇した時は、偶然通り掛かった行商人に助けて貰った事だって。

「まあ、基本は紛争で怪我を負った子供の怪我の治療が主だったな」

何を話して良いのか、何を伝えるべきなのか。

今のオレには今一つ分からない。だが、一つだけ分かり切っている事もある。

こんな平和な国に居る彼等にこそ、紛争地域の子供達がどれだけ苦しんでいるのか知って欲しいと、心の何処かで願っている自分があった。

結局、それだって押し売りに他ならないと言うのに。

「あまり重い話をするつもりは無いが、兎に角オレはもつと視野を広げるべきだった。10年間歩き続けて、そう思ったよ」

「いや、向こうで知り合った人のコネ。良い人だったぞ、見掛けは恐ろしいが」

楽しみに百代との談笑をする謙信を完全にシャットアウトし、各自が色々な反応を示す。

が、結局はどれも残念に思うと言う共通意思があったのは確かだった。

子供の頃からの兄貴分と共に学生生活を送れる、そう考えて浮き足立っていた彼等にとっては大きな痛手となっただろう。

「そう言う訳で、仮の保険医と言う形で川神学院に赴任する事になった」

とは言え、決してそれが出来ない訳では無い。

一応書類上は教師と言う形になるのかも知れないが、それでも彼等の兄貴分が赴任すると言う事に何ら変わりはないのだ。

先ほどの鬱蒼とした雰囲気から一転しての、狂喜乱舞。

その変わり様を見せ付けられ、思わず百代に「コイツ等ってこんな奴等だったか？」と聞き返してしまっただが、「こんな奴等だ」と笑い返されて何も言い返す事が出来なくなってしまった。恐るべき女性の笑顔、何処の国に行こうがそれは変わらない。

「あつ、そうだ。ケン兄ちゃんって何処に住むの？」

「ああ住む場所か？ 本当ならおじきの世話になる所だが、まあその……何だ。諸事情があつて、学生寮に住む事になった」

「諸事情？」

「旅をしている時に世話になった人の上司の娘さんが日本に来るら

しくて……その世話」

「女？ 美少女？」

「女だ。だが他の事は全く分からん。会った時からもう何年も経つ」

「うおおおっ！ 俺様にも春到来！」

食後の緑茶に舌鼓を打つ謙信を他所に盛り上がる周りのファミリーたち。

そんな仲間達の顔を見る謙信の顔は何と言うか、困ったと言うよりは疲れたと言った感じにすら思える。つまりは　　そう言う人なのだろう。

「まあ彼女が来たら、仲良くしてやってくれ。根は良い子だから。少し堅物だが」

困った様に笑った後、謙信が席を立った。

百代もそれに釣られて席を立つ。どうせ、謙信はこの後に鉄心の下へ向うのだから。

だったら付いて行っても何の問題も無いだろう。と言うか、無理矢理でも付いて行く。

「勘定はオレが持つから、お前達も気を付けて帰れ。特に京、お前はヤマ坊にラブコールしている最中に誰かと衝突、なんてベタな展開を起こさない様に」

「その時は大和が助けてくれる。大和、愛してる」

「救助活動も交際も遠慮する」

バツサリと切り捨てられようと、そんな大和も素敵などと言つてのける京を見て居ると、彼女も随分と豪胆に育つたものだと感心すらしてしまう。

昔のジメーツとした雰囲気は形を潜め、ファミリーと仲良く談笑するその姿は謙信が求めていた彼女にとつての救いなのだろう。

恋とは、人を此処まで変える事が出来るのか。

謙信は1人、考えてしまふ。こんな自分にも 愛する人は出来るだろうか、と。

「おい、如何した？」

「あ、いや、何でも無い。おじきの所に行こうか」

「じじいが喜ぶぞ。アイツ、お前のこと大好きだからな」

「安心しろ、おじきの1番はお前だよ」

「安心しないぞ、それ」

愛する人なら、もう居る。

ヤマ坊も、

シヨウも、

モロ助も、

ガクトも、

ワン子も、

京も、

そして百代だって、

謙信が心の底から愛するべき大切な人たちだ。掛け替えの無い、大切な宝物だ。

そんな自分の意思とキチンと向き合って、そして誇る事が出来る様になるにはまだ少しばかり時間を要するのかもしれない。

「あつ、アタシも行く!」

「ワン子、鍛錬は良いのか? 別にただおじきの所に行くだけだから、お前まで付き合う事は……いや、良いか。そうだな。ワン子も一緒に行こうか」

百代が立ち上がるのを見て、自分も付いて行きたくなつたのだろう。自ら名乗りを上げるワン子を見て、最初こそ戸惑いすら隠せなかつた謙信だが、折角帰国

したのでからもう少し彼女達と話してみたいと思つたのだ。快くワン子の同行にも頷いてくれた。とは言え、菓子も一つも持つて行かず鉄心の下へ赴くのも失礼と言うもの。

もしも、彼女等が「ついでに」なんて言つて物をせがもうと無視しよう。

ならば膳は急げ。

そう言わんばかりに、謙信は蕎麦屋から駆け出した。

その後を追い掛けるのは、川神百代と川神一子。

そのどちらもが南波謙信にとっては世界で一番を誇る、最愛の家族である。

多数の門下生を抱え込む、川神の道場。

その師範代であり、武道家たちに恐れられる存在こそ川神鉄心である。

孫たちを溺愛するその姿からは想像すら出来ないが、その実力は未だに衰えていない。

「うむ。無事に帰って来おったか」

「久しぶりさね、おじき」

ファミリーと会話していた時とは違う、リラックスした謙信の表情その為なのか、口調も昔と同じく訛りが混じったそれへと変化して居た。彼にとって鉄心とはそれ程に安らぎを与えてくれる存在なのだ。

「九鬼の連中に喧嘩を吹っ掛けたと言われた時は流石に冷や冷やしたのう」

「オレは降り掛かって来た火の粉を払うのに必死だっただけさ、おじき」

「それで揚羽と一戦交えるとはのう……恐ろしい孫じゃわい」

「ありやダメだ！ 化物だ、生きた伝説だ、怪物だ！ 危うく死に掛けたわい……ッ！」

「フオツフオ。向こうも大層お前を気に入って居ったぞ」

それを聞いただけで寒気すらしたのか、謙信は一度大きく身震いをした。

あんな 挨拶から殲滅へと脳内思考がシフトする化物とは拳を交えたくは無い。

まだ百代の方が、話を聞いてくれる分だけ彼としてはやり易かった。

「しかし お主も強くなったのう」

「そう易々と分かるものかのう？」

「孫の気を違える事はせん。小さな頃は未だに開花せんかった蕾が、今や花開いておる。美しいのう、南波の気は……この世で最も美しい」

「おじき。百代に聞かれたらまた面倒事になるさね」

「孫の力を見るのも、また親の責務よ。如何じゃ？ 打ち込んでは見んか？」

「……………いや、遠慮するさ」

「ほう、何故？」

鉄心は先程まで漏れ出していた鬨気を消して、分かり切った様な顔

をしているクセにそれでも尚、謙信に問うた。何故打ち込め無いか。ただそれだけを。

「おじきに振るう拳をオレは持つとらん」

「……出来た孫じゃわい」

当然だと言わんばかりに胸を張る謙信と、そんな孫の姿を見て頬を緩ませる鉄心。

血こそ繋がっては居ないものの、そこには確かに親子の情が存在していた。

謙信は自分を此処まで育て、我俣まで聞いてくれた鉄心に心の底から感謝しているし、

鉄心も同じ様に、百代を此処まで鍛え上げる事に協力してくれた謙信に感謝していた。

血の繋がりなど然して問題では無い。

此処で問題になるのはお互い、家族として愛し合っているのかどうか。

その点では、この2人に問題など全く無かった。

「百代たちを待たせるのも悪いさ。それじゃ、また今度」

「寂しくなったら帰って来い。お主1人を受け入れる事など、容易いわい」

「何から何まで本当にありがとう、おじき」

深く、深く一礼をして、謙信は鉄心の下を去った。

これから学生寮で生活をするしか無いと言つので、如何にも不安が拭えなかったがアレは百代とは違って精神面まで確りと出来た子だ。

何か過ちを犯す事も無いだろう。

鉄心は特に心配する事も無く、謙信の持って来た菓子折りを開けてみる。

中には、豪華な包みに包まれたどら焼きが入っていた。

登場人物紹介

南波 謙信

武士テーマ「護」 - 誰かを護る慈愛の心

身長183cm

好きな食べ物 食べられるのならば何でも

好きな飲み物 リポビタンD、酒

趣味 瞑想、読書

特技 百代のストッパー、日曜大工

大切なもの 風間ファミリー、百代、一子、鉄心

苦手なもの 百代、マルギツテ、九鬼揚羽 特に毛嫌いしている

もの 釈迦堂刑部

尊敬する人 川神鉄心、ブラック・ジャック

性格はサバサバとしていて、カラツとした青年。

”助ける”や”救う”と言う事に固執した、少々歪な生き方をする。保険医として、川神学院に赴任した。

現在は川神学院の保健室で日夜雪崩れ込む怪我人たちの世話に手を焼いている。

とは言え、人の悩みを熱心に聞く姿から人気はあるので保健室から人が絶える事は無い。

風間ファミリーの中では達観した意見を持っており、自分を第三者としての意見を述べる事が多い。キャップ曰く、「頼りになる兄貴分」。そんな風間ファミリーのメンバーを独特な仇名で呼ぶ事が多く、最後に「助」や「坊」と付ける。

攻めの百代に対しての護りの謙信として、昔から競う相手として何度も衝突しあった。

お互いに手の内は知り尽くして居るが、それ故に何処まで成長するのか分からない百代を相手取る事にそろそろ限界を感じている事がこの頃の悩み。

そも、南波流には2つの流派があり、彼が最も得意とする流派は彼が最も忌み嫌う「殺し」の流派である裏・南波流殺人術。相手の気を乱し、一撃で死に至らしめる殺人拳法である。

それも自身であると受け入れては居るが、そんな自分に何処か嫌気すらさしているのかも知れない。

吉拾参話現在：

陽と陰の気を操る事が可能になった。

それにより、周辺から気を根こそぎ奪い尽くす強奪と歪な形で物を再構築する再生を覚える。がしかし、自らの意思でコントロール出来る程に生易しい物では無く、それを振るえば周りに少なからずとも被害が発生する。

何故謙信がこの2つの気を持ち得るのか、現段階ではそれを知るの

は鉄心や釈迦堂など川神院に籍を置いていた僅かな人間のみである。

因みに座右の銘は「なんとかなる」

口癖も「なんとかなる」

第壹之巻「感動の再会を体験す」(後書き)

アニメ化、続編決定

そう聞いたら自然と書いていました
駄文だとは思いますが、今後ともよろしく願います

第貳之卷「己が隣にこそ不幸は居合わせるもの也」(前書き)

今回の話の概要

- 1 ・謙信がまゆつちを気に掛ける
- 2 ・百代、河川敷でバトル
- 3 ・モ口連れ去られる
- 4 ・事件解決時、クリス登場

4 / 0 9 修正

第貳之卷「己が隣にこそ不幸は居合わせるもの也」

第貳之卷「己が隣にこそ不幸は居合わせるもの也」

今日から通う事になる川神学院。

謙信は新加入の保険医としてそこで実習をする事になるのだが、それにしたって今朝の謙信のテンションは異様な程に低かった。理由など1つしか無い。

そう言えば あの精神不安定移動型暴走戦艦MOMOMOと同じ学校に通うなど、如何考えても並大抵の精神では頭がブレイクする。過労する事は確実だろう。

「リポDだ」

そんな事で、冷蔵庫の中に常備してあるリポDストックの一本を口に含む。

因みに、謙信のリポDストックは常時100本程存在し、もしもそれが無くなった場合は禁断症状が出て、眩暈・嘔吐・吐血した後に暴走する。具体的に言つと、リポD制作会社ごとリポDを丸ごと買おうとする。世界中のリポDを己の手中に収めようとするのだ。

何と言つりポD愛。

いや、これは確かに中毒だった。

精神を落ち着かせ、学校に来て行く事になる仕事服に袖を通す訳だが、此処でも問題が生じてくる。もしも百代に破かれたら如何する？ その場合、あまり高い物を着て行くと言つ訳にもいかない。だが、人間と言つのは第一印象こそ大事にする生き物である。

だったら、少しは気張って高級スーツに袖を通すべきでは無いのか……？

「うむ……ヤマ坊たちと飯を食おう」

そんな考えをアツサリと切り上げて、謙信はポンと軽く手を打ち合わせて時間的に下に居るのである。大和の下へ向うべく部屋を出る。

此処 島津寮には大和やキャップ、京など風間ファミリーが暮らしている。

本来ならば謙信は別の寮を探すべきだったが、キャップの如何してもと言つ頼みを断れず、雪崩れ込む様な形で入寮する形になってしまったのだ。

その為に寮母である麗子さんには頭が上がらない状況が続く事になってしまった。

とは言え、謙信自身も大和たちと共に生活出来ると言つ事を密かに喜んでいたりはそののだが、そんな事を本人たちの前で言えばどんな事態になるかも分からない。

と言つ事で今の所は何も言わずに学生と共に生活出来ると言つ事を楽しんでいた。

「おはよう、謙信ちゃん」

「おはようございます、麗子さん。今日も今日とて貴方は美しい。求婚しても？」

「やだわ、私なんて捕まえてお世辞を言っても何も出ませんよ。朝食、1品追加ね」

階段下にてバツタリ出会った寮母である麗子さんに頭を下げ、朝の挨拶。

昨日の時点で大和からお世辞を言えと言われていたので、取り敢えず自分が思い浮かぶ最高の言葉を掻い摘んで会話してみたが、何と朝食のおかずを増やして貰えたらしい。

何と言う僥倖。

まあ別に、朝飯を食べなくともリポDさえあれば生きていけるのだが、そこを言うのは失礼と言うものだろう。

「おはよう、大和。昨日は色々ありがとう」

「ん。おはよう、ケン兄さん。麗子さんにはちゃんと言えた？」

「ああ、完璧だ。求婚した」

「うえっ」

「京、止めなさい。彼女は素晴らしい女性だ、何せ朝食の品を1品増やしてくれた」

求婚と言う言葉に反応したのか、明らかに気持ち悪そうに呻く京を

咎め、謙信は大和たちの隣に座ろうと思い、咄嗟に味噌汁を装っていた少年へと顔を向けた。

「おはよう、ゲンさん。昨日は荷物運びまでさせてしまつて悪かつたね」

「チツ……別に礼を言われる様な事じゃねえ。それよりそこ、アンタの席だぜ」

少年 源忠勝。

見かけ不良で言動最悪だが実はツンデレの少年と大和に吹き込まれ、会話してみたが謙信自身も成る程と忠勝の言動に納得してしまう。確かに言葉遣いは荒い。

見かけも、真つ当な生徒とは言い難い。

だが、その芯からは暖かな物を確りと感じる事が出来た。ツンデレと言う言葉は的確だ。

まあだからと言って、本人を捕まえて目の前で「ツンデレ乙」なんて馬鹿な事を言つつもりは欠片も無い。寧ろ、謙信にとっては可愛い弟が増えた様で嬉しかった。

「まゆちゃんも、おはよう」

「お、お、おは、おははは、おはようござい、ま……すっ！」

忠勝の許可を貰った為に、大和の隣へ腰を下ろし、目の前で此方を凝視していた少女 黛由紀江に頭を下げる。向こうからの返事も返つては来るのだが、その表情は硬く、口調も安定しない。推測でしか無いが、彼女は口下手なのだろう。

朝から大和たちの方へも視線を向けている辺り、友達にでもなりたいのに上手く言葉に出せないと言う事か。昔の京に少し似ている様

な気もする。

そして、謙信の悪いクセが此処で1つ。

何と言うか、こう言うタイプは放っておけないのだ。お兄ちゃんタイプとして。

「折角だし、まゆちゃん。学園までの道教えてくれない？」

「え!？」

「何だ、ケン兄さん。オレ達と一緒にじゃないの？」

「凄く嫌な予感がする。今日は百代が何か仕出かすぞ、ヤマ坊」

「うわっ……縁起でも無い」

「あ、ああああ、あの……わ、私がで、ご、ございますか……?」

「貴方でございます。今日はね、本当にコイツ等と行動したく無い。特に百代」

そう言つて笑いながら、自分の前にあつた牛乳に手を伸ばす謙信。

それを見て 穏やかにだが、京が笑つたのを大和は決して見逃さなかつた。

ああ、何かやりやがった。

直感的にはあるが、そう感じ取るには十分だった。

「牛乳なのに……辛い……?」

一気に白濁液を飲み込み、そして口の中に残る痺れに謙信は首を傾げる。

本人曰く憑喪神らしいが、そんな事は知らん！
如何考えても寂しさを紛らわせる為の芸風の一種にしか思えねえのである。

（そ、そうですね！ 此処で南波さんと友達になれば、きっと……
きつと！）

勝手に気合を注入する由紀江を見て、対面に座っていた謙信は静かに微笑んだ。

今日も今日とて、南波謙信は風間ファミリー+ のお兄さんをキツチリとこなしていた。

お兄さんを演じていて一番困るのは、どうやって弟分や妹分の性格を把握するのだが、そこは流石長年お兄さんを演じて来ている南波流の現・師範代。

僅かな行動や言動で、相手の性格を射抜き、的確な言動で相手を懐柔していくのだ。

寧ろ、洗脳では？

NO、洗脳。これは風間ファミリーの戦力増強なのです。

「キャップ遅いな。仕方ない、見て来るか……」

「いや、オレが行くよ。シヨウは中々起きないからな」

席を立とうとした大和を制して、変わりに謙信が腰を上げる。

昔からの馴染みだからこそ、こう言う時は良く自らが率先して行動する辺りは流石風間ファミリーの兄貴分。リーダーがダメな場合は、そこを自らの確にサポートするのだ。

「まゆちゃん、案内のこと考えておいてね」

「あ、は、ははは、はいっ！！」

さり気無く由紀江とも言葉を交え、謙信は未だに部屋に居るのであるうきヤップを起こしに食堂を出て行った。

その後、ライトセ バー的な物で斬り掛かれていたキャップと共に、クッキーに追い回される事になったのは言うまでも無い。

突然だが、南波謙信は料理が作れない。

正確に言つと、作れる事には作れるのだが決して人に振舞える程の物では無いのだ。

それを食べると誰かが倒れるとか、核爆発を起こすとか、ヴォルテツカー！ と言つ事は全く無い。ただ「ああ、うん、ご飯？ うん、えつと……普通」的な感想を返されるのがお兄さんのポジションの彼として如何しても納得が出来ず、それ以来料理を作る事を諦めていた。元々、自分は医師を目指すべき存在である。料理なんて出来なくても構いやしねえっ、と自分に言い聞かせて今日まで生きて来

ただ。

「へえ。じゃあ、料理出来るの？」

「は、はいっ！」

スーツ姿の男子と学生服の女子。

かなり異色の組み合わせではあるが、これでも歳は2つ程しか変わらない。

片や、口下手ではあるが現在は謙信の巧みとも言える話術で何とか円滑な会話をする事が出来ている薫 由紀江。

片や、そんな由紀江のフォーローに回っている南波 謙信。

本当ならば風間ファミリーの連中と共に登校して見たかったのだが、如何にも彼女の様なタイプを放って置く事が出来ずに現在は2人だけで登校中である。

「それじゃあ、オレも教えて貰うかな。……なんてね」

「あ、あの、私で良ければ！」

「そりゃ嬉しい。じゃあ、学校から帰ったら島津寮の台所使わせて貰おうね」

「はい！」

嬉しそうに表情を綻ばせる由紀江を見て、同じく表情を緩める謙信。傍から見れば仲睦まじく見えるそんな2人ではあったが、河川敷に通り掛った時にはそんな2人の時間も突如として終わりを迎えた。

ズドン

何とも恐ろしい音である。

そして、謙信はこの音を昔から良く聞いている。

何せ、共に生活して居た相手が日々この音を辺り一帯に響かせては
気に入らない相手をボコボコにしていたのだから。

「……………す、凄いい音ですね」

「……………ソウダネ」

今の謙信の目は、痛んだ魚の目よりも酷い。

白目が消え、目全体が黒一色にすら染まった様な 死んだ魚の様
な瞳を携えていた。

「御免ね、まゆちゃん。ちょっと付き合っただけでも良い？」

「え？ わ、分かりました」

ウンザリした様な表情を見せる謙信に驚きながらも、由紀江も音源
の正体を確かめるべく河川敷を下って行く。音源の下へ近付くにつ
れて、地面には一昔前の不良の様な姿をした少年たちが転がってい
た。

あまりにも無残なその姿を見て、哀れにすら思ったのだろう。

謙信が軽く地面をトンと踏み鳴らすと、呻き声が少しずつ小さくな
って行く。

「気を静める南波流の技だ。少し眠って傷を癒せ」

紡がれた南波流と言う単語

その一言に、由紀江は目の前に居る謙信が武道家だと言う事実を漸

く気付く事になる。

何せ、生活をして居る時ですら鬨気と言う物を纏っていないのだ。あれでは一般人と何ら変わらない。

だが、今は違う。

静かに揺れる草木の様に穏やかで、優しい気が謙信の身体から確かに漏れ出している。

癒しの技を極めた、世界で最も優しい武。

昔、彼女の父親から聞いた事のある武の名前も確か南波流だった。しかし、南波流は既に継承者不在で自然に消滅してしまったと聞いた筈だったのだが、こうして目の前で南波流の技を見せられては信じるしか無い。

謙信が歩く度に、喚いて居た筈の不良たちが静まり返って行く。痛みに呻く者、恐怖に慄く者、もう一度立ち上がるうとする者、総てが深い眠りへと落ちて行った。安らかな寝息を立てながら全ての不良が眠りに付いた時、漸く音源の正体が目の前に現れる。

「派手にやり過ぎたな、ド阿呆」

「謙信〜！ アイツ等じゃ物足りん、イッパツやろうぜ〜！」

「適当に女漁って、抱け。朝っぱらからお前の相手などしたくは無
いからのう……」

「うわ、つれない。何だよ、だったら……おっ、見慣れない顔発見
！」

「ひびっ！〜？」

「紹介が遅れたな。黛 由紀江ちゃんだ。お前、手は出すなよ」

謙信の影に隠れる様な格好になる由紀江を見て、表情を崩す百代。あの顔だ、どうせ謙信が何を言った所で話など聞きはしないだろう。このまま放つて置けば、謙信の目が届かない場所で由紀江の貞操が失われる気がする。

「……分かったよ、分かった。1分だけだ」

「それでこそ謙信！」

謙信が肩を竦めて百代と由紀江の前に立ちはだかると、それを待っていましたと言わんばかりに、拳に力を込める百代。

その姿を見て、ギャラリィからは黄色い歓声上がる。女すら抱く百代のファン、と言う事だろう。キヤーキヤーと喚く姿を見て、謙信は顔を顰めていた。

何とも世間とは理不尽な物である。

あれ程、彼女が欲しいと喚くガクトには誰も振り向かず、こんな存在自体が出鱈目の女にあんな数のファンが付く事になるとは。皮肉、それ以外の言葉が思い浮かばなかった。

謙信は買ったばかりのスーツを脱ぎ、ネクタイを少し緩める

「怪我人が出ても知らんぞ」

「大丈夫、大丈夫。そこは弟分が何とかしてくれるからさ」

その言葉通り、確かに河川敷のガードレール向こうに観客を整列させる大和に京とガクト、モロの姿が見える。気が付かなかったがファミリーの連中もこの場に来ていたのだろう。

ならば安心して拳を振るう事にだけ集中する事が出来ると言つもの

である。

「まゆちゃん、そこから動かないでね」

「え？」

その言葉を皮切りに、2名の壮絶な試合が開始された。

風さえ切り裂きながら轟く百代の豪腕を謙信が左腕で捌き、応酬の蹴りが顔面を狙う。

が、それさえ先読みして居たと言わんばかりのボディブローが確かに謙信の腹部を深く抉った。しかし、その身体は”く”の字に折れ曲がる所か、何事も無かったかの様に百代の襟首を掴み上げ、軽やかに放り投げる。

地面を抉りながら着地し、足の筋力を総動員した蹴りが今度は顔面に狙いを絞った。

その一撃は謙信も回避する事を選択。

自身の顔の横を通り抜ける脚を掴み、百代の身体を動けない様に固定した後、その胸部にそつと手を添える。

狙いは外れる事無く心臓の位置でピタリと止まっていた。

その姿はいつでも射抜ける、そう宣告している様にすら思えてしま

う。

「2054戦2054勝0敗0引き分け。今日もお前の負けじゃ、阿呆」

添えた手を退け、軽く百代の頭を小突く。

子供の頃と何ら変わらざる猪突猛進とも言える戦闘スタイルは謙信にとつては馴染みの物であり、それ故に見切り易くもあった。こんな軽い試合ではお互い本気にもなれないが、それにしだって百代の戦い方はあまりにも愚直だ。

それで勝ち抜ける相手は以外な程に少ないと言う事に、本人は気が付いてはいない。

いや 寧ろ、彼女にとってはソレが良いのかも知れない。

自由奔放で、何処までも愚直な姿があるからこそ、人は彼女に惹かれるのだ。

「まだやれるぞ〜！」

「知つとるわい！ じゃけん、お前と真面目に打ち合う訳にもいかんと」

思わず訛りが飛び出した事に、しまったと顔を隠す謙信。

何年経つても、思わず訛りが出てしまうクセは変わる事は無い。まだまだ精進が足りないと己に喝を入れ、埃の付いたYシャツを払いながら由紀江の下へ赴いた。

「ああ、ごめんね。待たせちゃって」

「南波……謙信……」

「ん？ オレの名前が如何かした？」

「い、いえ、し、失礼しましたあああああああつ！！！！！！！！！！」

深く一礼した後に、全速力で河川敷を駆けて行く由紀江。

その後ろ姿を見て、流石に失敗したかと自粛しながらもファミリ―の連中へと顔を向けた。

既にギャラリーは散っており、河川敷にはキャップとワン子を除くメンバーが集まっている。キャップは大方、何処かのコンビニで朝

食でも済ませているのだろう。

「朝から随分と……お前達も大変だな」

「いや、ケン兄ちゃんに比べれば全然だよ」

「兄ちゃんよあ、朝からあんな派手にやり合って大丈夫か？ 目え付けられるぜ？」

「生徒には舐められる訳にはいかん。歯向かうなら相応の態度で臨むぞ」

「でもケン兄さん、さっきの子って1年生の……黛さん、だっけ？」

「ああ。学校まで案内して貰おうと思ったのに、この快樂主義者の所為で水の泡だ」

「何だよー！ 別に良いだろー！」

じゃれ付く様に飛び掛って来る百代を軽くあしらいながらも、謙信は先程の由紀江の事を気に掛けていた。流石に、急にこの人数を前にしては緊張してしまったのだろう。

次こそは、と次回以降のプランを考えておく事にしよう。

ブツブツと呟きながら通路を風間ファミリーと共に歩くそんな謙信の背に、突如として何か莫大な質量を持った何かが直撃した。

まるでピンボールの様に弾かれ、そのまま大きく弧を描きながら

「お兄様、おはよう！」

「……兄ちゃんが川に落ちた

ッ！！！！！！！！！！

「！！！！」

「おお〜！ ナイスシユ〜」

「大和、綺麗な虹だよ。結婚して」

謙信は川へと吹き飛んだ。

そんな真似を曝した張本人であるワン子はと言うと、状況に付いて行く事すら出来ずにただただ呆然と首を傾げていたと言う。

仕立てたばかりのスーツは既にびしょ濡れ。

今から寮へと戻る訳にもいかず、謙信は仕方が無くYシャツ1枚で学校へ向う事となった。

それもこれもワン子の所為なのではあるが、彼女のじゃれ付きに耐えられなかった自分が悪いと勝手に思い込む事にしたのだ。そう思い込まなければ、公衆の目前で彼女の尻を出して、百烈叩きせねば気が済まないからである。

「タイヤ、タイヤ」

「やーい、タイヤ」

「タイヤ」

「ううっ……やめるよお、タイヤって言うなよおっ……」

それに、ワン子ならばキチンと罰を受けている。

大和とガクト、そして京によるタイヤコール（ワン子がタイヤを引き摺っていた為）によって、今にも泣きそうな面を曝しているのだ。これで尻まで出して百烈叩きした暁には、純情なワン子の心にトラウマを植え付ける事に繋がるだろう。

それはそれで、面白そうな事ではあるのだが。

公衆の目前で可憐なお尻を曝す少女と、そんな尻を百烈叩きする保険医。

何とイケナイ関係だろうか。

別に最初からやる気など無いが。寧ろ、そんな事をしようとする考えないが。

「おい、その位で止めておけ。これ以上は流石に見ていて不憫だ」

「お兄様ああ、ガクトが苛めるよ！」

「俺様だけかよ！？」

「モモ、欲求不満で学校に行かれても面倒だ。気の済むまでやってやれ」

い。人生棄てた物じゃない等と、ジジ臭いことまで考えてしまった。

「そう言えば、今日ドイツから転校生が来るらしいね」

「ああ、”彼女”のことか……大変だとは思うが、色々と手引きしてやってくれ」

ポリポリと面倒そうに頭を？きながらも、何処か懐かしそうな表情を浮かべる謙信。

何年もの間会っていなかった少女とまた再会すると言うのは、やはり何処か楽しくもあり、嬉しくもあったのだ。まあ彼女が来ると言う事は 驚くべき程に大多数の余計な荷物たちもくっ付いてくる事になるのだろうか。

「可愛い子だと良いなあ……」

ポコポコに殴られていた筈のガクト復帰。

流石は人間サンドバツクである。謙信も驚き半分、関心半分でガクトの傷を手当する為に傷口へと手を当てた。

「その場合は私が貰うからな！ 速やかに連れて来る様に！」

「姉さんは過剰なセクハラで日本のイメージを悪くしない様に」

「弟、最近やけに生意気だぞー！」

「ひいっ！」

続いての被害者は大和になった模様だ。頬つぺたを抓られる程度なので、ガクトに行った鉄拳制裁よりは幾分も優しいものがある。そ

の辺りは、弟分である大和を大切に思っている百代なりの気遣いな
のだろう。

此処まで来ると、逆にガクトが哀れに思えて来る。

まあ女好きのガクトには残念ながら謙信が付くと言う事で耐えて貰
うしかあるまい。

「しかし、モロ助にとっては僥倖だろう？ 相手は女だぞ」

「そりゃそうだ！ モロはムツツリだからな！！」

「まあそりゃそうでしょ。モロはムツツリだから」

三者三様の意見。

謙信は苦笑、ガクトは嘲笑、ワン子は微笑。

それぞれ”イイ”顔で振り向いた3人の視線の先には、既にモロの
姿が無い。

「たー、すー、けー、てー」

その変わりに聞こえるのは、車道から聞こえるHELPボイス。

バイクの轟音と共に遠ざかって行くそれを耳にして、誰もが首を傾
げた。

何故？ と。

そこで一応現状を確認すべく先ほどの人物が誰であるのか確認する
と、百代とガクト曰く喧嘩を吹っ掛けに来た”ちば”軍団の一員ら
しく、最初から倒れていた為に謙信の技も上手く決まらずに眠らな

かったと言つ事なのだろう。
つまり、詰めを誤ってしまった結果としてモロが連れ去られたと言
う事だ。

「仕方無い……ヤマ坊、あのバカの逃げた先は分かるか？」

「大丈夫、もう調べは付いたよ。アイツ、金柳街方面の脇道に逸れ
たみたいだ。

姉さんと京はこのまま直進。ガクトとワン子はこの先の3つ目の路
地を突つ切れ！

それから、ケン兄さんは」

振り向いた大和の先には、既に笑顔を携えた謙信が膝を折っていた。
乗れ、ただ背中だけがそう告げている。
そうだ。

昔から、謙信の背中は大和だけの特等席だったのだから。
確りと背中にしがみ付くと、一瞬だけ圧力を感じただけでそれ以降
は何とも気持ちの良い感覚が続く。浮遊感、とも言えるソレを感じ
ながら大和は眼下の路地を見下ろしていた。

「懐かしいな……」

「……うん。そうだね」

「小さかったヤマ坊も、今じゃ立派な軍師か。オレも乗り物が板に
付いたな」

「ははっ。兄さんみたいな乗り物、とてもじゃ無いけど乗りこなせ
ないよ」

2人が移動する場所。

それは、街にある多数の家屋の屋根の上。とても人を背負っているとは思えない速度でピョンピョンと家屋を飛び跳ねて行く謙信の姿は昔と何ら変わる事も無く、今日も今日とて背中に大和を乗せて、楽しそうに街を移動していた。

こんな所を誰かに見付かれば、通報されるかも知れない。けど、仲間の命すら掛かっているかも知れないとなれば話は別だ。例え警察を相手にしようと、一步も退く訳にはいかない。

まあ姉さんと兄さんは、並の警察官では止められる筈も無いと思っただけ。

「兄さん、見つけた!」

「あいよっ!」

眼下の路地には、現在ワン子と百代、そして京に囲まれている先程の不良がいた。

何やら光物まで飛び出して居り、モロの首に宛がわれる始末である。あれでは冗談を抜きにして、モロの命の危機では無いか。

十数m有ると思われる建物の屋根から飛び降り、謙信は己の踵を振り上げる。

不良は、まだそれに気が付いてはいない様だった。

「モロオツ、伏せるおっ!!!」

「え?」

「ああんっ!?!」

大和の声を聞き、モロと不良がほぼ同時に上を見上げる。

そこには、本来ならば有り得ない程に加速を付けて弾丸となった大和と謙信の姿があった。そんな物を見せられて、不良は思わず口を開けて、目を見開く。

しかし、命すら危ういモロにはそんな事をしている暇は無い。必死に不良の腕を振り払おうとするが、その力の前に成す術が無い。

「モロ助！」

「ケ、ケン兄ちゃん……ッ！」

「動くなよ……！」

モロが衝撃に備え目を瞑ると、謙信が自身の全力を持って踵を振り下ろすタイミングはほぼ同時だった。此方を見上げた不良の顔面の中心に踵を突き刺し、その勢いを殺さぬまま全力で振り下ろす。踵が突き刺さった時点で不良の身体に気を流し、その腕から力を抜けさせるとモロはアツサリと脱出する事に成功した。前にゴロンと回転しながら脱出するモロの後ろで、不良の顔面は完全に地面へと沈んで行く。

その後、不良に目を向ける事無くモロの下へと駆け寄り、その身体に傷が無いか確りと確認する。首、胸、腹、背中、腕、足、あらゆる場所を触診して居た。

「んっ……に、兄さん……」

「いいなー、謙信。私も混ぜろよー」

「待てえっ、この野朗！ オレの朝食を　　ん？　あれ、アイツ何処だ？」

「ああキャップ……アイツって、そのシミか？」

「おおコイツコイツ！ 食べ物を粗末にしちゃいけないって教わらなかつたのか！」

「無事みたいだね、モロ助。お前は昔から不幸体質だな、このバカ」

「ご、ごめんね、ケン兄さん」

「でもさ、モロってか弱くて人質役にピッタリだよな。ププーッ」

「ワ、ワン子〜！」

気絶して居た不良をガクガクと振るいながら怒鳴るキャップを他所に、謙信はモロが怪我をして居なかつたと言う事に取り敢えず安堵して居た。もしも怪我でもして居たら。もしも命すら落として居たら。そう思うと、目の前でキャップに揺す振られる男が憎くて、恨めしくて、今直ぐにでも叩き折ってやりたいと考えてしまう。そんな負の感情を自ら叩き潰し、不良の首根っこを掴み、吊り上げた。

「1つ。二度とオレ達には関わるな」

「ひ、ひっ……」

「2つ。二度とオレ達の前に現れるな。これだけだ、良いな？」

「は、はひっ……」

「良いな？」

「は、はいつ、はいつ……！」

怯え、竦み上がる不良の姿を見て、内心細く微笑みながら不良の首根っこを離す。

ドスンと尻餅を付いた不良は、それでもただ恐れ、オレ達を指差して問うた。

何者か、と。

「キャップ、教えてあげたら？」

「ん？ おおっ、そうだな！」

大和の提案に、そりゃ良いと言わんばかりの笑みを浮かべて、キャップは軽く咳払い。

そんな姿を見て居ると、謙信は自分が此処に相応しくは無い人間のように感じられた。

だって、自分はたった数年しか彼等と行動を共にしていない。

メンバーたちに背を向け、学院へ向おうとした謙信の手を、誰かが握っていた。

「何処に行くの？」

「京か……勝ち名乗りはお前達に任せるよ」

「お兄ちゃんも、ファミリィー」

「……いや、しかし、オレはなあ……」

「たった少しの時間でも、お兄ちゃんは私たちの仲間」

「いつの間にか……京も言う様になったな」

軽く頭を小突くと、恥かしそうに微笑む京。

昔の陰湿な感じからは一転して、今の彼女は仲間内にだけとは言え、明るく振舞える様になっただけでも良い進歩だと言える。

それに、謙信を仲間だと言ってくれた。

今はその事実だけで、お腹は十分一杯と言う物である。

「うん、よしっ！ 兄ちゃんも復帰したな！それじゃ〜いくぞ！

オレ達は泣く子も黙る、人呼んで 風間ファミリーだ！ 覚えて置け！！」

リーダーの勝ち名乗りを聞き、不良は完全に撃沈した様である。

首をガツクリと垂らし、俯いてしまった。

この姿では、まるで1人を大勢で取り囲んだ様では無いか。

流石にコレでは不憫だと思い、顔を腫らした不良の手当てをしてやるうと足を前に出した瞬間、誰かからの視線を いや、闘気をヒシヒシと感じた。

「 ひとりを大勢で取り囲み責め立てるとは、卑怯千万」

良く響き足音……

いや、蹄だ。これは馬の蹄の音だ。

しかし、何故こんな街で蹄の音など響くのだろうか？

そこまで考えて、謙信は考える事を止めた。

その理由は、声の主が女性であった事。そして、馬に乗っている可能性があると言う事。

更には 今日、彼女が転校して来ると言う過程から導き出した結論。

99・99%間違いは無いだろう、ほぼ確定した答え。」

「お前達はそれでも日本の……武士の国の人間か！」

その様な行為は、たとえお上が許しても このクリステイアーネ・フリードリヒが、許さん！！」

「……………馬　　っ!?!」「……………」

「フリードリヒの姓……やはり、君か……クリステイアーネ」

お馬さんの上から此方を指差し名乗る少女　クリステイアーネを見て、謙信はコレでもかと言う程に盛大な溜息を吐いた。本日何度目になるか分からない溜息ではあるが、不幸とは向こうから大手を振ってやって来る物である。

今日も今日とて、路地裏だろうと朝陽は眩しく輝いていた。

第貳之卷「己が隣にこそ不幸は居合わせるもの也」(後書き)

私はこの作品が2作目となるので、両立出来る様に
あっちへフラフラこっちへフラフラしながら頑張っていきたいと思
います

無論、目指すは完結です

第参之巻「背中に咲く桜吹雪、覚えが無いとは言わせねえ」(前書き)

クリス登場

新たな妹分キャラクターの登場になります

その強すぎる我を、お兄ちゃんは上手く操る事が出来るのか

4 / 0 9 修正

第参之卷「背中に咲く桜吹雪、覚えが無いとは言わせねえ」

第参之卷「背中に咲く桜吹雪、覚えが無いとは言わせねえ」

誰かの正義が、万人に受け入れられるとは限らない

偽善と笑われて、愚考と罵られて、それでも尚ただ人を救う事に命を賭ける行い

それでも愚直に貫こうとする正義を、オレは美しい物だと思うよ
でも オレは、最後の最後までバカになる事が出来なかった

君は如何だ、クリスティーアネ。君は、最後まで正義を貫けるかい？

まだ幼い頃。

父様に連れられてやって来た1人の少年は、正義の意味すら知らなかった少女に正義が何たるかを淡々と語った。それは己の勝手な介錯だが、と付け加えていたと言うのに、少女には彼の語る言葉が正義の全てだと思った。

彼の存在その物が、正義だと思えた。

強く、大きく、誇り高く、優しい少年は確かに正義の体現者と思われても仕方が無いのかも知れない。それが世間すら知らない少女が相手ならば 尚の事。

「久しぶりに遠山の金さんが見たいなあ〜」

「トオヤマノ、キン、サン……？」

「クリステイアーネは分からないか……日本でやっている時代劇の事だよ」

「JAPANの……？」

「ああ。ゴホンツ！」

数ある花のその中で、大江戸八百八町に紛れもねえ、背中に咲かせた遠山桜、散らせるもんなら散らしてみやがれ！ ってね」

自分の羽織っていたジャケットを脱ぎ、背中を少女 クリスへと向ける。

そこには桜の花弁など描かれては居なかったが、それでも彼女には確かに少年の背中に美しく咲き誇る花弁を見た。”正義”と言う膨大で、偉大な花弁を。

その当時のクリスは憧れすら覚えていたのだろう。日本には、悪を倒す明確な正義がある。

それは水戸黄門であったり、暴れん坊將軍であったり、必殺仕置き人であったり。

数こそ沢山あったが、どれも「悪は滅びる」を物語の芯に置いて作られた話である。

そして、その時代劇の事を楽しそうに話す少年を見て、クリスは思

った。

“一度でも良いから、日本に行ってみよう”と。

「謙信！！」

馬上から飛び上がった少女は、驚きに目を見開く謙信の胸元へと飛び込んだ。

それに動揺を隠せずに居ながらも、クリスを確りと受け止める辺りは何とか理性と言う壁を壊す事無く、状況を理解して居ると言う事なのだろう。

隣でガクトはギャーギャーと喚いていたが、それを捨て置き、謙信は戸惑いながらも胸の中で蹲る少女に問う。

「クリスティアーネ、如何して？ 本来なら学校に……それに、この馬は……？」

「ああ、私の馬だ！ 名は浜地鳥と言う」

本当に嬉しそうに謙信に語り掛ける少女を見て、一同は如何にも戸惑い気味。

世界中を旅していると言うのは分かって居るので、その際に知り合った少女ではあるのだろうが、何故こんな場所に居るのだろうか？

そんな疑問だけが尽きなかった。

それにクリスに比べて、謙信の表情は明らかに暗い。

まるで大和たちとまだ出会わせたく無かったと言わんばかりである。幾度と此方に視線を配り、本来ならば動じる事の無い謙信が僅かとは言え、動揺を示していた。

「し、しかしクリスティアーネ、日本では通学手段に馬は使わないよ」

「何！？ リューベックの日本人友達は何、馬で登校すると言っていたのに……！」

「見事に騙されたみたいだね、あの様子だと」

「純粹だな。いいこつた」

呆れを含ませた物言いをするモロと、それに反して好感触を示すキヤップ。

とは言え、そんな事など耳にすら入っていない謙信は正直頭の中がパニックだった。

何故と言うのはもう何度も頭の中で問い続けた。

結局、それに対する有用な解答など出る筈も無く、ただ目の前の出来事を整理する為に脳細胞が必死になって働いている。

「と、取り敢えず学校だ、学校！ このままじゃ梅先生のムチだぞ！？」

「ああ、そりゃそうだ！ じゃあね、ああっと、くりすていあーね、さん……？」

「じゃ」

「遅刻しちゃダメだよ、お兄様〜！」

「ケン兄ちゃんも程々にね」

「先学校行くからなく、兄ちゃん！」

「え！？ あ、ちょっと！」

そんな折、突如として弟分たちは謙信に反旗を翻し、弟達の突如の反旗に流石の兄貴分も狼狽を隠せないで居た。伸ばした手が彼等を捕まえる事は無く、その手はただ虚しく虚空を掴む様にワシワシと動いているだけだった。

これ程までに人の薄情さ加減に絶望した事は無いだろう。

残っている1人は決してそう言った方面で頼りになる奴では無く、謙信は期待もせずに

残った1人である百代へと視線を向けた。

やはりと言うか何と言うか、彼女の視線は既に謙信には無い。

その2つの瞳は真っ直ぐクリスを凝視して居た。彼女を食おうが食うまいが、知り合いの少女が捕食される瞬間など目の前で見せられればトラウマにもなる。

取り敢えず歯止めを掛けて置こうと百代に声をかけようとした瞬間、百代は興味を失ったと言わんばかりに謙信の横を通り過ぎて行った。

流石の百代も、分は弁えて居たと言う事だろう。クリスにも、悪い印象を与えずに済んだだけでも僥倖と言う物であろう。

(まあ、分を弁えていたと言うよりは不機嫌になったと言う方がシツクリ来るか……)

先程の彼女の様子から察するに、謙信とクリスが2人だけの世界を作っていた事が何とも気に入らなかったのだろう。昔から、自分の周りに居る存在の視線を独り占めしなければ気が済まなかった彼女の性格故の不機嫌になった原因だ。

流石に、そんな物にまで気を使ってやる程に寛大な心内は持ち合わせては居ないが、痕で茶の一杯でも奢ってやった方が良いかも知れない。

後々まで引つ張られれば、それだけ此方も鬱陶しく思ってしまうだ

ろっから。

「君は学校に向ってくれ。学校の場所は分かっているな？」

「あ、ああ。一緒に行つてはくれないのか？」

「君の父上が来ているのなら、担当医としてその容態は確りと記載する必要があるのでね。悪いけど、一足先に学校に向わせて貰うよ」

浜千鳥と呼ばれていた馬の鼻を軽く撫で、路地裏から表通りへと顔を出す。

朝とは言え、大和たちと同じ様に遅刻ギリギリで学院へと向つて走つて行く生徒も何人かは確認出来る。謙信はそんな生徒を後ろに置き去りにしながら、ただ只管に走つた。

流石に初日から遅れると言つ訳にもいかない。幾ら、後ろ盾のある教員とは言え遅刻は遅刻なのだ。寧ろ、教育に携わる者として遅刻だけはする訳にはいかないのである。

そつ言つ理由にて全力で疾走する謙信ではあつたが、流石にこのままでは危ついと思ひ至つたのだらう。両足に気を巡らせ、強く地面を蹴り飛ばす。

一步が十歩分の距離を稼ぎ、それが瞬間的に何歩も何歩も繰り返される。

既に視認する事すら不可能なレベルで移動する謙信は、誰にも見える事の出来ない神風のような存在だった。

そんな少々罰当たりな行動をしながらも、チャイムが鳴る前に何とか職員室に辿り着く事が出来た。新任の見習い教師である事を伝えようと、碌な挨拶もする事無く保健室に雪崩込み、自分の着て来たスーツを衣装掛けに掛けてやって漸く、一息吐く事が出来た。

保健室と言つただけ有り、最低限の医療器具や薬は常備してある。

切り傷や青痣などは謙信自身の力で容易く治療出来るが、大きな怪我となると応急処置をした上で時間を掛けて治して行くしか無い。その上ではやはり、医療器具は如何しても必要になってしまふのだ。いつかは大怪我ですら治してしまう様になりたいとは思っているのだが、その道はまだまだ険しそうである。

「ふう……」

保健室に常備してあるポットからお湯を頂戴し、これまた常備されていたティーパックとティーカップに注ぐ。如何やら前回まで此処に居た教師は、暇さえ有れば延々と茶を飲み続けていた様だ。それを悪いとは言わないが、こんな危険地帯である川神学院で怪我人が雪崩込む様な事は無いのだろうか？ そんな筈は無いと思うのだが、そんな事を考えながらも、ティーカップに口を付ける。

日本に帰国してから、久しく口にしていなかった日本茶の優しい香りが口の中に広がって行く。そも、日本茶とは蒸した物を揉み、乾燥させる製法を取る。摘んだ後に加熱処理をした物はその段階で発酵が止まってしまふので、普通日本茶と言うと緑茶を指し示す。

しかし、この「蒸す」と言う方法以外にも炒めた茶葉と言う物もあり、それは金炒り茶と呼ばれており、蒸す物が日本独特の物であるのならば、炒める物は中国茶に近いのだ。

つまり、日本茶と簡単に言っては居るがその奥深さは本物であり、たかが数十年生きた程度の若造では到底日本茶の歴史を感じ取る事など出来ないのだ。

「緑茶は学術的には不発酵茶と呼ばれては居ますが、日本人のイメージする緑茶とは日本で最も作られている緑茶である事が殆どです。その場合はそう、煎茶などが例として挙げられる事になるでしょう」

「ふむ。君の日本茶に対する深い愛を感じ取る事が出来たよ」

「それは有難う御座い……ま……す……」

「久しぶりだね、Dr・ナンバ。君が帰国したと聞いた時は誰よりも先に会いに来たくてね、すっ飛んできたよ」

「フ、フリードリヒ中将……！！」

独り言の様に呟いていた謙信の言葉は、以外にも受け取る相手がい

ただその相手が決して普通の生徒や教師と言う訳では無く ある意味では、この世界で最もデンジャラスかも知れない人物の1人である。

ドイツ軍人であり、クリスの父であり、そして謙信受け持ちの患者でもある男性

フランク・フリードリヒ、その人であった。

「はい、結構です。服を着て下さい」

聴診器を外し、フランク中将の容態を再度カルテに記入する。

フランク中将との馴れ初めなどは別に口を大にしてまで言う事でも無いが、一応語って置くに限るのかも知れない。それは　まだ謙信が15程の頃。

戦地を転々としながら、色々な患者を治して来た謙信の前に、ドイツ軍人たちが立ち塞がった事があった。無論彼等は交戦の意思を示していなかったが、そんな事は謙信には関係が無かった。これから向おうとしている小さな村には、高熱で魘されている子供が居るのだ。その治療の邪魔をするのならば、とドイツ軍人と正面衝突する事になった。

銃器類の類を向けられても動じる事無く、軍人相手に一騎当千の動きを見せていた彼の前に、ふいに1人の女性が立ち塞がる。眼帯を着用した女性

彼女が突如として謙信の前に躍り出て、頭を下げた。

助けて欲しい人が居る。

貴方の力が必要だ。

たったのそれだけの言葉で、謙信は交戦の意思を消し、自身もこの先に居る子供の治療をしなければ其方に向う事が出来ない旨を伝えた。その際に移動手段として軍用ジープに搭乗させて貰い、大幅な時間短縮をする事が出来たのだ。

子供を治療して、さて次はと言う事で彼女　マルギッテの上官であるフランク中将の下へ向う事になったのだ。現在、片方の肺に銃弾が埋め込まれているらしく、それを切除する事は体力的な面でも難しいと言う。つまり彼女らが言いたい事は、『銃弾は我々が取り除くから、お前は中将を死なせない様にしろ』と言う少しばかり無茶な事だった。

「もう傷口も消してしまつて良いかも知れませんね。如何します？
その片肺を潰した銃弾の跡も勲章として飾りますか？」

「そうだな、この傷跡は消さないで欲しい。Dr・ナンバと出会う
事が出来た証として」

「お世辞を言つても何も出ませんよ」

先程淹れた日本茶をフランク中將にも差し出し、静かに啜る。

厳つい顔をした軍人と、まだまだヒヨッコの保険医が居る保健室な
ど此処を除けばそうそう見られる光景では無いだろう。

しかも、保険医は軍人の担当医と来たのならばそれこそ奇想天外と
言うヤツである。

「フランクさん、クリステイアーネがそろそろ自己紹介を始める時
間ですよ。教室に向われては如何ですか？ 悪い虫が付かない様に
ね」

「むっ！ もうそんな時刻か……では一度失礼させて貰うよ、Dr・
ナンバ」

「オレは此処に居ますから、威嚇射撃が終わつたら戻つて来て下さ
いね」

「了解した」

娘を愛している事は知っていたが、まさか学校に乗り込む程の溺愛
振りだとは思つてすら居なかつた。それは少々予想外でもあるが、
懐かしい顔を見られたと言うだけでそれは僥倖と言う物であろう。
高望みをする者は案外と、何も得られない事が多い。

本来ならばマルギツテにも会って置きたかったのだが、彼女にも任務があるのだ。

フランク中将及びマルギツテの担当医としては、あまり自分の容態を詳しく話して欲しくないマルギツテは信用なら無いので、自分の目と指でキチンと確認しなければ納得が出来やしないのだ。しかし彼女、診察の為に服を脱げと言ってもそれを一向に聞いてくれない。フランク中将からの命令でも無い限り、決して首を縦には振ってくれないのだから困り者であろう。それでも頑なに謙信が彼女に拘るのは、クセとも言えるお兄ちゃんスキルから発動される物なのかも知れない。

本来ならばマルギツテの方が年上である筈なのだが、それでも医者と患者の立場となると医者役を担う謙信がマルギツテの面倒を見る事が多い。

その為、一度世話をしてしまうと最後までキチンとしないと謙信自身が如何しても納得出来ないのであった。

「我俣患者マルギツテ、と」

カルテに悪戯っぽくそう綴ると、事務用に譲渡されたPCを起動させる。

PCが起動する際のカリカリと言う音だけが保健室に響き、謙信は今朝手渡された全校生徒のファイルへと目を通す事にした。知り合いに似通った人物が居るのか否か、それだけを確認するだけでもきつとそれなりの違いは出るのだろう。

例えば 2 - S に在籍する九鬼英雄。

あの超絶モンスター、九鬼揚羽の弟であると言うのだから驚きである。

武芸にはあまり秀でて居ない様ではあるが、その代わりに姉を凌ぐ政治力を搭載して居る為に現段階では2 - S のリーダー格は彼と言

う事になる。

次いで、名門不死川家のお嬢様である不死川心。

強いて言うのなら「利己主義」・「自分が1番」と言う絵に描いた様なお嬢様。

その様な正確故に友達は少ない、らしい。

由紀江とはまた違った意味で孤立してしまつた可哀想な子である。

まあこの中で注意しなければならぬ人物としては、九鬼英雄のメイドだと言う忍足あずみ程度だろう。九鬼家のメイドと言う時点で実力は十分であり、あの大佐殿と共に傭兵部隊出身と言うのなら尚の事注意しなければならない。

まあ現段階、謙信が着任する前から特に問題を起こしている訳では無いので、あまり注意し過ぎるのも如何な物かと思われてしまつが、と言う訳で、取り敢えずは保険医として学生達を見守れば良いと言う訳である。

暇な一日保健室にてポケーッと茶など啜りながら外の天気をチエックしながら、医療器具やベッドを天日干しして殺菌でもすりゃ給料もちゃんと入つて来るのだろう。

その金の4割程度が百代やワン子に吸収されてしまう様な気もしたが、そんな事を考えればきつと枕を涙で濡らす事になるので今は止めることにした。

「失礼する」

「ベッドは奥、ズル休みなら教室、休憩だつたら屋上に」

そんな折、誰かが保健室の扉を開けて入室した。

残念ながら謙信は既にPC画面へと目を向けており、1〜3年の生徒たちの名簿作りに躍起になっていた為、其方に視線を向ける事は無かったが、入室した者は特に気にする様子も無くパイプ椅子に腰掛け、謙信の仕事が終わるのを静かに待つ事にした様である。

さしもの謙信も、その様子に何か思う所があったのだろう。
暫くキーボードを打ち込んでいた筈の手を止めて、パイプ椅子の方
へと回転椅子を回転させた。

「一体何の用だ？ わざわざそこで待つなら、それなりの用事が
」

「お久しぶりです、Dr. ナンバ」

「マルギッテ、来ていたのか！？ てつきり任務なのかと思ってい
たが……！」

「此方で生活する為にホテルへとチェクインして居たので、少し
ばかり手間取ってしまいました。それよりもDr、診察の事ですが」

「この数年もの間、よくもまあオレの目を掻い潜りながら生活出来
たな……マルギッテッ！ 君の友人では無く1人の医者として言わ
せて貰うがね、最低な行為だ！ 少しは反省して、頭を冷やしなさい
……君は子供じゃ無いだろう！」

「で、ですがDr、私にも任務が」

「任務うつ！？ 君ねえ、オレの忠告も聞かずにまた任務か！ 今
度は何処に行った！？ イラン、イラク、ソマリランド、それとも
モロッコか！？」

「あ、あの……」

「答えなさい、マルギッテ！ これは君の担当医としての”命令”
だ……！」

「あうっ……………東チモール……………」

パイプ椅子に着席していたのは、謙信が今最も会いたいと思っていた人物であるマルギツテ本人だった。これは僥倖と喜ぼうとは思っていたが、彼女の顔を見た瞬間にフツフツと過去数年間の怒りが込み上げ、それが一瞬にして爆発する。

人の命を預かる立場の人間として、中途半端にされる事が一番我慢なら無いのだ。

しかも、彼女は絶対安静と言おうが次の日には任務に出てしまう様な女性なのである。

何度と無く医師として彼女には安静にする様にと言い聞かせていた筈だと言うのに、碌な診察も受けずに任務、任務。帰還して傷を見せると言っても、中々首を縦に振ろうとはしない。漸く彼女の傷の治療を始めた頃には、既にフランク中將が怒鳴り込んで強制的に彼女を剥くまでに事が発展していたのである。

それ以来、マルギツテと言う女性は如何しても謙信に対して強気に出る事が出来ずに居た。何せ、どんな事だろうとほぼ一喝で切り捨てられるのだ。

Q・任務に行きたい。

A・却下。安静にしなさい。

Q・訓練をしたい。

A・却下。自分が患者だと言う事を理解しなさい。

質問に対する解答の内の実に9割がN○であり、僅か1割はと言うと生きる事に必要な”食う・寝る・排泄行為”程度なのだから堪った物では無い。

とは言え、謙信にして見ればマルギツテの様に放って置けば何を仕出かすか分からないタイプに対しては、一切の自由を与える訳にはいかないのだ。

徹底した管理体制の下に、キチンと完治するまでの数週間は安静に

して居て欲しいのである。別に、苛めている訳でも無いと言うのに、やれ「Drは私の自由を奪う」だの「Drは私を苛めている」だの「お願いだから戦地に赴かせて欲しい」だのと、此方が悪者の様に仕立て上げようとするのだから此方も堪ったものでは無いと言うのを分かって居るのだろうか。いや、分かって居ないからこそ今日までノコノコと謙信の前に姿を見せず、戦地で伸び伸びと任務をこなしていたのだろう。

「で？ 今日は何した」

「そ、それが、如何にも身体の調子が……」

「マアルウギツテエエツッ!!」

「も、申し訳ありません！」

「もう良い!! 取り敢えず上着だけ脱げ、下着は脱がなくて結構！ 全身がピリピリと痛むかも知れんが、治療中なので噛み締めて耐える様に！」

それだけ告げ、衣装掛けに制服として渡されていた白衣を掛け、Yシャツの両腕部分を捲くる。その作業中にマルギツテも上半身の衣服を脱いだらしく、背中を此方に向けて立っていた。面倒だがベッドに誘導し、彼女をうつ伏せに寝かせる。

背中から気を巡らせ、何処に異常があるのか探るのだが、その箇所があまりにも多い事に逆に戸惑いすら隠せずに居た。彼女は、身体を極限まで酷使して漸く己の異常に気付き、此処に来たのだろう。それに呆れ、マルギツテの両肩と両足に触れ、気を送る事で脳からの命令伝達を遮断する。これで、そう易々とは動けまい。

取り敢えず全身の筋肉を解す為に右腕から微弱な気 電気の様な

物を身体に送り続け、それと同時に身体に付いた細かな傷を回復させる為に左腕から気を流し続ける。

中々骨の折れる作業だが、別段と集中力が必要な作業と言う事でも無い。

全身の筋肉を解し終え、彼女の緊張を完全に解した時点で自分自身の気分も紛らわせる為に最早愛読書となつてしまつたブック・ジャックを片手に、マルギツテの治療を進める事にした。続いては脊椎を中心にして指で病の元凶を捜し、そこに直接気を流し込んで行く。流石に仰向けになれ、とは言えないので、そこは気を利かせて背中から直接お腹側の病の源ごと叩き消す考えにシフト。背中から先程よりも強めの気が身体に流れると、マルギツテは僅かに身体を震わせた。

「痛むか？」

「い、いえ、Dr……」

「痛むのだったら遠慮無く言ってくれ。やり様なら幾らでもある」

「ッ……分かりました……」

続いては下半身へと移るのだが、これも今から脱げとは言えない。

その為に、足裏にあるツボを突く事を現段階の処置として行う。

太股や脹脛、踝などに溜まつている疲れを癒す為に足裏から微弱な気を連続して何度も送り続ける。これまたプルプルと震えるマルギツテではあつたが、足裏と言う事でくすぐったいのであろう。謙信は特に声を掛ける事はしなかつた、我慢して貰うしか無いからだ。

「今日はこれ位にして置こう。あまり長時間、君を此処に置いておく訳にもいかない」

「……」

「マルギツテ、聞こえているか？ マルギツテ」

返事すらしなないマルギツテに痺れを切らしたのか、彼女の肩に触れようとした謙信だったがその手をふと止めて、思わず苦笑を浮かべてしまった。

あのマルギツテが、学校のベッドで安らかに眠っているのだから、笑わずに居ると言う方が無理であろう。その様子を写真にでも収めてやるうかと少し悪戯心を動かされたが、患者の弱みなど握っても何の得にもなりはしないので今回は遠慮する事にした。

「……………くう」

「ふふつ。おやすみなさい、マルギツテ」

天日干ししていた暖かな布団をゆっくりとマルギツテに掛けて、未だに作業が途中のPC画面へと身体を向ける。背中から聞こえる寝息を耳に入れ、僅かばかりに気が良くなった謙信なのであった。

「と、とんだ醜態をお見せしました……」

「いえいえ。お粗末さまでした」

漸くマルギツテが起きた頃には既に学校は昼休み直前であり、その頃には謙信の名簿作りも既に終わりを迎えていた。1人で茶を飲んでいた時に、眠り眼でやって来たマルギツテを見て、さしもの南波謙信も顔を赤らめると言う珍しい姿を晒してしまったと言うのは謙信だけの胸に秘めた秘密である。

現在、保健室の中央に置かれた机の上にはティーカップが4つ置かれている。

1つには日本が代表する緑茶。

もう3つにはドイツ人が好むフルーツティーを入れてある。

それぞれアップル、レモン、ピーチと味に限って言えば種類は豊富だ。何故こんな物が保健室にあるのかと問われると、前任者の趣味であるとしか返せないのは困りものだが。

さて。

この場にはマルギツテと謙信しか居ない筈だが、何故カップが4つ置かれているのか。

その理由は実に簡単である。来るのだ、フランク中將が此処に。

その為に念の為と言う事でクリステイアーネの分のフルーツティーを淹れて置いたのだが、彼女はもしかすれば学友作りに勤しんでいるかも知れない。

まあわざわざこんな保健室なんて辺境に、足を踏み込む様なタイプでも無いだろう。

謙信個人の意見としては、クリステイアーネには早く学校に慣れて欲しかった。

「Dr、この紅茶はとても美味しいです。市販の物なのでしょうが

「？」

「らしいですよ。前任者の置き土産だから、何処に売って居るのかは分からないけれど」

マルギツテはフルーツティーが大層気に入ったらしく、自分に渡されたカップの中の紅茶を愛おしそうに少しずつチヨビチヨビと口を付けていた。その姿は苛烈で、他人を見下す普段の彼女からは考えられない程にお淑やかで、美しい物であった。いつもこれならば担当医である謙信も困る事は無いのだが、そう易々と話は終わらない。まあ結局は、どちらかが折れなければ一生終わる事の無い追いかけてこなくなってしまふのだから、仕方が無いと言えば仕方が無いのかも知れないが。どうせ、マルギツテは折れないし。渋々ではあるが、此方が譲歩するしか無いと言つのは気に入らないが。

「しかし、マルギツテ。如何して貴方も日本に？ まさかとは思いますが、どうして？」

「ええ、転入します」

「……………嘘だろ」

自分の持っていたコップを落としかけたが、何とか耐える。

いや、それにしたって、まさか、あのマルギツテ（21）が此処に転入だと？

それ程までにクリスティアーネが大切か、フランク中将。娘の為ならば平気で自分の部下や兵器まで使用しかねない勢いじゃないか。軍事の私用化など、洒落にすらならない。

よくもまあ、そんな娘馬鹿で今まで軍隊の中でやって行けた物である。

「迷惑でしょうか、Dr……」

「いや、迷惑じゃ無い。オレとしても近場にマルギツテ(21)が居てくれる事は嬉しい」

「ほ、本当ですか!？」

「オレは嘘の類が嫌いだよ、マルギツテ(21)」

「しかしDr、何故私の名前の後ろに(21)が付くのでしょうか？」

「それは勿論、マルギツテ(21)だからさ」

少しばかりメタな発言を合間に挟んだ事で、マルギツテ自身も自分のペースと言う物を取り戻して来たのだろう。身体に纏っていた気が弱々しかった先程とは比べ物にならない程強くなっている。軍人氣質な彼女が放つ、本来のマルギツテが持ちえる物だ。

身体の調子も良くなり、美味しいフルーツティーを飲んだ事から少しは元気になったのだと推測される。

それにしても、元気になったマルギツテを見ていると無性に腹が減って来た。

ずっとPCを弄っていたとは言え、減る物は減るのだから仕方が無いのである。

「あつ、弁当忘れた」

それでも弁当が無ければ空腹は満たせない。

マルギツテにその場に待機する様をお願いすると、謙信は保健室か

ら出て、取り敢えずは購買へと向う事にした。それでも、未だに学園の事を大まかにしか理解出来ていない彼にとっては、この広々とした川神学園は最早迷路と何ら変わる事は無いのだ。

「……道が分かれた」

「上？ 下？」

「え？ 此处、何処なの……？」

別に迷路の様に入り組んでいる訳でも無い学園の中を上をフラフラ、下にユラユラとまるで放浪者の様にあちこちを行き来するのだが、購買が見付からない。

いや、実際の所は先程通り過ぎて居たのではあるが、焦っていた謙信は気付く事すら出来なかつたのである。これは不味い、ヤバイ、如何しよう。

1人ウロウロと泣き目になりながらも辺りを見渡して居る謙信の姿は、最早迷子のソレと何ら変わりは無かつたのである。

「あれ？ ケン兄ちゃんだ」

「あつ、兄さん。もしかしてこれから飯？」

「兄ちゃああああああああんっ！！！！！！！！」

そんな折、偶然通り掛かった大和・モロ・キャップの3人。

謙信は迷う事無く、大和の胸に顔を埋めて泣き喚いた。

ギャーギャー！

購買が見付からない！

ギヤーギヤー！

腹が減った、このままじゃ飢えて死ぬ！

ギヤーギヤー！

大和、飯奢れ。

最後の一言の時点で、大和がこれでもかと言う程に此方を冷たい目で見下ろしていたが、そんな事あ関係ねえのである。飯さえ食べれば、今の謙信にとっては他の事など如何でも良かったのだから。

「購買なら1階にあつたでしょ？ 此処に来るまでには通る筈だけど……」

「見てない！ 知らない！ 分からない！」

「ほら此処」

「あつたー！！ モロ助、好き！」

「じ、じじじ、告白された!？」

「兄ちゃんはオレのだぞー！」

そんな訳も分からない事を言い合いながらも、謙信はと言うと一瞬で購買へと突っ込んで行く。競争率など何のその、押し返されるのならば押し返すのみと自分の前に並んでいた客「障害を」全て”放り投げた。

「おばさん、卵サンドとカツサンド、それにそっちのサンドイッチに、やきそばパン！」

あとカレーパン、ドーナツ、クリームパン……取り敢えず、全部3

「つづつ下さい！」

「あ、あいよ〜」

笑顔で相当数のパンを頼むだけで無く、自分の目の前に居た客を全て吹き飛ばすと言う荒業をやつてのける教職員に、購買のオバサンは戦慄を覚えたという。

南波謙信　リポDが無い時は、食う事で欲求を満たす説あり。

「それじゃあな、ヤマ坊、シヨウ、モロ助！」

出会つた当初は死に掛けていたクセに、食べ物を買つた途端に元気になる。

口にカレーパンなど啜えながら、元気に走り去っていく兄貴分の背中を見送る風間ファミリーの男3人なのであつた。

「随分と遅い到着だね、Dr・ナンバ。君にしては珍しい」

「お待たせしました。購買を見付けるのに時間が掛かってしまつて」
既に保健室にはフランク中將が着席しており、その隣には友人作りに勤しんでいると思われたクリスもちよこんと座っていた。マルギツテも、フランク中將の斜め前に腰を下ろしている。取り敢えず、謙信はクリスの斜め前に腰を下ろし、先程自分の買って来たばかりのパンを机の上に広げた。

「食べたい物があつたら遠慮せずどうぞ。特にクリステイアーネ、糖は頭の回転を良くする。勉強に勤しむ君にとっては欠かせないエネルギーになるよ」

笑顔でそんな事を言つてのける謙信ではあつたが、そんな僅かばかりの会話の間に2つのパンを完食しており、既に3つ目へと手を掛けていた。

無論、クリスを含む3人は彼が大食らいである事は熟知している。

寧ろ、マルギツテにしては今まで良く緑茶程度である無尽蔵の胃袋が満たせていたと感心すらしていたのである。

凄まじいのは緑茶の力が、それともブラックホール胃袋なのか。

「しかし、Dr・ナンバがまさか学園の保険医とは……娘の心配も要らないな」

「子供には親が必要です。特に、クリステイアーネの様にお父上をこの上無く愛している子にとって、父の愛と言うのはどれだけ捧げられても嬉しく感じる筈ですよ。その愛をオレは決して代用する事なんて出来ません」

「そうか……そうかな。フツッ、流石はDr・ナンバだ。実に素晴らしい」

「いえいえ。それよりもクラスでのクリステイアーネの評判は如何でしたか？」

「何匹が要らぬ詮索をする輩が居たのでね、然るべき処置を下した」

ふふんつ、と胸を張るフランクとは別に、謙信は何処か呆れ顔。

予測でしか無いのだが、その中にガクトが含まれていると思うと如何にも居た堪れない気分になってしまうのだ。かと言って、娘を愛しているからこそ行っているフランクの行為に口を出すと言つのも少し気が引けてしまう。

まあ此処は、ガクトだから仕方が無いと諦めるしかあるまい。

「……むっ、そろそろ時間か。私は此処で失礼させて貰うよ、Dr . ナンバ」

「えー!? すみません、大したお構いも出来ず……」

「いやいや、君が忙しい事は私も理解しているつもりだ。マルギツテ、行くぞ」

「はっ。ではDr、失礼します」

「はい。お大事に、マルギツテ」

・そう言つて、フランク中将とマルギツテは保健室を退出した。

フランクは如何やら謙信にクリスと言葉を交わせ、とでも言いたかったのだらう。

何年もの間放置されて居たクリスとしては、短い期間だけとは言え、兄の様な存在だった謙信と言う存在は彼女の中でとても大きな物と

なっているのだ。

父親だからこそ、娘のそれに気が付き、そして気を利かせた。いつものフランクからは考えられずらしい事ではあったのだが、今回謙信はそれを気に留める事も無く、静かにフルーツティーを飲んでいたクリスマスへと語り掛ける事にした。

「クリステイアーネ、クラスは如何だい？」

「素晴らしい学友たちだ。これから沢山の友人を作りたいと思っている」

謙信が話し掛けると、ホクホクとした顔で嬉しそうに答えるクリスマス。そんな表情を見せられた時、何処か謙信は一瞬だけ心配そうな顔になった。だが、それを悟られる事は無く、直ぐ様笑顔の仮面でその表情を覆い隠す。

“万人に受け入れられる正義など、無い”

それでも彼の脳裏には、そんな言葉が何度も反復されていた。

「放課後、川神の事を謙信の友人から案内して貰えることになった！ 私はそれが楽しみで、楽しみで、今直ぐにでも飛び出したい程だ！」

「本当ならオレも一緒に行ってあげたいけど、今日は歓迎会があるから……あつ、はしゃぎ過ぎて、大和たちに迷惑を掛けちゃダメだぞ？」

「任せてくれ！」

元気に答えるクリスマスではあったが、そんな様子を見せられては益々謙信の不安が積もって行く。もしもクリスマスと大和たちが喧嘩してし

まっさら、もしもクリスがクラスの仲間と対立してしまったら。本来ならば考えの及ばない様な事ですら、彼女の強すぎる正義の信念の前では現実となる可能性を秘めている。強すぎる我は、時として己すら滅ぼしてしまうのだから。

「クリステイアーネ、あの……」

「ん？ 何かしたのか、謙信」

「いや……何でも無い」

だが、彼女の喜ぶ顔を目の前で見せられて、如何しても言葉を紡ぎ出す事が出来ない。

言葉を有耶無耶にする様に、謙信は自らの緑茶を口に含んだ。

第参之巻「背中に咲く桜吹雪、覚えが無いと言わせねえ」(後書き)

今回は金曜集会の辺りになります

もう一方の小説の作成に入るので、連続投稿は今日で一度終了

15日に1話程度のペースで投稿出来たら……いいかな、なんて

第四之巻「予期せぬ事態にこそ上手く立ち回るべし」(前書き)

書き始めだからなのでしょうか

スラスラと文章が浮かんで来る辺り、執筆速度はもう一方の小説よりも速い

4 / 09

第四之巻「予期せぬ事態にこそ上手く立ち回るべし」

第四之巻「予期せぬ事態にこそ上手く立ち回るべし」

学業を終えた生徒たちがそれぞれ帰路を辿る様を見送りながら、謙信の保険医としての初日は静かに終わりを告げた。フランクとマルギツテの所為もあつてか、中々保健室に入ろうとする猛者が居なかつたので、本日は実に暇な1日であつたと追記しよう。

朝びしょ濡れだったスーツも乾いて居たのでそれに袖を通し、手荷物を小さな鞆へと押し込んで、職員室へと向う。

本日は何やら歓迎会を開いていただけると言う事なのだが、大人の飲み会と言う物を知らない謙信にとって未知の経験となる。外面は平静を装っては居るのだが、内心ではそんな未知の経験への期待と不安が入り混じつた感情が渦巻いていた。

「宇佐美先生、今日の件ですが」

職員室の扉から顔だけ出し、中をパツと見る。

が、そこに目的の人物である宇佐美巨人の姿は無かった。まだHRでもしているのだろうか」と結論付けた謙信は、取り敢えず辺りを見渡す。

面識のあるルー師範代の姿も無く、如何しよう物かと頭を捻っていた。

保健室で待っていても良いのではあるが、わざわざご足労願うと言うのも気が退ける。

此処は職員室前で黙って立っている方が吉だろうと思いつち、謙信はそのまま職員室の壁に背を預け、宇佐美たちの到着を待つ事にした。

流石に待ち続けると言うのも暇だったので、現在の財布の中身を確認。

医師として活動していた手前、歳の割には謙信の懐はかなり暖かかった。憧れのブラック・ジャックの様に膨大な金額を請求する訳では無いが、それでもキチンとお金は貰って来ていた。勿論、お金が無いのならば物々交換でも快く応じて居たのは、人の良い謙信だからこそその美德とも言える行為だっただろう。

その為に、飲み屋数軒を飲み歩こうと、決して彼の財布の中身は空になる事は無い。

ただし、世の中には不測の事態と言う物が存在する。それに供えてお金は少し多めに持っていても外れる事は無いだろう。

財布の中身の確認を終え、それをお尻のポケットに入れると、謙信は次いでボールペンを手で弄る事にした。指と指の間を行き来させ、軽く回すと指でそれを弾き、宙に浮かんだ物を再度キャッチして指で回すと言う作業を延々と繰り返す。

これも手先に神経を集中させる修行の一環ではあるのだが、はたから見れば大道芸の類にしか見えないと言うのは最大の難点とも言え

る事だ。

「それにしても……宇佐美先生、遅いな」

「ん？ 時間はキッチリ守ったつもりだけどなあ」

「うわっ！ ……う、宇佐美先生、急に隣に立たないで下さいよ」

退屈そうに呟いた謙信の独り言へ答える様に、隣からは間髪入れずに宇佐美の声が響く。突然の事で驚きを隠せなかった謙信ではあったが、何とか心を落ち着かせ、苦笑しながらも宇佐美へと苦言を申した。それに悪びれもせず笑いながら「悪かったな」と連呼する姿を見せられ、さしもの謙信も困り顔である。

宇佐美巨人 2・Sの担当でもある彼は、代行業も営んでいる謙信と似た様な”2つの顔”を持った教師の1人である。武道には精通してはいないが、それでも人脈や情報収集などの能力は抜きん出ており、その手の業者が彼に依頼をする事は多いと聞く。

「さつ、南波先生。大人の社会見学の時間ですよ」

「大人の社会見学……？」

「夜の街にはねえ、子供には分からない事が沢山ある訳ですよ。沢山ね」

「は、はあ……」

頬を緩ませる宇佐美に反して、謙信はと言うと如何にも困惑気味である。

世界中を歩いて来ているので”そっち関連の仕事”と言う物に関わ

つた事もあつたし、そう言つた仕事で傷付いた人々の心を癒す事も彼は多かつた。だからこそ、彼はそう言つた仕事に対してあまり良い印象を持つてはいない。

無論、その様な仕事自体が悪だとも思つてはいないが、酒と女は何処の世界でも男を惑わせて墮落させる最大にして最高の武器である。酒が好きな謙信としては、酒の怖さは身に染みている。故に此度の宇佐美の提案には如何にも乗り気にはなれなかつた。

しかし、これもお付き合ひと言つ物である。

渋々。

渋々ではあるが、大人しく宇佐美の後に続こうとして居た時、突如として女性の声が2人の耳に響く。凜としていて、条件反射で思わず背筋が伸びてしまいそんな声を出した人物に、少なくとも宇佐美は面識があつたのだろう。直ぐ様、後ろを振り返つた。

「小島先生、いやあ〜どうも」

「どうも、宇佐美先生。それよりも南波先生、これから宇佐美先生とお出掛けですか？」

「ええ。歓迎会を開いてくれると言つ事でしたので、後でルー先生とも合流します」

百代の両親を倒し、川神院となつたルー師範代と共に酒を飲み交わせると言つのは実に嬉しいのだが、その場所がキャバクラとなれば話は別である。恋愛に関して奥手過ぎるルー師範代の事である、キャバクラなんて女性だらけの場所に行つてしまえば口を開かなくなるに決まつていでは無いか。そう言つ意味では、謙信は是非とも此

処で梅子にも同行を申し出て欲しかった。しかし、あちらからわざわざ男ばかりのむさ苦しい場所に飛び込んでくるとは到底思えない。諦めるしか無いか、1人覚悟を決める謙信であった。

そんな謙信とは裏腹に考える仕草を見せる梅子。

実は彼女、迷っていたりするのだ。クラスの中でも切れ者である風間たちファミリーを纏め上げる謙信の統率能力。最早カリスマとも取れるそれを少しでも垣間見る機会としては、願っても無い物だからである。

「少しお時間を頂いても宜しいでしょうか？」

「へ？」

「私も、同行させて頂きたい」

「こ、小島先生が！？ ええええ良いですとも、良いですとも！」

急に運んだ事態に未だに付いて行けない謙信とは別に、アプローチを仕掛けていた梅子が自ら自分の下に飛び込んで来てくれた事が嬉しいのだろう宇佐美は、想像以上に喜んでいた。それから仕度を整えて来ると言って更衣室へと向った梅子先生と入れ違いになる形で、今度はルー師範代が2人の前に現れる。

「お久しぶりです、ルー師範代」

「久しぶりだネ！ 元気だったかい？」

「はい。日々を無駄にせず、自分なりに南波の拳を磨き上げて来たつもりです」

「強くなつたネ、謙信！ 凄いヨー！」

我が事のように喜ぶルー師範代を見て、謙信自身も懐かしさを覚えたのだらう。

何処か憂いのある笑顔を浮かべ、自分の手をブンブンと振り回すルー師範代を見詰めていた。彼は、昔から川神院に居候して居た謙信の良き理解者の1人でもあった。

凡才でありながら努力し、その結果として部類の強さを発揮したルー師範代としては、謙信の持つ才は羨ましい物だっただらう。だが、当の謙信から言わせれば寧ろ、独力のみで師範代と言う肩書を手に入れたルー師範代こそ尊敬すべき人物だったのだ。

衝突する事も無く、兄弟子と弟弟子と言う円滑な関係を築いて来た2人だからこそ分かる、感動的な再会であった。

それから間もなく、私服へと着替えた小島先生を迎えて、一向は金柳街にある、小さな居酒屋へと向う事になった。新人教師含む4人の、静かな歓迎会。

料理を頼み、

酒を飲み、

くだらない話に華を咲かせ、

生徒たちの問題点などをツラツラと語る、濃密な大人たちの時間。

とは言え、実際の所は既に数時間は経過して居る為に宇佐美は完全に出来上がっており、ルー師範代に絡みながらネチネチと何か吹き込んでいる。

察する事に、どうせ下ネタだらう。

初心なルー師範代にとっては生き地獄とも言える苦痛の時間ではあるが、唯一の助け舟になる可能性を持った謙信と梅子は2人で生徒たち 特に風間ファミリーについて静かに語っていた為に救済など送られる筈も無いのである。

「小島先生の所に居る、あの子たちですが……」ご迷惑を掛けてはいないでしょうか？」

「元氣過ぎるのは確かに困り物ですが、子供としては当然の事です」

「そう言っただけだと、私としても肩の荷が降りません。小島先生のクラスで良かった」

梅子は、謙信の柔和な態度に感心すらして居た。

川神学園でも特に特殊な部類に入る風間ファミリーの連中を纏め上げ、尚且つそのリーダー格をも務めるとなれば如何様な変人なのかと気張ってこそ居たが、その実口を開けば川神に居る人間の中では至極真つ当な部類に入る人種だったので拍子抜けしてしまったのだ。落ち着き払った態度と、如何なる場面でも崩れる事が無い表情。

かと言って、喜怒哀楽が消えているのかと言われればそうでは無い。嬉しければ喜び、気に入らなければ怒り、哀しければ泣き、楽しかったら楽しむ。

当たり前前の事も当然の様に言う人間は、この場では酷く浮いた存在である様にすら感じられるのである。

世界を渡り歩いたと言うだけで、人の心は此処まで寛大になるのか。大らかに育ち、教養をすら身に付けた謙信は最早教育の賜物の様な存在だろう。

梅子は一人、胸の内で未だ教員としての曆が浅い謙信に賞賛の言葉を送った。

「愛している、のですね。あの子たちのことを」

そんな梅子の独り言の様な呟きに、謙信は呆気にとられた様に口を開き、次いで恥かしそうに自身の頬を掻く。此処まで真つ直ぐで、

愚直な質問をされてしまうと答えが口から如何しても出し難くなってしまう。胸の内に秘めている思いだと言う事に変わりは無い筈ではあるのだが、人に聞かれるとそれが途端に恥ずべき物の様な気がしてしまうのだ。

人と人の繋がり。

友情や、愛情、絆。

LIKEとLOVE。

短くとも、密度の濃かった時間を、そして仲間を、謙信は確かに愛していた。

これは覆しようの無い、誰にも動かせる事の無い事実である。

そして、その事実は胸を張って誇れる物であると、謙信は確りと自負していた。

「そう、ですね……そうみたいです」

恥かしそうな表情を浮かべ、それを紛らわせる様に笑う謙信の顔は実際の年齢よりも幾分も幼く見えた。青春を殺して、ただ神の如く人を救う事に命を賭けた謙信だからこそ出来る、邪気の籠る事の無い、見る人を見惚れさせてしまう様な優しい微笑み。

それは梅子ですら例外では無く、自分よりも幾分も年下である筈の謙信の笑顔に魅せられ、ただその笑顔に心奪われた。

謙信は世間一般で言うイケメンと言われる部類では無いだろう。

表情も何処か幼さを残し、童顔と馬鹿にされる事もあった。

それでも、彼の浮かべる笑顔だけはあらゆる人間を魅了し、そして虜にする。

それはダヴィンチのモナリザであったり、ミケランジェロのミロのビーナスであったり、人の持つ”感性”に語り掛ける様な一種の芸術的な物であったのかも知れない。

”笑顔の天使様”

彼に救われた者たちは、口を揃えてそう言った。

人の命を天へと運ぶ天使とは逆の、人の命を地上へと留まらせる事を生業とする医者と言う仕事に就きながら、彼は周囲の人々から天使と言われていた。

それは、彼がメスすら握らずに人を治してしまうからなのか。

それとも、マザーテレサの様な慈悲深さから来たものなのか。

「先生？ 小島先生？」

「あ、はいっ!？」

「保険医からの忠告ですが、飲み過ぎですよ。顔が真っ赤ですから」

「……………し、失礼しました」

ダメですよ、などとクスクスと笑いながらも、謙信は直ぐ温かいお茶を梅子に差し出す。こう言った辺り流石は保険医と言える行為であろう。

人の容態を見抜き、飲み過ぎであると判断したのならば酒の代わりとして心を落ち着かせる様にお茶を差し出す辺りも良く考えられている。

ああしかし、1つだけ残念なことがあるとすれば梅子の容態は飲み過ぎによる物では無いと言うことだろうか。

そんな梅子や謙信も含め、教師4人の長い夜は少しずつ更けて行った。

「ただいま戻りました、麗子さん」

「おかえり、謙信ちゃん。お酒飲んだみたいねえ、匂いがするわ」

島津寮に戻ると、寮母である麗子が謙信の帰りを出迎えてくれた。当の本人である謙信だったが、酒に全く酔ってなど居ないので自室へと戻ろうと思い、1度足を止める。そう言えば今日でクリスマスが島津寮へ入寮する事になった為に、寮の空き部屋は無くなってしまったのではないだろうか？元々、謙信が使っていたのは2階の空いていた女子部屋の1つである。どうせクリスマスが来るまでと高をくくっていたのが、此処に来て仇になったと言う事だろう。階段下にて1人頭を抱える謙信ではあったが、自室 現在はクリスマスの部屋だろうか 置いてある私物を持ち出さなければ話が始まらない。幸い、現在の時刻は10時手前。早めに帰宅した事が不幸中の幸いと言った所だ、この時間であるのならクリスマスも眠ってはいないだろう。

階段を上り、元・自室の襖を軽く叩く。

中からは微かな音がしていたが、それが止み、静かな足音が此方へと近付いて来る。

ススー、と静かに開かれた隙間からは、襖を叩いた人物を警戒する様に顔の半分だけを覗かせるクリスが居た。

何故？ と純粹に疑問にこそ思ったが、それを抑え込んで謙信はクリスへと軽く手を上げる。

それを見て、先程の警戒心など何処かへ吹っ飛ばしたと言わんばかりに笑顔を携えたクリスが襖を開けた。パツと見た所、部屋の中身自体は弄られていないらしい。

謙信のクセなのか、それとも旅をし続けた所為なのか、それにしたつて今のクリスの部屋にはあまりにも物が無さ過ぎる。ある物と言えば、敷かれた布団の枕部分に置いてある数匹の人形程度だ。和室の部屋では、その存在はあまりにも浮いている。

「戻ったんだな、謙信。歓迎会は楽しかったのだろうか？」

「ああ、クリステイアーネの担任の小島先生と話をして来たよ。良い先生だね」

「ふふっ、そうだな」

嬉しそうに笑うクリスに、「それよりも」と前置きをして、自分の荷物がまだ此処にある事を伝える。通帳や彼の大事な助手とも言える医療器具、そして命と同等の価値を持つ愛読書のブック・ジャックたち。それを取りたいから上がっても良いかな、と訪ねると何とも不思議そうにクリスは首を傾げた。

何を可笑しな事を言っている、その表情はそんな事を告げている様にすら思えた。

「私は父様から、『謙信と共に暮らす様に』と言われてるが……」

「……………ん？」

「？」

「？」

小首を傾げる、2人。

1人は今更と何を言わんばかりに首を傾げる少女、クリスティアーネ・フリードリヒ。

1人は突拍子の無い事態に思考が追いつかない教師、南波謙信。思考に要した時間はタツプリ1分。

思考の果てに納得したと言わんばかりに。謙信は携帯電話を取り出した。

通話の相手として選んだのは、クリスの父であるフランク・フリードリヒである。

呼び出し中、と言う文字の後に浮かぶ通話中の文字。

その文字が出た瞬間、謙信は自分ですら聞いた事の無い様な裏声でフランクに尋ねた。

「何故私がお嬢様と同棲せねばならないのでしょうか？」

『君ならば娘を預けても心配が要らないからだ。24時間、娘の警護を頼む』

「ちょっと待て！ 貴方の信頼を買っている事は嬉しいことだがのう！ オレは男でクリスティアーネは女の子さね！ 一夜の過ちが無いとは」

『君は”私”の娘と過ちを犯すのかね？』

「うっ……………お、犯さんのう」

『ならば信頼出来る。では失礼するよ、Dr・ナンバ』

切断中とだけ綴られた携帯のモニターを、今程叩き割りたいと思つた事は無いだろう。

後ろで此方を心配そうに見守っていたクリスの頭を数度ポンポンと叩き、謙信は溜息と共にクリス　と不本意ではあるが自分の部屋に足を踏み入れた。

部屋の中を確認すれば、確かにクローゼットの中には謙信のスーツと共にクリスの制服も納められている。その下に旅行鞆が置いてある事から、これは彼女の下着なのだろうと勝手に判断。夢ならば覚めてくれと願いながら、クローゼットを閉めて向う先には自分の布団を仕舞つてある押入れ。

ああ、成る程。確かに押入れには見慣れない『掛け布団』が入っている。

人間は2人に掛け布団2つ、そして敷布団が1つ。

頬を引き攣らせながらも、謙信は部屋の中央にあるテーブルへと目をやる。

そのテーブルにも、見慣れないテーブルクロスが敷いてあつた。如何やら本格的に　同棲する事になるらしい。

「……………君は良いのか、クリステイアーネ」

「？　何の事だろうか？」

「オレと共に此処で暮らすと言う事だ。君も女の子だろう？ 同じ部屋に男が居ると言うのは、如何にも居心地が悪いのでは無いか？」

「私は一向に構わない。謙信は私と共に生活する事が、嫌なのか？」

「嫌、と言う訳では無いが……道徳上の話をしているだけだ」

先程まで自分の着ていたスーツの上着を脱ぎ、クリスの制服の上着と被らない様に衣装掛けに掛ける。皺が出来ない様にと、少し大きめの物を買った事がこんな時に功を奏するとは思ってすらいなかった。別に嬉しくも何とも無いが。

気分転換にシャワーだけでも浴びて来ようと思い立ち、その事をクリスに伝えて謙信は部屋を出る。その際、敷布団が1つしか無い事を思い出して、誰か敷布団が余っている寮生は居ない物かと考えながら、トボトボと浴場へと向かった。

男子寮生たちに敷布団が余って居ないかと聞いて回っていた謙信なのだが、そんな上手い具合に敷布団が余っている筈も無く、最後の希望である大和の部屋へと足先を向ける。

此処にすら無いのであれば、腹括って立ちながら眠るしかあるまい。

「ヤマ坊、居るか？」

「ケン兄さん？ いらっしやい、どうしたの？」

「いや、偶然にも敷布団は余って無いかな〜と思ってね」

「敷布団？ ああ、代え様のヤツが1つあるよ。 ちょっと待って」

そんな武士の如く気合を入れていた謙信に、大和は優しく微笑みかけて押入れから敷布団を取り出す。まだ袋に入っていたそれは使つてすらいない物だったのだろう。

そんな物を見せられて、謙信自身何とも申し訳無い気分になってしまった。

本来の持ち主である大和には古い物を使わせ、自分だけ新しい物を使う等と言う事が如何しても許せなかったのである。かと言って、このまま手ぶらで自室へ戻れば立ちながら眠る事に繋がってしまう。究極の二択に頭を抱えながらも、謙信は申し訳無さそうに大和の敷布団を手を取った。

「ごめんな、ヤマ坊。迷惑掛けちゃって……」

「気にしないよ、こんな事。寧ろ、兄さんこそ珍しいね。オレに頼み事なんてさ」

「……まあ、諸事情ってヤツだ」

「それってクリスのこと？」

「うっ……ま、まあそんな所だ」

「上がってよ、折角だし。兄さんと話す機会って中々無かったからさ」

半ば引き摺る形で無理矢理謙信を部屋の中に連れ込み、着席させる。直ぐ様取り置きである『兄さん専用リポD』を取り出すと、餌付けされた犬の如く謙信が目を輝かせながら大和の手にあるリポDへと視線を注いだ。

無論、これは謙信の物であるので躊躇せずには渡すと瞬時に蓋を開け、一気に中身を飲み干す。プハ〜！などと親父臭い表現を使っっては居るが、まだまだ謙信は元気そうだった。

「あのクリスって子、良い子だね。変わり者だけど」

「……やっぱり、ダメか。融通の効かない子だったろう？」

大和の変わり者と言う言葉の意味を逸早く汲み取ったのだろう謙信は、溜息と共にそう切り出した。そしてポツポツと語り始めるのはクリスの語る正義、そしてその原因を作ってしまった自分とクリスの馴れ初め。

クリスの父親の怪我を治し、その礼として招待された彼女の家にて自分が語った時代劇の名場面や名台詞、そして『正義の意味』。それ等全てがクリスへ影響を与え、歪な存在へと作り変えてしまっていた。

そう語る謙信の様子を見て、漸く大和もクリスと謙信の関係を理解する。

クリスが何故あそこまで謙信に懐いていたのか。
そして、謙信は何故あそこまで自分たちとクリスを会わせる事に迷いを覚えていたのか。

それ等は全て、結局は彼女の強過ぎる我が影響しているのだろう。
そんな我を作る切欠を与えてしまった自分の言動を、今でも謙信は後悔している。

だから彼はクリスに強く言い出す事が出来ず、彼女の暴走とも言える正義の執行を見守り、見続ける事しか出来なかったのだ。

「正義って何だろうな？」

「……難しいよ、そう言う問題って。人にも個性があるみたいにな、正義って言うのも結局は十人十色だとオレは思っけど」

「他人の正義なんて、押し付けられれば結局はただの押し売り……
ああ、だから」

そこで言葉を止めて、謙信は自嘲気味に笑う。

あの時、クリスに語った時代劇が描いていた正義。

よく思い出してみれば、アレに描かれていた正義だって差異はあった。
た。

水戸黄門は人を殺さずに、その心に教えを諭す。

だが、必殺仕置き人は悪を許さず、殺す事で弱き民を護ろうとする。
対極に位置する2つであったと言うのに、謙信はソレを同一の正義としてクリスに語ってしまった。悪を倒す方法の違いがあったと言うのに、正義が正しいと教えてしまった。

その結果として、謙信は彼女に “絶対正義” の理念を埋め込んでしまったのだろう。

この世界に絶対的な正義など存在しない。
どんな存在だって、結果としては誰かのマイナスとなって生きてい
る。

行動全てがプラスになる存在なんて、この世界の何処にも存在など
していないのに。

「今度の金曜集会だけど

」

「きつと、何かが起こるだろうな。あの子を仲間として受け入れる
なら」

「……そう、だよな」

強過ぎる正義に対する熱意故に、クリスは孤独になってしまう。

だからこそ、教えてあげなければならぬのだ。

人を救う医者たる者として。病の原因を、この手で取り除かねばな
らない。

人を救うと豪語したのであれば、それがどんな病であろうかが決して
諦めない。

身体の事ならば共に痛みを分かち合い、心の悩みならば共に悩む。

南波流とは、そうやって人を癒して行く物なのだから。

そして南波謙信は、人の命の輝きと尊さ、そして美しさを知ってい
るからこそ。

「勝負は次の金曜日、タイムリミットは僅か。如何する、策士？」

「策士に頼らなくても策はあるクセに。それに、兄さんは誰かの手
を借りるタイプじゃないでしょ？ 特に”治療”に関しては、さ」

「……小生意気だな、”大和”のクセに」

「成長したって事でしょ。オレだって兄さんと一緒だよ」

笑いながら背中に凭れ掛って来る大和の重みに安心感を抱きつつ、謙信は強く己の手を握り締めた。全ての原因が自分にあるのであれば、それを断ち切るのは自分の役目である。

確かに、大和の言う通りだ。

この件には 謙信はきつと、誰も関わらせたくは無いと思っているのだらう。

医者としてでは無く、クリスを愛する1人の兄として。

愛する妹の為に、南波流師範代 南波謙信が執刀する大手術、必ず成功させなくては。

部屋に戻ると、人形を抱き締めていたクリスが布団に入って横になっていた。

まだ眠っては居ないのだらう。謙信の襖を開ける音に気付き、其方へと身体の向きを変えていた。そんなクリスの隣に膝を付き、砂金

の様に美しい髪を撫でる。

気持ち良さそうに身を委ねていたクリスではあったが、突然として何か不安にでも駆られたのだろう。髪を梳かしていた謙信の手を掴み、絶る様な声を出していた。

「謙信」

「如何した？」

「私は、私の正義は……謙信の正義は、間違いなんかじゃない。そうだろうか？」

「……クリステイアーネ」

恐ろしい夢を見た幼子の様だと、謙信は今のクリスを見て思う。悪鬼に追われる子供の様に、不安を強く両目に映したクリスの目は仄かに涙で湿っていた。彼女なりに考えている。そして、悩んでいるのだろう。

“正義”の意味、そして方向性。
だからこそ今の彼女は不安定で、危なっかしくて、心細いのだ。

「私は悪では無い……私は……謙信が、間違っ事など……ッ！」

「クリステイアーネ」

「違う、私は悪くない、私は悪じゃない、謙信の言葉が間違っ筈が無い……ッ！」

「クリスッ……！」

怯え、震えるクリスを強く抱き締め、その背中を何度も摩る。

赤子を泣き止ませる母親の様に、何度も何度も、胸の中から嗚咽が止むまで、幾度と無くその背を撫でる。クリスの小さな頃 何処かで転んで、泣いて帰って来た彼女をこうして慰めていた事をふと思ひ出していた。そんな自分の苦笑しながらも、謙信は胸の中で嗚咽を漏らす妹を抱き締め、ただ静かにその不安を受け止めていた。

「落ち着いたかい、クリスティアーネ」

「……………うん」

未だに胸に顔を埋めていたクリスではあったが、謙信の問い掛けに弱々しくも確りと返事だけは返してくれる。それに安心したのか、謙信は彼女の身体を器用に片腕で抱きかかえると、その身体をゆっくりと布団へと横たえた。

「ベッドで生活して居た君にとっては、少し寝辛いかも知れないが我慢してくれ。今度買ひ物にでも行った時は、マットレスでも買って来る事にしよう」

「謙信」

「消灯時間も近付いている、電気を消すよ。暗いからと言って騒がないでくれよ？」

「ッ、謙信！」

「クリスティアーネ、今のオレから何も言えない。ただ、君の悩みは凄く正しい事だし、その果てに得た答えはきつと君の心に深く残る事になる。今はとても不安かも知れない、怖いかも知れない、

だけど逃げないで欲しい。その答えは　きつと」

それだけ告げると、謙信は優しくクリスの頬を撫でる。

涙の跡すら残すその頬を見て、謙信は一人強い後悔の念に襲われていた。

彼女の涙も、苦しみも、元を辿れば全ては自分の所為なのだ。それが悔しくて、苦しくて、哀しくて、そんな感情たちが結局は行き場の無い怒りへと変わって行く。

「おやすみ……謙信」

「ああ。おやすみ、クリスティアーネ」

泣き腫らした目で笑顔を浮かべ、クリスは静かに目を閉じる。

いつかはきつと

そう胸の内だけで呟き、謙信は大和から借りた敷布団をクリスから少し離れた場所に敷いた。

第四之巻「予期せぬ事態にこそ上手く立ち回るべし」（後書き）

絶対的な正義がこの世界には本当に存在しているのか

クリスとの話では、そんな真面目なテーマが含まれて居ます

ある意味では原作よりも歪んでいるかも知れないクリスを矯正するのは、

お医者さんであり、お兄さんである主人公の役目であります

第伍之巻「物事を臨機応変に運ぶことこそ成功へと繋がる道也」(前書き)

3時のおやつに、マジ兄(真剣で兄貴を愛しなさい!の略称)など
如何でしょう

はは、胃もたれしそうだ……

4/09 修正

第五之卷「物事を臨機応変に運ぶことこそ成功へと繋がる道也」

第五之卷「物事を臨機応変に運ぶことこそ成功へと繋がる道也」

目を開けた時、隣に居る筈の無い誰かが居る。それを今回ほど恐ろしいと思った事はないと、後に謙信は涙ながらに語っていた。何せ、少しでも彼女の機嫌を損ねよう物ならば軍隊が飛んで来るかも知れないと言う爆弾を背負った生活をしているのだ。彼の精神は1日目にして限界一歩手前に到達しようとしていた。

そんな状態でも、そんな状態だからこそ、南波謙信と言う人間は容易く休息をとる事が出来る。寝付けないなんて有り得ない。何せ戦場のど真ん中、銃弾飛び交う激戦地ですら堂々と居眠り出来る程の猛者なのだ。疲れたら休む、眠いなら寝る、それが健康を保つ為の秘訣であると謙信は常々言っている。まあ、それと戦場のど真ん中で眠る事には全くと言って良い程に関連性など無いのだが。

「んっ……」

自分の右腕に押し掛かる違和感。

それに気が付いたのは、夜中の何時だったか。1時だったろうか、それとも2時だったかも知れない。そんな曖昧な精神状態で、謙信はふと目が覚めた。

右腕に押し掛かる違和感を払い除けようと思い、ふと手を止める。

そこには、スヤスヤと眠るクリスの寝顔が

「と言つ夢を見た」

共同で使う洗面所。

そこで歯を磨きながら、謙信は隣で自身と同じ様に顔を洗う大和に話しかける。肝心の大和はと言うと、何とも言えない微妙な表情を浮かべて謙信に視線を送っていた。その視線は「だから如何した」と言うよりは「何でそんな物を？」と疑問に思ふ意味合いの方が強かったが、今となつては分からない事ではある。

「朝からハードな夢だね。で？ その続きは」

「父親に許されるまで、クリスティアーネと愛の逃避行。お蔭で眠りが浅くて……ふぁ〜」

現実で、もしも謙信がクリスにそんな事をしよう物ならば許す・許さない以前に蜂の巣にされて終わりだろう。1日と逃げ切れる気はない。

何せ、相手は軍隊だ。そんな文明の利器の最先端突き進む様な連中を相手に、たかが人間1人が出来る事など精々逃げ回る事程度だろう。とは言っても、どうせ衛星やら何やらが飛び出して、数十分もすれば周囲100m四方を封鎖される事になるのだろうが。

「現実にならないと良いね」

「ならない事を切に願うよ、オレは」

「謙信！」

「……件の問題児の登場か。如何かしたのかい、クリステイアーネ」

「私は先に食堂へ向っているぞ」

「はいはい。じゃあ、後でね」

顔を洗っていた大和たちよりも先に洗顔などは一通り終わらせたのである。クリスは、謙信にそう告げて洗面所を後にした。その去り際、大和をコレでもかと言う程に睨んでいた事を謙信は見逃さない。幾ら意見の食い違いで衝突したとは言え、クリスにあれ程恨まれる事は滅多に無いだろう。如何した、と言葉に出さず大和へと視線を向ける。

「風呂場で……」

「言うな。分かった、理解したから。ヤマ坊も初日から災難だな」
災難とは、勿論クリスマスに魅力が無いと言う事を指し示している訳では無い。

彼女は学園の女子生徒たちの中でも上位に食い込む容姿を持っているだろう。普通ならば、多少の暴力を振るわれようがラッキースケべと喜ぶべき事である。

だが、大和も謙信もクリスマスのバツクに誰が居るのかは確りと理解しているのだ。あんな巨大な組織と敵対して、生き残れる気などしない。だからこそ心から現状を喜ぶ事など到底出来ないのである。

「しかし、まあ……悪い子じゃないのにね」

「ああ……悪い子じゃ無いのに」

ほぼ2人同時に溜息を吐き、顔を拭う。

鏡に映った2人の顔は実年齢より幾分も歳をとった様に感じられたと言った。

そのまま食堂へ向い、ほぼ定位置となった大和の隣へと謙信が腰を下ろす。そんな謙信の前にはクリスマスが既に着席して居たので、軽く朝の挨拶を交わすと朝から爽やかな笑顔で挨拶に応じてくれた。

しかし 昨日の夜は夢の所為で深い眠りに着く事が出来なかった。この眠気を払う為には活力剤でも飲めば良いのだが、そんな物を飲んでしまうと百代と同じ様な戦闘狂に変わりそうで怖いのだ。実際そんな副作用は全く有りやしないのではあるが、気の持ち方と活力剤「ドーピング」と言う凝り固まった先入観の所為であまりそう言った物が好きでは無かった。ただ、リポDだけは別だと言う事も追記して置く。

「お兄ちゃん、これ」

そんな折、眠気を誤魔化す様に欠伸を堪えていた謙信の前に真っ赤な飲み物が差し出された。差し出した相手は京。朗らかな笑みを携えて、何の敵意も無く置かれたその飲み物らしき物を、未だに寝惚けていた謙信は「トマトジュースの類か何かと」勘違い”した。元々、トマトジュースには大量の完熟したトマトを使用する。完熟したトマトはリコピンが豊富であり、それだけ抗酸化作用が強いと言う事になる

つまり料理などに良く使われるトマトジュースではあるが、それは飲む事によつてはまた別の面で身体にアプローチをしてくれる最高の飲み物なのだ。

まあ、京が渡した飲み物がトマトジュースと言う事が前提ではあるが。

ありがとう、と京の行為に笑みで返し、謙信はそれを一気に煽る。

一瞬で口の中に広がる、芳醇で居て、濃厚な刺激。

鼻を突き抜けるトニツクの様な爽快感。

喉を通り過ぎた瞬間、胃が拒絶するかの様に激しく痙攣をする。

つまり、辛い。初日に飲んだ牛乳（辛）の何十倍、下手をすれば胃に穴が空くのでは無いだろうかと思わせる程に辛く、そして痛い。

それを噴出さなかつたのは、食材を無駄にすると言う事がどれだけ愚かなのか知っている謙信だからこそその小さなプライドである。

肩を大きく震わせ、口元を抑え、必死に吐き出さない様に歯を食い縛る。

一口飲み込むだけで吐き気を催すが、それでも飲み込む。

これで自分の身体に何か変化が起きたら、医者の不養生と笑うしかあるまい。

「ひッ、はッ、ふッ！！」

「……気に入ったみたいで嬉しい。大和も、どう？」

「い、要らない！ 兄さんが此処までになる飲み物なんて、要らないからな！」

「恥かしがり屋さんの大和も素敵……口移しする？」

「要らない、必要じゃ無い、止めてくれ、頼むから！」

「み、みゃこ、おめえ、やつひえくれひやはあっ！」

『京、お前、やってくれたなあっ！』

「お兄ちゃんは特別。もう一杯いく？」

「ひはん！ み、みどうっ、まひゅひゃん、みどうっ！」

『要らん！ み、水うっ、まゆちゃん、水うっ！』

「あ、ああ、はは、はひっ！ 水、水ですね！？ 今持って来ます
ううううっ！！！」

案の定と言う事だったのか、京が謙信に渡した飲み物はタバスコだった。

燃え滾るマグマの様な激痛を口の中に感じながら、謙信は朝食も食
べずに飲んで吐き、飲んで吐き、それでも必死になって口の痛
みを和らげる為に水を飲み続けたそう。

「……まだ口の中がヒリヒリする……」

「兄さんは不運だね。と言うか、普通は気付かないかな？」

「朝のオレはダメだ。頭が動かん、特に寝不足の日はダメだ」

川神学園への登校中。

並んで歩く大和と謙信は他愛の無い話に華を咲かせていた。取り敢えずは今朝の一悶着から始まり、学校の事へ。大和がクラスメイトの事を語れば、謙信は感心したかの様に頷いたり、笑ったり、ちょっと突っついてみたり。逆に謙信が保健室での事や先生たちの話をすれば、珍しい教師たちの一面に大和は表情を変えていった。

2人で並んで歩いている姿は仲の良い兄弟にしか見えぬ、本人たちからすればその言葉は他に無い程に嬉しい賞賛となるのだろう。

軍師であり、風間ファミリーの頭脳その物である直江大和。

一騎当千の百代に匹敵する武道家である南波謙信。

一方は頭脳、一方は肉体、とコンビネーションや統率、何よりもお互いへの信頼が他の追随を許さない。この2人のタッグに勝てる者は、そう易々とは見付からないだろう。

だがしかし、そんな2人でも絶対に勝てない相手がいた。

「よーっ！ 弟、謙信！ 我が最愛の弟と我が最愛の双子（仮）！」

「さっ、今日も学校だ、急がないと」

「逃げるなー！」

目の前に立ち塞がった川神百代。

そう、言わずとも知れた風間ファミリーの最終兵器である彼女こそ彼ら2人の最も苦手とする相手でもあった。大和は舎弟だからと言う理由があるのだが、何故謙信が彼女に勝てないのか。その理由は

まあ、謙信の性格故なのか。

そんな百代から逃げる為に背を向けた2名ではあったが、持ち前の俊足を活かした百代に腕をガツチリとホールドされてしまう。これで逃げる事は不可能になった。

逃げる＝腕を引き千切るしか無いからである。

「よしっ、取り敢えず金貸してくれ！」

「あ？ か、金？」

「姉さん……また……」

困惑気味の謙信とは裏腹に、この状況が如何いった事から来る物なのか理解しているであろう大和は至って冷静。冷静とは言え、ドバドバと涙を流しているので平静であるとは言い辛いのはあるが、細かい事を気にしてはいけないのだ。

「川神家は高貴な家柄と聞いておったが、それがこの様じゃ！」

「返済期限が迫っているで候」

「九鬼家のメイド長として取立ては確りするぞ」

「不死川のご令嬢、武士系譜の矢場家、締めには九鬼家のメイドか……大物揃いだな」

「おうっ、確り借りたぞ！」

「威張るな」

胸を張る百代に即座に突っ込みを入れ、自分の周りで回って居るのである不幸の星 結局は百代だが のあまりにも吹き飛んだ行為に頭を抱えなくなる。

金を借りるのは別に何も言わない。教師として如何かとは思うが、返す意思が確りあるのならば何ら問題は無いと思っているのだ。まあ今回の場合は百代の返す・返さないの意思を問わず、この人数に借りたと言う事が問題なのではあるが。

「……よしっ、分かった」

そんな時、何を理解したのか大和が謙信よりも一歩前へと出る。

金を貸している側も何事かと思つて大和を見詰め、百代も期待したかの様な瞳で大和へと視線を向けていた。

「オレが身体で払おうじゃないか！」

ズキュウウウン

辺り一体に衝撃が走り、百代は目を輝かせ、謙信は一人「……で？」

と言つ表情。

それもその筈だろう。

面子を見れば分かるが、身体で払うなんて面白可笑しい言葉が通用する連中では無い。

その証拠に、不死川のご令嬢を含む3名の顔が引き攣っているではないか。

渋々、本当に渋々ではあるが弟分の危機かも知れない現状に此処で謙信が動く。

「不死川のご令嬢、この馬鹿にはオレから良く言い聞かせて置く。だからもう少しだけ返済期限を待ってやる事は出来ないか？」

「むっ……没落したとは言え、南波には世話になっておつた。そう言われると……」

「矢場家のお嬢さんも同じく。返済は必ずさせる」

「……南波先生の言う事ならば従うで候」

「九鬼家のメイド、お前は……納得出来んか」

不死川・矢場の2名が納得したとは言え、九鬼家のメイド長であるあずみは如何にも不服な様子である。それもその筈、この目の前に居る南波謙信は九鬼家に従うメイドたちにとっては恨んでも恨み足りない存在なのである。

九鬼家と南波謙信の対立。

正確に言えば、謙信の武術を気に入った揚羽が送り込んだ精鋭の1人に　あずみは居た。何人目の刺客だったのか、謙信も彼女も覚えてはいないが、確かに謙信とあずみは対決したのだ。

勝負の決着は謙信の勝利で終わりを迎える。

あずみの攻撃など避けるまでも無いと全て気を放出するのみで払い除け、彼女が諦めるまで何もせずに攻撃を傍観し続けたのだ。戦闘に携わる者としては屈辱とも言える行為を行った謙信故にあずみは謙信が嫌いだった。

その感情は最早嫌い、と言うよりは嫌悪に近いのだが。

謙信にしてみれば、何度も何度も襲って来る敵を相手に一々全力で相手をして居る余裕が無かったからこそ気を放出し続けると言う最も安全で最も効果的な防御手段を展開する事で少しでも体力を温存しようとして居ただけなのではあるが、武道を嗜む物から見れば、それは屈辱以外の何物でもなかったのだ。

「……気に入らないな、おいコラ」

「如何してもダメだと言うなら、今直ぐにでも金は払う」

「あたいが気に入らないのは、お前だ」

「それなら 交渉は決裂か？」

「らしいな」

直ぐ様に己の得物へと手を掛けるあずみと、自らのネクタイを緩める謙信。

一触即発とも言える雰囲気か辺りへと濃く充滿して居た。

このまま再戦と洒落込もうとする2名の間、突如として1人の影が割り込む。

一触即発の原因を作ってしまった大和が2人の間に入り、謙信へと視線を向けていた。

強く、強く謙信を見詰め、言葉すら紡がずにただ見詰め続ける。自らの意思を伝えるのに、言葉は不要なのだ。そして謙信も 誰よ

り大和の心には敏感だった事が幸いした。

「借金の一部はオレが払う……百代、バイトでもして金を稼げよ」
財布から出した札を百代へと渡すと、興味を無くしたと言わんばかりに無言であずみの隣を通り過ぎ、黙々と歩き去って行く。その後を追い掛ける様に走り寄る大和を見送りながら、あずみもまたその場から姿を消した。

「兄さん」

「……」

「兄さん！」

「……オレ、劇団員になれるかな」

「え？」

「良い演技だっただろ？ あの一触即発の雰囲気とか」

「い、いや、でも確かにあの雰囲気は……」

「百代が動かなかった事その物が演技だったって証拠だよ。あの敏感モモ野郎が」

ケラケラと笑いのけ、謙信は何事も無かったかの様に学校へと歩を進める。

そんな尊敬する兄貴分の背中を見詰め、大和は1人思った。
今のケン兄さんは劇団員と言うより 道化がピッタリだと思うよ、

と。

今日も今日とて、学園の保健室は暇だった。

入った当初は百代の存在から怪我人が絶える事の無い、危険な学園なのかとも思っていたのだが、如何やら此処に居る生徒たちは基本的に肉体のスペックが高いらしい。

保健室に人が来る事には来るのだが、多い時でも3、4人。下手をすれば1人も来ない事だつてあるのだ。その為に、謙信は持て余した時間を読書に費やす事になっていた。

「それで、クラスメイトが」

「……」

「謙信？」

「あ、ああ。それで、何の話だったかな？」

「もう良い！ そんなに本が好きなら、お前は本ばかり読んでいれば良い！」

「すまない、クリステイアーネ。決して君の事を忘れたと言う訳では無いよ」

謙信の読書に対する姿勢は、帰路であろうと変わる事は無い。

隣で今日1日の出来事を事細かく通達しようとするクリスの話などに耳すら傾けず、医療学の本をただ只管に読み耽っている姿は病的とまで言える程である。

人を救いたいからこそ、本を読み、知識を付ける。

ある意味では貪欲な彼は隣で共に帰路を辿っていたクリスの声で漸く我に返ると、バツが悪そうな笑顔を浮かべた。

クリス自身、謙信が医師であると言う事は知っている事ではある。彼の人の命に対する熱意や、日々精進しようとする姿勢だって幼い頃に隣で見た事があった。

それでも自分よりも本ばかりに目が行ってしまうと言うのは、女の子からすれば気に入らない事でもあるのだから……両方とも仕方が無いと言えば仕方が無い。

「あつ、そうだ。少し本屋に寄っても良いかな？ もう少してこの本も読み終わってしまうから、新しい本が如何しても欲しくてね」

「むっ……分かった」

「ありがとう、クリステイアーネ。帰り道では久寿餅でも買ってあげるからね」

「こ、子供扱いするな！」

ブンブンと隣で怒るクリスを慣れた口調で容易く宥め、謙信とクリスは金柳街にある川神書店と言う古い本屋へと向った。

向かいに別の真新しい本屋があると言うのに、それでも此方に謙信が足を運ぶ事に疑問が浮かんだクリスではあったが、敢えてそれを口には出さずに謙信と共に書店へと足を踏み込む。

その場にあつた本は、ハッキリ言えばどれもコレもがマニアックな物ばかりだった。

一般人ならば手に取る事もしない様な本を数冊だけ手に取ると、中身のチェックもせずに謙信はスタスタとこの店の店長と思わしき人物へと渡す。

慣れた手付きで会計を済ませ、店長に軽くお辞儀した謙信は来た時と同じ様にスタスタと書店を後にしていた。

「謙信、如何してあの様な場所で購入物を？」

「うん？ ふふつ、”あの場所”だからだよ」

「??？」

「君にだっていつかは分かる様になるさ」

そう告げると、謙信は特にその後と言葉を紡ぐ事も無く久寿餅を買う為に仲見世へと足を向けている。その後を追う様にして駆け寄るクリスではあったが、ふと謙信の顔を見上げた時、何とも言えない気持ちになった。

謙信の表情が、暗い。

それは例えば、廃れたビルを見た時だとか。今は店を畳んでしまっ

たのだろつ跡地を見てだとか。そう言った物を見て行く度に謙信の表情は暗くなり、何処か憂いすら帯びて来る。変わり行く景色。覚えている景色。

その違いが彼の心に何処か影を落としている等と言う事は、今のクリスは知りもしなかったが。だからこそ、そんな彼を元氣付けようとクリスは強引に謙信の手を引つ張り、目的地である仲見世へと向う。どうやら今回は、大和に案内された為に場所は分かっている事が幸いした様である。

「ク、クリステイアーネ!？」

「早くしないと、日が暮れてしまうぞ! 行こう、謙信!」

爽やかとも言える笑顔を携えて、元氣の無かった謙信を元氣付ける為に奮起する健気な少女。その行為は、少なくとも謙信の心には良く響いていた。

「1人知れず」ありがとう」とだけ呟いて、引つ張られる力をそのままに目的地まで一気に駆け抜ける。勝気な妹に引つ張られる気弱な兄。

今の2人はそんな絵をモチーフにしている様でもあった。

それから仲見世で買った久寿餅を食べながら、河川敷を辿るクリスと謙信。

行儀が悪いから店で食べていこうと進言したクリスではあったのだが、たまには食べ歩きも良い物だからと謙信が封殺して今に至るのである。

まあどちらにせよ、クリスは美味しそうに久寿餅を食べるのではあるが。

「ふふっ」

「君のお気に入りみたいだね、クリステイアーネ」

「ああ、甘くて美味しい」

「それならオレのも1つ如何だい？ この量は食べ切れなくてね」

「い、良いのか？」

「是非とも」

「ありがとう、謙信。謙信は優しいな」

食べ切れないと言う事でクリスマスに自分の久寿餅を進呈し、謙信はと言うと隣で美味しそうに久寿餅に齧り付くクリスマスを微笑みながら見守っていた。

他の人たちよりも正義に対して意固地ではあるが、こう言った甘い物に対して弱い所はやはり年頃の女の子だからこその特権ではあるのだろう。

と言うか、何かこう、物を食べているクリスマスは小動物に例えるとハムスターとかそんな感じに思えてしまう。小さな口でちよつと大きな餅を齧る姿など、まさにそれだ。

「……何か可笑しいだろうか？」

「え？ オレ、もしかして笑っちゃった？」

「ああ、クスクスと」

拗ねた様に頬を膨らませるクリスに苦笑を浮かべ、気にするなと言わんばかりに謙信はクリスの頭を撫でた。まあ此処で事細かく説明するよりは、全て有耶無耶にしてしまった方が結果として後々自分に届く被害が減るのだから吉とも言える行動である。

「おつ、兄ちゃん見つけ！！」

そんな折、河川敷の下から聞きなれた声が聞こえる。

バンドナを巻いた男、無論誰もが知っているであろうキャップの声だった。

謙信は軽く手を振ると、河川敷を軽やかに降りて行く。

それに習う様に、クリスも謙信の後を追った。

「野球か、シヨウ」

「おう！ 兄ちゃんもやる？」

「いや、遠慮する。スーツだから如何にも動き難くてさ」

「ちえ〜、残念」

そう言うてはいるが、キャップの顔は残念と言う様には見えなかった。

そもそも、あまり期待はしていなかったのだろう。私服の黒シャツとダメージジーンズならともかく、スーツ姿で激しく動く野球は流石に酷である。それを分かっているにも、少しだけの『if』を探求する辺りは流石キャップと賞賛すべきなのか。

「 楽しそうだな」

ふと、クリスが小さくキャップたちの野球の感想を漏らしていた。それを聞いたキャップと謙信が顔を見合わせ、小さく微笑む。元々スカウトするつもりで居たのだから2人は、寧ろ手間が省けたと言わんばかりのドヤ顔を披露していた。

「だったら、クリスも仲間に入るか？」

「え？」

「オレは君を歓迎するよ、クリスティアーネ。他の連中は　聞くまでも無いか」

「美少女歓迎！」

何処から駆け付けたのか分からないが、百代が一瞬でクリスの前へと詰め寄り、その華奢な身体を担ぐ。その様子を見ていた謙信が止めに入ろうとはしたが、折角の機会と言う事でただ傍観する事とした。この医者、案外と鬼畜である。

「手続き・氏名記入・入会金一切不要。馬鹿と狂人ばかりの風間ファミリー入会か」

楽しそうに笑う謙信を他所に、その後ろではクリスが百代に襲われていた。
寝技DE。

「ええ」音頭は不肖この直江大和が

「あ、テメエ、ワン子！それはオレの肉だ！」

「鍋は戦場！」

「僕は白滝がいいな」

「ここにタバスコを……」

「誰か京を止めるー！！！」

「誰か聞けよ！！！」

「諦める、大和。コイツ等はそう言う連中だ。ワン子、よそつてくれ」

乾杯、そんな在り来りな言葉で此処に居る連中が制御される訳は無かった。

大和の音頭を完全に無視し、各々が鍋に箸を突っ込み、目的の具材を次々に食して行く。

消費スピードは肉く『越えられない壁』くその他ではあつたのだが、

それをわざわざ口に出して言う程に大和自身も空気を読めない訳では無かった。

そんな中だろつと、謙信は1人熱燗片手に、胡坐を掻きながら肉と野菜を均等に食す。

自分の身体を作るのに必要な肉と野菜のエネルギー。

それを現在、彼は黙々と身体に詰め込んで居るのである。

そして この男、ワン子よりも断然食う。ワン子は自ら鍋は戦場とは言ったが、謙信にだけはその言葉が適応される事は無かった。そんな物を適応すれば、この場に居る全員を叩きのめしてですら鍋の中身を1人で間食しようとするだろつ。つまりは、食べ物絡んだ時の謙信は百代すら凌駕する危険性を発揮するのだから振るわれる方は堪ったものでは無い。

その為の救済手段として此方が更に盛る、と言う給仕にも似た事をするしか無いのだ。

まあ命懸けともなれば、それは当たり前前の事だろつ。

「まあ何はともあれ、新メンバー加入は喜ばしい事だ。ガクト、よそつてくれ」

「に、兄ちゃん、まだ食うのかよ……!?!」

「この程度では満足すら出来ん。それとも お前が食材になるか?」

「冗談でも勘弁してくれ、洒落にならねえぜ!!」

「……しかし、肉が少ないな。こんな事なら鉄心さんにもつと頼めば良かった」

「川神院に来た献上品全部だよ、これ! お前の胃袋が予想外過ぎ

るだろ！」

「百代、うるさい」

「ぐ、ぐぬぬっ……」

何よりも、食卓に着いた時の謙信は強かった。

黙々と白米を掻き込み、黙々と鍋の具材を減らし、黙々と食べ続けるその姿。

見ている者たちがゲツソリする大食漢である。これで優秀な医師だと言っただから、尚更自分の耳と目を信じられなくなるだろう。

「まゆちゃん、いっぱい食べてね」

「ひゃ、ひゃい！ ま、まいっ、です！」

大和たちが食事をギブアップして行く最中、由紀江と謙信の箸だけは止まる事が無かった。別に由紀江が謙信に並ぶ大食漢だからと言う訳では無く、純粹に食べているスピードがゆっくりと言っただけの事なのであったが、此処に居る者は半ば強制的に謙信に張り合える猛者が現れた様に錯覚していた。

「それにしても何だよ、謙信！ この面白かわゆい生き物は！？」

「1年の黛由紀江ちゃん。剣聖・黛十一段の娘さんだ」

「！？ ち、父をご存知で……？」

「あそこに置いてある薬はオレの調合した物だからね。君のお父さんはオレのお得意様」

劍聖、黛十一段。

国に帯刀を許可されたと言う武道家たちから見れば超の付く有名人である。

そんな娘なのだから強いと言うのも当たり前。そしてそれを確かめたかったのだろっ百代の行動を牽制する為に、謙信は由紀江の素性を明かした。

明らかにブーブーと残念そうに此方を見る百代ではあったが、既に興味は無いと言わんばかりに謙信は鍋の中にある食材を空にする事に熱中してしまっていた。

「幻の十一段の娘さんか……」

「武道家ばかりだね、うちの女子って」

「面白いなー！」

風間ファミリーの普通組みである大和・モロ・キャップはそんな劍聖だの何だのと言う物騒な単語に僅かばかりの恐怖を覚えながらも、茶を啜っている。

そんな時、漸く食事を終了したのであろう謙信が箸を置いた。

皆の視線がそこに集まり、1人ゆっくりと茶を啜り続ける謙信の喉を通り越すお茶の音だけが、居間に静かに響き渡る。

「まゆちゃん」

「ひゃ、ひゃい!？」

「折角だ。劍聖の娘さんとやらの実力、見せて貰っても良いかな？」

ニコリと笑って、謙信は静かに剣聖の娘である由紀江に勝負を叩き込んだ。

本人からすれば百代の暴走を止めるべく投じた一手ではあったのだが、大和たちからすれば違う。『食後の運動がてら、女の子を叩き潰す』、そんな悪代官の様な兄の背中が彼らの瞳には写っていたと言う。

それに百代も納得して居ない様ではある、先程よりも一層口を尖らせてブーブーと唸っているのだから。

「受けてくれるかな？」

「……はい」

それでも由紀江は、謙信の挑戦を受ける事を決断する。真っ直ぐな視線が 笑顔の天使を射抜いていた。

第伍之巻「物事を臨機応変に運ぶことこそ成功へと繋がる道也」(後書き)

前々回くらいに金曜集会云々などと次回予告していましたが、
金曜集会の話は次回く次々回になりそうです……ごめんなさい

取り敢えず、次回はまゆつちvs.お医者さん

剣聖の娘まゆつちは迫り来るお医者さんトラップに如何対処するのか

「ああダメです、そこは……」

「君の欲しがっていた人の温もりだよ、確りと味わいなさい！」

待て、次回

() > 良い子は真似しちゃダメズエア

第六之巻「結成！ 新たな仲間、新生・風間ファミリー！」（前書き）

金曜集会までの話

此処までが、ある意味ではプロローグ的な物になります

4 / 0 9 修正

第六之巻「結成！ 新たな仲間、新生・風間ファミリー！」

第六之巻『結成！ 新たな仲間、新生・風間ファミリー！』

百代の拳を”力”と例えるならば、由紀江の刃は”技”と言える物だった。

相手が拳と言う事を理解しているからこそ、振りの大きい攻撃は決してせずに、一撃一撃をコンパクトに纏めて斬り・払い・薙ぎ・突く。

それでも謙信は冷静に、その鋭き一撃に対処した。

袈裟に斬られれば掌で刃の横を軽く殴り、軌道を反らせてやる。

払いには身体を屈めて、薙ぎには跳躍する事で、突きには身体を半歩退く事で。

攻撃を受けるのではなく、流す。

自らの拳を振るう事で相手を傷付ける事無く、相手が疲れ果てた所に適度な一撃を当て、勝負を決すると言うある意味では相手に屈辱

すら与えてしまいかねない攻撃方法。

例え自らを悪に染めてでも、謙信は人を傷付ける事だけはしたくなかったのだ。

まあ由紀江に挑んだ時点でそんな話の信憑性など薄れてしまったが、彼の心は悪などでは決して無い。それは 誰よりも風間フアミリが、そして百代が保障してくれる。

「はっ！」

「うっ、お ツ！」

上段から落とされた木刀の一撃を両の拳で受け止めるも、上からの圧力は強くなる。

思わず肩膝を地へと付け、由紀江の見掛けからは想像も出来ない重圧に歯を強く食い縛り、耐える為に両の拳へと一層力を込める。

メキリ、と片足が地面へと沈んだ。この華奢な体の何処にそんなパワーがあるのか、技とかカッコいい事を言っていたがその実、中身は列記とした虎だったと言つ訳である。実に笑えない。

「変わってやろうかー？」

「断る……！」

百代からの助け舟を一蹴し、反撃の狼煙を上げるべく拳に気を纏う。元々気を集中していたのでダメージこそ少ないが、両拳は今や紫色に染まっていた。上から抑え付けられた所為で、血が止まっていたのだらう。上手く拳を握る事が出来ない。が、それでも勝機は十分に存在する。

右腕だけで木刀の圧力に耐え、左腕で木刀の柄を殴り付ける。バランスを崩した由紀江はあわよくば転倒、となりそうだったが確りと態勢を立て直して此方へと向き直っていた。

成る程、強い。

膝に付着した埃を払いながら、謙信は思う。

剣聖の娘と言う肩書を持つだけの小鹿かと思いきや、その中には猛者としての血がこれ見よがしに受け継がれていた。

国に唯一帯刀を許された黛十一段の後継者と成り得る、恐ろしい程の素質を秘めた娘である事は拳を交えた自分が良く理解出来る。

ならば、遠慮は要らないのだろう。

拳に纏った気を一度霧散させ、もう一度力強く練り直す。

今度は拳だけで無く、足へ。そして更に緻密に、指の先へと気を流し込み続けた。

グツと拳を握れば、暖かな光が拳を包み込み、コーティングしてくれる。

地上に落ちた太陽だと、相対する由紀江はその拳を例えた。

輝く光は人にとっては近寄り難い物ではあるが、人はあの光を切望する。

その様が　太陽の様に思えたのだ。

「悪いけど、攻守逆転させて貰う」

「…………ツ！」

眼前から謙信の姿が掻き消え、その後を追うべく意識を集中させる。上　では無い、今一瞬で気配が掻き消えた。

後方、でも無い。一度たりとも後ろから周り込むつもりは無い様である。

左？　それとも右？

否、正面　ッ！！

神速の突きが正面へと繰り出され、その木刀の横を潜る様に謙信が由紀江の目前へと姿を曝け出す。頬に付いた血の跡は、先程の突きによって作った傷なのか。

ただ、そんな事をお互いに考えている暇など無い。

下から顎を狙うアッパーを木刀の腹で受け流し、態勢が崩れた自分を追撃する踵落としを転げる事で回避する。

無論彼女も、転んだだけでは起きやしない。

直ぐ様に足へと力を込め、腰に構えた木刀を全力で振り被る。タイミングはジャストタイミングとも言える瞬間であって、更に回避不能の絶対なる一撃だった確信すら持てる。

だと言うのに、視線の先に居る謙信は攻撃を食らった様子など無い。寧ろ、全てを有耶無耶にする様にその姿が霧となって辺りに消えて行く。

「はい、チェック」

可笑しそうに笑いながら、謙信は徐に由紀江の肩を叩いた。その事に気付き、ハツとした様に後ろを振り向いた由紀江の頬に謙信の差し出した人差し指がツンと刺さる。

そんな彼女の様子を見て、遂に笑いを堪えられなかったのだろう謙信が可笑しそうにクスクスと笑いを携えて由紀江に笑顔を向けていた。

「気で練り上げた罔。所謂、残像って言えば良いのかな？」

「ざ、残像……？」

「そぞ。筋は良いけど、あまり熱くなり過ぎない様にね」

子に教えを諭す親の様に由紀江の頭をポンポンと叩くと、満足したと言わんばかりに謙信はその場を後にしていた。

残った風間フアミリーも由紀江に惜し気も無い賞賛の声を浴びせて、島津寮へと戻って行く。その場に残されたのは木刀を見詰める由紀江と、奇しくも強者との戦いを逃してしまった百代のみだった。

「強いだろ、アイツ」

そんな折、ふと百代が呟く。

呟いた言葉には寧ろ、当然だと言わんばかりの確信にも近い何かが含まれていた。

信頼などでは生温い。それはお互いが自分の半身だと言わんばかりの、理解すら通り越した先にある共通と言う概念へと辿り着いた2人の武道家だからこそ分かる思い。

確かに、川神百代は南波謙信を心の底から認め、尊敬していた。同じく、南波謙信も川神百代を心の底から認め、そして尊敬している。

その2人だからこそ辿り着いた、最早誰にも分からない”境地”。漠然としたそんな感覚を、由紀江は肌で確りと感じ取る事が出来た。

「強いです」

「当然だ。何せ、私の双子の……弟か？ それとも、兄貴かな」

可笑しそうに笑って、百代はふと思い出した様に空へと手を向けた。届かない、届く筈も無い。

力は手に入れた。心は、まだまだ成熟したとは言い難いかも知れない。でも、漸く世界最強の名誉に近付けたと思っただのに

最後の最後で、目の前に立ち塞がった壁は今の百代から見れば大きく、険しい。

正面から当たれば力の有無など関係無く、呆気無く玉砕するだろう。上手く長期戦に持ち込んだ所で、体力の使い方が上手い向こうに軍配が上がる。

拳技だろうと、足技だろうと、サブミッションでも、絶対に勝てない。

男に遅れを取るつもりなんて昔から全然無かったのに。今となつては、この身が女である事をこれ程悔いた事は無い。鞭の如く撓る筋肉、槍の一撃の如く鋭い手刀、あらゆる攻撃に耐え得る鋼の肉体。全て、百代が心から欲する物。

それを手に入れたのは、自分の片割れとも言える存在。

悔しくない、そう言えば、それはきつと嘘になる。だが 憎もうとは思わない。

南波謙信。

ちよつと捻くれた、それでも百代にだけは誰よりも優しい義理の双子。

自分を姉と呼ぶ姿は想像出来ないの、多分向こうが兄になるのだろうか？

「強いなあ」

「おじきか？ それとも、ヒュームさんかな？」

深刻そうに呟く百代の頭の上に僅かばかり重み加わる。

見れば、楽しそうにクスクスと笑う謙信が百代の頭の上に自らの顔を乗せていた。

傍から見ても、仲の良い2人に見える。

実際にそうなのだから、別に何と言う事も無いのではあるが。

「何だよ、何で戻って来たんだよ」

由紀江など知らず、謙信はそう言って楽しそうに喉を鳴らして頭を振動させた。

謙信の振動が頭から伝わり、結果として百代の声も震える事になってしまふのだから堪った物では無い。頭の上で首を振る謙信を振り解こうと尽力する百代の姿を見て、思わず由紀江は笑ってしまった。友達が出来る、如何して仲間に入れて貰えるのか、そんな事を考えていた自分がふとした瞬間に馬鹿らしく思えてしまったのだ。この2人の、楽しそうな仕草を見ていると。

「おっ、笑った」

「はひっ!？」

「笑った方が可愛いよ、まゆちゃん」

そんな彼女の表情を逸早く見据えた謙信が、微笑む。

が、そんな感動的な場面も彼の下で土台の様な役目をする事になっていた百代の拳によって泡の如く消えて行くのではあったが。

金曜集会

風間ファミリーの取り組みの様なそれは、金曜日に行われる。それでも謙信の日常は、波乱を含んだ金曜日を迎え様と変わる事だけは無かった。

「いつつ……！」

「男なら少しは我慢しなさい。ほら、湿布を張るからね」

川神学院特有の決闘によって怪我をした生徒の様だが、見た所はただの打撲。

湿布でも張って、外に放り出せばこの後もいつも通りの生活を送る事になるのだろう。

ベッドに横にさせた少年の背中に湿布を張り、早く痣が無くなる様に少しだけ気を練り込み、それを打ち込む。まじないと変わらない物ではあるが、やらないよりは湿布の効き目が断然違うのだからやっつけて置いて損をする事は無いだろう。

「はい、終わり。教室に戻りなさい」

「どうも、先生！」

処置を終えた生徒は元気良く保健室を飛び出し、教室へと走り去って行く。

治療に使った湿布やテープなどを戸棚に戻しながら、謙信はふと思いついた様に自らの腕に巻いた時計に目をやった。時刻は12時手前。まだまだ放課後には腐る程に時間がある。

だと言うのに、時間の流ればかり気にするのは今日が金曜集会だからだろう。

あの場にクリスが行く。

そう考えただけで、良い様の無い不安が彼を襲う。

本人に言えば濡れ衣だと言われて怒られてしまいかも知れないが、誰よりも彼女の歪みが分かる謙信だからこそ彼女が何かをするだろう事は目に見えていた。

それでも彼女との接触を止めないのは、きつと

「友達、か」

昨日の由紀江との会話を何と無く思い起こし、謙信は口元を歪めた。友人作りの為とは言え、わざわざ戦場を作り出そうとする自分も中々に外道である。

段々と悪役が板に染み付いて来たかな？ 等と勝手に自己分析を始めると、ふとある事に気が付いた。そう言えば、1時間目から保健室のベッドを占領する阿呆が居た事を。

「辰子、起きろ」

「先生……ねむいよー……」

「知るか！ お前、週末くらい真面目に授業を受けられんのか……？」

「だって、ねむいから……」

「……お前の頭の中には睡眠に対する欲求しか無いのか？」

その阿呆とは、板垣辰子。

板垣三姉妹の次女であり、幾度と保健室へと顔を出してはベッドを独占する困った生徒の内の1人である。因みに次点程度には良く決闘に負けて来るワン子だろうか。

現在はその困った生徒の1人がベッドを占領しており、その上で干し立てだった布団を被って可愛らしい吐息を吐きながら眠っている。ハッキリ言うが、欲情の「よ」の字もありはしない。寧ろ、ベッドを占領しようとする彼女には謙信もいい加減ホトホト呆れているのだ。

「ハア〜ツ……好きにしろ、ド阿呆」

呆れていると言いながらも、謙信は渋々彼女にベッドを提供してしまつ自分自身にも同時に呆れていた。が、今はそれすら一先ず置いておく。此処で持ち出されると、ぐうの音も出ない程に言及されてその果てで潰されそうで怖いからである。

「辰子、オレは昼飯を買って来るから留守番を確りする様に」

「ええ〜……」

「何だ？ また川原の上で蟻にチクチクと苛められる生活に戻りた
いか？」

「留守番します……」

「宜しい」

ふふんっ、といつの間にか辰子の操縦が上手くなった自分に胸を張りながら（自分でも小さな事だと笑いたくはなつたが）謙信は

保健室のドアを開け、購買へと向う。

保健室の平和は今や辰子の両肩に背負わされた訳だが、問題は無いだろう。

いつの間にか姉以外で唯一謙信のアサルト指令にも耳を傾ける様になった辰子ならば　ベッドが賭かかっているからだと思われるが

安心して保健室の警備を任せて置けると言うものである。

最早、購買までの道も慣れたもの。

初日とは違って、スイスイと廊下を歩いて購買へと向かい、いつも通り大量のパンを買い漁る。向こうもそんな謙信に慣れてしまったのか、謙信があれやこれやと言うよりも早く的確にパンを摘めると言う進化が見受けられた。

こんな所で進化されても如何よ、と思うのだが気にしてはいけない。行儀が悪くも食べ歩きしながら、謙信は自分の根城とも言える保健室へと足を踏み入れた。

「遅ーぞ、先生」

「天使か。如何した、辰子を迎えに来たのか？」

「？　此処で昼飯だよ、此処で」

「この消毒液臭い部屋で、か？　冗談も大概にしろ」

「仕方無いだろ。辰姉が此処好きらしいし」

心底嫌そうに溜息を吐きながらも、彼女　板垣天使は自分の弁当に箸を向ける。

見て居ると何とも食欲のそそられる弁当では無いか。

まあ、此方は色気よりも食気。彩りよりも圧倒的な量で腹を満たすモニターマシンと何ら変わらないので天使の食べている弁当で

は些か物足りない。
カレーパンを口に含みながら、購買で買って来た午後ティーの蓋を開ける。

「相変わらず偏った飯だな、アンタ」

「料理も作れない独り身の飯なんて、殆どこんな感じだろ」

保健室のテーブルの上には今や、圧倒的物量を誇るパンと弁当が置かれていた。

朝方、コンビニで買い足した弁当は既に4つ。

ハンバーグ、スタミナ、コロツケ、チキンカツ。

どれもこれも、ポイポイと謙信の腹へと納まって行く。かと言って、謙信の食事風景が荒いと言っ訳では決して無い。確りと食材を噛み、味を確かめながら胃袋へと納めて行く様は機械の類が行う作業と何ら違いが無い。

まあ違いがあるとするれば、たまに自らの意思で喋ること位だろうか。

「おはよあ〜」

そんな折、思い出した様に辰子が奥のベッドから顔を出した。

天使は姉と言う事もあって朝の挨拶を返しているが、謙信は眼中にすら捉えていなかった。無心で飯を食う、食う、食う。

此処に来て 辰子の寝る事を邪魔される事が嫌いと言う事柄が、ある意味では謙信にも当て嵌まると言う事を知る。

南波謙信は、食事を邪魔される事を嫌う。

否、寧ろそれ以前に 自分の行いを邪魔される事を嫌う。

覇道を突き進む王者であるからこそ、自らの決めた道を土足で踏み荒らすコソ泥の類に対して寛大な心を持ち合わせる事など到底出来なかった。

殲滅、抹殺、そして抹消。
基本にして根本でもある、裏・南波流を得意とする謙信の歪みは、
そこにある。

「ケンちゃん、おはよあ〜」

「チツ……………おはよう、辰子」

とは言え、近頃の謙信は丸くなってはいた。

それも全ては、川神学園と言う学校で保険医として仕事を始めてからの事だろう。

『悪を滅ぼす』と言う基礎概念は今では話し合いによる解決を望み、
今ではただ人を救う事にのみ執着する事で裏の顔を見せずに済んでいる。

それも、全ては自らを受け入れてくれた鉄心のお蔭でもあるのだから頭が上がらない。

その為に、彼は基本的に医療器具の必要数や経費などの纏め資料は全て自らが作成し、それを事務へと持って行く事が多い。

少しでも仕事を減らそうとする、謙信なりのやり方だった。無論、不正や裏金云々などと言う卑怯な真似は一切無い。

今日も今日とて、謙信は学園の奉仕者であった。

生徒たちが帰路を辿る中で、その一団は異質とも言えた。

教師を交えた10人もの顔触れ。

川神百代を筆頭に、直江大和、風間翔一、島津岳人、師岡卓也、川神一子、椎名京、黛由紀江、クリステイアーネ・フリードリヒ、保険医である南波謙信を含んだ一団は周囲から完全に浮いている。

「そうか。シヨウはバイトか……気を付けて行きなさい」

「おうつ！ また後で行くからな〜！」

途中参加になってしまったキャップとは別れ、一行は取り敢えず目的の場所へと向う事にする。目的の場所 廃ビルの中にある、風間ファミリーの秘密基地である。

元々は廃ビルを管理するバイトだったが、管理者不在と言う事で私物を持ち込んだ結果、そこは今では私有地さながらの場所と化してしまった。

謙信自身、それを悪いとは思いつつも何処かで楽しんでいる自分が居る事を心地良く感じていた。他の者と同じ思考であると言うのは、彼の様なタイプにとっては何よりも安心出来るものなのだから。

「この辺が漫画で、向こうがゲーム棚だよ」

「モロゾーン」

モロがクリスと由紀江に場所の説明をして居る時、チャチを入れる

様に京からの横槍が入った。オタク、とも言えるモロが独占する2つのゾーン。いつの間にかそこがモロゾーン、と呼ばれていたとしても何か可笑しい事は無い。無論、謙信もモロゾーンには聖書とも呼ぶべきブラックジャックを数冊置いてある。たまに此処へ顔を出し、ソファに腰掛けながらそれを読む事が近頃の楽しみのみ1つとなっていたのである。

「ジョーとかエースって読んだことある？ 激アツよ！」

「スポコン系は大体ワン子だな」

「そっちのダンベルは俺様のただ使っても良いぞ」

「四六時中使い続けるのはガクトとワン子くらいだろ」

クリスと由紀江に親しげに話しかける風間ファミリーの姿を見て、謙信と、そして状況を大まかに理解している大和は不安の念に駆られて居た。

由紀江は良い。

秘密基地と言う言葉に憧れを抱き、「友達が居なかったから」などと馬のストラップに話しかけている姿は哀愁すら誘う物ではあったが、非常に楽しんでくれている様である。

その様を見せられているからこそ、大和も由紀江の言葉に涙すら飲んでいなのだ。

だが 予測通り、クリスは不味い。

この場所の意味を理解しておらず、何故このような物が必要なのか疑問に思っている。

謙信は1人、頭を抱え込みたくなった。

もしもではあるが……クリスが怒りのキーを自ら回したとき、ファ

ミリーの仲間たちが平穩無事で居てくれることなど考えられない。京は、あの子はきつと激昂するだろう。それだけは絶対に確信出来る。

そうなった場合、自分はクリスを護る為に迅速に行動出来るのか。

理性では無く、意思がそれを拒みそうで怖い。

故郷。

そうだ、この場所は謙信にとっては故郷と呼んでも過言では無い場所である。

そんな場所を貶されて、自分は平静を保っていられるのか。

もしかすれば、京よりも先に手を出しているかも分からない。

人の命を奪いたく無いと言いながら、この腕はクリスの心臓を握り潰そうと真つ直ぐに繰り出されてしまうかも知れない。

そう考えてしまうと、思考の悪循環は止まる所を知らなかった。

“何が教師だ、生徒に教えを諭す事も出来ないクセに”

自分をそう罵り、謙信は無理矢理思考を断絶する。

これ以上の思案はきつと、誰の為にものならない。それは　きつと己を狂わせる。

「クリステイアーネ、少し外に出ないか？」

「え？」

ふと、謙信は自らの口から出た言葉に内心で酷く驚いていた。

自分にしては何とも機転の利いた、有効な一手である。

それには大和も驚いた様で、ソファの上で此方へ啞然としたと言わんばかりの視線と表情を向けていた。当然だろう、自分だって無意識に言ってしまった言葉なのだ。

何よりも 己が1番驚いている。

「何か飲み物でも買って来る。リクエストはあるか？」

「アタシ、プロテインジュース！」

「俺様は肉汁！」

「いや、近場の自販機だからね!？」

即答したワン子とガクトに思わず突っ込みながらも、そんな仲間たちに暖かな視線を送る謙信。

対照的に、クリスの瞳には疑惑とも言える物が宿っていた。

疑問に思っているのだろう、”何故このような場所に集まるのか”と
言う事が。

「あつたよ、プロテインジュースと肉汁……」

川神にある自販機の恐ろしさを己が身で痛感しながら、謙信は秘密基地から持ち出したビールに人数分の飲み物を入れていった。その後ろでは、仏頂面のクリスが腕を組みながら待ち構えている。彼女に飲み物を1本手渡すと、渋々ながらもそれを受け取ってくれた。

「謙信、何故大和たちはあの様な場所に遊び場を設ける？ 私には理解出来ない」

「……理由を聞いても、良いかな？」

激情に身を任せる事は無い。

まだ理性が熱く、言葉に過剰な反応を示す事も無い。

謙信は己の身を沈める様にまだ冷たい飲み物を確りと握り締めて、クリスが次に紡ぐ言葉を黙って待っていた。瞳は真っ直ぐに彼女を射抜き、一言一句聞き逃すまいと全ての神経をクリスだけに向わせている。

夕暮れの自販機前、2人の男女が静かに見詰め合っていた。

「あそこに秘密基地を作ると言うのは建設的では無い。第一、危険だ。何の為に立ち入り禁止の札があるのか、彼らは理解しているのか？」

「……」

「元々がバイトとは言え、私有化してしまっただけは何の意味も無い。あの行為はあまりにも自分勝手が過ぎる。あの廃ビルは ” 今直ぐに取り壊すべきだ ” 」

その言葉が、ある意味では引き金だっただろう。
変わり行く町並み。
消えて行く景色。

新たな時代の流れに逆らえず、飲み込まれて行く思い出。
遂には、あの場にまでその毒牙が伸び様としていると考えると、謙信は身体の震えが止まらなかった。母も、父も、過去の思い出など何も無い。

家族を愛し、愛された記憶など何処にも無い。拾われて、救われて、そして漸く作った僅かな思い出。たった数十年の思い出すら、今消失しようとしていると思うと ジューズの缶を握り潰し、中身が服や顔に掛かろうと構う事無く更に小さく握り潰して行く。
滴り落ちる血。

肉にアルミの破片が食い込み、痛みが神経へと伝達される。
だから如何した。だから何だ。

「無意識だとは言っても、やっぱり我慢なんて出来ないのか」

自嘲する様に呟いて、謙信は笑った。

己の運命を、己の悲運を、そして我慢すら出来ない餓鬼と変わらぬ己自身を。

笑って、笑って、笑い続け、やがてそれは行き場の無い怒りに変わった。

轟く気が透明なそれから、色を帯び、やがてはドス黒い何かへと変色する。

渦を巻く濃密で居て、絡みつく様な気配。

それが行き場の無い謙信の怒りだと知って、クリスは身震いした。怒っている。

あの優しく、自分を抱き締めてくれる謙信が怒っている。

その事実を理解出来ず、寧ろ否定する様にクリスはただ叫ぶ事しか出来なかった。

「私は……私は間違った事を言つたつもりは無い！あの行いはゴソ泥と変わらない 悪にも近い行為だろう！？」 謙信、何故お前はアレを見ても何も思わない！」

「今の君に正義が無いからだ」

ハッキリと目を見て、謙信は言葉を紡いだ。
先程までの行き場の無い怒りは形を潜め、今はただ憂いを帯びた瞳がクリスを射抜く。

「『他者の幸せを壊す者を、オレは絶対に許さない』。まだ覚えてるか？」

「……謙信が、初めて私に語ってくれた正義の話だ」

「そうだね。クリステイアーネと出会って、暫くしてから話した事だ。クリステイアーネは誰かの幸せを壊す事が楽しいかい？ 笑っている笑顔を打ち砕く事が幸せかい？」

「そんな事は無い！ それは……それでは、悪党と一緒にでは無いか……ッ！」

心の底から、謙信の言葉を否定する。

謙信の大好きな遠山の金さんだって、水戸黄門だって、暴れん坊將軍だって、クリスの好きな大和丸夢日記の大和だって、クリスが愛するキャラクターは皆が正義だ。

そして、自分のそう在りたいと強く思っている彼女からすれば、悪と同一視される事は我慢なら無い事ではあった。それを見越しているからこそ、謙信は笑う。

「オレもそれは悪だと思っよ。でもね、クリスティアーネ。君は今何と言った？」

「何と……？」

「あの場所に詰まった思い出も、願いも、夢も、希望も、何もかもを否定したよね。」

“何の意味がある、取り壊すべきだ”。それが君にとっての当たり前だとしても、あの子たちにとっては悪だった。勿論、オレにとっても許せない言葉だ」

クルッと向きを変えて、今は沈み行くこうとしている夕陽へと視線を向ける。

今の怒りに歪む自分の姿だけは見せたくない。そう、背中だけが語っていた。

「この世界に絶対の正義なんてあっちゃいけない。時代劇の中に居る主人公はね、皆が確かに正義として描かれている。皆が悪滅を根本として肉付けされている。でも、良く考えてみてごらん、クリスティアーネ。此処は 時代劇の舞台じゃ無いよ」

血がベツタリと付いた己の手を見て、謙信はそれを拭う。

乾いていなかった血は片方の手にもベツタリと染み付き、両の手が血で染まる。

内戦の時、銃弾で撃たれた女性を救う時も両手が血だらけになったな、などと今とは関係の無い事を謙信は呆然と思い返していた。

「人はね、簡単に死ぬ」

漸く振り向いた謙信は、泣いていた。

いや、正確には泣き崩れてしまいそうな程に破顔した笑顔を浮かべていたと言えば良いのか。今にも泣いてしまいそうなのに、必死にそれに耐える姿を見て　クリスは自分の中で何かが壊れて行く様な気がしていた。

「内紛で、国同士のイザコザで。人は簡単に死んでしまう」

それはクリスに対してなのか、それとも己の意思を確認する為なのか。

謙信は空を一度見やり、またクリスへと視線を戻す。

「でも、オレ達は今もこうして生きている。何でだと思う？」

「何で、って……それは……平和、だからだ」

「如何して平和なのかな」

「そ、れは……」

「オレの勝手な想像だけど、それはきっと　皆が譲り合っているから」

「譲り合う……？」

「そうそう、譲り合い」

僅かに微笑んで、謙信は辺りを見渡した。

向こうでは自転車に乗った人物が、歩行者を確認して自転車から降りる様が見える。

買い物袋から落ちてしまった商品を持ち主へと届ける少年の姿。
ああ、この世界は譲り合いに満ちている。

「譲歩して、妥協して、受け止めて、受け入れて。譲り合う心が正義だと、オレは思う。」

誰かが泣いているのなら、手を差し伸べる。誰かが悲しんで居るのなら、胸を貸す。

誰かを泣かせる者が居るのなら、やっつける。誰かを悲しませる者が居るのなら、打倒する。当たり前のように聞こえて、簡単には出来ない事が正義だと思う」

オレは 君に間違った事を教えていた。世界を旅して、オレも漸く理解出来た。

そう続けて、謙信はクリスマスへと微笑む。

先程までの破顔した顔とも、怒りを帯びた物とも違う穏やかな笑顔。それは紛争地の子供たちが謙信を天使と呼んだ折に見せた 慈愛の微笑みだった。

「本当にすまなかった。オレが、君を歪にってしまった」

「……謙信、違う……私は……わ、わた、しは……」

ただ、彼に振り向いて欲しかっただけ。

結局は正義と言う建前を抱いて、共通の話題が欲しかっただけ。温もりに飢えていたのだ。

フランクと言う強大過ぎる父親の背中、幼かった頃のクリスマスには重荷でしか無かったのだろう。父に迷惑が掛からない様に、父に嫌われない様に。

そうやって押し殺して来た感情を吐露出来る相手が、唯一謙信だったのだ。

だから傍に居て欲しかった。

ずっと、お兄さんを続けていて欲しかった。

それだけの事なのに、決して悲しませたかった訳じゃ無いのに、それを分かって欲しいのに。クリスは、言葉を紡ぐ事が出来ない。

自責の念に駆られる謙信に、ただ一言の言葉を伝えられない自分が恨めしい。

“ごめんなさい”

そんな単純な言葉すら言えない自分に、正義を語る資格など有る訳が無いのに。

「泣かないでくれ、クリスティアーネ。君の泣き顔を見たくて、オレは君に話をした訳じゃ無い。悪いのはオレだ、君は自責の念に駆られなくて良い」

「ちが、う、ちが、ひっく……」

「血？ ああすまない、無遠慮だったね。ちよつと洗ってくるから」

そう言つて水道へと足を向ける謙信の血に濡れた手を握り返し、振り向いた彼の胸に顔を埋める。驚いた様に瞳を見開いた謙信だったが、胸元で泣きじゃくるクリスに何かを感じたのか、撫で返す事は出来なかったが、ただ静かに言葉を紡ぎ続ける。

“大丈夫”、“安心して良い”、“良い子だ”

我が子を慰める親の様に、謙信は胸元で泣きじゃくる最愛の妹を宥め続けた。

「お兄様おかえ　　そ、その怪我如何したの!?!」

「ああ何でも無い。ちよつと10tトラックとガチバトルしてみただけだ」

秘密基地に戻ると、既に到着していたキャップが持つて来ていた寿司を皆で食べている最中だった。そんな中にこんな両手血濡れの男が帰って来ると言うのは、気分を害しそうで非常に心苦しい。もしも寿司が残ったなら、全て自分が食してやるう。ちやっかりそんな事を画策する謙信であった。

「クリ、アンタお兄様に何したのよ!?!」

流石に10tトラックのジョークは聞き入れて貰えなかったのか、ワンス子は噛み付く様にクリスへと視線を向ける。牙を剥き出しにして、答え次第では襲い掛からんとする姿は野獣の様である。とは言え、その相手に当たるクリスは未だに謙信の服の裾を引っ張り、泣いている最中なのだが。

第六之巻「結成！ 新たな仲間、新生・風間ファミリー！」（後書き）

次回、南波謙信が保険医らしい事をする かも

次回は話は世間一般で言うところによる、体力測定
そしてそれに伴う地獄の様な責め苦を味あわせて謙信を蹴り殺しに
する話

一部修正しました

第七之巻「龍鬼激突！ 因縁に終止符を打つべし」（前書き）

何か、書いているときに違和感を感じたのですが……
何だろう、このモヤモヤーっとした感じは……まさか、恋？

4 / 0 9 修正

第七之巻「龍鬼激突！ 因縁に終止符を打つべし」

第七之巻「龍鬼激突！ 因縁に終止符を打つべし」

「人間力測定？」

昼間。いつも通り保健室で昼飯を済ませている謙信と共に食事をするのは、百代とその友人である松永燕。2名共々、謙信が買って来たパンに手を付けながら答えた。

「ああ、じじいから聞かなかったか？」

「もう直ぐ人間力測定だから、先生も準備中かと思ったのにな」

鉄心からは特に連絡を受け取っておらず、大方忘れたのであろうと当たりを付けつつ謙信はふと学園へと勤務する事になって渡された

予定表へと目を通した。

確かに、そこには人間力測定と書かれている。

だが準備とは何だ？ 燕の言った言葉の意味を理解出来ず、謙信は首を傾げた。

身長や体重、視力や聴力を測ると言った程度の事だろう。

それだと言うのに、一体全体何の準備が必要だと言うのだろうか。

「決闘だよ、教師同士の。先生知らなかったの？」

「は？ 決闘？」

燕の口から飛び出した突拍子の無い言葉に、思わず山彦の様に聞き返してしまふ。

決闘 そうだ、確かに川神学園には決闘と言う問題を解決する為に用意された殴り合い制度の様な物がある。決闘の意を伝えてワッペンを取り出し、応じるのならば自らもワッペンを取り出して公共の場にて正々堂々と果たし合う。

それが、この川神学園の用意した問題解決策なのだ。だが、確かに教師同士が殴り合うと言う姿は見た事が無い。

てつきり禁止されているのだろうと思ひ、わざわざ渦中に飛び込む様な真似もせず、謙信は静かに保険医として過ごしていたのだ。

だが、今回の教師同士の決闘の事を燕に聞くと今回はそう言った物では無いらしい。

身体測定 と言うよりは、自らの身体が強く育っている事を自分自身が確認する為に用意された場なのだろうが、そこでは1つだけ大きなイベントが行われるのだ。

それが燕の口から語られた、教師同士の決闘である。

生徒たちの模範となる様に教師同士が戦う事で、屈強に育つ様にと熱いメッセージを送ると言うのだが、今回の教師同士の決闘では何

故か謙信の名が上がっているらしいのだ。

勿論、それを聞きつけた生徒たちは黙っていない。

勤務初日、河川敷にて学園最強である百代に勝利した姿は既にその筋の情報化たちの耳には届いているのだ。そこから広まった噂やら何やらで、大規模な賭けまで行われている始末だと言う。相手も分かっているに、気が早い連中だ。

「うちのクラスは全員先生に賭けたから、絶対勝ってね！」

「お前が負けたら借金が返せなくなる。勝てよ」

「如何言う事だよ！？ つうかまた借金したのか、馬鹿モモオツ！」

いつの間に自分の勝利に金を賭けていたのかは知らないが、そんな大博打まで始まっていると言うのは全く知らなかった。

当事者には知らせない様に事を運んだと言う事なのだろうか？ それとも単に、謙信が周りに対して鈍感なだけなのか。

どちらにせよ、もしかすれば自分が表舞台で殴り合いをしなければならぬ事態になりかけていると言うのは本当らしい。

別に決闘のシステムに如何こう言うつもりは無いが、それに己を無理矢理引っ張り出さないで欲しいのだ。非常に迷惑なのである。

「それが学園側の決定なら、教師であるオレに贖う術も無いか……」

まあ、悪くは無い。

謙信は胸の内だけでそう呟き、拳を握り締める。

人目があると言うのは気に入らないが、全力で殴り合いに望めると言うのは非常に良い。

相手は誰になるかはまだ分からないと言うのに。
しかし、謙信と打ち合える相手となると最早1人だけしか居無いだろう。

体育教師であり、川神院師範代の1人であるルー師範代。

謙信があらゆる面で尊敬する、彼の兄弟子に当たる人物である。

百代の父母を倒し、川神の師範代に襲名した実力は侮れた物では無い。
い。

確実に言える事は 強い、それだけだ。

加減をして勝てる相手でも無い事は自分自身が十二分に理解して居る、そう心に言い聞かせて深く息を吸う。身体の隅々にまで酸素を
行き渡らせ、頭の中身を全て白に染めた。

イメージするのは拳を交えるルー師範代と己の姿。

拳が腹を穿ち、蹴りが顎を跳ね、膝が鼻を潰し、肘が鳩尾を抉る様
を想像する。

心躍る戦い、胸震える闘争、血肉沸き踊るガチバトル。

「せ、先生？ おーい」

「瞑想中だ、今の謙信には何をしても無駄だぞ」

目の前で手を振る燕など意にも介さず、気を身体中に張り巡らせる。
毛細血管よりも長く、細かく、丁寧に身体中を包み込ませ、それを
やがては右拳にのみ一点集中させる。光り輝く右腕の光を見て、百
代は静かに微笑んだ。

謙信が楽しんでる。

謙信が喜んでる。

嬉々として身体を駆け巡る気が荒れ狂い、それが優しさを潜めて牙
を剥き出しにする。

保健室と言う小さな箱では抑え切れない暴風。解き放たれる野獣の牙。

獐猛な犬歯が、これでもかと言う程に剥き出しにされた。普段の謙信からは想像すら出来ない、恐ろしい形相。だが 百代はこれを知っている。

鬪争の申し子、南波謙信。その本質は野獣と何ら変わらない程に苛烈だ。

「南波流継承者、南波謙信……確かに御相手致す」

堂々とした名乗り。

瞑想の終了と同時に辺りに吹き荒んでいた風が止まり、謙信の白衣が揺れる。

先程までの野獣の如き笑みは今や形を潜み、そこにはいつも通りの僅かばかりに微笑んだ謙信が、美味しそうにカレーパンを口に含みながら立っていた。

「勝てそうか？」

百代の問いに、親指だけを立てて謙信が答える。

自信に満ちた顔だ。

百代は安心したとでも言わんばかりに、肩から力を抜く。

先程の気の中てられたのかも知れない、頬は少し赤みを帯びていた。もしも謙信が自分との前哨戦を望むと言うのであれば、今の彼女は即飛び付く事だろう。

それだけ、武道を嗜む物にとって先程の気は魅力的だと言う事だ。

荒々しい中に輝く静けさ、壮大さ。人間と言う括りの中をすら超越したかの様な膨大な闘気は時として麻薬にも等しい気分の高揚を与えてしまう。

身体の芯が熱い。

ああ、もうダメだ。そう思った時には百代は保健室から駆け出していた。

「な、何だ、アイツ？」

「さあ？ お花でも摘みに言ったのかも」

冗談めかして言う燕の言葉に、謙信は呆れたと言わんばかりに肩を竦めた。

納豆小町も案外と下ネタが好きなお年頃か、などと独り愚痴り購買で買ったパンに手を出す。今日はいつもよりも少なめにしてあるので、コンビ二弁当は無い。

故にパンで腹を満たすしか無いのではあるが、何個か燕と百代が口にして居たので腹8分になってしまう。そんな如何でも良い事を考えながら、謙信は無心でパンを齧り続けた。

「あつ、納豆食べます？」

「松永の納豆は美味いからな、1つ貰おうか」

因みに、百代はお花では無く、女の子を摘みに行った様である。

戦いに対する欲求を、女の子を愛でる事で解消する辺り、百代も成長したと言ふ事か。

まあ 公衆の前で抱かれる女の子も気が気では無いだろうが、その辺りは割合する。

視力検査を行う部屋は、バカに広い川神学園の中でもアホの様に広い会議室と呼ばれる場所で行われる事になっていた。機材を運び込み、それを保健委員のお手伝いさんが棒で指して生徒に読ませ、その結果を謙信が記録用紙に書き込んで行く。

何十人、下手をすれば何百人もの生徒たちの記録を書き綴り過ぎた謙信の手は今や真つ黒。肩も凝って非常に辛い。少しでも疲れを癒そうと何度も何度も目元を揉み扱く。が、疲れは一向に取れやしない。

それでも、あと一組見れば午後からは別の先生が代わりにやって来る。

それまでの辛抱だと、謙信は大きく伸びをすると次の生徒の名前を呼んだ。

「川神一子」

「はいはい！」

元気の良い返事と共に会議室へと足を踏み入れたのは、風間ファミリーのマスコットとも言えるワン子だった。その元気が有り余った彼女の姿を見て、謙信は呆れを含んだ様な溜め息を吐く。今の今まで外でも走って居たのだろう彼女の体操着は、泥や土で僅かばか

り汚れていた。何処にそんな元気が有り余って居るのか、不思議に思う程である。

「視力検査をする前に、顔を洗うべきだな。ホラ、目を瞑って」

顔に付いた泥をハンカチで拭ってやり、頭をポンポンと軽く撫でる。それだけでワン子は大人しくなり、椅子に座って目の前にある計器の方へと視線を向けた。

「まずは右から。保健委員の指した場所を読み上げてくれ」

「うん！ えっと」

スパンスパンと正解して行くワン子、やはり身体の機能はズバ抜けている。

両目とも文句なしの視力A。いたって健康の素晴らしい目だと言う事だ。

それに満足したのか、謙信も笑顔でその結果をワン子の記録用紙へと記入した。

川神一子・視力非常に良好。

「ご苦労様。教室に戻って、昼飯を食べて午後の競技に」

「わくわく！」

「……口に出してまで言う程の擬音か、今の」

退室を命じようとした謙信の前では、ワクワクなどと擬音を口にす
るワン子の姿があった。

「ああ、オレがこれから戦うからか……」と適当に当たりを付けた

謙信はポンポンといつも通りワン子の頭を撫でながら、安心させる様に微笑む。

まあ 今朝知った事ではあるが、相手はやはりルー師範代と言う事らしい。

彼女の修行を見てくれる優しい彼の事を顧みても、絶対に勝つと言つてのけるのも何かと非道では無いだろうか。まあ空気を呼んで、「頑張るぜ」程度で治めて置く事にしよう。

そう思つて声を出そうとした謙信よりも先に、ワン子が微笑んだ。

「お兄様、ハッスルハッスル！」

「え？ 発する？ 何を？」

「お姉様が、『今日の謙信はハッスルしてるぞー』つて言ったから！」

「……………ああ、”ハッスル”ね」

百代の訳の分からない発言に首を傾げながらも、今日の決闘を激励されたと言つのは少なからずとも嬉しいのだろう。謙信はワシヤワシヤと力強くワン子の頭を撫でると、デコを一発軽く叩く。昔からの恒例である ”お兄ちゃん”の激励だ。

あだつ、と後ろに下がったワン子を笑つて、謙信は今一度自らの体調を確認する。

今日1日の為にコンディションは絶好調にしたつもりなのだ。後悔せず、全力で当たりに行きたい。

それがある意味での謙信自身の望みではあった。

「ワン子、ちょっと根性注入してくれ」

「根性？ あっ、うん！！」

自ら死地へと赴く男の激励の為、白衣の背中をワン子へと向ける。その意味を悟ったのか、ワン子は体操服の袖を捲くって腕に力を込め始めた。

よく、プロレスラーの人が”気合注入”とか言ってる事があるが、謙信の言った根性注入もそれと変わる事は無い。

振り被られたワン子の張り手を背中に受け、その激痛で意識がハッキリと覚醒する。

腑抜けた覚悟を外へと追い遣り、闘争本能を内に閉じ込める。

闘う為だけの思考へと頭を切り替え、優しい教師の面を一時的に棄て去って置く。

「ワン子の張り手、昔に比べて痛くなつたな」

「ご、ごめんね、お兄様」

「いや、これもワン子の成長の証だ。しかしなあ、こんなに元気な根性注入されちゃったから、恥かしい試合は出来ないな！」

まだ少しばかり痛む背中を軽く慣らし、その上に羽織っている白衣を着直す。

この検査が終われば、次に彼を待つのはルー師範代との激闘である。ワン子がワクワクなどと言って居たが、実際彼女よりも謙信がワクワクして居るのは

男の子故の性、なのかも知れない。

『さあ始まりましたあつ、今日のメインイベントオツ!』

『司会として俺様こと島津岳人と福本育郎がお送りするぜええ!!』

満員の観客席。

わざわざ作られたのだろう特設リングを見て、謙信は開いた口が塞がらなかった。

こんな無駄な事に金を使うのならば　と、僅かに貧困に喘ぐ子供たちの事を思い浮かべたが、今回の相手は迷いがあつて勝てる相手では無い。

その迷いを切り捨てる様に、着用していた白衣を投げ捨てた。

「おい、謙信!」

「何だ、モモ。今日のオレはお前に構つとる余裕は無かたよ」

訛りが飛び出すと言う事は、それだけ謙信がこの一戦に緊張していると云う事を指す。

そんな彼の背中に、百代は自らの持つ有りつ丈の張り手をブチ込ん

だ。

声にならない叫びを上げ、抗議すら出来ずに悶絶する謙信。その襟首を持ち上げ、涙目で訴えようとする謙信に百代はただ一言だけを告げた。

「勝てよ」

「……おう」

右手同士をコツンと合わせて、謙信はリングへと、百代はリングから下がる。

此処から先は百代ですら関与を許されない2人の戦いだ。誰も、一切の手出しを許されない決闘。

そして 南波と川神と言う2つの武の、正面衝突。

『さあまずは選手紹介だ!!』

元気なガクトの声に苦笑しつつも、謙信はリングの反対側へ立つ男へと視線を向ける。

ルー師範代。心の師とも言える、謙信の兄弟子は今日もジャージ姿でそこに立っていた。そんなルー師範代へと軽く手を上げると、向こうもそれに気付いたのか手を上げ返してくれる。これから戦うと言うのに何と暢気な2人だろうか、と観客席にて見守る大和は呆れている最中であつた。

『まずは説明不要の拳法マスター！ 40代とは思えないストイックが売りの、ルー先生!』

ヨンパチの名乗り上げに答える様に、観客席にお辞儀をするルー師範代。

どんな戦いだろうと礼節を重んじる辺り、やはりまだまだ見習うべき所は多い様である。

謙信は感心した様に何度も頷いていた。

『続いては期待の新生、南波先生だ！！ 噂ではモモ先輩を倒したって言うけど……』

『ウオオオオオオオオオオツ！！！！！！ 兄ちゃああああああああんっ！！！！！！』

「や、やめんか、ガクトツ！ 恥かしいだろうが、このバカ！！」

そんな謙信の怒鳴り声など意にすら介さず、ガクトは叫び続けている。

観客席から沸き起こる笑いを背に、何とも恥かしい登場を経験するしか無い謙信だった。

が、そんな事など如何でも良い。

目の前で相対する男の闘気の中てられ、自ずとそんな恥かしがる心なども吹き飛んで行く。

「決着、つけましょうか」

「そつだね。キミとの闘いも、そろそろ終わりにするヨ！」

コツン、とぶつかる拳がお互いの挨拶。

それを合図に、特設されたリングの上で2つの影の拳と足が交錯した。

飛び散る砂埃に汗が混じり、そして 血の香りが辺りへと充満して行く。

一度目の交錯にて既に謙信の拳からは血が噴出しており、それを拭

おうともせず吹き飛ばし、ルー師範代へと肉薄する。

轟音、次いで漸く人の目にも映る殴り合う2人の姿。

音が付いて来られないと言う異例の事態になりながらも、2名の苛烈な激闘は留まる事を知らなかった。上段を蹴り飛ばすべく振り上げられたルー師範代の蹴りを額で受け止め、反撃としてブチ込んだ左腕が左肩を射抜く。

苦悶に染まるルー師範代の隙を、決して謙信は見逃さない。

ルー師範代の左肩を掴み、そのまま力任せにブン投げる。空中へと舞い上がった身体目掛けて拳を振り抜こうとした瞬間

「アイヤアツ!!!!」

「ぶっ!？」

空中で回転したルー師範代の回転蹴りが謙信の顔面を襲い、身体の動きが一時的に止まる。

脳が揺れたのだ。脳から送られる『動け』と言うパルスに四肢は反応せず、見開いた目はただ此方へと肉薄するルー師範代の姿のみを捉えていた。

「行くヨ、謙信!!!!」

腹部を襲う強烈な一撃。

次いで腹、肩、顔面、足、次々と身体中を穿って行く強烈な拳と蹴りの連続攻撃を謙信は真っ向から全て受け止める。

否、受け止めたくて受け止めている訳では無い。

先ほどの蹴りで身体が、全く動かない　ッ!!!

百獣の王者すら留める龍の乱舞。それを身体中に浴びて、今まで立っていられた者など精々が鉄心程度の物である。

誰もが、百代を含めた誰もがこの戦いの終わりを悟った。

リングの上では膝を付き、崩れ落ちる謙信の姿。そのあまりにも壮絶な姿に、口元を覆う生徒が続出して居た。

子供には　いや、武芸を嗜んでいない者にはあまりにも苛烈過ぎる。

そしてルー師範代自身も、この攻撃はやり過ぎたと反省していた。脳が揺れていた時点で、攻撃の手を止めていても何ら問題は無かったというのに、彼は謙信に攻撃を続行してしまった。動けないと分かっていたながらも、全力の拳を放った。

まだまだ修行が足りない、と己を律してリングを降り様と階段へと向う。

そんな折、観客席から悲鳴があがった。

1つや2つでは無い。1人が2人に、それが10人に、そして100人に　伝染する病の様に、それはどんどん広がって行く。

誰もその光景を理解する事など出来なかっただろう。膝を付き、血を流しながら気を失っていた謙信が　立っているのだから。

「謙信、キミ　ッ!???!」

軽く振るわれた拳から発せられる衝撃が、ルー師範代の身体を襲う。戸惑う事だろう、動けない筈の身体で何故動けるのか。何故立てるのか。

普通ならば有り得ないその光景だが、南波の前に普通などと言う生温い言葉は決して通用しない。普通を覆し、有り得ないと言う言葉を跳ね除けて、神さえも掴み取ろうとした愚かな武の真髄は　こ　とサシでの戦いに置いて、絶大な力を誇るのだから。

パキリ、と謙信の身体から何かが落ちる。その赤黒い何かは、やがては身体の至る場所から剥がれ落ちて行く。

それを見て、百代は我が目を疑った。血だ、赤黒い物体は固定化し

た血の塊だ。

今の謙信は百代に備わる異常とも言える自然治癒能力に似た行動を取っている。

しかし、謙信が今行っている事はそれすら越える治癒。

否、”再構成”ッ！

肉体の欠損を確認すると同時に身体のパーツを作り直し、細胞を活性化させる為に気を身体に送り、欠損した部位を修復する。

蜥蜴の尻尾、ふとそんな例えが頭の中に浮かんだ。

あれは切り離されても生えて来る物だが、人間でそんな事が可能だと言っのか？

これではまるで 人ならざる何かでは無いか。

「謙信、お前……」

「……勝つ、から、安心しろ……ッ！」

謙信は余裕有り気に微笑み、百代へとサムズアップまでして見せる。目の前で佇む血だらけの保険医は今やその身体に付着していた血を全て払い落とし、何事も無かったかの様にリングの中央に佇んでいた。

仕切り直し、誰かが喚き、それに伴って観客席から歓声が沸き起こる。

目の前で起きた理解が追いつかない出来事は結果として謙信がまだ戦えると言う事にしか繋がらない。観客は理解出来ない部分に目を瞑り、試合の続行に歓声を上げる事を選んだのだろう。

またもや鳴らされる、第二ラウンドを開始する為のゴング。

その音と同時に、ルー師範代の身体が上空へと飛び上がった。

眼下にはルー師範代を蹴り上げたままの姿勢で硬直する謙信がルー師範代の着陸を待って居た。ゆっくりと地面へと落ちて来るルー師

範代、その身体目掛け、謙信が己の足を全力で振るう。衝撃だけで風が舞い起こり、女子生徒のスカートが舞い上がる。

その事に喜ぶヨンパチやガクトではあったが、京にワン子やクリス、由紀江と大和などはあまりの光景にそんな事になど構っていられなかった。

キャップとモロだけは、あまりにも派手な2名の戦いの熱気の中でられたのか、応援ばかりで事の重要さには気付いていないようではあったが。

「ッ、謙信、まだまだ甘いヨッ!!」

振り被られた足の上に着地して居たルー師範代の反撃の蹴りが、顔面を狙う。

加減無しで振り抜かれたソレは、吸い込まれる様に謙信の顔面を潰す。
が、無傷。

「ハイハイハイハイイツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

狭い足場で行われる、ルー師範代が行う怒涛の連撃。

一撃一撃が鉄板すら容易く砕く勢いすら秘めた蹴りを食らい続けても尚、謙信は微動にせず直立不動のまま動かない。

“狙う隙は、一瞬で良い”

「コレで　　ッ!!!!!!!!!!」

他の連撃よりも大きく振り被られた蹴り、それを見て　　謙信が動く。

振り抜かれる寸前の蹴りを右腕で掴み、相手の身体に直接気を流し込み、動きを阻害する。帰国初日に百代へ行った神経遮断とは比べ

「大丈夫ですか、ルー先生」

「いたた……最後の最後で、謙信に加減されちゃったネ」

そんな観客たちの声に答える様に、土煙の中から2人の武道家の姿が漸く現れた。

ジャージがボロボロに破け、土埃に塗れたルー師範代。

そして、ルー師範代を肩に担いだ謙信の2人だ。

どちらも覚束無い足取りではあったが、確りと自らの足で歩いている。

『こ、この場合勝者って……どっち？』

『あぁっと……し、知らん』

司会2名の戸惑いなど放って置いて、百代は謙信の下に駆け寄った。着ていたスーツは最早見る影も無く、ズボンの片足部分も膝から下が破り切れていた。言い方に少々棘が付くが、非常に惨めである。

「バカか、お前！」

「……お前にバカと呼ばれるとは、世も末だのう……」

肩に担いでいたルー師範代を床に座らせると、自らも千鳥足ではあったがリングを下りて行く。リングの下に広がっている草むらに顔を埋めると、息を整える為に幾度も深呼吸をする。百代は、最後の連撃でルー師範代のある部分に目が行っていた。

あの謙信の連撃を食らって居ると言つのに、表情に苦痛が伴っていないのだ。

何十発と言う強烈な連撃。だが、その全てを相手の身体に気を巡らせる事で無力化させて居たのである。自分で行った攻撃だと言うのに、最後の最後になって相手を倒す事でも怖くなったのだろう、謙信は結局ルー師範代に止めを刺さなかったのだ。

「つ、かれた……」

草むらに横になりながら、何とか息をする謙信を心配してか、ファミリーの仲間たちが続々と集まって来る。いや、ファミリーだけでは無い。彼に関わった全ての人々が、その行く末を心配そうに見守っていた。

「水でも飲むか？」

「いや……良い……寝る」

息も切れ切れだ。やはり、気の使い過ぎによる反動で身体に相当ダメージがあるのだろう。

謙信が此処まで無様な姿を晒した事は、百代が生きている中でだって幾度も無い。

苦しそうに目を瞑る謙信の背中を、何度も何度も擦ってやった。

「……モモ」

「如何した？」

「……勝った、ぞ……」

「……ああ、これで借金も返せるぞ。美少女のお願い、聞いてくれたのか」

「……お前に、金を貸した奴等が……不憫……だからのう」

「謙信、” ありがとう”」

「……気持ちわりいな、オイ……」

百代の心からの感謝の言葉。

それを聞いて、謙信も悪い気はしなかったのだろう。だが、それをわざわざ言つてやる程に彼の心の形は出来上がっている訳では無い。皮肉気に唇の端を吊り上げると、糸が切れた様に目を閉じた。死んで居るかの様な静かな吐息を吐きながら眠る謙信を百代が抱え上げ、歩き出す。

本来ならば逆なのに、と大和は内心で苦笑しながらも2人の歩みの後ろに続いた。

近場にあつたベンチに謙信を寝かせると、自身の上着をその身体に被せる。

さて きっと百代はコレだけでは終わらせないだろう。

このままでは、謙信が敗北した様な空気のまま試合が終わる。

そんな事はさせない。

そんな事は許さない。

それを言い放つ様に、百代は拳を天へと向けた。

「南波謙信の変わりとして、私がルー先生と戦う！ 異論がある奴は居るか！」

誰もその言葉に異論を唱える者など居なかった。

見てみたい、とも思ったのか。それとも 観客たちの思いが1つだったのだろうか。

どちらにせよ、ルー師範代にとってはあまり良い知らせでは無い。

「謙信に続いて……結構きついネ」

「悪いが、加減はしないぞ」

「当たり前ネ。加減なんてされたら、謙信の顔に泥を塗る事になるヨ！」

ボロボロだった身体に鞭を打ち、ルー師範代も呼応する様に立ち上がる。

全ては謙信の誇りの為に。

あの優しき青年の、人を思う心の為に。

遠雷の如く鳴り響くゴングが三度、観客たちと武道家たちの鼓膜を震わせた。

「謙信……！」

その近場にあるベンチにて、今や死に体とも言える謙信を必死に看病する1人の少女。

クリスは、死んだ様に眠る謙信の顔や腕に付いた血の塊を一所懸命に落としていた。

顔面に蹴りが打ち込まれる度に、何度飛び出そうとした事か。

その度に京や大和に宥められ、ハラハラしながら試合の一部始終を見守っていたが、最早それも限界を迎えていた。

あれ程までに強かった謙信ですら、死に体になる程の相手。

今の自分では到底理解し得ない領域に踏み込んだ、武の天才たちの戦い。

マルさんなら、今の闘いの凄みが分かるのだろうか？

そんな事を考えながらも、クリスは何度も何度も濡れたタオルで謙

信の顔を拭う。

顔にタオルが被さったとしても、今の謙信ならば意にも介さず眠り続ける事が出来るのだろう。それだけの消耗を強いられた、恐ろしい相手だったと言う事はクリスにだって理解出来る事の1つではあった。

ただ 理解出来ないことがある。

何故、こんな姿になるまで拳を奮い続けるのか。それだけはいつになっても、彼女には到底理解し得ない事柄だった。男の誇りとは無縁な彼女だ、分からないのも無理は無い。

ただ、そんな彼女でもいつかは理解する事になるのだろう。何せ彼女も、南波謙信の大切な妹の1人だ。何れは関わるに違いない。

「っ!？」

物思いに耽っていたクリスの横から、誰かが謙信の身体の下へ手を差し込んでいた。

そのまま担ぎ上げると、先程の百代の様に軽々と謙信をお姫様抱っこする人影が写る。

「だ、誰だ？」

その人影は名乗る事はせず、ただ黙々と謙信の事を校舎の中へと運んで行く。

クリスの目に写るのは、その長く美しい髪の毛だけだった。

その後、手負いのルー師範代が十全の百代に勝てる筈も無く、ボコボコにされてしまったが、観客たちからは惜し気も無い拍手が送られる事となる。

そして、この戦いの結果もあり 謙信は師範代に匹敵する化物教師として、川神学園に名を刻む事になった。

第七之巻「龍鬼激突！ 因縁に終止符を打つべし」（後書き）

長髪の影……いったい、何者なんだ？

待て、次回

私はもう少しこの話を読み返す作業をするぜ
突貫工事だった為に、誤字がありそうで怖いのです

第八之巻「闇夜に踊る、黒猫の舞踏曲へ前編」(前書き)

この話では少しモモ先輩が悪い奴チツクに書かれているかも知れませんが

モモ先輩はいい子だ(ドンッ!!)

異論は認めない

純粹なんだ、モモちゃんは!!

4 / 0 9 修正

第八之巻「闇夜に踊る、黒猫の舞踏曲〈前編〉」

第八之巻「闇夜に踊る、黒猫の舞踏曲〈前編〉」

『良いかい、謙信。南波の力は人を殺めるものではない』

何時ぞやの事だったか。

磨耗した記憶の中ですら光り輝くそれは、まだ謙信が小さな頃の誰かの言葉。

優しく大きい手を、今でも覚えている。

温かくて、嬉しくて、謙信はその人に撫でられる事が大好きだった。

『お前は才のある子だ。きっと、私すら越えて行くだろう』

寂しそうに笑うその人の顔は、やけに霞んでいる。

記憶が思い出す事を拒絶するかのようにその記憶だけを消している様

無理だ、無理だよ、そんな事はオレには出来ない。

オレが得意なのは癒す事じゃ無い。

いつだって、作るよりも壊す方が簡単だったじゃないか。

オレには、誰かを救うなんて出来やしない。いつだって”壊す”方が楽しかった。

悪に染まる。黒に染まれ。闇に堕ちろ。

ああ、オレはいつだって欲を殺して来たじゃ無いか。そろそろこんな茶番も

「違う　　ッ！！！！！！！！！！」

負のスパイラルに陥ろうとした己の意識が、一瞬で覚醒する。

柔らかな布団の感触、暖かな毛布、額に当てられていた濡れ布巾。

辺りに充満する鼻を刺激するアルコールの臭いは、馴染みの深い臭いだ。

保健室。

そつだ、学園の保健室。

暗闇の保健室。気が付けば、いつの間にか夜になっていたと言う事か。

額に手を当てると、やや熱っぽい。

汗でビショビショになって肌に纏わり付くYシャツを脱ぎ捨てると、鏡の前に立つ。

手や胸元に巻かれた包帯。至る所に張られた絆創膏。とても綺麗と言えた物じゃないソレは、如何見ても素人が行った物だろう。

一体誰が……？

そう疑問に思った時、ふと謙信は自分の仕事机の上に手紙が1枚置いてある事に気付いた。誰の物かも分からない手紙ではあったが、封筒はやけに綺麗だ。

封を切り、中身を確認する。

その中であつた手紙には、筆で書かれたのであろう達筆な字で謙信が倒れた後の事が事細かく書き連ねてあつた。あの後百代が謙信に代わつて試合を続行したこと。倒れた謙信を心配して何人もの生徒が保健室を訪れたこと。

こんな物を見せられて、謙信は如何しようも無い程に自分が惨めに思えてしまった。

甘っちょろい考えなどせずに、ルー師範代との戦いを全力で行えば

その後悔した所で、既に終わった事柄が変わる訳でも無い。

宛先人の『通りすがりのお節介屋』と言う言葉に首を傾げ、謙信は手紙をもう一度仕舞つて、ベッドの布団を整える。

本来ならば保険医である自分がベッドを使うなど、言語道断である。夜と言う事もあり、今から干す訳にもいかない。

さて如何すべきか……そんな事を悩んでいるとき、ふと謙信の耳に普段聞き慣れていない音が聞こえた気がした。

それは段々と遠くへ　いや、近付いているのか。

保健室を出た先にある、長い廊下。

その先から聞こえるのはガラスを叩き割る、そんな物音。

何故校舎でそんな音が？　疑問は絶えないが、もしも空耳でないのなら即刻元凶を捕まえなければならぬ。

もし盗難でもされれば、明日面倒な事になるのだから。

代えのシャツに袖を通し、真っ暗な廊下を歩く。

月明かりに照らされ、辛うじて足元だけは見えているが一寸先は闇だ。

辺りをキョロキョロと見渡しながら、物音を辿って行く。今聞こえる物音はもう直ぐそこだ。あと僅かに歩か進めれば、そう思い足を出した先にゴッソ、と何かがぶつかった。

その感触に何事か、と足元に目を向けると、そこには気を失っている警備員が居た。

「大丈夫ですか!？」

青い顔をしながら倒れる警備員を抱き起こし、特に身体的な被害が無いと判断すると、身体の中に気を巡らせて中に異常が無いか確認する。

やはり気を使おうとすると身体に痛みが走るが、今はそんな事を言っている暇は無い。

頭の上から、爪先まで。

丁寧に見て行くが、特に異常は見当たらない。

どうやら気絶しているだけの様である。

だが何故こんな所で気絶しているのだろうか。

そんな謙信の疑問に答える様に、彼の目の前に冷たい風が吹き込む。あまりの急な出来事に驚きはしたが、よく目を凝らして見れば窓ガラスが何枚も叩き割られていた。やはりか、と齒噛みしながらも何とか警備員を肩に担ぐ。

手負い2人、しかも1人は気絶して居るのでカウントされないとすれば真正面から闘うなどは愚の骨頂である。

気絶した警備員を担いだまま、謙信は先程自分が歩いて来た道を辿った。

やがて、2人の下から、学園から誰かが遠ざかって行く感覚を直感的に謙信が感じ取る。

此度の犯人はどうやら、窓ガラスを割っただけで満足した様だ。これで自分たちが見付かっていれば、最悪自分の頭も叩き割られていたかも知れない。そう考えて謙信は何とも言えない気分になった。

「……………チッ」

弱々しい現在の自分に舌打ちし、警備員を肩に担いだまま保健室へと向う。

担がれた警備員も段々と意識がハッキリして来たのだろう、謙信に担がれているとは言え、少しずつだがボンヤリとした表情で言葉を紡いでいた。

“窓ガラス”、“3人”、“自転車”、“バッド”。
ああ成る程。

つまり、窓ガラスを割っている3人の犯人を見つけ、止めに入った所にバッドで殴られたと言う事か。尚且つ犯人の逃走手段は自転車である、と。警備員としての役割をこなす事は出来なかったが、それでもこれだけの情報が手に入るのは非常に有り難い事だろう。

保健室に警備員を寝かせ、直ぐ様携帯で鉄心にこの件を報告する。

まだ深夜では無かったと言う事で電話口にはワン子があつたが、急を要すると言う謙信の言葉に何か感じる事があつたのか、直ぐに電話口に鉄心を引っ張り出してくれた事は非常に良かった。

それから、時間は少し経過する

川神学園は、川神鉄心を学園長とする学園である。

そんな鉄心のお膝元で問題を起こすなど有り得てはいけない事態。それに川神学園にはフランクを筆頭とする資産家や世界でも有力な有権者の娘が通っている事が多い。その為に、絶対安全を語っている筈の川神学園で事件が起こった等と言う事が外に洩れる訳には絶対にいかないのだ。

内密に、しかも即時に解決を望む。

それが朝礼にて、鉄心から教師陣に言い渡された言葉だった。

「おじき、すまん……オレが居ながら何とも不甲斐無い……」

「気に病むな。病み上がりの御主がまた怪我を負わなかったただけ重畳じゃ」

そう言つて頭にポンと手を置く鉄心ではあつたが、謙信は何とも言えない気持ちになる。

鉄心に迷惑が掛かる事など、彼は全く望んでいない。

だと言つのに、今回は自分が学園に居たと言つのに事件が起きた。最早これは鉄心だけで無く、ある意味では謙信にすら宣戦布告をした事と同じ意味合いを持つのだ。

だが、今の彼は残念ながら病み上がりの非戦闘員にしか過ぎない。役にすら立たない自分に歯噛みしながらも、この件の処理を任せられた宇佐美に全てを託す事しか出来なかつた。

「宇佐美先生……」

「大丈夫さ、謙信ちゃん。謙信ちゃんの方まで犯人にはキツイお灸を据えるから」

「……申し訳ありません、私が無様なばかりに……」

陰鬱になる謙信の気分を取っ払うかの様に、宇佐美が謙信の頭を軽くポンポンと叩くと笑いながら職員室を後にして居た。せめて、この償いは必ず

そう心に固く誓い、謙信も落ち着いた足取りで自らの職場である保健室へと歩を進める。

自らの脆弱な身体に何処かで憤りながら。

保健室に到着した落ち込む謙信を出迎えたのは、見慣れない女生徒たちだった。

見知らぬ女生徒に首を傾げ、戸惑う謙信。

もしも、彼女たちが自分のファンだと知ったらどんな顔をするのだろうか。

突然ではあるが、前回の謙信とルー師範代との激戦。

リングの上で血を撒き散らしながらも、愚直なまでに勝利へと突き進んだ謙信の姿に感動し、密かに彼に思いを募らせる者たちが少数なりとも学園で出て来ていた。

そんな者が四六時中保健室を利用する様になり、件の当事者である謙信は困り顔である。

奥のベッドには辰子が、暫くすれば何故か恒例となった百代との昼食が保健室で行われる。

だと言うのに、此処に居る女子生徒たちは一向に教室に戻る気配を見せない。

何だか良く分からない話題を振られ、困り顔で適当に相槌を打ちながらも、謙信はと言うと先程から何度も時計との睨めっこを続けていた。

「そろそろ昼食時だから、君たちも教室に……」

「大丈夫、私つてご飯食べなくても平気ですから。それより先生、今度のお休みに」

一向に退いてくれない女生徒たちに頭を抱えなくなりながらも、その話には適当な相槌を打つ事しか出来ない謙信。幾ら武道家として武術に秀でて居ようと、中身はまだまだ初心な若者と何ら変わらない。今時の化粧で着飾った親しくも無い女の子に気安く話し掛けたり出

来る程に、彼の精神は成熟しているとは言いがたい。

「教室に戻ってくれ。オレも飯を食いながら君たちの相手を出来る程に起用じゃ無い」

最後の最後に何とか保健室から退室して頂いたが、それも結局は泣き脅しに等しい。

これから毎日こんな事が続くのか、そう思うと何とも謙信の胸の内は重くなる。

カーテン一枚挟んだ向こうで寝息を立てる辰子を起こし、昼間になったと言う事で先程の女生徒と同じくご退室願う事にした。

「悪かったな、お前の安眠妨害になった」

「別に平気だけど……大丈夫？」

「ああ言うタイプの相手は慣れないだけだ。特に、一般的な子になると声も出ない」

やれやれだ、と肩を竦めて疲れた様に溜息を吐く。

辰子の様な普通の少女と違う不思議なタイプは喋っていて疲れないし、寧ろ楽しいとも言えるのだが、先ほどの彼女たちの様なタイプは如何にも苦手なのだ。

謙信自身も好き嫌いを言える職業では無い事程度分かっているが、職務では無く、私情まで持ち出されると如何にも口が詰まる。これも全て、恋愛経験の無さ故の哀しき悩みなのだろうか。

そんな時でも、決して彼を見捨てない人は居た。

ポンッと謙信の頭に置かれた手。その手が、子を慰める時の様に優しく彼の頭を撫でる。

目の前でニコニコと謙信の頭を撫でる辰子は至って真剣で、「良い子、良い子」などと謙信の頭を撫でている。が、当の謙信は絵図のシニールさに笑いすら出ないご様子だ。

「お前から見りゃ、オレは子供か？」

「疲れた時こそ誰かが労ってあげるべきだな〜って」

そう言つて頭を撫でる辰子に、謙信は内心で深い安心感を手に入れていた。

誰かに慰めて貰える。

それが、どれだけ嬉しい事だろうか。

人の事ばかりを顧みだ結果として、いつかは自分だけが破綻して行く。それを思い浮かべれば、毎度ながら恐れしか生まれて来ない。考えるだけで、彼の屈強な拳は震えた。

だが、たまにでも良い。

こうして自分の行いを労ってくれる人が居ると言うのは、どれだけ心が癒されるのだろうか。気紛れで招き入れた”猫”ではあったが、いつの間にか掛け替えの無い存在になって居たと言うことなのだろう。

「……………母さん……………」

「”母さん”？」

「ッ！？ いや、何でも無い、何でも！ ただの気の迷いだ、きつと、うん」

とは言え、気の緩み過ぎは己の弱みを相手に見せる事になる。

辰子の事を疑う訳では無いが、この世界で弱みを握られると言う事

がどれだけ自らに不利益を招くのかは旅先で身体に刻み込んでいた。故に、先程軽率に彼女の事を”母さん”と呼んでしまった自分を恥じ、律する。

アホな事をした、何と馬鹿な事をしたのだろうか。

頭の中に浮かぶ罵倒が浮かんでは消え、やがては思い付かなくなつたのか、それとも単に疲れただけなのか、謙信は諦めた様に回転椅子に腰を降ろした。

「オレは……何がしたいのかなあ」

独白を呟き、ポケットと天井を眺める。

川神学園は基本的に綺麗な校舎だ。それは保健室だろうと例外では無く、掃除など滅多にしない天井ですら綺麗なタイル色を輝かせていた。

タイルですら輝いていると言うのに、自分は今輝いているのだろうか？

人を助けて、自分は報われるのだろうか。

そんな事を考えてしまった自分に、きつと疲れが溜まっているからだと結論付けて、謙信は辰子の方へと振り向いた。

「また、来いよ」

「うん」

短い問答ではあったが、お互いにそれだけで十分なのだろう。

次の瞬間には辰子の姿は謙信の前から消え、謙信自身それを気にした様子も無く、仕事机へと向き直っていた。

あと数分もすれば、あの困った魔王様のご登場となる。

そうなる前に、この陰鬱な気分を晴らしておかなければと、謙信は保健室に配備されている冷蔵庫の中に入れてあったりポDを一気に

飲み干した。

魔王登場までに自分も用意しなければと思い立つと、漸く重い腰を上げる気になった。

椅子を用意し、端に寄せられていた机を保健室の真ん中へと持って来る。

ティーカップを2つ用意し、その中に緑茶を淹れている最中、丁度タイミングよく保健室の扉が開かれた。

「いらつしゃ……何だ、お前たちか」

百代かと思ひ振り向いた先には待ち人では無い、風間ファミリーの面子たち。

その光景に苦笑しながらも、新しいティーカップを出して、流石に緑茶だけでは足りなくなつたのでフルーツティーなども追加で淹れていく。

「兄さん、身体は大丈夫？」

大和が心配そうに尋ねて来るも、当の謙信は特に気にした様子も無く笑顔を向けた。

未だに身体の芯はズキズキと痛んでは居るが、身体を動かす事には何の支障も無いのだから特に気にする事も無い。口に出しては居ないが結局はそう言う事なのだ。

「でもさ、ワン子が昨日、緊急事態って言ったから何かあったのかと思っただぜ。まっ、何事も無くて良かったな」

「何よおっ、昨日はお兄様が緊急事態って言ったのよ!」

「? ああ、”事件”のことか」

何気無く呟いた謙信の言葉に、誰よりも早く反応したのはキャップだった。

“事件”。そして、謙信の口からも出ると言う事は学校関係の出来事だ。

今学園で起きている事件とえば、最早校舎のガラスを割っている者たちのこと以外には有り得ないだろう。

「兄ちゃん、事件ってガラス割られたことだろ？」

「何だ、もうシヨウの耳にまで届いていたのか？ おじきも気が早いな……」

「あつ、そつか。ケン兄ちゃんは”昨日”起きたから知らなかったのか」

納得した、と言わんばかりに相槌を打つモロ。

そんな彼の様子に首を傾げながらも、謙信は次にモロの口から放たれた言葉に絶句した。

「兄ちゃん、3日も起きなかったからね」

「3日……!？」

「その間に、もう何枚も窓ガラスが　　って、大丈夫？」

3日。

確かに、ルー師範代との戦いは苛烈だった。

だが、あの怪我を治す為に3日も日付を要するだろうか？

答えは否。有り得ない、いや、有り得る筈が無い。あのレベルの怪

我であれば、1日もあれば修復可能な筈なのに　今回に限っては
何故か3日もの時間を要した。

それはつまり、”気”が回復し切って居ないと言うことに他なら
ない。

気とは、生物の内に存在する元気の塊。即ち生命力と同義だ。今ま
でならばその有り余っていた生命力によって百代すら驚きのタフネ
ス加減を誇っていた謙信だったのだが、今回に限っては何故か上手
く身体の修復に機能していないのだ。

それ即ち　生命力の低下。

気を多用する武道家たちは短命と言われるが、所詮は他の武道家と
比べて数年ばかり早死にする程度の事である。だが南波流は気を多
用するのでは無く、気その物を身体から放出・固定化させる気を最
大現利用した武術だ。もしかすれば

「……そうか」

「謙信、本当に大丈夫なのか？　まだ休んでいた方が……」

「問題は無いよ、クリスティアーネ。オレの身体の事はオレが良く
”知っている”」

その言葉は、彼らの目から見れば如何思われるのだろうか。

どちらにせよ、まさかあの謙信が死に掛けて居るとは誰も思わな
いだろう。

生命力の欠如に伴う衰弱死。

幾人もの死を振り払って来た彼が、此度は自身が死に魅入られて
いる。

それは何と言う皮肉

そうか、と寂しそうに呟いたクリスは自分の前に置かれたティールカ

ツプに注がれたフルーツティーに口を付ける。相変わらず謙信の淹れたフルーツティーは仄かな甘みを感じさせ、フルーツ独特の旨味を殺さずに淹れられている。

料理は平凡なのに、そう思うと苦笑せずにはいられなかった。

「それよりもシヨウ、窓ガラスが割られていると言っが……如何言う事だ？」

「ああ、今月に入って3回だっけ。最初は事故かと思っただけど、2回目・3回目って目撃証言も出て来たし、学校側でもいい加減解決しなきゃヤバイって事になったらしい」

「それで、3回目の犯行直後にオレは起きた訳か……泣けるぜ」

「で、キャップがさつき依頼を受けて来たって訳だ」

ガクトの言葉に頷き、そこでふと違和感を覚えた。

確か、この仕事を任せられたのは宇佐美の筈である。それが何故依頼に出されている？

疑問が浮かび、直ぐに解決する。

あの人は代行業。

つまり 代行しやがったのだ、風間ファミリーに。

その事実に関頭を抱えなくなる謙信ではあつたが、宇佐美の本質を見抜けなかったこと、そして昨日の失態もあるので強く言い出す事も出来ない。諦めた様に溜息を吐き、仕方が無いとばかりに緑茶に口を付けた。

「相手はバッドを持っていると聞く。本当ならオレも手伝ってやりたいが、まだ戦闘を行える程に回復した訳じゃ無い。お前たちなら出来ると思う……だが、気を付けてくれ」

心配する謙信の言葉を受け、寧ろそれを活力にしたのだろう風間フアミリーは全員がニイツと不敵に笑う。確かに、あまり心配は要らないだろう。

モロを除いてこのフアミリーの戦闘能力は高いのだ。素人が相手ならば、案外呆気無く倒して来るかも知れない。モロを除いて。

「ヤマ坊、確りとコイツ等を支えてやれ」

「まっ、軍師の役目だよな」

「シヨウはキャップとして仲間を纏めてやれよ」

「任せてくれよ！」

「ガクト、お前は油断せずに確り犯人を捕まえろよ」

「おう！ 俺様が見事依頼を完遂して来るぜ！」

「ワン子は張り切り過ぎて自爆しない様に。良いな？」

「はい！ お兄様の仇はとるからね！」

「京、お前は……大和のことばかり考えるなよ」

「無理。大和は私の婿」

「クリスティアーネ、君は確りと周りの意見を聞く様に。良いね？」

「ああ。もう二度と……同じ過ちは犯さない」

「それとモロ助は 人質にされない様に」

「僕だけ酷くない!？」

冗談だよ、と笑って、モロの頭を撫でる。

幾分か不服だったのだろう膨れっ面のモロを連れて、大和たちは保健室を後にした。

しかし、由紀江と百代は如何したのだろうか？

僅かばかり疑問に思ったが、特にあちらも何も言っ来ない。

それを考慮に入れて謙信は無粋な質問をしなかったが、大和たちが立ち去った後でやはり何か引掛かる様な感覚に襲われる。

が、考えているだけでは物事が前に進む事は決して無い。自らの身体の不具合を確かめる為にも、今回はかりは 裏方の仕事に身を落とすべきなのかも知れない。

「まあその前に飯だな」

腹が減っては何とやら。

謙信は取り敢えず、購買へと足を向ける。

「入れ違いになったか……まゆっち、気配は終えるか？」

「すみません、南波先生の気があまりにも希薄で……」

「チツ、あのバカが！」

彼の身体の異常を知った2人が、入れ違いになる形で保健室に訪れた事も気付かず。

もしかすれば 謙信の異常を一時的にだが、治す術が見付かったかも知れない。そんな事など露ほども知らずに、謙信は購買でただ美味そうなパンを選び続けていた。

親不孝通り。

夜のその場所は不良の溜まり場であり、1人で歩くなど言語道断な場所。

だが、そこを百代はただ1人で歩いていた。

自らの強さ故の自信か。それとも、ただ腕試しがしたいのか。

実際は、そんな単純な事では無い。

昼間、保健室で謙信を由紀江と待った2人。

そこへ両腕一杯のパンを抱えて帰って来た謙信に、百代はキツイ口調で言い放った。

「お前、死に掛けじゃないか」

その言葉に目を見開くも、別段驚いた様子も無く、謙信はパンをテーブルに置く。

それからティーカップ2つにフルーツティーを淹れると、由紀江と百代の前に差し出した。もう気丈に振舞う必要は無い、安心したのか今の謙信の手は震えている。

お茶を淹れると言う作業ですらコレ　由紀江は、目の前の武道家の命の炎が消え掛かっている事に驚愕すら覚えた。自分を倒し、隣に座る武神とも言われる百代の1つ上に行く武道家が今では自らの毒で苦しみ、死に至ろうとしている。

何よりも　初めて声を掛けてくれた彼が死ぬ、それが由紀江には到底許容出来ない。

「お願いです、南波先生。私たちの言う事を聞いてくれませんか？」

由紀江の懇願にも近い言葉を聞いて、謙信は深く息を吐く。

呼吸すら、辛いのだろう。本当ならば消失する事の無い気が、身体から消えて行く。

通常ならば気を10消費しようと、少し休めば10回復すると言うのに。

今の謙信は10消費したとしても、回復するのは2〜3程度。

それも全て、気を酷使し過ぎたからの過負荷が原因だ。勿論、ルー師範代との戦いだけでは無い。それよりも前に積み重ねた、人を救う為の行為。

それは全て、謙信が自らの首を絞め続ける事と同義なのだ。

「悪いが、YESとは言えない」

それでも、謙信は首を横に振った。

由紀江の懇願すら跳ね除けて、それでも尚彼が此処を離れられない

理由があるのだ。

何故だ。自らの命よりも重い物など、この世界にありはしないだろう。

百代が咄嗟に、謙信の首を締め上げる。

「黙って言う事を聞け！！」

最早それは、悲痛な叫びだった。

誰よりも彼に死んで欲しく無いと思って居るのは、彼女自身なのだろう。

咄嗟の事だったが、まだ付き合いの短い由紀江ですらそれだけは理解出来る。

だって、百代は 例え離れていようと、その心だけは謙信と共に育って来たのだから。

苦しげに顔を歪ませ、百代の手を掴む謙信だが、その手に入る力は驚く程に弱々しい。

「止めて下さい、このままだと南波先生が ツ！！」

ハツとした様に我に返り、首を締め上げていた手の力を緩める。

その瞬間に膝から崩れ落ちた謙信は激しく何度も何度も咳き込んだ。痛々しい程に。

「お前……何で……ッ！」

「ゲホッ、ゲホッ！」

死ぬかも知れない。

冗談や増徴では無く、本当に。だと言うのに、まるでそんな事など如何でも良いと言わんばかりに己の治療を拒む。理解出来ない、し

たくも無い。

それでは狂人と何ら変わらないでは無いか。

何度も由紀江に背中を擦られながらも漸く回復したのか、謙信はか細い声でその心情を 治療を拒む理由を語った。

「猫が……来るから……」

「猫？」

「迷い猫、が……毎日……だから、オレは……」

生粋のバカが此処に居た。

そうだ、そうだった、コイツは昔からこうだった。自分よりも何よりも、コイツは誰かとの約束を重んじる。そう、愚直な程に。

例え自らの命が天秤に掛かろうと コイツは死んでも約束は護る。

もう耐え切れない、そう言わんばかりに百代は保健室を後にする。

そんな彼女の後姿を見送り、謙信と何度も見比べている由紀江ではあったが、謙信は彼女のそんな心情を察して、背中を擦る由紀江の手を制した。

「もう大丈夫だから。それよりも、まゆちゃん。オレよりもモモを追ってくれ」

また、自分よりも他人を心配する。

歪過ぎる。南波謙信と言う人間の根本は、動かす原動力は、単純だった。

誰かを助けたい、誰かを護りたい、だから その思いに背筋が寒くなるのを感じる。

美し過ぎる尊い願いを、自らの命を切り捨てる事ですら適えようと

する。

由紀江は未だ数十年しか生きていない若娘だが、それでもこんな人種に会った事など無いし、会える筈も無いと直感的に悟る。

どうする事が彼の為になるのか、どうする事が彼を救えるのか。それは分からない。

だが、こんな所で彼を死なせてはいけない。それだけは分かった気がした。

「南波先生、あの、ベッドで休んで下さい」

「だけど、午後も学校が……保健室に人が来るかも知れないし……」

「でもっ　先生が倒れられたら、誰の治療も出来ません」

その由紀江の言葉に漸く折れる場所を見つけたのか、謙信は疲れ切った足取りでベッドに腰を降ろした。それから布団を掛ける事も無く目を瞑れば、数分も立たない内に寝息が由紀江の耳にも届く。

「眠ってくれたね、松風」

「おう、しっかし頑固だよな。南波ティチャーもさ」

「この人は……こんな生き方しか知らないのかもしれないかも」

やっと眠ってくれた、その事実を確りと受け止めて、彼女も百代の後を追う様に保健室を後にする。その場に残ったのは、ただ静かに眠り続ける謙信1人だけだった。

そして　話の舞台は親不孝通りへと戻る。

何故百代が此処に居るのか。

それは全て、謙信の為とも言える。つまり、自らに喧嘩を吹っ掛けて来た連中を全員叩き潰し、その身体にある気を奪おうとしているのだ。

もしかすれば相手が暫く動けなくなるかも知れない、そう考えもしたが、此方とて死人が出るかも知れない一大事なのだ。その程度の事には目を瞑るしか無い。

だが、今日はやけに親不孝通りが静かだった。

溜まって居るのであるう不良は1人も居らず、通りには閑古鳥が鳴いている始末。

何故だ。何故だと、焦る気持ちに駆られた百代の前に漸く影が躍り出た。

来たか　百代は内心で笑った。

まずは1人、コイツを締めて他の奴の居場所も聞き出す。その後は他の奴等も殲滅して、気を奪う。

だが、だが、神は何とも残酷な運命を彼女に与えていた。

「何をするつもりだ、百代」

暗闇から電灯の光を浴びる位置まで影が移動した時、彼女は己の不手際を恨んだ。

こんな事なら、鉄心に頼んで部屋に縛り付けておけば良かったと。その後悔するが、もう遅い。

此処で出会ってしまったのなら、ある道は1つだけしか無いのだ。

「そこを退け、 ” 謙信 ” 」

「何をするつもりだ、と聞いている。答えられないならコレ以上先には行くな」

「お前には関係無い」

「百代、頼む……止めてくれ」

今にも泣き出しそうな表情で懇願する謙信に、百代はイラつくしが無かった。

何故分かってくれないのか、と。全てお前の為を思っただけで居る事なのに、何故お前が自らの手でそれを止める。

此処に止めに来たのが鉄心ならば、ルー師範代ならば、もしかすれば百代は自らの行いを悔いて道を引き返していたかも知れない。だが、謙信だけはダメなのだ。

もう引き返せない。百代の胸中で、覚悟が決まる。

「退け、南波謙信 ツ！」

渦を巻く怒涛の気迫。

それを真つ向から受け止めて尚、謙信はその瞳から炎を消そうとはしない。

「オレが幸せになる為に誰かが泣くのなら そんな幸せは要らない」

その身が衰えようと、その腕に宿るのは”神”。轟く轟音、渦巻く風、噴出する裂帛の気合。

「川神百代。お前の道は、オレが正す」

にこやかに笑う保険医としての顔は既に無く、ただ眼前に立ち塞がる障害を滅ぼす1人の武道家、南波流継承者 南波謙信が、”本気”の構えで百代と相対して居た。

第八之巻「闇夜に踊る、黒猫の舞踏曲へ前編」(後書き)

なぜかこの先の川神大戦のネタで悩む私

- 1・通常通り+オリ主ルート
- 2・オリ主の裏切り、敵対ルート
- 3・まさかの釈迦堂ルート

個人的には3番だった

第九之巻「闇夜に踊る、黒猫の舞踏曲へ後編」(前書き)

ネタに奔った感がある……ボ○ガ博士、お許し下さい

4 / 0 9 修正

第九之卷「闇夜に踊る、黒猫の舞踏曲〈後編〉」

第九之卷「闇夜に踊る、黒猫の舞踏曲〈後編〉」

2対の質量を持った何かが、その通りで激突する。
手を組む2つの何かを中心に衝撃が辺りを揺らし、物が全て吹き飛ばされて行く。

最早限界だった。

限界なのは、2つの何かでは無い。限界なのは 親不孝通りだ。

既に何度交わったか分からない拳、そして技の応酬。

小賢しい技に頼る事が出来なくなった今となつては、力だけが物を言う。

地が罅割れて、大気が振動し、宙に紫電が走る。

これを人間が起こしているのだから、ますます頭が痛い事態だったろう。

み、全力で地面に叩き付ける。

数多の時を経てすら頑強な道が一瞬で朽ち、そこに隕石でも落とすたのでは無いかと言う程に巨大なクレーターを即席で作り上げていた。

それでも、止まらない。

百代の上に押し掛かり、その顔面を何度も何度も殴り付ける。

右に、左に。

殴られる事で揺れる百代の顔が、今にも泣き出しそうな程に歪んでいた。

謙信の拳に入る力が　あまりにも弱過ぎる。

本来であれば、先程の地面へと叩き付けられた時点で勝負は決していただろう。

万全な謙信であれば、一撃で勝負を終わらせる事も可能だった筈だ。だが、今の彼は如何だ？　貧弱な拳で、一体何が出来る？　そんな物で、何を護れる？

「お前は……お前が……ッ！」

いつしか、2人の格好は謙信の上に百代が覆い被さる事となっていた。

胸倉を掴み、息も絶え絶えの謙信の柔らかな胸板に頭を押し付ける。疲れた様に大きく上下する胸の中では、確かに心臓が鼓動していた。

ああ、コイツはまだ生きている。

そんな当たり前の事が、今程嬉しい事は無かっただろう。

いつしか辺りに降り積もる雨は、2人の汗を流す天然のシャワーと変わっていた。

身体に激しく当たる雨粒と、耳を支配する雨音。

だが、そんな物よりも何よりも相手の言葉が謙信にとっては痛かったのだ。

「お前が川神に來なければ、私はこんな事をせずに済んだのに……ッ！ 如何して、お前なんだよ！！ 何でお前が川神に來て、そんな性格なんだよッ！！」

強過ぎる事は人を孤独にする。

もしかすれば 百代の心を救ったのは鉄心でも大和でも無い、彼だったのかも知れない。自分と渡り合える武道家で、捻くれた奴で、口は悪いクセに甘っちょろい。

頑張った時に頭を撫でて貰える事が、嬉しかった。

方言の混じった会話を聞くと、心が和んだ。

一緒に稽古するのは、楽しかった。

短い様で居て、長い時間。謙信が旅をする為に飛び出す時まで、2人はいつだって一緒だった。仮初とは言っても兄妹だから、家族だから。

手を繋いで、虫を捕まえに行った事もあった。危ないと言った謙信の言葉を無視して木に登った百代が落ちた時、逸早く彼女を抱き止めたのは謙信だった。

川に魚を釣りに行った事もあった。はしゃぐ百代が川に落ちた時、呆れながらも手を差し伸べてくれたのは

花火の後片付け、最後の一本を終わらせて寂しそうにする百代にまだ自分の取って置いた最後の一本を譲ってくれたのも

「恨めしいかよ」

「違う！」

「憎いかよ」

「違う ッ！」

「だったら何だよッ!!」

「ッ、死ぬなッ！ 私の傍に居れば、それで良いッ！」

あまりにも愚直で真っ直ぐなその言葉だったからこそ、人は心を動かされるのだろう。

真っ直ぐに自らを見詰める2つの瞳があまりにも美しく、謙信は言葉を失った。

頬から伝わる水の粒は、涙か雨か。

震える腕は、恐怖。ならば何の恐怖だ？ 殺すこと、失うこと、それとも 畏怖？

「コイツの目って綺麗だな」と、別段今は如何でも良い単語が頭の中に浮かび、そんな考えを軽やかに笑い飛ばす。

自分が心配などするまでも無く、百代は邪な道へ走ろうとはしていない。

その胸の内はいつまでも純粹無垢で、ガキの頃から何も変わる事のない無垢な物だ。

だと言うのに、勝手に心配をした自分もまた子供の頃と何も変わらないガキのままか。

思わず失笑すら漏らしながら、謙信は雨に濡れる百代の髪をクシヤクシヤと撫でる。

「ヤマ坊が居るだろ。2人目は流石に多過ぎると思うが？」

「美少女のお願いだぞ。嬉しいだろ……？」

「美少女云々の件は如何でも良いが、オレの為を思ってくれるなら誰かを傷付けるな。このくらいの気の消失、ギャーギャー喚く程でもない」

「……取り敢えず、続ける」

「あ？ まあ、3日寝込んだのは無理に身体を治癒したツケだろうか？ だったら、その分だけ休めば良いだけだ。あの怪我だったら……3週間か」

「つ、つまり？」

「お前がギャーギャー喚かなくても、勝手に治るって「よし、死ね」ひよ？」

「バカバカ、と百代を指差して笑っていた謙信の顔が地面へと沈む。

勝手に治るって、そんなバカな。

気は即ち人間の生命力。

確かに生命力が満ち溢れている状態ならば納得が出来たが、死に掛ける身体である謙信が自らの気を高めることなど出来る筈も無い。

気の消失は即ち命の消費。命を回復出来る手立てなど、それこそ神だけに

否、『南波流』に常識は通用しない。

気を操るあの武術ならば、気の回復程度は当たり前前の様にやってのけるだろう。

つまりは、完全なる空回り。百代の小さな勘違いから始まった、盛大な兄妹喧嘩。

「あーっ、馬鹿馬鹿しい！ おい、帰るぞー！！」

「テ、テメエツ、少しは加減を知れ！ が、顔面が、鼻の形が……」

「元々が不細工だろうが」

「今の台詞は凄く傷付いた。お兄さん、もう立ち直れない」

そう言つて不貞腐れた様に頬を膨らませる自らの兄貴分に、百代は拳骨でも落としたい気分に陥る。何だ、このふざけた面は。此処まで人をイラつかせるのも一種の才能か？

そんな眉根をピクピクと痙攣させる百代とは裏腹に、謙信は流石に自分の犯したアホな行為に頭を抱えなくなる　　と言つよりも、抱えていた。

冗談抜きで身体が動かない。

脳がどれだけ命令を身体に伝達しようと、身体はソレを適える事が出来ない。

自身の生命力よりも何よりも先に、彼の身体が悲鳴を挙げているのだ。怪物百代と正面から本気で打ち合えば、今のこの身体から省みても結果は明らかだったと言つのに。

それでも命懸けで彼女を止めに来たのは　　”家族愛”。

彼が欲しくて堪らない、この世で彼には永久に手に入る事の無い物。仮初だとしても、謙信は百代と家族だと思つている。

だが、それは一方的な物では無いのだろうか？

向こうにとっては目の上のタンコブなのでは？

邪魔なのでは無いだろうか？

そんな事を感じている時点で結局の所、謙信は川神家に馴染めていないのだから。

鉄心には感謝している、恩義もある。

百代は昔からの馴染みで、戸籍上は双子の妹に当たつた筈だ。

ワンスは可愛い妹分で、今は無理だが修行だつて見てやりたいと思つている。

だが、彼らは謙信が居ぬ間に止まり木を見つけていた。

百代には　　もうオレは必要じゃ無い。オレだけが必要な訳じゃ無

い。

(あ、ダメだ……)

これ以上は、他の何よりも自分の為にならない。

そう思つて無理に思考を切り上げたが、頭の中で思考の残滓が糸を引いていた。

この世界で謙信が必要な時は、誰かが悲しむ時だけ。

必要とされる理由は、命を助ける為だけしか無い。命を助ける事は立派な行いだが、それは結局誰かの為でしか無く、己の為では無い。誰かが涙を流す時が最も自分の輝く瞬間であるなんて、それは何て酷いことだろうか。

自らは人の幸せを祈っていると言うのに、自らが生きる為には人が不幸にならねばならない。医者なんて、結局は人の不幸を啜るしか無い職業なのだ。

実際は人の命を救う尊い職業だったとしても、今の謙信にはその事に胸を張つて生きる事が出来る程の度量も誇りも無い。

南波流は癒しの拳。

そうだ、その言葉に従つて今の今まで人助けをしながら生きて来た。戦場を掻い潜つて、地雷原の中を掻い潜つて、海を渡つて、人を助けて、感謝される。

心の底から言われる『ありがとう』の言葉は重い。

だが、それだけだ。言葉だけでは何も満たす事など出来やしない。だからそろそろ、”自分”の事を考えても良い頃合じゃないのだろうか？

誰かの為では無く 己の欲望のままに食らい、戦い、犯し、壊す。

「……ん、……信！」

謙信ッ！！！

「ウオオオツ、耳痛ええええつ!!!!」

耳元で百代に怒鳴られた事で、マイナスの思考が意識の外へと吹き飛んで行く。

ジンジンと鼓膜が痛んだ。

至近距離で百代が遠慮無しに怒鳴った所為だろう、オマケに目までチカチカとする。

「今度はどんな理由だ!？」

「腹減った」

「テメエエエエエエエエエエエエエエエエエツ!!!!!!!!!!!!」

意味の分からないカミングアウトありがとうございます。

青筋を浮かべてプツンした謙信が百代に殴り掛かり、雨の降り頻る親不孝通りで2回目の兄妹喧嘩が再会された事は、誰にも知られなかった事が幸いだっただろう。

因みに　こう言う場合の喧嘩で、謙信が百代に勝てた試しなど有りはしない。

財布の中身が少しばかり消し飛んだが、最早慈善活動と割り切るしか無いと言つのは……実に辛い事実であった。

雨の中を歩く百代と謙信。

Mなジャンクフード店で食事を済ませた2人は、黙って川神院に戻

る為の道を辿る。

本来ならば島津寮に戻る謙信なのだが、鉄心に百代の夜歩きの弁解でもしてやるべく、こうして川神院へと足を運んでいるのだ。

「子供の頃さ」

ふと、思い出した様に謙信は語る。

2人の上に降り注ぐ雨はいつの間にか優しい物に変わり、ずぶ濡れと言う事に変わりは無かったが、先ほどの拒絶する様な雨粒より幾分も優しい物へと摩り替わっていた。

「誰かの為に、何かをしたいと思ったのは……間違いじゃ無いと思っただ」

降り頻る雨よりも優しく、心に響く謙信の言葉。

顔に張り付いた表情も儂いながらも優しく、温かい笑顔。

ただ、百代にだけは言葉の持つ意味が分からなかった。表面上だけでは、昔話をしているとしか思えない。だが、謙信はもっと別の何かを百代へと伝えようとしている。それだけは、辛うじて理解出来た。

「自分が死んでいるとも気付かないのにさ」

人ならば誰もが持つ、我侭。

それをすら殺した謙信は今になって漸く、人並みの幸せについて考える事が出来る様になった。いや、考えなければならぬと頭が勝手に理解したのだ。考えなければ破綻する、考えなければ暴走する。南波謙信の存在が、今ほど不安定になった事は無いだろう。

子供の持つ不安定さ、それをこの歳になるまで持って来るとは思わなかった。

「オレの生きて来た過去は消せない」

夜空を見て、一言。

過去は消せない。失った悠久の時、永別した命、消えた思い出。

それらを取り戻す事は南波流だろうと出来はしない。

だが、これから『先』ならば作って行く事が出来るのだ。未来は誰にも決められない。

「それでも 100年先は無理でも、明日の自分は変えたいよな」

この世界で最も純粹で、無垢で、ピュアな心を持っているのは子供。ならば、それに順ずる者は何か。

大人になろうと子供の心を忘れず、いつまでも子供の様に無垢で居られる大人。

人は子供っぽいと笑うだろう。

人は馬鹿らしいと貶すだろう。

それでも尚、愚直なまでに何かに憧れ、追いつける姿は人の心を動かして行く。

人の上に立ち、大局を見極め、誰かの幸せを護る為に戦いに身を投じる。

そして 王は廃れ、壊れるのだ。

“彼”が王であるとは言わない。だが、それに順ずる者である事は確かだった。

人は大きな渦に巻き込まれ、引き込まれていく。

いつの間にか渦中に居たとしても、それは必然の事なのだ。

運命がその事態をそう定めてしまっているから。だからこそ、謙信は言うのだ。

神さえも敵にして、運命さえ蹴つ飛ばして、人類史上最高最大の我

俣を口にする。

『運命は、オレが決める』と。

誰の手を借りるでも無く、誰かの助言を受けるでも無く、人として生きる道を歩み、励み、自由気儘、風の行くまま生きて行きたい。誰かがそれを許さないかも知れない。

それでも揺るぐ事の無い意思と決意、そして己の為に奮われる何かを胸に進む。

決めたからには止まらない、止まらない。

「まずはそのひ弱な身体を回復させろ、アホ」

「あ！？ 誰がひ弱だ、誰が！ これでも毎日鍛えてますから！」

「だったら100m3秒で走って見ろ」

「無理だろ！ オレの肉体スペックをお前とイコールで結ばないで下さい！」

今度は1人で行かせる事無く、その背中に飛び乗ろうかなどと考えながら、百代は謙信と共に川神院へと足を向ける。

帰れば鉄心の大目玉を食らう事になるだろうが、その足取りは自然と軽やかだった。

川神院へと百代を送り届け、鉄心に百代を連れ出してしまった事の侘びをして島津寮へと戻る。まだ大和たちは帰って来て居らず、謙信は1人でいそいそと部屋の布団を敷く作業へと入っていた。自分の物よりも少し遠目に置く、クリスの布団。見えない壁でもあるかの様な感覚。これが謙信とクリスに敷かれた一線である。

もしもこれを越える事があるのならば、（有り得ない事ではあるが）謙信とクリスが恋仲にでもなった場合のみだろう。

「ん〜！」

大きな伸びと共に出る気持ちの良さ気な吐息を皮切りに、謙信はゆつくりとだが身体を解す運動を始める。部屋の中でガチャガチャと五月蠅くする訳では無く、あくまでも身体の筋肉や疲れを解す為の軽い運動である。

肩を回したり、腰を捻ったり、足首を慣らしたり。

その程度の軽やかな運動をしていると、下の階が無性に騒がしい事に気が付いた。

わざわざ関与したくも無い謙信はと言うと、何も言わずに身体解しの運動を続けた。

コキコキと首の関節を鳴らし、順次肩・腰・足と鳴らして行く場所を下げに行く。

その頃、階段下でも口論は終わりを迎えては居なかった。

ギャーギャーワーワーと怒鳴り合う2名の言葉を無視して、謙信は黙々と自らの身体の調子を最善へと持って行く為に身体を慣らしている。

最早、彼の中では関与する事すら馬鹿馬鹿しいのだろう。

何よりも今日は百代と戦った、それだけで疲労は限界近くまで溜まっているのだから。

ズガンツ、と寮の中で落ちる2つの雷　　と言う名の怒声。

それを聞いた瞬間、謙信の両足に力が籠る。

よいしょ、等と言う可愛らしい声を出す事も無くスタスタと歩き、スーッと襖を開け、階段下で言い争っていた2名の脳天を、全力で殴り抜いていた。

「「痛　　つ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」」

「痛いよ、オレも。特に心と拳がね」

頭を抑えて蹲る2人、クリスと大和の姿を見て謙信は深い溜息を吐く。

アレ程に協調性云々とクリスに釘を刺したと言うのに、帰って来たと思つて蓋を開ければこの始末。如何責任を取ってくれようか、と珍しく青筋を浮かべた謙信が腰に手を当てて2人の生徒を見下ろしている光景は正直、怖い。心成しか、眉根もピクピクと痙攣している。

「帰つて来たと思えばギャーギャーと、何の騒ぎだ？　喧嘩か？
表に出なさい」

「だって兄さん、クリスが　　ッ！」

「謙信つ、元々は大和が　　ッ！」

ゴソッ！　と良く響く音と共に落とされる急降下型流星。

2名の頭部を激しく揺らし、一撃で大和とクリスの頭部を粉碎していた。

1本の青筋を2本に増やして、謙信は大和の首根っこを掴み、邪悪な笑みを見せる。

邪な気持ちを込めた微笑と言うのは、人を此処まで怯えさせる事が出来るのだろうか。

まるで蛇に睨まれた蛙の如く、大和はその身体を小さく縮込ませていた。最早反論する気も起きないのである。大和をポイントと投げ捨て、次いでクリスの首根っこを掴み、階段を上って行く。ギャーギャーと怒鳴るクリスには、脳天に一発チヨップを入れて黙らせる辺り、謙信もクリスの扱い方と言う物を理解して来たのだろうか。

クリス用の敷布団の上にポンッとお尻から投げ出され、可愛い悲鳴を小さく上げるクリスではあったが、謙信はそれすら厭わずクリスの頭を自らの拳骨でグリグリと苛める。

国民的アニメのクレヨンなし　ちゃんてママが行う、あのグリグリ攻撃だ。

例え、どれだけ歳を取ろうとも心の中に埋め込まれた恐怖感を拭い去る事は出来ない。

それは父に育て上げられたクリスとて同じ事。

涙声で「うあ、うあ」などと呻き始めた所で漸く、謙信はその手に込めていた力を抜き、クリスの頭から手を離す。

「理由は聞かない。聞いた所で、それはもう終わった事だ」

「で、でも……」

「猛省なさい、クリステイアーネ。オレも席を外すから、1人で反省すること」

諦めた様に溜息を吐いた謙信は、それだけを告げて部屋から立ち去る。

残されたクリスはと言えば、頭に残る鈍痛と今日の出来事　大和の策略に、如何しても首を縦に振る事の出来なかった自分について、思いを馳せる事にした。

さて。

では、此処で部屋から立ち去った後の謙信の行動を追う事にする。本来ならば黙って部屋にて休むべき身体なのだが、成長をしようとして居る者の妨げになる訳にはいかない。多少の無茶でも出来得る身体なのだから、今日とはことんまで無理をするべきなのだろう、と結論付けて向った場所は　ゲームセンター。

夜だと言うのに、まだまだ人が居るのはゲーセン故の性か。

それとも、道に迷った子羊たちの溜まり場なのか。

まあそれは一先ず置いておくとして、謙信はあまり見慣れない光景に色々な場所へと目を向ける事になって居た。元来、旅先でこんな機器類を目にする事は滅多に無い。

精々が家庭用ゲーム機、筐体など初めての経験である。

子供の頃の磨耗した記憶の中に微かに残るゲームの記憶を掘り起し、謙信は手短にある格ゲーの台へと腰を降ろす事にした。

反対側の台に人が居る気配も無く、1人で時間を潰すのに適していると考えたからだ。

財布から100円玉を取り出し、投入口に入れる。

ジョインジョイン、と言う独特なキャラセレクトの音と共に謙信の選んだキャラは、病魔に身を蝕まれた今でさえ最強を名乗る事を許

された有情な拳闘家。

その名に恥じぬ様な攻撃はまさに激流。その激流にすら身を任せ、対戦相手であるCPUの命を幾つも投げ捨てて行く様は鬼畜の極み。

「ん？」

そんな折、彼の画面に対戦者が現れた事が告げられる。

元々人が来なさそうと言う理由で遊んでいただけなのではあるが、行き成り人が現れたとなつては困つたものである。だが、まあ、少しは良いかと自分に適当な一線を敷く事によつて謙信はその挑戦を受ける事に決めたのだつた。

『ジョインジョイントキイ』』

ほぼ同時に告げられるキャラの名前。

お互いに選んだキャラクターは、最早性能すらバクと言われる最強のチートキャラクターであるト だつた。この世紀末ゲームではほぼ全てのキャラクターに永久コンボが存在するのだが、その手軽さや打ち込み易さから キは人気キャラクターの1人である。

中にはト を最強たる者として押し上げる『北 無想流舞』を使わずに完勝する化物の様なプレイヤーである 修羅、通称『那戯無鬨鬼』も存在して居ると言う。

ゲーム開始と同時に動くのは、謙信側では無い キ。

ユクゾツ、の掛け声と共に奮われた弱Pを確りガードするが、そのまま画面端まで連行される。このト の弱点だが、気絶し易い事などが上げられるが この様な世紀末ゲームでは、押し込まれればその瞬間に敗北を喫する事が当たり前の事だつた。

誰もが、謙信の敗北を悟る。いや、寧ろ1発目からの連続攻撃に耐えている謙信には賞賛の言葉を送つても良い程だつた。ガードが崩

される、そう誰もが悟った時

その場に、神の右腕が舞い降りる。

押し込まれるべく放たれた蹴りを、謙信のキが放つ当て身がもう一方のトを直撃する。

一度でも怯めば、このゲームは終わってしまう。

もう一度だけ言うが、このゲームは一度でも攻撃が入れば終わってしまう。

何故ならば、『全てのキャラに永久コンボが搭載されているからだ。』

だが、敢えて謙信は永久コンボを狙わない。

あくまでもフェアな戦いを、それが彼の信念なのだ。

先程のユクゾツの返礼だと言わんばかりに、今度は謙信のトがブーストを吹かしながら一方のキを画面の端へと追い込んで行く。攻撃を当て、当て、当て、そして狙うのはガードクラッシュ。

謙信の放った弱Pが直撃した瞬間、このト同士の勝負は静かに終わりを迎えていた。

「何だよ、これ！ 人力チートじゃねえか！ つうか、那戯無鬪鬼かよ！」

台の向こうから聞こえる悪態が、ふと聞き覚えのある声である事に気が付いた。

あまり慣れ親しんだ声では無いが、学園に居る生徒の声は一通り耳に収めたつもりである。

ならば、記憶の奥底にある海の底を辿れば 案外とアツサリ答えは見付かる物だ。

「井上か？」

「ん？ ……何だよ、南波先生じゃねえか」

台の向こうで謙信を見上げたハゲは 川神学園2 - S組の井上準
その人だった。

あまり関連性がないとはいえ、学園の生徒ならば声を掛けるのも教師の務め。

何よりも、一緒にゲームをしたとなれば話は更に加速する。

「へえ、お前もゲームか。もう一戦くらいなら付き合っ^てやるぞ？」

「マジかよ……良いぜ、やってやるよ。その綺麗な顔、吹き飛ばしてやるぜ！」

再びコインが投入され、お互いにキャラセレクトの画面が表示される。

先程のト 合戦はあまりにも詰まらないと言う事で、お互いに自重の心を持ち合わせ、今回の戦いはケン ロウvs・シ というライバル対決となる。

無論、主人公は勝つ。

「サラダバー」の断末魔と共に、筐体の向こう側でハゲの身体が爆ぜた。

第九之巻「闇夜に踊る、黒猫の舞踏曲へ後編」(後書き)

このお話を読んで世紀末格ゲーに興味を持ったお方

『全て自己責任』でお願いします

次回はちよつと準も絡む予定です

ご期待下さい

第拾之卷「強き身体は心と共に育てるべし」(前書き)

出会いと別れのリユウゼツラン削除
拾話を此処へ

第拾卷「強き身体は心と共に育てるべし」

第拾卷之卷「再会故の悲しみ、終わらない過去の清算」

「オレはロリじゃねえ。小さな女の子と一緒に風呂に入りたいてピュアな願いを持っている、純粹無垢な若者の1人だ！」

「屈折した願い事さえ持たなきゃ、確かに若者だったろうな」

準の訳の分からぬ力説に耳を貸す事も無く、謙信は帰路を辿っていた。

ゲーセンで潰した時間は1時間程度。

その間に何度と無く、準は謙信にゲームを挑んで敗北の記録を塗り替えて行く事しか出来なかったと言うのは 関係の無い話である。

「それより、S組は如何だ？ F組に比べて個性的なメンバーが勢

揃いで……」

ロリコンの井上に付き合う事が怖くなった謙信は、話題の路線を変える為にわざわざクラスの事を聞いてみる事にした。それに元々、謙信は保健室に籠りつきりになる事が多い。

その為、こつやつてクラスの事を生徒に聞く事は密かな楽しみでもあるのだ。

例えば 授業中にあつた面白い話とか。

些細な事だつたとしても、謙信にとっては良い刺激となるのである。

「幼女が居ない」

「マジで警察行くか、井上。お前ダメだわ、ホントにダメ」

だが、相手は準。

一般的な感性が通用する相手では無く、ロリの事になれば尚更の事であつた。

即答で返された答えに、流石の謙信も黒い笑顔を浮かべながら首を締め上げる事しか出来なかつたのである。

ギリギリと万力の様に準の首を締め上げる謙信の顔は、イイ表情だつた。

やがては白目を剥いて意識をフェードアウトさせそうになる準の頬を気付け代わりに一発ビンタして、無理矢理にでも意識を覚醒させてやる。

この保険医、案外鬼畜の類だつた。

「こ、此処は何処！？ オレは井上！？」

「そつだね、お前は井上準だ。因みにロリコンだぞ。このクスが、死ね」

「生徒に対してそれで良いのか、教師！ 迷える子羊を導いてくれよ！」

「犯罪者生産はオレの役割じゃ無い。出る杭は引き千切る」

「何処をおおおおっ！？ 下か、下なのか！！」

バキバキと片手を鳴らす謙信の行動と”引き千切る”と言う言動があまりにも怖かったのか、準は自らの息子を抑えながら謙信から数歩ばかり距離を離れた。

武を嗜む準だからこそ分かるが、謙信は強い。

ある意味ではルー師範代との勝負で周囲にも実力は十分知らしめているが、あれで本気では無い事は準にだって十二分に理解出来る事だった。

もしも、自分と謙信が戦った場合。

そうシミュレートを頭の中で何と無くしてみるが、一瞬にして塵の類に変えられる光景しか浮かんでは来ない。それだけ、今の2人には実力的差があるのだ。

「井上、頼むから……甘粕に手を出すなよ」

「Yes、ロリータ。No、タツチ」

即返って来た訳の分からない単語。

『はい、ロリータ。いいえ、触る』とかマジで意味分からん。

謙信は準の風変わりした性癖と、吹き飛んだ螺子の事を思っただけかばかり涙すら流しそうになってしまった。此処まで屈折した性癖を持った男となると、嫁の貰い手も居ないだろうに、ああ何と可哀想に。わざとらしくオイオイと泣く仕様まで入れるレア仕様で準の悲

劇的とも言える性癖に教師として悲しむ事しか出来なかった。

「ああそう言えば、うちの若が先生に興味津々だぜ？」

「若？」

「葵冬馬。分かるだろ？」

「ああ……あのエリートくんね。うちのヤマ坊とライバル関係の」

準の若、と言う単語に謙信は引つ掛かりを覚えはしたが、人の呼び方など様々。

現に彼自身も大和たちを独特な名前で呼ぶのだ。気にする事でも無いだろう。

寧ろ、彼にとつて今一番重要なのは自分に興味を示してくれた物珍しいエリートくんである冬馬の存在である。何せ、就任したばかりの教師とは言えど同じ男に興味を持たれるとは思ってすらいなかったのだから気にはなるのだ。

「若、先生の貞操狙って」

「お前の周りには変人しか居ないのか？」

「あだだっ！！？げるう、？げるううううううっ！！！！！！」

額に数本の青筋を浮かべた謙信が問答無用で準の『ナニ』を掴み、万力の如く力を強めていく。ギリギリと締め付けられる激痛に準は身を振るが、それをさせまいとするかの如く力を強めたり、弱めたりと強弱を付けて痛みの波を作りやがるのだ。

引き千切れる寸前、漸くその手を手放した謙信は汚物を触ったと言

わんばかりに両手をハンカチで拭い、そのハンカチへと気を流し込む事で一瞬にして発火させる。

シュボツ、と勢いを付けて燃えるハンカチだった塵はやがて空へと掻き消えて、風と共に何処かへと飛んで行く。

謙信のなるうとして、自由気侷な風に乗って……

「井上」

「あん？」

「野暮用思い出したわ。お前は先に帰れ」

ふとした瞬間、何かに憑かれた様に動かなくなった謙信が思い出した様に準へと声を掛ける。その突然の申し出に質問を返す事も出来ず、直ぐ様に闇夜と同化して行く謙信の背を準はただ呆然と見送る事しか出来なかった。

「行つちまいやがった……自由だなあ、オイ」

気侷に現れ、気侷に消える。

自由奔放な謙信のあり方は何処か風を思わせる物であった。

が、それは周りの思う意見。謙信本人にその自覚は無いのが残念な所ではあるが。

ないだろう。

拳を振るえば、一撃で骨が砕け散る。

蹴りを入れれば、相手が倒れ込む。

脆い、脆過ぎる、あまりにも人間の身体は 脆弱過ぎる。

だからこそ、数を相手にすれば飢えも癒えると思っただが、それも甘い考え。

寧ろ、中途半端な状態で宙に釣られている様な物だった。

退屈だ。暴れ足り無い。

家に帰れば、確かに凶悪な強さを誇る姉たちが居るが アレはまた別だ。

彼が求めるのは、そう言った類の物では無い。

「血の臭いがしたかと思えば……ただのケンカか」

そんな彼の狩場に、またもや一匹の”獲物”が迷い込んだ。

辺りに惨状に目を向け、嘆息しながらも血塗れになった不良の1人を担ぎ、ヒョイヒョイと道の端へと寄せて行く。

その動作の途中で、立っている男に視線を配る事も無い。

元々、興味すら無い。男には、目の前で淡々と作業をする獲物が自分にそんな印象を持っている様にしか思えなかった。

「オイ」

「ん〜？」

「死ね」

だからこそ、地に伏していた不良たちへと放った拳と同じ様に豪腕を振り被る。

今まで不良たちの頂点として君臨し続けた、男の拳。

それは容易く獲物の身体を　射抜く事など無く、通過する。次いで、自分の顔面に走る激痛と衝撃。

それが獲物だと思っていた存在が放った蹴りだと理解するのに、男はかなりの時間を要する事となった。口の端から垂れる、一筋の血……それを拭い、目を見開く。

見えなかった、全く。

速い、と言うレベルでは無い。

最早それは人の常識から逸脱した、有り得てはならない境地。拳を振り抜くよりも速く移動し、尚且つ寸分狂わず顔面に蹴りを打ち込む精密な技巧。

それ程の動作を行いながら尚且つ、足に力を入れてインパクト時のダメージを高める事までやると言うのであれば、それは神技の域であろう。

「今の一撃すら見切れないなら、お前じゃ一生オレに勝てん」

道端に生える雑草を見るが如く。

否、それは既に形すら纏まらない空気へと視線を向ける様に、獲物は男を見下ろした。

獲物は　狩人を逆に狩ったのだ。

狩場に迷い込んだのはコヨーテでは無く、ライオンだった。

それを知らず挑んだ己の無知具合に、寧ろ笑いすら飛び出しそうな始末である。

「お前……何処の誰だ」

「名乗ると思うか？　報復なんて面倒な真似するお前みたいな面のヤツに」

「デメエツ!!」

「粹がるなよ、クソガキ。お前じゃ遊びにもならない」

今にも殴り掛かろうと足に力を入れた男の前に、一瞬で亀裂が刻まれた。

足を振り上げている辺り、足で刻んだのだろうか　どうやって此処まで大きな亀裂を刻み込むと言うのだろうか？

この男は最早、姉たちに近い。圧倒的な力と技量、そして恐怖。人の根本をすら揺るがす巨悪とも言える、強大なオーラ。

それを見せ付けられ、男は自らの器が途轍も無く小さく思えてしまった。

「精々鍛えろ、クソガキ。不良相手じゃ無く、ちゃんとした連中を相手に」

「あ？」

「居るだろ、とって置きが」

「……おめえ、マジで何者だ？」

「通りすがりのお節介屋だ。覚えておかなくて良いぞ」

それだけ告げて、興味を無くしたと言わんばかりに自称・お節介屋は男へと背を向けた。今ならばもはや……

一瞬間に浮かんだ言葉を、直ぐ様取り消す。

あの蹴りで刻んだ線、これは警告なのだ。これを越えればその時は

「ああそうだ」

「……まだ何かあんのかよ」

「お前じゃ無い。辰子と天使に宜しく伝えて置いてくれ、竜・兵・く・ん」

皮肉気味に頬を吊り上げた笑いを見せて、通りすがりのお節介屋は男 板垣竜兵の前から登場した時と同じ様に一瞬でその姿を消して見せた。
後に残る沈黙、そして竜兵の溜息。

「……姉貴の知り合いか」

家に帰れば忙しくなりそうだ。

そんな事を頭の中で考えながら、竜兵はその重い腰を漸く上げる事が出来た。

島津寮へと帰った頃には、既に寮を出てから2時間以上も経過していた。

流石のクリスマスも眠っているだろう。

そう当たりを付けて、謙信は他の寮生を起こさない様に静かに階段を上がって行く。

特に気にする事も無く扉へと手を掛けて、そこで漸く　違和感を覚えた。

眠っているのならば聞き取れるだろう寝息が聞こえない。

起きているのか？　そう思いながら、謙信は静かに扉を開く。

「ただいま」

普段と比べれば、小さな挨拶。

居間に見える僅かな灯りを見て、律儀に反省するクリスマスに流石に負い目すら感じた。

猛省しろ、とは言ったが此処まで気に病む事も無いのだ。

一度失敗すれば二度目もある。もしかすれば、三度目だってあるかも知れない。

だが、そんな事を気にして居る暇がある程に人生に余裕は無いのだ。失敗なんて人間誰にでもある事。

ならば、その失敗をしない様に如何すれば良いか考えてくれればそれで良い。

謙信の考え方はそうなのだが、どうやら今回は　伝え方その物が失敗だった様である。

「クリステイアーネ」

部屋の中央で正座しながら、『私は悪い事をしました』と、自分で

書いたのであろう画用紙を胸に掲げたクリスへと謙信が屈み込む事で視線を合わせる。

自らの非を認めた事で僅かに濡れたクリスの瞳の端の涙を人差し指で掬い、謙信は出来るだけ優しくクリスの頭を撫で続ける。

項垂れていたクリスも、謙信が頭を撫でてくれると言うだけで嬉しそうに頬を緩ませていた。その顔は、普段の彼女からは想像も出来ない程に少女らしい物である。

「クリステイアーネはちょっと頑固だから、どうしてもヤマ坊と衝突しちゃう。その気持ちはオレも分かっているつもりだよ。でも、クリステイアーネ。人は分かり合わなきゃ生きていけない程弱い生き物だって分かるよね？」

「……うん」

「だったら今日は大きく前進だ。明日、ちゃんとヤマ坊にも気持ちを伝えてもらえん」

「で、でもっ……大和は、許してくれるだろうか……？」

「当然だろう、そんな事。だって 仲間じゃないか」

沈むクリスを元氣付かせようと、謙信は笑顔で『仲間』と言う単語を口にする。

それが今の自分にとって、どれだけ辛い意味合いを持っているか知っていると言うのに、それでも尚彼は敢えて仲間と言う言葉を選んだ。

クリスにとって最も効果的な言葉が『仲間』。

彼女は風間ファミリーを気に入っているのだ、あの場所からは自分から抜け出したいは無いだろう。

だからこそ、敢えて仲間と言つ言葉を強調する。そうすればクリスも迷う事無く、明日の朝に大和へと謝る事を了承してくれた。

「謙信は 私の”友人”で居てくれるか？」

「勿論」

クリスの不安そうな言葉に、謙信は迷う事無く即答する。

考えていないと言つのが実際の所ではあるのだが、今の彼女に水を差すのも悪い。

謙信の言葉に嬉しそうに胸の前で手を合わせるクリス。

まるで何かに祈る様だ、そんな如何でも良い事が瞬間的に謙信の頭の中に流れた。

最早、それすら如何でも良い事ではあるのだが。

「謙信、私からお願いがある」

「お願い？ クリスティアーネが？ 珍しい事もあるね」

茶化す様に言葉を口にする謙信の態度が不服だったのか、少しばかり頬を膨らませるクリスの様子に「やれやれ」と肩を竦めながらも謙信は己の佇まいを正した。

最初こそ言葉を選ぶ様にモジモジと指を弄っていたクリスだったが、やがて決心したかの様に佇まいを正し、視線を確りと謙信へと向ける。

「私を、鍛え直して欲しい……ッ！」

「は？ 何で？」

「そ、そのつ、モモ先輩や謙信に頼らなくても良い様に日頃から、鍛錬を……」

段々と尻すぼみになるクリスの言葉を受けて、謙信は苦笑を漏らす事しか出来ない。

元々、百代や謙信はハッキリ言つて鍛え方の次元が違うのだ。

普通の鍛え方では到達出来ない様な境地。

それに到達する為に厳しい訓練に耐え抜き、自分の肉体を苛め抜く事で漸く手に入る武術の雛形を更に昇華させる為に日々訓練に勤む。

百代は大人をすら相手にして己の力量を磨き抜く事に勤め上げ、

謙信は鉄心の教育の下で気の固定化や一点集中に磨きを掛ける日々。それが最終的には百代の様な攻撃的な武や、謙信の様な保守的な武へと変化して行くのだ。

つまり、重ねた日数が物を言う武術の鍛錬は一朝一夕で如何にかなる物では無い。

だが、それでも強くなりたいと願う者はいるのだ。

今のクリスの様に、少しだけでも誰かの力になりたいと願う者は腐る程に居る。

だからこそ、謙信は彼女に手解きする事を決めた。強くなって欲しいと言う訳では無く、彼女の兄として出来得る最大の教育を施す為に

「まっ、護身程度にはなるか……」

「良いのか!？」

「ちょっとだけなら、ね?」

「ありがとう、謙信！ 大好きだ！！」

感動が極まったのか、クリスが謙信に飛び掛かって来るのだが謙信にとつてその行為は迫り来る爆撃機以外の何者でも無い。此処で彼女を抱き止めれば、フランクに何をされるか分かったものでは無いのだから。

クリスの額に人差し指を当て、その身体の軌道を180度反転させてやる。

訳も分ならず壁へと突進するクリスの姿を見て、謙信はクスクスと笑うのだった。

正義の味方になる為には、力が必要である。

それも中途半端では無く、圧倒的なまでを誇る最強の力が必要になる。

だが、人にはそんな物を手に入れる事など不可能だ。

故に必然的にはあるが、誰でも救える正義の味方など存在出来る筈が無い。

それでも 手を伸ばす努力をする事は無駄では無い。

クリスの放つ神速の突きに対して、謙信は退屈だとも言わんばかりに欠伸を噛み締めながら、身体を逸らすのみで易々とそれを避けて見せた。

その謙信の姿を目で確認したタイミングで、クリスは手を引き戻そうと動くが、あまりにもタイミングとしては遅過ぎる。もう一度戻すまでの一瞬で謙信はクリスの手の甲を叩き、力強く握っていた筈のレイピアを簡単に叩き落した。

手からレイピアが抜け落ちるのと同タイミングで、クリスも力無くその場へと倒れ込む。

昨日の夜に約束した稽古。

その為に朝早くから起きたクリスではあったが、早くも自らの自信が崩れ落ちそうになる。

2人の力の差が、凄まじく空き過ぎているのだ。

クリスの攻撃など赤子を宥める事よりも容易いと言わんばかりに、全ての攻撃を回避して見せる謙信は最早武人の境地へと片足を突っ込んだ途轍も無い男である。

だと言うのに、稽古に付き合ってくれるのはただの気紛れか。

それとも純粹な好意なのか。

どちらにせよ、今のままでクリスは終わる事など出来ない。

出来ないが、既に身体は自らの「動け」と言う命令にすら反応を示してはくれないのだ。

鉛を付けられた様に一步も動く事の出来ない両足、上がらない手。

自らの身体を、これ程までに恥じた事は無かっただろう。

「もう終わりにするかい、クリスティアーネ」

額に付いた汗を拭う手の甲で拭い取るクリスへと気を利かせて夕オ
ルを投げた謙信は、幾分も疲れを見せた様子など無く平然と問い掛
けている。

肉体の基礎スベックすら、此処までの差を示しているとなると謙信
が本当に人間なのか如何か疑いたくなるレベルであった。

「まだ、まだあつ………！」

「ならば全力で挑みなさい。鍛錬とは、常に全力で挑まなければ意
味は無いよ」

震える両足に力を込め、何とか立ち上がるクリスの決死な姿を見て

謙信の口角が鋭利になる。基本、この男は如何しようも無い程
に面倒見の良い男はある。だが、その中身は誰もが恐れ慄くサデ
イストであると言う事を忘れないで居て貰いたい。

踏み込みと同時に突き出されるレイピア。

フェンシングの基本的な構えから繰り出されるクリスの突きは速く、
威力もある。

並大抵の木刀程度ならば押し折る勢いもあると思う。

そんな突きを前に、謙信は焦る事も無く、足元に転がっていた洗濯
用の棒を蹴り上げて、その一撃を軽やかに弾いて見せた。

本来ならば己の肉体を酷使用する謙信だと言うのに、今は棒を使う。

確かに、リーチも威力もある棒ではあるが、使い手が使わなければ
何の意味も無い。

振り被るには長過ぎて、振り下ろすには隙が大き過ぎる。

そんな物を手にとって何を考えて居るのか。クリスは、レイピアの
持ち手を握って1人冷静になって考えてみる　　が、答えなど出て

は来ない。

「ならばっ!!！」

元々、考えるよりも先に身体が動くクリスだ。

棒を腰溜めに構える謙信の攻撃に逸早く反応出来る様、身体を屈め、その懐へと身体を無理矢理に潜り込ませる。

が、それも謙信がクリス以上の速度でバックステップして距離を置く事で容易では無い。

クリスが一步踏み込んでいる間に、向こうは3歩、4歩と倍以上の距離を離してしまふのだから追い付くと言う事ですら今の彼女には厳しい物があった。

「集中力を切らさない」

「あっ!?!」

如何すれば、と考えてしまったクリスの持つレイピアの柄に衝撃が奔り、バランスを崩した身体の横合いを殴り抜ける程に強烈な衝撃が少女の華奢な身体を地面へと吹き飛ばしている。転がりながら漸く受け身を取ったクリスが顔を上げれば、目前に物干し竿が迫っている始末。歯噛みしたくもなるが、それよりも先に身体が棒の攻撃範囲から咄嗟に脱出する事を選んだ。

転げる事で、勢いを付けた突きが先程までクリスの居た場所を通過する。

物干し竿とは思えない程の凶器が、今や地面に深く突き刺さっているのだ。

もしも　そう想像すれば、顔面が蒼白になりそうではあった。

だが、今はそんな事を気にして居る暇は無い。

「はあああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

気合と共に一突き。

謙信が物干し竿を抜き取るよりも速く、鋭く、レイピアの刃が肉薄する　ッ！！

相手の隙を付いた効果的な一手。

獲物を失った事で拳のみになった相手ならばリーチで勝るクリスにも十分な勝機がある筈だと、彼女は頭の隅で楽観的な考え方を持っていました。

だからこそ、その甘さは敗北の道へと一直線に彼女を誘って行く。

「0点だ」

物干し竿を武器では無く、1つのオブジェとして扱った謙信の判断。竿を踏み台として飛び上がり、突き出されたクリスの一撃を空振りさせて、その後ろへと余裕を持って着地する。

渾身の一撃と言う物は避けられれば同時に隙を敵に与える様な物である。

謙信の方へ振り返るよりも速く、彼女の脳天に謙信渾身の説教チヨップが直撃した。

「動き云々よりも、まずは身体作りから始めた方が良い。如何せん、体力が……」

ねえ？　と同意を求める様に、縁側にて2人の稽古を見守っていた由紀江に尋ねる。

そんな謙信の仕様に、由紀江は慌てながらも仕切りに何度も頷いていた。

基礎中の基礎、体力作り。

クリスは技や身体作りは非常に確りしているので問題は無いが、

体力が無い。

勿論一般的な人物達と比べれば十二分な程だろう。だが、謙信の稽古にすら付いて来られない程度の体力では何の意味も無い。

それ故に、今日の打ち込みから得た情報によって、謙信は最初にクリスの体力を向上させる事から稽古をスタートさせる事に決定したのである。

「でも、凄かったです。ねえ、松風？」

『まっ、南波ティーチャーを相手にするには10年早えけど』

「コ、コラッ、松風！」

……以外に毒舌なのね。

そんな事を心の中で思い浮かべた謙信は、一度大きく息を吐いて地面へと突き刺さっていた物干し竿を一気に引き抜いた。

寸分も乱れる事無く空いた穴は、それだけ先程の一撃に威力が込められていたと言う事を見ただけで証明して居る。それは一点集中から放つ最速の突き。いつかはクリスにも、と少しばかり遠い未来を思い浮かべて今日の稽古は終わりを迎えた。

いつも通りの登校。

いつも通りの仲間たち。

南波謙信は幸せだった。

南波謙信は今をとても楽しんでた。

南波謙信は川神を心の底から愛して居た。

「もう少し手加減って言葉を覚えた方が良いと思うな。クリスマスもボロボロだしさ」

「いや、今回の責任は全て私にある。謙信は全く悪く無い」

「……ま、まあ、自重の気持ちは大事だな」

頬や腕、足など至る場所に絆創膏を張った痛々しい姿を晒すクリスマス。流石にやり過ぎたと自分でも自覚して居るのだから謙信は、苦笑いと共に自らの頬をポリポリと掻いた。女の子、それもクリスの顔を傷つけたともなれば　待っている結末は非常に非情である事は疑い様が無いのだ。

「大和は傷が好み？　待って、今轢かれて来る」

「傷だらけの女の子との交際は遠慮します」

「なら、このままの私を愛してくれる？　……ポッ」

「お友達で」

今日も今日とて行われる、大和と京の仲睦まじい光景。それに呆れ、笑い、そして何処か懐かしさすら覚えてと、空を見上げた。謙信はふ

何処までも透き通って居て、何処までも続く青い空。

その果てで苦しむ人々。

そんな人々を放って、自分は今や川神学園の保険医として穏やかな時間を過ごしている。

許されるのか、これが。

否 この場所へと足を踏み込んだ瞬間には、もう決めた筈だ。

壊れる前に修理しなければならぬのだ。心も、身体も、何もかもを全て。

「兄さん、如何したの？」

「え？」

立ち止まり、空を眺めていた謙信を心配する様に、いつの間にか大和が傍へと駆け寄って居た。視線を前に向ければクリスと京も、此方を心配する様に眺めている。

「……ごめん、ちょっとボーっとしちゃった」

そんな大和を心配させ無い様に、気丈に振舞った謙信は空を見る事を止める。

思いを馳せた処で、結局何も状況は変わる事だけはしない。ならば、今はただ愚直なまでに強くなれば良い。

愚直なまでに。

何をしても 強くなれば、それで良い。

「板垣”、か……」

思い出したかの様にポツリと呟いて、謙信は歩を進めた。

自らのセンチメンタルな気持ちを振り払う様に、強く、そして大きく。

河川敷を 罷り通る。

第拾之卷「強き身体は心と共に育てるべし」(後書き)

小雪 を消去

第拾巻之巻「水の中でもユーオウマイシン」(前書き)

4 / 09 修正

第卅拾卷之卷「水の中でもユーオウマイシン」

第卅拾卷之卷「水の中でもユーオウマイシン」

お父様、

お母様、

謙信は1つだけ、お伝えしなければなりません。

健康な肉体でこの世に生を受けた事には途轍も無い程の感謝を抱いています。1つだけ如何しても納得が出来ない事があります。

何故自分だけが？

何故こんな事が起きてしまうのか？

今までも悶々とした生活を送り続け、漸く出た答えも解決策とは程遠い。

どれだけ強くなるうとも、どれだけ正義の心が育まれ様とも、自分には出来ない事。

それは

「泳げない？」

「そつだよ、悪いかよ、悪いよな、すいません」

珍しく川神院を尋ねた謙信と、その来訪を快く受けた百代とワン子。しかして、謙信が来ると言う事で楽しみに待ち構えていた百代も、彼の口から語られた悩みと言う物を聞いて心底如何でも良く思ってしまった。

“泳げない”

元来、何故か知らないが謙信は泳げない。

武道を嗜み、勉強に励む謙信唯一の弱点は 泳ぐ事が出来ない事だろう。

足が付くプールならば何の問題も無い。

歩けば良い、ただそれだけの事だ。

だが、海ならば如何だ？ 足の付かない底無しの水など、考えただけで恐怖の象徴だ。

吸い込まれる様な青色。

確かにそうだろう、あんな底無しの水溜まりは一度落ちれば吸い込まれる事になる。

無論、地獄に。

「でも意外。お兄様が泳げないなんて思わなかった」

「……何故だろうな。オレにも分からん」

ワン子の純粋な瞳が今は痛い。

オイオイと涙を流す謙信の痛々しい姿を見て、流石の百代も頬を引き攣らせる事で精一杯になっていた。何故って、この間まで死に掛

けていた男とは思えない拳動だろう。

拳を振るえば人が倒れ、蹴りを放てば人が飛ぶ。存在自体が兵器の様な男が今や、泳げないと言う自らの弱点を克服したいと頭を下げて来たのだ。そりゃもう驚くし、何よりも人に物を教える事なんて出来ない。

「大体、何で泳がなきゃならん？ 別に泳げなくとも関係無いだろ、お前」

「教師ともなると、色々と勝手が違う。水上体育祭が行われるかも知れんのなら、それまでに泳げる様になっておかないと不味いと言う訳だ」

「ならお兄様、あたしと一緒にユーオウマイシン！」

「だが断る！ お前との特訓では泳げる気がせんわ！！」

「ちえ」

「修行なら腐る程面倒見てやるさ、水泳以外。そう落胆するなよ、水泳以外」

「言葉からも滲み出る水泳に対する拒否反応……重症だな、オイ」

だが、訓練すると言っても場所があるのだろうか？

まだ春先だと言うこの季節に、川で泳ぐと言うのは流石に問題がある。

ならば場所は 市民プールと言う事になるのだろう。

まあどうせ、金銭の類は謙信が全額負担する事になるのだから、たまには羽目を外すのも悪くは無いのかも知れない。

それに折角帰国した謙信とも、今回は2人きりになれた事自体が少ないのだ。

本来の目的を少々忘れ掛けている百代とは別に、謙信は決心したかのように拳を空へと突き上げた。拳帝、此処に降臨　じゃなくて、特訓此処に開始と言う合図。

「明日は風間ファミリー総出で特訓だ！　目的はオレを泳がせること！」

「ちょ、ちょっと待て！　アイツ等も誘うのか!？」

「当然だろ。人数は多い方が良いだろうが」

「……お前マジKY」

「何この理不尽な罵倒。オレ泣くぞ」

百代からの理不尽な罵倒を受けた謙信は、面倒臭そうに重い腰を上げた。

折角川神院に足を運んだのだ。

ワンスの修行を見てやってもバチは当たると言う事もあるまい。

謙信は院生が洗濯物を干す祭に使う物干し竿を手に取り、惚れ惚れする様な手腕でグルグルと一回転させて腰溜めに構えた。

軽い風が百代とワンスの前髪を押し上げ、縁側から中へ暖かい風を送っていく。

南波流拳術、そして我流で磨き上げた棒術。

相手の得物によっては、謙信もこうして武器を使い別ける事になっていると言つのは　まあ修行を見て貰う相手からすれば、あまり関係は無い事だろう。

「そら、戯れてやる。得物を持って、ワン子」

左手でクイツ、とワン子を手招きしてやると、パツと顔を輝かせたワン子が立て掛けてあった修行用の長棒を両腕に持って謙信の前へと躍り出た。

ロードワーク、1人での打ち込み、素振り、たまに行われるルー師範代との修行。

それ等よりも過激で、尚且つワン子にとっては楽しみ以外の何物でも無い修行が謙信と行う決闘形式の1対1でのタイムンバトル。修行が終わった後にキチンと今回の反省点や今までの向上点などを述べてくれる謙信との修行はワン子の中でも最上位の修行 もとい、謙信とのスキンシップだ。

「それじゃ、始めるぞ。用意は良いか？」

「いつでも!!」

基本的に忠実なワン子の構えとは対照的に、腰に抱える様に物干し竿を持つ謙信独特な構えは一目見れば動き辛そうな物に思える。

だが、こと戦いではこの構えこそが謙信にとっては最上の1つとなるのだ。

払いだろつが突きだろつが袈裟斬りだろつが、全てに簡単に対応出来るのは独特な構えからでも俊敏に対応出来る謙信が持つ身体能力に依存するが、それでもあらゆる距離に対応出来る万能具合を彼は気に入っている。

踏み込みと共に繰り出されるワン子の突き連打。

リーチと言う長所を活かし、棒と言う隙が大きい武器の短所を補う

連続での突き。

確かに驚異的ではあるが、別段焦る事も無く対処は出来る。

棒を使うまでも無く、己の足のみで全ての突きへと対応して見せた謙信。

突きに合わせる様に蹴りを繰り出し、向こうが棒を引っ込めるタイミングと同時に此方も足を引っ込め、構えてやる。ワン子がまた棒を繰り出すのならば、それに寸分も狂わないタイミングと位置で蹴りを突き出してやれば、今の2人はラッシュ対決をして居る様に周りには見る事が出来るだろう。

これが謙信なりの気遣いだと言う事に気が付くのも 百代程度で済む。

「そらよっ!」

「せいやあつ!」

身体を捻らせたワン子渾身の薙ぎ払いを、謙信も同じく自らの身体を捻り棒で受け止める。

バギツ、と言う棒と棒がぶつかり合う音が響き、それを耳にした頃には謙信は既にワン子から2m程の距離を取っていた。

「良い調子だ、一撃一撃が鋭くなった」

一呼吸取る為の間合いから、今回のワン子の良い所を褒めてやる。昔打ち合った頃よりも突きは鋭さを増し、棒術も大分向上した様であった。

だが、同時に問題点も浮かび上がって来た。

素直なワン子故の問題点なので、苦笑を漏らしながらも謙信はそれを口にする。

「だが突きが素直過ぎる。もう少し意地悪くしても良いぞ」

「い、意地悪く？」

「そうさね……例えば、こうとかっ！！」

一呼吸分の間合いを一気に積み、ワン子へと突きを繰り出してやる。下から突き上げる強烈な一撃。

それを咄嗟に判断出来たワン子は一般人と比べれば優秀だろう。限界を既に見切られていたとしても、謙信は決して彼女が強くなれないとは思っていない。

この世界に絶対が無い事を証明する南波流の使い手ならば、彼女の道理すら蹴散らしてやれるかも知れない、と謙信は考えて居るのだが　今はまだ関係の無い話。

下から突き上げられると思ったワン子は、その突きを防御する為に棒を下段に構えて衝撃を待つ。だが、棒の突きは予想もなかった方向から飛んで来た。

ワン子の頭部目掛け、一直線に棒が伸びて来るのだ。

「ひゃうっ!?!」

尻餅を付く様に後ろへと倒れ込み、それを回避するワン子ではあったが、実戦ならばこの時点で勝負は決している。

お疲れ様の意味も込め、ポンポンとワン子の頭を撫でてやると期待に満ちた目で彼女は謙信を見返していた。先ほどの一撃の原理でも知りたいのかも知れない。

「さっきの突きは気迫を使ったフェイントだ」

「気迫？」

「そこに攻撃する、と思わせて別の部分へ攻撃する。拳を極めた者
が出来る奥義だな」

「ならっ、お姉様も!？」

「おう、出来るぞー。でも謙信ほど綺麗じゃ無いけどな」

「お前の気迫はアレで十分完成形だ。それに、ハツタリするタイプ
じゃないだろ？」

「それもそうだけどさ。お前に勝つ為には色々と必要だろ？」

「おいおい……勘弁してくれよ」

縁側にて不敵に笑う百代の姿を見て、謙信は疲れた様に笑った。
昔から百代は貪欲に力を求めていた。それは、最強とも言われる様
になった今となっても変わる事は無いのだろう。
清々しく、それでも貪欲に力を求めるその姿。謙信は、美しいとも
思う。

自分には出来ない事だからこそ、人はその対象に淡い羨望を抱くの
だ。

「よーしっ、早速ロードワークよ!」

「コラコラ。もう直ぐ夕飯だろう、確り飯は食べなきゃいかんぞ」

「大丈夫! 夕飯までには戻るから!」

謙信との軽い修行での元気が有り余っているのだろうワン子は、謙信の言葉を跳ね除けてそのままロードワークと言って飛び出してしまった。

「タイヤ良いのか？」と、頬を掻く謙信と縁側で走り出したワン子を見送る百代。

2人之間に降りる沈黙。

それは、健気な努力をするワン子が決して報われない事に対する2人なりの葛藤。

告げる内容の残酷さと、告げない事の非道さ加減。

ワン子を傷付ける。そんな事は、両者共に望んではない事だ。

だが、天賦の才と恵まれた肉体を持つ2人には分からない事柄でもあるのは事実。

成長の限界と言う、人には必ずある壁を前にしては 人では勝てる訳が無い。

「せめて、報われれば良いけどな」

「……………ああ」

辛そうに言葉を吐き出す百代に同意する様に、謙信は自らの持つ物干し竿を器用に自分の前で回すとそれを宙へと投げ放った。

人では無く、神ならば。

そう心に思い浮かんだ言葉を払拭する為に、強く 拳を振り被る。寸分違う事無く落下して来た物干し竿は謙信の拳を受け、その形状を塵へと変化させた。

春先ではあるが、プールにはそれなりの人数が居る。
水泳とは身体中の筋肉を特に酷使するので、ダイエットにも最適と
か昔聞いた事があったが、別にそんな事は無かったぜ！

と言う訳で、現在風間ファミリーは川神市にある屋内プールへと来
ているのである。

「でっけえっ!!」

「へえ〜 来た事は無かったけど、結構綺麗な所だね」

興奮気味にプールサイドを走り回るキャップと、概観が美しくなっ
た屋内プールを見て回るモロ。その2人に続く形で大和とガクト、
そして今回の主役である謙信は同じく物珍しいプールへと視線を向
けていた。

「川神もいつの間にか発展したな。兄さん悲しいよ……昔の光景が
見られなくて」

「兄さん、ちょっと年寄り臭いよ……」

「ヘイツ、そこのお姉さん！ 俺様の自慢の筋肉、如何思う？」

女性陣を待つ為にプールサイドで準備運動をする一行なのではあるが、男5人　しかも美少年揃いとなれば目も引くと言う物だろう。イケメンのキャップ、線の細いモロ、整った顔立ちの大和、筋肉ガクト。

何よりも謙信の裸は中々に女性たちの視線を集めていた。

戦場で付いた傷跡が、生々しくも男のワイルドを膨張させて居る。

一部のアクセサリーの如く傷を負った男のデコレートに役立っていた。

まさに、選り取り見取りの状態である。

「しかし女の仕度は遅いな……あとシヨウ、あまり走り回らない」

「は〜い！　なあ大和、次はあっち行こうぜ！」

「キャップ、ちょっと！　……兄さん、行って来るね」

「なあモロ、兄ちゃん。俺様って如何すればお姉様をゲット出来る？」

「知らないよ、そんなこと。　　たく、ガクトは何処でもそればっかりだねえ」

「お姉様のゲットよりも先に、今日はオレを泳がせてくれよ。　　頼むから」

ガクトの相変わらずな態度に苦笑と共に今日の目的がいつの間にか有耶無耶にされるのでは無いかと内心では戦々恐々としている謙信であった。

当然だろう、この屋内プールも無料では無い。

今回の入場料の全ては謙信が払う事になっているのだから、これで泳げる様になれなかつたら泣きつ面も良い所である。故に、今日は真面目に頑張つて欲しいのだが 風間ファミリーに真面目と言う言葉を求めるには、些か無理があつた。

元々男性陣には期待して居なかつたが、この勢いならば女性陣もダメだろうな。

1人諦めた様に溜息を吐いた謙信は、取り敢えずプールサイドに備え付けられているプールサイドチェアに自らの身体を預ける。

ポカポカと暖かな室内プールの魔の手に身を任せ、このまま夢の世界に旅立つても良い様な気がして来るのは何故だろうか。兎も角、暖かいと眠くなる原理の解明を求む。

とは言え、プールに来たのに寝るだけって如何よ？ と言う突っ込みが聞こえて来そうな勢いだったので面倒ながらも目を開けて女性陣を待つ事に決めた。

屋内プールと言う事で、天井に吊るされた電灯をポーッと眺める事で時間を潰す。

特にやる事が無い時程に、人間と言うのは如何でも良い事に夢中になるのだ。

「オイ、起きろ」

電灯と頭の間挟まるジト目の少女。

良く知るロングヘアをポニーに纏めた姿は物珍しく、珍しいその姿に謙信は最初こそ戸惑った。身体のラインを主張する様な黒の水着と、男ならば誰もが食い付くプロポーション。ああ確かに、彼女は謙信の良く知っている川神百代であつた。

「悪い、氣い緩ませ過ぎたな」

「お前が頼んだのに良いご身分だな。まっ、お前らしいけどさ」

「休日返上しての特訓だ。今日はバリバリ頼むぜ、”コーチ”」

教える側と教わる側の逆転。

普通ならば有り得ない事ではあったが、謙信にとっては教師としての誇りなど狗の餌にすら匹敵しない下らない物の1つなのだから、関係など最初から無い。

教えて貰えるのなら、例えば子供であろうと彼は躊躇せずと頭を下げるだろう。

純粹なまでの知的欲求。

そして、乾いたスポンジへと水を垂らし込む様に貪欲に吸収して行く圧倒的な学習速度。

謙信は最強とは別に、天才という言葉を超すに適した人物であった。

「まずはお前がどれだけ泳げるか知りたいから、取り敢えず泳げ」

「え!?! いや、オレは、えっと、まずは……バタ足から、とか」

「はあ? いいから泳げつつうの!」

百代の行いは至極当然の物だった。

まず実力を知らなければ対策は立てる事など出来はしない。

故に実力を知る事から始めるのではあるが、相手は謙信と言う事で迷い無くプールへと蹴り落としてしまったのだ。親犬に捨てられた子犬の如く、涙を零しながら巨大な水溜まりへとその身を沈ませて

行く謙信。

まあ溺れたとしても楽しいアイツの姿が見られるから良いか、などと楽観視していた百代はこの後に自らの予想があまりにも甘過ぎる事を思い知った。

浮かんでは来ない。

10秒経つても、浮かび上がっては来なかった。

此処の水深は僅か2m程度。謙信の身長であるならば問題も無いと思っただが、何故か時間が経過しても一向に浮かび上がる気配は無い。

20秒経過、30秒経過。

流石の百代も事の重大性を理解したのか、プールの中に飛び込んだ。

プールの底には、確かに謙信が居た。

息もせず、重石でも付けられて東京湾に簀巻きにして沈められる借金取りに捕まった貧乏人ヨロシクな状態の謙信の姿を見て、百代はその身体をプールサイドへと一気に持ち上げる。息すらしない謙信の胸を百代の強烈な張り手の一撃が襲うと、謙信の口の中から大量の水が一気にプールへと溢れ出た。

「ゲホツゴホツ、おぼっ、し、死ぬ……かと……!!」

「お前、本当に泳げないのか……?」

百代の問い掛けは酷く優しい物ではあったが、謙信にとっては屈辱以外の何物でも無い。

妹分である百代にすら虚仮にされるとは　ッ!

僅かばかりの悔しさを噛み締めて、謙信は不貞腐れた子供の様に唇を尖らせながら問いへの答えを呟いた。

「……………身体が、勝手に沈む」

筋肉があり過ぎる、と言う訳では無い。

純粹な”かなづち”。水に嫌われた可哀想な男、南波謙信。

水の上は歩けても、水の中を泳げないとは　これ如何いかに？

そんな言葉を百代は頭の中で思い浮かべて、仕方が無いとばかりに頭を掻いた。

予定よりも時間は掛かりそうではあったが別段当初の予定から大幅に外れる訳でも無い。

そも、今回の特訓は謙信を泳げる様にする為の物である。

少し泳げようが、全く泳げまいが結局変わりはない。

つまり最終的に泳げれば、それで良からうのだあ　ッ！！

「取り敢えずバタ足の練習からだ。サッサとプールに入るぞ」

「おうつ、ビート板貰って来る！」

子供の様に眩しい笑顔と共に、プールサイドを走ってビート板の下まで一直線に向う謙信の後姿を見て、ふと百代は記憶の底にある風景を思い出した様な気がした。

子供の頃、川で溺れそうになった自分に手を差し出し、救い出してくれた謙信。

あの時は確か　いや、気のせいだろう。

今日の謙信を見る限りでは泳げる筈も無い。だと言うのに、川で溺れ掛けている自分を助けられる筈も無いのだ。この光景は何かの思い違いで、幼い頃の自分は何かを勘違いしているのだと思う。そう結論付け、此方へと駆け寄って来る謙信を見やる。

張り切り過ぎたのだろう。

ビート板と共に綺麗な円を描き、謙信は2度目のプール落下を果たす事になった。

爆発しろ、爆発すれば良い、爆発して下さい。

彼氏・彼女が居ない者たちから見れば今の2人はまさに現実と言う世界を謳歌して居る最高のリア充以外の何者でも無かった。

絶世の美女に手を引かれ、プールで必死に泳ぎの練習をするリア充と言っのが男視点。

ワイルド系美男子と一緒にプールでイチャイチャするリア充と言っのが女視点。

どちらにせよ、彼らは良くも悪くも目立っていたのだ。

「ほら、確り息継ぎしろ。もう少しで25mだぞ」

「うわっぶっ、おっ、押忍、モモ先輩！」

練習を開始してから既に3時間程度。

百代の視界の隅では楽しそうに水上バレーに華を咲かせる風間ファミリーの一団が見えた。本来ならば自分もあそこにいる筈だ。いる

筈なのだが、彼女は自らの願いでそれを辞退している。謙信に最後まで付き合う、それが百代なりの筋の通し方だった。

「浮いたぞ、モモ！ オレも浮いた、少し泳げる！」

「やつとか……進歩しないな、水泳は」

「いや、オレにしては凄い進歩だ！ 泳げるなんて夢にも思わなかった！！」

3時間にも及ぶ百代が付きっ切りの特訓。

それで漸く10m前後泳げる様になった謙信は凄いのか、別段凄くも無いのか。

本人の激しい喜び様にそんな事すら忘れ、百代は嘆息していた。

あと少しばかり頑張れば25mも夢では無い。

ならば努力次第で少しはマシな泳ぎも出来る様になるだろう。

そうなれば謙信は百代に感謝する事になり、百代ウハウハの時代になって来る。

まさにずっと百代のターン、神の手は伊達じゃ無い。

「水の中って気分良いな……陸上とはまた違う軽快な動きが出来そうだ……」

「それは泳げる様になってから言う台詞だ。お前には100年早い」

気の早い謙信は既に水中殺法的な物を考えているのかも知れないが、たかが10m程度しか泳げない男に一体何が出来るのか。好奇心も極め過ぎればただのバカ。その良い見本となった様なバカが百代の前にてプカプカと気持ち良さそうに浮かんでいる。

緩み切った顔。

だらけ切った気。

休んでいた、見紛う事も無く。南波謙信は身体全てでリラックスして居た。

気の回復促進には確かにリラックスする事が効果的ではある。ただ寝る・食うと言う行為を繰り返すよりもリラックスした状態で休む事が一番効果的なのだ。

だが、近頃謙信はリラックス出来る様な状況だっただろうか？

自らの弱体化による歯痒さ、百代が武の道を踏み外しそうになった事、クリスの強過ぎる我、何よりも正義を貫く南波流が人を救って居ないと言う現状。

全てが重なり、謙信は酷く疲弊して居た事も事実。

それが分かっているからこそ、百代にとって 自らに責任の一端があつたとしても 謙信がリラックスして居る今の状況を喜ばしく思える。

最強無敵の川神。

絶対美麗の南波。

対極にありながらも、同じく”究極”へと手を伸ばし掛ける2つの流派。

何より百代は、謙信が弱って居ると言う事自体が気に入らない。

倒すならばベストコンディションの相手を。闘うのならば最強の敵を。

それが百代なりのスタイルなのだ。

「それじゃ、少し休憩にしてやるから。今の内に精々休めよ」

「お〜……休憩か〜」

プールに立つ波に揺られ、気持ち良さそうに揺れる謙信は百代の言

葉に気の無い返事を返すと、そのまま波に身を任せて何処かへと流されて行った。

一瞬大丈夫なのか心配になったが、最悪の場合はライフセイバーも居る。一緒に居る身としては恥かしいが、どうせ直接的な恥を搔くのは謙信なのだから問題も無い。

プールから身体を上げた百代は、そのまま自らの身体も休める為にプールチェアへと腰を降ろした。また数分もすれば謙信自ら百代を呼ぶ事になるだろう。

それまでの間は、ジツクリと休ませて貰う事にすれば良い。

足を組み、見事な水着姿を惜し気も無く晒す彼女　男たちは惜しむ事無く賞賛の拍手を心の中から送った。今日はプールに来て幸運だった、そう神にすら感謝しただろう。

同時に、プール内でもユラユラと揺れる謙信の姿を見た女たちが面白可笑しくチョツカイを出して居たと言うのは今の百代に興味も無い事だったが。

「ねえねえ君」

「ねえさっきの男、彼氏？　あんなヤツよりもオレらと遊ばない？」

「君チョー可愛いね、もしかしてモデルとか？」

興味が無いと言えば　今もこうして彼女に話しかける男3人も同じであろう。

魅せるだけの無駄な筋肉だけを付けた、見掛け倒しの3人組。

比べる対象に問題があるかも知れないが、ルー師範代や謙信の筋肉と比べれば力も機能性も皆無に等しい。何せ、ルー師範代と謙信の筋肉は必要最低限の重さと強さを兼ね備えた完璧と言って差し支えの無いバネと撓りを持った最上級の物だ。それと比べると言うのは、

比べられた側に失礼だったかも知れない。

「悪いが、私よりも弱い男に興味は無い」

「ははっ、強気だね。だったらさっきの彼氏、君よりも強いわけ？」

「見えないよね、あんなヘナチヨコ。ビート板で遊ぶガキなんてさ」

「あんなヤツよりオレらの方が楽しめるって。遊ぼうぜ？」

強引な手段で百代の手を取ろうとする3人組の1人。

他の2人に比べて体格も少し大きい事から、リーダー格はコイツなのだろう。

どちらにせよ 雑魚に興味は無いのだ。

手を掴もうとした1人の腕を抜けて、そのままプールに飛び込む。

水分を飛ばしていた筈なのに、バカ共の所為で休憩も取らずに水の中に飛び込むしか無いと言うのは馬鹿馬鹿しい事ではあったが、此処で面倒事を起こす事の方が更に面倒だった。それに、あの雨の夜に謙信と交わした約束。

『誰かを泣かせない』と言う言葉を、百代は忠実に護っていた。

「おい、練習再開するぞ」

「……良いのか？ 連中、お前を楽しませてくれるらしいぞ」

「私は今でも十分楽しいよ、アーホ」

何気無く放った百代の言葉に、珍しく謙信はその両頬を赤く染めた。妹のような存在だったのであまり意識こそしなかったが 百代は正

真正銘の美女だ。

そんな彼女に言われた何気無い一言が、初心な謙信としては何よりも気恥ずかしく思える。呆れた様に肩を竦めて居た事で百代が此方を向いて居なかつた事は不幸中の幸いと言えただろう。こんな顔を見せた日には、羞恥で百代の前を歩けたものではない。

「れ、練習！　練習するぞ、うんっ！」

そんな気恥ずかしさを紛らわす様に、謙信は普通の人に比べれば遅いとは言え、何とか25mのスタート地点に到着すると気合を注入する様に深呼吸を繰り返す。

気合を入れ過ぎれば溺れる様な気もするのだが　百代は敢えて何も言わず、呆れた半分に謙信の手を握る。恐る恐ると言う感覚を抱いていた最初の頃はギュツと握り返してくれていたが今では軽く握り返す程度に落ち着いていた。

これを喜ぶべきか、それとも惜しむべきか。

珍しく少し怯えていた義兄の姿を見て、それも一応は帳消しと言う事にしてあるが。

「あっ、手が滑った〜」

壁を蹴り、スタート。

謙信自身はそうしようとしたのだろう。

だが、そんな彼のスタートを妨害する様に1本のペットボトルがポカッと間抜けな音と共に弧を描いて飛んで来たのだ。

出鼻を挫かれ、何事かと後ろを振り返る謙信と百代。

その先には先程の3人組がニヤニヤと悪びれる様子も無く、プールサイドから謙信と百代を見下ろしていた。

「ごめんねー、手が滑っちゃってさ」

「まっ、そこに居た君も悪いってことでさ。許してくれるよね？」

2人がニヤニヤと此方を見下ろす姿には謝罪の気持ちの欠片すら見えない。

流石の百代も額に青筋を浮かばせ、この3人組を殴り飛ばそうと拳を握ったが、その拳を優しく握り返す存在が居た。

謙信だ。驚いた様に謙信を見詰める百代を諭す様に、優しく微笑んでいる。

「あれ？ 何、どうしたの？ もしかして頭可笑しくなっちゃった？」

「話が終わりなら、オレたちは行きますよ。練習しないと泳げませんから」

「はあ？」

「ほらっ、モモ。練習続けようぜ」

「あ、ああ……」

あくまで明るく。

表情に不快感すら出さず、謙信は百代の背中を押した。此処で争う事に意味など無く、バカな騒ぎを起こして楽しく遊ぶ大和たちに迷惑を掛ける方が自分の誇りが貶される事よりも我慢ならないのだ。

折角の休日なのだから、風間ファミリーの仲間たちには是非とも最後まで楽しんで貰いたいと言うお兄ちゃんからの願い。

我慢は出来る。

昔から、謙信は我慢強い少年だった。

だからこそ　その我慢が出来ない程に許せない事があった場合の怒りは、想像すら絶する恐ろしい物があるのだが。

「……何だよ、つまんねえ」

「節穴かつつうの」

「バカじゃねえ、アイツ。マジつまんねえ女だわ」

自分たちの思い通りにならない物があると、こう言ったタイプは罵倒と言う手段に出る。それは正しくは無い事ではあるのだが、一種の「諦め」だと言う事は分かって貰えるだろう。古風な言い回しをすれば棄て台詞なのだ、結局。

雑魚の相手をせずに済んだと言う事に僅かな安堵の息を漏らし、自らの背中を押していた謙信を振り返った百代はそこで　言葉を失った。

面を貼り付けた様な無表情を曝す謙信が、そこに静かに佇んでいたのだから。

「　　オイ」

2人の下から立ち去ろうとする3人組へと、底冷えする程に冷めた声が掛かる。

その声が先程まで貶していた『ヘナチヨコ』の出す声だと誰が思うだろうか。

思う筈も無い。

彼らは、謙信の事を何も知らない。

同様に謙信も彼らが一般人だと言う事など、全く知らなかった。故に、この場で起こった事はある種の事故。

交通事故の類と理解しなければ　彼ら一般人には到底理解が負い

付かなかつただろう。

「今、オレの家族を笑ったか？」

1人が宙を舞う。

その事に気付かない2人は、隣を通り過ぎる一陣の風を感じ、それが何かも気付かぬまま歩を進めて漸く気付く。もう1人は何処に行つたのか、と。

「テメエか……何処の屑とも分からないテメエが、百代を笑つたのか」

知る筈も無かつた。

分かる筈も無かつた。

今まで旅をして居た彼の周りには、家族と呼べる人物が居なかつた事は幸いだつたらう。

もしも、彼の周りに家族と呼べる人物が居たのならば

きつと何処かの戦場で彼は大暴れして居た事だらう、彼にとっての”敵”が死ぬまで。

湧き上がる濃密な気が殺気だと理解したのは、このプール内で何名居ただろうか。

普段浴びせられる事の無い、凶悪な気。

記憶に埋め込むなどと言う生温い事などせず、存在をすら刻み込む様な濃厚な気配。

百代は当てられた事の無い気の強さに身体が硬直し、

由紀江は凶悪なまでに捻じ曲がった気に言葉を失い、

クリスの護衛と言う建前でプールに侵入していたマルギツテは恐怖を抱いた。

人間が持ち得る限界をすら消し飛ばした、単純な「殺す」と言う意思表示。

威嚇程度なのだろう、本人にとっては。

だが、それを向けられる人間としては威嚇程度で済む筈が無かった。身体中の筋肉が硬直し、声を発する事も出来ず、意識すら手放せない。

目の前で此方を見下ろす殺意の元凶に、ただ怯えた視線を向ける事しか出来ないのならば、それは拷問だ。

「百代を笑ったのかあああああああああああつ！
！！！！！！！！」

踏み込んだ瞬間、渦巻く黒い殺意の奔流。

血走った目とは別に、右腕を取り巻く赤黒い気の塊は最早圧縮された爆弾だ。

近場でそれを見詰めている百代だからこそ、分かる。

超回復を持っている自分だとしても、あの一撃を貰ったのなら即刻落ちるだろう。

それだけの気を一瞬で練り上げる事の出来る謙信を褒め称えるべきなのか、それともこの現状でそれだけの隠し玉を惜し気も無く繰り出す謙信を笑うべきなのか。

無理だ、どちらも出来ない。

生物の根底にある意識を手放すと言う行為は、極限までの恐怖を体験する事で発揮される一種の防衛本能である。失禁から意識を手放すと言う事は、有り得ない話では無い。

故に、現状、意識を手放せない2人は恐怖を体験して居るのでは無い。

人が理解出来ない圧倒的な”何か”。

それを前に出されて、理解が追い付いて来ないのだ。

もしかすれば殺されるかも知れないとしても、到底理解などは出来なかった。

「Dr!!」

「南波先生　　ッ!!!!」

「謙信ッッ!!!!!!!!!!」

たった2人の一般人に振り下ろされる、鬼の怒り。

振り下ろされる拳を止めるべく、鬼の前に立ち塞がる3人の武士娘たち。

命を左右するべく医師を目指した男が、今まさに　人の命すら殺めようとしていた。

だからこそ、彼の過ちを止めるべく3人の武士道に生きる者たちは彼の前に立ち塞がるのだ。例え自らの命すら危機的状況になろうとも構わずに。

鬼は、躊躇う事もせずに拳を振り切った。

第壹拾貳之卷「鬼神乱舞」(前書き)

4 / 09 修正

第拾貳之卷「鬼神乱舞」

第拾貳之卷「鬼神乱舞」

加速された拳を真正面から受け止める事は避けた方が良い。

威力が最高潮になっている瞬間だからこそ、そう言った類の物はなるべく正面では無く、横合いから背後から弾き飛ばすべきなのだ。それが人外魔境の放つ全力の一撃ならば尚更の事である。

誰よりも早く反応したマルギツテは、謙信の拳を横合いから思い切り殴り付けた。

少しでも拳の範囲を2人の青年たちから逸らさねばならない。圧縮された気の塊は既に凝固され、後は解き放つ時を待っただけなのだ。僅かのズレですら、己の身体を吹き飛ばしかねない凶悪なエネルギーの塊。

それに真っ向から対峙出来るマルギツテは勇敢だと言える。だが、

勇気を持ってして行った行為が結果に繋がるのか如何か　それはまた別の話だ。

横合いを殴り付けた筈の拳が、まるで跳ね除けられる様に宙を穿つ。何が起こった？

考える暇も無く、マルギツテの身体は直ぐ様に動いた。身体を捻らせ、今度は左腕での裏拳が謙信の顔面を捉える。タイミング・速度から見ても回避は不可能だと言い切れるそれは意図も容易く謙信の顔を”逸れた”。

「なっ！」

驚愕と共に、勢い余って謙信を通り過ぎるマルギツテの身体。

謙信の瞳は最早マルギツテを捉えては居らず、その恐ろしいまでに血走った両目は自らの肉親を貶した2人の愚か者へとだけ注がれている。

不味い、が如何する事も出来ない。

渦巻く気とは、即ち最大の凶器とでありながらも防具である。

身体を高速で巡る気は通常の打撃を防ぐ気の壁を作り出し、あらゆる攻撃を逸らす。

単純な例えを述べるのならば”空気の壁”だ。身体を護るのは空気の壁。

剛だろうが柔だろうが、全てを弾き飛ばす鉄壁の防護壁。

マルギツテの攻撃が通用しなかった原因も全てはそれにあつた。だが、それは空気で作られているのでは無い。あくまでも、”気”で形成された壁。

ならば　この場に彼女が居た事は幸運だったのだろう。

「はあっ！...！」

気合一閃。

その辺りに散らばっていたのだらう棒きれにて謙信の腕を下から全力で叩き上げ、その拳の矛先を天井へと向けさせる。

黛由紀江　　気ですら断ち切る、剣聖の娘。

その手腕が無ければ、この場で謙信を止める事は誰にも不可能だった。

一気に解放される気の荒波が、薄い天井へと向けて　　牙を剥く。
赤黒い波動、それは天井を崩すのでは無く、ただ綺麗に穴を穿つだけで終わった。

拍子抜け　　そう思った者も中には居るだらう。

だが、マルギツテや由紀江はその傷跡を見て冷や汗を垂らしていた。余計な破壊が無いと言う事は、ただ一点に破壊力を結集させたからこそ出来る技。そして天井に穿たれた穴も余計な物を破壊する事無く、綺麗な円形を形作っている。

一点に集中された力、剣道などの突きが近い物になるだらう。

破壊力、速度、そして危険性。

全てが並外れた中途半端な実力者には使用すら禁止された技の一手。その原理を拳へと定着させ、それ以上の破壊力で解き放った結果が目の前の穴だとすれば　　南波謙信の存在キャパシティは既に人間を大きく上回っている。

そして、この場にはその”人間を大きく上回る存在”がもう1人存在して居た。

「行くぞー！！」

百代の蹴りが、拳を天へと突き上げた謙信を吹き飛ばす。プールの中に落ちまいと手足に気を遣わせる事で水の上での受け身を行う謙

信だったが、今回に限って言えば大人しく水の中へと落ちて行くべきだった。

間髪入れずに謙信の身体が上から強い力によって叩き付けられ、身体を逆「く」の字に折り曲げて水底へと沈んで行く。衝撃の元凶であるマルギツテは華麗な受け身と共にプールサイドへと着地して、攻撃にて僅かに緩んだ水着の紐をきつく締め直した。

「……まゆまゆ、アイツの気は探れるか？」

「いえ、それが全く。多分気絶して居るのでは無いかと……」

この川神の屋内プールには大きく別けて3つのプールがある。

メインである屋内にある温水プール。同じく屋内に設置してある子供用のプール。

そして、屋外に設置してある水が流れる娯楽用のプールだ。

現在戦闘が繰り広げられているのは屋内プールであり、既に其処でプールに熱中していた人員はプール外へと避難していた。

屋外プールにて屋内の様子を覗く者たちも、決して中に入ろうとはしない。

監視員らしき人物がドアの前で立ち入りを禁止して居るのだ。良く目を凝らせば、監視員たちに食って掛かる様な格好の大和たち風間ファミリーの姿も見える。

だが、今は此処に仲間たちが来なくて正解だろう。

水の底から感じる“ゴツゴツ”とした生命の息吹。

今か今かと待ち構え、隙を伺うのでは無く　存在すら強く香らせて、自分が此処に居る事を悟らせる。絶対的な有利から来る圧倒的な余裕。

全身にてそれを感じ取った百代は、だからこそ構えを決して解こうとはしない。

「来る　　ッ！！」

マルギツテの直感的な叫び。

それに呼応するかの様に、静かだったプールの水面が揺れ、水面へと巨大な波紋模様を浮かべ上げていく。1つが2つ、2つが3つ、それぞれがお互いを呼び寄せる様に。

感応、とでも呼べば良いのか　　波紋はやがて1つの巨大なサークルへと変わっていた。

中心から外側へとゆっくりと奔る波。

小さな波も回数を重ねれば大きな物へと進化して行き、徐々に力強さを増して行く。

水着の美女3人。

先程、謙信が沈んだプールへと構えを解く事無く睨み付ける姿は酷く美しい　　だが、同時に儂く、酷く脆い。

“誰かが襲われるから自分が護らなければならない”

そんなチームワークの基礎的な部分すら養われていない百代たちは正直、危う過ぎる。

仲間意識すら芽生えていない即席で作られたこの3人組にとって、それは致命的な弱点とも言えた。個人対個人でならば、誰かがリカバリーに入る事も可能だったかも知れない。

しかし、これから先は予断すら許されないシビアな状況なのだ。

誰かのミスが全員の敗北へと繋がるのならば　　この3人組の評価は最悪と言える。

波紋が、止まった。

「あつ　ぐつ!？」

マルギツテの身体が宙へ浮き上がり、直ぐ様地に叩き付けられる。黒い影の様な物がマルギツテの身体の回りを駆け巡る度に、彼女の顔が苦痛で染まって行く。攻撃？　否、文字通りその行為はただの”旋回”である。

攻撃の意思など無く、ただ様子見として彼女の周りを旋回して居るだけだと言うのに、既にマルギツテは惜し気も無いラインを曝し、細かな傷を残して行く。

胸元を隠せば首を搔つ捌かれる可能性すら秘めていた。

カマイタチの様な”何か”の猛攻を嫌がったマルギツテは羞恥を何とか押し殺し、そのまま自らの持つ全力にてプールの中へとその身を躍らせる。

水の中ならば或いは

そう考えたマルギツテの予想は確かな物であった。

謙信は今日漸く10m程度泳げる様になったドの付く素人。水の中ならば勝機はある、そう踏んだ彼女の思考は生粋の軍人である。

故に、

「があつ!？」

彼女は悪くなど無い。

ただ相手が”常識など銀河の彼方へと消し飛ばした非常識人”だっただけの事なのだ。

黒い影がマルギツテの首を掴み上げ、プールサイドへとその身体を吹き飛ばす。

水に濡れた身体は良く滑り、実った2つの果実すら惜し気も無く見せびらかしては居たが、誰もそんな彼女の恥辱に染まった姿に喝采を浴びせる者は居なかった。

文字通りの、黒い影。

マルギツテを吹き飛ばした存在は顔も身体の凹凸も何も無い、影の様な”何か”。

「気で練り上げた残像か……！？」

それを見た瞬間、謙信独特の気の気配を感じた百代はそれを残像だと見破る。

中身を渦巻く黒い気。

その外を覆う赤い気。

たった2色のおぞましい何かはプールサイドをペタペタと歩いていた。

恐らく、水面に浮かび上がった波紋模様は気を練った際の波動。それならば幾つも浮かび上がっていた事から察するに総計は恐らく

想像を絶する数に及ぶ。

「まゆまゆ、構えろ……！」

「っ……！」

百代の怒号に反応するかの様に、プールから幾つもの水柱が上がる。其処から現れるのは、先程の影人間と全てが同一の影人間の群れ。

数は凡そでも10弱、その全てが今は倒れ伏しているマルギツテを無視して百代と由紀江へと襲い掛かった。

個々の力は先程のマルギツテのやられ具合から省みても、謙信には及ばない。

しかして、仮にも謙信の気によって練り上げられた影人形なのだ。

百代の拳には身体を溶解させる事に対応し、気を斬る事の出来る由紀江の斬撃ですら床と溶け込む様なバックステップで華麗に避けて見せる程の技量持ち。

攻撃は十分に捌き切る事が出来るが、此方の攻撃は効果が無い相手

と戦つとなると百代は脆い。それに　こつ言つた実体の無い相手を恐れるのが百代の”弱さ”だった。

「気味が悪いな……コイツらッ！」

「このままではジリ貧、ですね　ッ！！」

自らに接近する影人間に斬りかかるが、容易くそれを避けられる事で普段は温厚な由紀江ですら歯噛みして居た。攻撃が通用しない相手　彼女たちにはまだ早過ぎる。

あわや敗北？　屋外プールから2人の防戦一方の戦いを見守る風間ファミリーたちは自らの無力さを嘆く事しか出来ない

。このままでは、誰もが自らの身に迫る危機を感じ取った。

“危ない”、“驚異だ”、“怖い”

人々の頭の中に浮かび上がる単語はやがて、暴動と言う形に成り代わる。

それは何よりも、世界の歴史たちが明確に証明していた。このままでは百代たちだけでは無く、自分たちまで危ないのでは無いか？　ならば逃げなければならぬ。何処へ？

無限に続く様な問い掛けに対する答えを、此処に来て思っても見なかった人物が導き出した。いや、それは導いたと言うよりも　尻を拭いたと言う言葉の方がシツクリと来る。

「おぼ、おぼぼっ、溺れ、溺れる！？　……何だよ、足付くじゃねえか」

半ば程弾け飛んだプールの水。
そこから全ての元凶は今漸く、

「ん？ 何だ、モモ。その黒いウジウジした気味の悪い物体」

いつもの調子で、百代へと語り掛けた。

拍子抜け、するよりも何よりも彼が正気だと言うのに止まない影人間たちの猛攻。

百代も軽口の1つや2つ叩いてやろうかと思ったが、直ぐ様表情を引き締めて影人間たちへと向き直る。見れば見る程、妖怪や物の怪と言ふ言葉がピッタリの化物面だ。

何せ、この影人間たちには顔が無いのだから。

「……………成る程、大体分かった」

プールサイドにて激闘を繰り広げる百代と由紀江。

2人のその姿を見て、漸く謙信は事の重大さを理解したのだろう。

軽いウォーミングアップの後、まず初めに由紀江の周りを囲んで居た影人間たちの下へ飛び掛る。

タイミングドンピシャの飛び蹴り。

すらも、問題無いと言わんばかりに溶解する事で回避する。

物理的接触にはハッキリした言い方をすれば”無敵”。一撃で身体を形成する気を吹き飛ばす事の出来る大技の類で無ければ効果も無いと推測。

ならば、と謙信はまたもやプールへと飛び降りた。

「水の凝固は難しいから大嫌いだが、今はそんな事言う暇も無いか……………」

軽く握ったプールの水に気を流し、それを固定する。

柔軟な水に合わせる様に気を巡らせる事でボディブレードの様に型を固定させ、そこから強く気を流し込む事で強度を上げて即席の槍を拵えた。差し詰め、ウォーターランスか。

それを携えたまま、先程と同じ様に由紀江を取り囲んでいた影人間の1人にそれを投げ付ける。ドロリと溶解する事で避ける影人間だが、地面にはまだ液体の様に光る赤と黒の気が張り付いている。アしならば何の問題も無く”吸い取れる”だろう。強固させる為に流していた気を一度緩め、その代わりに新しくその場にある気を吸い取る為に意識を集中させる。赤と黒、2色の気が水の槍へと吸い寄せられて行き、透明の中に2色のコントラストを生み出した。赤と黒のストライプ、武器としては二流品の香りしかない。

「まずは1匹」

床の上に広がるドロリとした液体を足で振り払い、次いで2匹・3匹目の獲物へと同時に視線を這わせる。現在、其方は由紀江と切り結んでいる状況だ。美しさの欠片も無い回避行動は見ていて本当に腹が立つ。ああ言った類の物は、南波の前から消えて欲しい物だ。由紀江へと拳を振り下ろそうとしていた影人間の腕を絡め取り、それを吸収。

それを確認した後、槍を左手に持ち替えて周囲一体を一気に薙ぐ。1匹目は胴体を。2匹目は下半身を全て奪い取る事に成功し、その隙を逃す事無く由紀江の一撃が2匹の影人間を的確に仕留めていた。

「先生！ あの、肉体疲労とか精神的疲労とか鬱とか……ありませんか！？」

「無い。それよりもオレがプールの底で気持ち良くあの世に逝き掛けた時に何があった？ コイツら、何だ？ こう言うタイプは百代が大嫌いな奴等だぞ、まったく」

「そ、それは……」

現状に戸惑う謙信と謙信の態度に戸惑う由紀江。

この影人間を生み出した元凶が自分自身だと知った時、彼は一体どんな表情をするのだろうか？ 戯言だと切って捨てるのか、後悔に顔を歪めるのか。

恐らくは後者。

だからこそ、由紀江は心優しき兄貴分にこの事を口走る事を躊躇ってしまった。

もしかすればもつと最悪の形で誰かが喋るかも知れない。だが、自分には出来ないのだ。この人の前で、貴方がやりました。貴方の所為ですと告げる事が。

「それよりも怪我人が居ます！ あの、早く助けてあげて下さい！」

故に、由紀江は話題を逸らす事を決心した。

自らに科せられた咎から逃げる為に、指差した先には先程影人間の攻撃を食らい、地に伏しているマルギツテの姿を指差す。

怪我人が居るのならば、謙信の行動は早い。

2つの足に全力で力を込め、爆発的な加速と共に一気にマルギツテの下へと走り抜ける。

その道中で自らの道を塞ごうと躍りかかる2匹の影人間をほぼ同時に放たれた槍の突きによつて腹に巨大な風穴を穿ち、倒れ伏す影人間たちに視線を這わせる事も無く真っ直ぐマルギツテの下へと駆け寄った。

裸体同然の姿のマルギツテではあったが、初心だろうか何だろうかその前に謙信は医者である。目の前で誰かの命が危機に曝されていると言つのならば羞恥心だろうか誇りだろうか、何だろうかなくり捨てるだけの覚悟はあった。

「肋骨にヒビか……待っている、直ぐに治療する」

右腕は見えない肋骨を、左腕は身体に奔る細かな傷に当てて治療を開始する。

細かな擦り傷の類は見る見る塞がっては行くが、胸元の紫色をした痣だけは如何しても消えてくれない。骨を復旧すると同時に、身体の中で破裂した血管の修復にまで気を使わなければならないのだ。この状況で更には後ろから襲い掛かる影人間たちの相手までしなければならぬとなれば　集中力が保て無い。

「先生、まだですか?!先輩が……助けに行かないと　ッ!」

「あと少し……あと少し……頑張れ、マルギッテ……頑張れ……ッ!」

由紀江の攻撃によって2匹程は撃破しているが、残った数は6匹。その内の2匹が此方に、4匹は百代の下へと殺到して居る。別段由紀江は心配する事など無いのだが、如何にも実体が無い相手と言う事で百代の腰は引けていた。

超人的な回復能力によって致命傷は負っていないが、このままではジリ貧になる。

そうなれば幾ら百代と言え

謙信の不安を現実に表す様に、影人間の攻撃が百代の肩を掠った。僅かばかりに漏れる血。

それを見やり、ただ歯噛みする事しか出来ない自分。

“力が欲しい”

もって純粹で、強力で、強く、逞しい力が欲しい。

幸せも要らない。

思い出も要らない。

だからこそ、恵んで欲しい。 ”もつと力を”

目の前に転がる、ストライプ柄の槍。

この中に渦巻く気を吸収すれば　もしかすれば　多少なりとも
の速度アップに繋がるかも知れない。助けたいから、救いたいから、
純粋な願いを込めて槍を掴み、その穂先を自らの腹へと向ける。躊
躇う事など無い、強くなれるのならば何だって取り込んでやる、何
だってやってやる。

この子たちを護ってやれるなら、死んだって構いやしない。
純粹過ぎる思い故の力なのか、ストライプの気は謙信の身体を侵食
して行く。

元々あつた透明で清々しい気を上書きする様に、黒く毒々しい赤の
気が謙信と言う存在を塗り替えて行く。

圧倒的だった。

清々しかった。

頭の中が一瞬でクリアになる瞬間、アドレナリンが分泌され過ぎれ
ば全ての動きがスローに見えると言うのが現実でそれを体験したのは
始めての事である。

自らの掌を見詰める腕の動きは遅く、拳を握り締める速度もそれに
比例して居る。

モヤモヤとした感覚全てを吹っ飛ばした様な爽快感。

想像を絶する快感を身体に受け、謙信の顔が　笑う。

「気分が良い……凄く、気分が良い」

ゆっくりと立ち上がった謙信が、仰々しく天井に空いた穴から空を仰ぐ。

神を追い求めた青年は遂に神をその身に宿したのだ。

ただ、その神が”真つ当な物か如何か”と言う話は別である。

既に身体の痣は消え、もう直ぐ意識すら回復させ様と言うマルギツテを捨て置き、上機嫌な謙信は百代の下へと向う。

鋭いストリートすら身体を軟体化させる事で回避する影人間を前にしても余裕すら漂わせる、何かが決定的に違う謙信の存在感。

「　　これは、良いね」

贅辞の言葉と同時に、謙信の身体が陽炎の如く揺らぐ。

それと同時に弾け飛ぶ2体の影人間。

ガリガリガリガリツと大きく何かを削る音と共に、またもや謙信はその姿を百代の前へと現した。足跡をクツキリ残すブレーキの跡。

黒く、線引きした様なブレーキ痕を残した謙信はと言えば、自らの身体を確かめる様に身体の先々へと視線を向けていた。

超高速移動。

百代ですら追い掛ける事がやっとの高速移動を行って尚、その身体は無傷。

気の消失？ そんな物、有りはしない。

身体が無限回路へと成り代わった様な感覚を感じて、謙信が薄く笑う。

「初陣にしては華が無いが、そこは我慢するとしますかねえ」

プール内を、激震が襲った。

跳躍の際に踏み込んだ謙信の居た筈の場所は大きく歪み、現在の謙信と言えば　奇声を上げながらプールの”天井”を走り回ってい

る。

あまりの衝撃にガラスが砕け、それが落下している事にすら気付いていなかった。

護るべき存在すら蔑ろにしたその行為に、流石の百代ですら驚愕に目を開く。

謙信ならば、有り得ない。

何事もスマートにこなし、人一倍面倒を嫌う男の筈であろう。その男が自らの力を証明する様に無差別に力を振るう？ 考えたくも無い事だった。

「モモ先輩!!」

「あ、あぁっ!!」

硝子降り頻る屋内プール。

何とかその破片を避けながらもマルギツテに肩を貸していた由紀江の悲鳴にも近い懇願の叫びを聞き、弾かれた様に百代は2人の下へと駆け寄った。

大分落ち着いてきたのだらうマルギツテも、幾分か辛そうではあるが何とか自らの足でプールサイドを歩いている。最早残された選択肢など、脱出以外何も無かった。

「屋外に逃げるぞ！ 此処はアイツに一任だ！」

「でも、今の南波先生は……ッ！」

「大丈夫だ」

不安そうに顔を曇らせる由紀江の頭をポンと叩き、朗らかな笑顔を向ける。

そこから漏れる自信。絶対的な確証。

それを見て、由紀江は理解した。百代が謙信の事を疑って居ないと。

アレ程までに暴れ狂う彼を信じて疑っては居ない、と。

「……分かりました、行きましょう！」

ならば自分も信じなくて如何すると言うのだろうか。

覚悟した様にマルギツテを強く担ぎ直す由紀江の姿を見て、百代は次いで言葉を紡いだ。

それに、と前置きした上での百代の台詞を聞いた由紀江の顔は笑っていただろう。

「アイツ、楽しそうだろ？ ……止めるのが可哀想でさ」

謙信一人の娯楽の為に屋内プールが吹き飛ぶと言うのは如何かと思うのだが、言い知れぬ安心感の様な物を抱いて 3人娘は戦線へと背を向ける。

後ろで暴れ狂う男が、正気に戻って来ると信じて。

そんな彼女たちの気持ちなどいざ知らず、謙信はコウモリのように天井から影人間を見下ろしている。

身を捻り、ツイストを決めながら数十mはあるつかと言う天井から華麗な着地を見せた謙信は自らが招いた破壊の惨状を見て、苦笑いを漏らすしかなかった。

幾ら気分が良かったとは言え、此処まで公共の施設を破壊する事は些か問題がある。

預金通帳の金で事足りるだろうか？ この場にあまり相応しく無い思考を頭の中に浮かべて、自分の前にウネウネと出現する影人間に向き直った。

「こうなったら、お前たちに八つ当たりだ」

ニイッと頬を吊り上げた謙信の身体が消える。

正確に言えば、足に集中させた気を放出する事で瞬間的な加速力を得ているのだが、今はそんな事すら如何でも良い。問題があすとなれば、このスタートダッシュにて更に屋内プールの被害を増やしていると言う事だろうか。

気弾をハンドボール程度の大きさに固定し、それを加速した力を含めた全力を持って影人間へと投げる。カーブもしなければ、ツイストもしない。ナックルでもスライダーでも無い有り触れたストレー

ト。ただ、それが持ち得る力は小型のナパーム弾の様な物である。

着弾と同時に炸裂、回避しようが次弾は既に装填されているので反撃の暇も与えない。

密度の濃い弾幕　　と言うよりも、”爆撃”とも言える破壊行為。

それを行っている謙信はと言えば標的にボールが当たらない事に渋い顔をして居た。

身体にはパワーが溢れているのだが、まだそれをコントロールする事が出来ていない。

だと言うのに、謙信はその事を非常に喜んで居た。

まだまだ修行の余地を残している、即ちまだまだ強くなる事が出来ると言うこと。

何と素晴らしいのだろうか。

あんな良く分からない気を食らっただけで、此処まで力が溢れるとは思いもしなかった。

最高に「ハイ」ってヤツである。

「避けるよ、ホラアツ！　負け犬みたいに走り回れ、屑が！！」

獰猛な笑みを携えた謙信の投げたナパーム気弾が影人間を前にして炸裂する。

点では無く、面。

生温い考えは捨てて、ただ”倒す”事のみ思考の比重を強く傾ければ後は非常に簡単だ。どうせ人では無い何かしらの物体、ならば遠慮せずに殴りに行ける。

それでも、今の謙信にはこの八つ当たりを終わらせるつもりは毛頭無い。

顕示欲、とも言えるそれが己の力を示せと訴えるのだ。

いつもならば軽く捻り潰す欲求の1つであったとしても、今の謙信にはそれに購える程の精神的余裕が無い。傍目から見れば余裕すら浮かべる謙信だが、その精神は最早限界一步手前の危機的な状況である。

力に溺れる、とはまさに今の彼に相応しい言葉だろう。

「……雑魚のクセに、雑魚のクセに、雑魚のクセに、雑魚のクセに
ッ！！」

南波謙信の温厚な部分。

そして、今まで隠し通して来た残忍な部分。

2つの激突によって、謙信の精神は限界に達しようとして居た。道徳を尊重する心、欲望を是とする心。相反する2つの精神の激突の果ては 暴発。

「オレの前に出て来るな、雑魚風情が！！」

右腕を横へと薙ぎ払い、全ての存在を否定する。

誰も前に立ち塞がって欲しくは無い。邪魔だから、全てが、何もか

もが。

全ての否定。

存在の拒絶。

その結末こそが、敵の殲滅。

赤と黒のコントラストが渦を巻き、右腕の動きにシンクロする様に謙信の眼前に広がる光景全てに絡み付いて行く。影人間だろうが、プールに付けられた時計だろうが、ビート板を置く棚だろうが、誰かが置き忘れたボールだろうが。

全てに接触すると同時にそれを分解、吸収する。

優しさを兼ね備えた南波流の武を操る彼の心の拮抗が崩れれば、それは武にすら影響を齎す事になる。その事を象徴する様に、謙信の前には1つの小さなボールがあった。

“吸収”と”再生”。

先程薙いだ存在を”再生”する事で生まれたボールには、確かに色々な物体の名残が見える。時計の針、ボールの皮、鉄の破片、赤黒い気。

吸収した物体を新たな物体として再構築する。正し、それらが全て綺麗な物体になるとは限らない。彼の精神を表す様な不安定なボールはやがて塵となって、青空へと溶け込んでいった。

此処に来て、南波謙信は確かに強くなっただろう。

今の謙信ならば百代との修行に頭を抱える事も無い。

何せ、強いからだから。

無論それにはデメリットも存在している。

その力は、あの清々しかった南波流をおぞましい新たな武へと変貌させた。

川神に住まう全ての武道家たちが、謙信の放つ異質な気に見張った。

薄気味の悪い、おぞましい”何か”。

正体の分からない何かに怯える武道家たちのトップに立つ翁である川神鉄心は1人、この気を持つ意味を理解する。

そして同時に、遂に時が訪れた事を悟った。

全ては川神院の為。

全ては百代の為。

そう昔から言い聞かせて来たと言うのに、今の鉄心の胸の内は重く暗い。

全ては覚悟していた事であった。

謙信を自らのお膝元へと引き取った瞬間から、幼子だった少年の中に渦を巻く酷く恐ろしい気と欲望を逸早く見抜いた鉄心だったが、それを危険視する事は無かったのだ。

人の持つ欲は、確かに強過ぎれば人を捻じ曲げる。

そう言った意味では師範代であった釈迦堂が良い例ではあるが、あの時、まだ幼子だった謙信の持つ欲は清々しく美しかった。

『強くなりたかよ』

子供ながらに鉄心に頭を下げる姿を瞼の裏で思い起こし、深い溜息を漏らす。

純粹だった欲求は最早、誰にも止められないエンジンとなった。

あとは其処へガソリンを入れるだけで、エンジンはフル稼働する。

急がねばならない。

南波謙信は、既に覚醒した。

ならば 誰よりも早く、鉄心自らの手で尻拭いをしなければならぬ。

誰かに要らぬ事を吹き込まれる前に。

あの力は最早、全ての武道家にとって天敵でしか無いのだから。

「為景……御主ならば、如何するかろう」

今は亡き、昔の男。

その男に付けられた古傷を擦り、鉄心は玉露へと手を伸ばした。

第卅拾參之卷「背負いし運命、乗り越えられぬ宿命」(前書き)

4 / 09 修正

第拾参之卷「背負いし運命、乗り越えられぬ宿命」

第拾参之卷「背負いし運命、乗り越えられぬ宿命」

「辰子、お前いい加減帰ってくれないか？ これ以上はオレが学園長に怒られちまう」

「……むにゃむにゃ」

ア、コイツブツコロシテー。

額に数本の青筋を浮かべて、龍二は手に持っていたボールペンを押し折った。

別に何の因果がある訳でも無く彼女を此処で休憩させて居る謙信であるが、近頃の辰子の暴虐非道な（ベッド侵略行為）には目を見張る物があるのだ。

Q・バイトの時以外、お前殆ど此処にいない？

A.....ZZZ

人の話も聞きやしねえ辰子のマイペースな一面は嫌いでは無いのだが、よくもまあこんな女が一家の家事を担う柱として君臨して居ると感心してしまう。考えられないでは無いか、いつも保健室でグース力と寝てばかり居る彼女が料理をしている姿など。

つい先日、謙信が原型すら留められない程までに破壊した屋内プール。

顔の広い鉄心が九鬼に話を付けてくれたらしく、大事には至らなかつたらしいがそれを差し引いても教師としては目に余る行為である。その為、鉄心は謙信に被害総額などを纏めた報告書を作成する様に指示。

いつもならば暇な保健室での時間を返上し、パソコンの前に渋い顔で座っているのだ。

全て自業自得とは言え、こうして自分が苦勞して居る後ろで誰かが幸福に浸かると言うのは納得出来るものではない。謙信、相当捻くれた男である。

ふと、目が疲れた謙信が思い起こした様にテーブルの上に置かれている一枚の写真へと目を向ける。子供の頃の風間ファミリーの写真、今も尚透明の額縁に入れられて大切そうに飾られるそれを軽く撫でて、謙信は懐かしむ様に目を閉じた。

竜舌蘭の下で撮った写真。

50年後もずっと友達　成長しようが、色褪せる事の無い約束。捻くれたクソガキだった自分が、唯一心を開いた少年少女たちとの思い出。

「あつ、ちつちやいケンちゃんだ〜」

「ぎゃああつ!!　っ、ビッ、ビックリした!　ビックリした!」

現在は 最強の保険医。

時が経てば、人は如何進化するのか分からない物である。辰子も開心 と言うよりも、純粹に子供の頃の謙信を愛でる様な表情ではあったが して居たが、その目がある一つの単語を捉えた。隅に書かれた、今は薄くなつたマジックでの一文。

『ずっと、いつしよに 』

最後の部分は文字が霞んで居たので読み取る事は出来なかつたが、この言葉に込められた思いは感じ取る事が出来る。

長らく続く友情を約束した決意ある一文だと解釈した辰子は写真入れを作業机へと戻すと、いつも通りベッドへとその身を潜り込ませた。

彼女は知らない事ではあるが、この文は長らく続く友情を約束するなどと言う簡単な物では無かつた。永遠の友情とはある意味で、永遠のパートナーと同義でもある。

なればこそ この写真の送り主は、謙信を人生の伴侶と認めただ。

未だ子供が交わした、遊びの様な”結婚”の約束。

それを信じて居る者はまだ心に無邪気な幼さを残していたとも知らずに、謙信は保健室から飛び出して屋上へとその足を向わせている。

何故自分がこの禍々しい気を取り込めたのか。

あの日、あの場所に現れた影人間は一体何だったのか。

何も分からぬまま、謙信は時をただ過ごす事になって居た。それでは納得が出来る筈も無く、自分の独力のみで色々な書物を読み耽った……が、結果は芳しく無い。

1つだけ、分かった事がある。
気には陰と陽がある。

一般的な者たちが持つ気は陽と呼び、心に闇を持つ者が操る特別な
気を陰と分別するらしい。その為、今謙信が操る事の出来る気は
陰と陽の2つ。

だが何故自分が陰の気を操る事が出来るのか？

それだけサツパリ理解が出来なかった。

左手から溢れる、暖かな光を溢れさせる陽の気。

右手から溢れる、毒々しい闇を覗かせる陰の気。

1つの身体に宿る2つの気。これは 最後には鉄心を頼るしか無
いだらう。

それに、陰の気もなるべく使わない様に心掛けなければならない。
陰の気とは人の持つ闇。

それを使い続けると言う事は、闇にその心を蝕まれると言う事に他
ならない。

気を使う人物 例えば、鉄心の毘沙門天は強大な”陽”の気を相
手に叩き付ける物だ。

だからこそ強力な一撃ではあるが、決して人を殺める為の物では無
い。

あくまでも”拳と拳”の真剣勝負の技だ。

だが、陰の気とは元々の使い方すら陽の気と異なる禁手の1つであ
る。人の身体を蝕み、その心をすら汚染する最悪の”闇”。

それを 今や自らの身体に宿している。

謙信にとっては、またもや悩みの種が増えてしまう現状だった。

振るえば絶大な力を持つ陰の気と、人を護るべく振るう陽の気。相

反する2つを1つの身体に宿した自分は一体何なのだろうか？

南波謙信の父と母は、一体何者だったのだろうか？

疑問は尽きる事無く増え続けている一方である。

「陰陽弾を食らえー！ うおっ、まぶしっ……」

アホらしく天高くに拳を突き上げ、爛々と輝く太陽に両の目が照らされる。

その眩しさに思わず怯み、両目を抑えてゴロゴロと屋上を転げまわった。

グルグル、ゴロゴロ。

回って、回って、それで何もかもが忘れられたのならば……

やがては回る事にも飽きて、ただボンヤリと空高く浮かび上がる太陽を見詰める。

由紀江に言われた自分の持つ『地上に落ちた太陽の様な気』、それは陽。

ならば 陰の気を見た人々は何と表現するのだろうか。

「……やっべ、仕事しねえと」

今思い出しましたと言わんばかりに飛び起きて、屋上に張られた飛び降り防止のフェンスを軽やかに飛び越える。そのまま空中で身体をツイストすると、クルクルと美しい弧を描きながら謙信の身体は地上へと吸い寄せられていった。

「南波先生ですか。随分と面白い人ですね、準」

「面白いっつうか、化物っつうか……強過ぎだろ、アレ。人間か？」

「川神鉄心にすら比肩する南波の継承者。フフッ、ますます興味深いですね」

そんな謙信の姿を、ふとした瞬間窓から覗いた者たちが居た。

葵冬馬。そして、先日ゲーセンにて謙信と凌ぎを削った井上準の名である。

ツイストしながら屋上から飛び降りた謙信の姿を見て、冬馬は興味深そうに眼鏡を押し上げ、準と言えばゲツソリとした表情だった。どうせ　冬馬の頼みで自分がアプローチを仕掛ける事になるのだ。ゲツソリするなと言う方が無理だと言うものである。

「チヨウチヨだー」

準と冬馬の後ろ。

同じく窓の外で曲芸を披露した謙信の姿を見たのは、彼らだけでは無かった。

榊原小雪、準と冬馬の親友たる人物。

正確に言えば、彼女が見ていたのは謙信では無く蝶だったが。

「チヨウチヨ」

朗らかな笑顔を浮かべる小雪は、窓から外を見やった。

眼下では、体育をして居たのである。ルー師範代の隣に飛び降りた謙信が、苦笑と共にその場を後にする姿が写っている。

それを見詰める事無く、宙を漂う蝶を見詰めて小雪は楽しそうに微笑んだ。

保健室にて一通りの仕事を終わらせた謙信は、予定表へとサラッと目を通す事にした。

この学園は異様に行事が多い。

例えば、体力測定　この学園では人間測定と言つと最近知つたが
が終わつても次にはGW、そして体育祭の取り決めの儀を行つてからの体育祭。

いや、取り決めの儀って何だよ。普通に投票とか優しそうな名前にしませんか、おじき？　などと聞いても結局一教師の意見など取り入れて貰える筈も無いのだろう。

それから期末考査を行い、修学旅行になる訳だ。

濃密なスケジュールに思わず頬が引き攣るが、川神に常識は通用しない。

つまり、非常識が常識。常識とは投げ捨てるもの。

それでも考えなければ、まともな生活も出来ない現在であつた。

「ゴールドデンウィーク……黄金週間……黄金体験……ゴールドエクスぺリエンス……」

特に用事も無いと言つのに、目先の休みについつい目をやっつてしまふのはクセなのか。

斜め上の方へと思考を転換させながら、今日も今日とてコンビニで買つて来た弁当をテーブルの上に広げて行く。

今日の謙信はパンを買わず、弁当だけで昼食を済ませる予定であつ

た。
その為にバリエーションも多く、見ている此方側が胸焼けする勢いである。

今日の来客予定者も、やはり百代。

それ以外のメンバーは、いつも訳の分からないタイミングで現れる他の来客たち。

大勢で囲む食卓と言うのは案外と楽しい物で、一人で食事するより万倍も有り難い物である。寂しく箸で弁当を突くよりは、誰かと軽やかな会話をしながら食事する方が箸の進みも良くなると言うもの。まあこの場合、謙信のみ食事代が嵩むのだが。

「南波先生、お客さんですよー？」

「お客さん？」

では早速食事に、そう構えていた謙信の行動は一時中断させられる事になった。

保健室のドアから顔を出す、事務員の女性。

彼女の口から語られる来客の言葉に、謙信は首を傾げながらも事務員の後を付いて行く。

何でも急用と言う事らしく、今直ぐに合いたいと言う事らしい。

誰だろうか？

九鬼の連中でなければ良いのだが……不安を織り交ぜた微妙な表情を携えて、昇降口から校庭へと出る。確かに、昇降口の段差に腰を降ろしている男性が居た。

あの人が来客だろうと適当な辺りを付けて、謙信は男性へと歩を向ける。

「よお、ケン」

「……」

振り向いた男性の顔が、彼がこの世界で最も嫌う男の顔で無ければ

謙信は笑顔を携えて、彼を保健室に通した事だろう。だが、今回の事は上手く運ばなかった。

男性の顔を見た瞬間、謙信の足に力が宿る。

零からの加速に伴う力量を持って、男の顔面へと蹴りを打ち込んだ。周りの切り裂きながら進む蹴り自体を先読みして居たとばかりに、男はポケットに両の手を突っ込んだまま昇降口から身を翻させる。突き進んだ空気の刃は、そのまま誰も居ない校庭に深い傷跡を残していた。

「釈迦堂オツ！！」

土煙の中を、謙信が突っ切る。

憎々しげに叫んだ相手の頭を握り潰す為に伸ばされた腕は、容易く払われ、応酬として飛んで来た蹴りが顔面を横合いから吹き飛ばす。身体が回転しながら校庭方面へと吹き飛び、両足を獣の様に踏ん張らせる事で何とかその衝撃を噛み締める事が出来ている様な状態だった。

口の端から滴る血を吐き出し、軽く首を慣らす。

あの程度が本気では無いと 両者共に理解して居るからこそ、軽いウォーミングアップをする様に男、釈迦堂は自らの拳を握ったり締めたりと繰り返し返しているのだ。

「おいおい、ケン。お前ももう少し加減って物を知りやがれよ」

ニヤリ、と嫌らしい笑みを浮かべる釈迦堂の姿を見た謙信の額に青筋が浮かぶ。

ホントに、ホントに、ホントに、ホントに、ホントに
謙信は釈迦堂が大嫌いだつた。川神院に居ると言うのに門下生たち
に対して劳いの言葉も掛けず、ただ暴力だけを振るう捻くれた武人
もう一度言う。

謙信は釈迦堂と言う人間の本質を、心の底から憎んでいる。

「黙れ、川神院の面汚しが！ 猶予すら与えずに潰してやる ツ
ッ！！！！」

纏った陽の気でリーチを伸ばした拳が釈迦堂へと向けられる。

普通ならば当たる筈も無い場所から放たれた拳だとしても、謙信の
気によって包まれたそれは既に常識を逸脱した物である。

不可視でありながら、当たれば痛覚を刺激する南波流の技の1つ。

それを釈迦堂と言う男は見るのでは無く、”感じる”事で避けてみ
せた。無論拳の数も1つや2つでは無い、数秒の間に数百と打ち込
まれた拳全てを、である。

「どうした、キレがねえぞ？」

「黙れっ！！」

先程までの一撃とは違い、威力を込めた渾身の拳。

身体を捻り、自らの体重と共に放たれようとした必殺の一撃はこの
場ではあまりにも遅く、そして温い。

今放つ、と言う瞬間に謙信の懐へと釈迦堂が現れ、顔面を右の拳が
襲う。

口から出る唾と、それに混じった血。

飛び掛けた意識を何とか繋ぎ止め、拳と打ち込もうとした時には謙
信の身体は大きく宙を舞っていた。腹を釈迦堂の両拳が滅多打ちし
たのである。

襲い来る吐き気を無理に押さえ込み、何とか笑う膝を立て直す物の
今の2人の間には、あまりにも力の差が開き過ぎていた。

本来の謙信ならば、釈迦堂と同等かそれ以上の力を発揮する事が可能である。

だが、直情的になれば拳とは読み易くなる物。

日々百代に謙信自身が伝えている様に、熱くなつた時の拳程に避け易い物は無いのだ。

「……ッッッ!!」

「お前、マジで如何しちまつた？ 南波だろ、無敵で美麗な南波流様だろおっ!!」

「つるせえ……」

「廃れたお家柄じゃ”拳も振るえません”って事かあ？」

「」

世界と自分がずれて行く感覚、此処に自分が居ない様な不可思議な浮遊感。

それを味わつた謙信は、自らの理性と言う手綱を自らの手で放棄した。

目の前に居る男が憎い。

憎い、憎くて堪らない、してやりたくて堪らない、す、す、

す、す

カチリ、と自らの中にある入れ物を入れ替える感覚。

どんどん自分が何処か仄暗い場所へと落ちて行く恐怖感。

それら全てに身を委ね、力を内から外へと押し出して行く。先程まで謙信の身の回りを包んでいた陽の気が上書きされて行く様に赤と

黒のストライプへと変わって行く。

自分の周りに浮かび上がっていたストライプの気を自らの腕で払い除け、謙信が陰の気を纏って姿を現した。

払い除けた気が漆黒の翼の様に空間に浮かび上がり、辺り一面を黒に染めて行く。

陰の気が持つ浸食作用。

周りの存在からも気を奪おうと自動で動く辺り、確かに性質は悪いだろう。

だが 目の前に居る男を倒すには、寧ろそれは有り難かった。気の配分に気を向ける事無く、武にのみ神経を集中出来る。

これならば、無我夢中で殴った感覚が分からなかったと言う事は無い。

自らの強い意思を持って、釈迦堂の顔面を渾身の力で殴り抜ける事が出来る。

「カツ消す…… ツツツツ……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ゴオツ！！

辺り一体を震撼させる燃え盛る気合。

大きく育つ、謙信の中の闇。

陰とは人の闇を表し、それが大きい程に力を増して行く。

ならば、今の謙信が纏う陰の気から察するに謙信の心には、どれだけ大きな闇が潜んでいるのだろうか。

それを知ってか、釈迦堂は目の前に佇む男に向かって狂気すら秘めた笑みを溢した。

策云々など、如何でも良いのだ。

謙信の過去が如何とか、今彼が自分の力に葛藤して居るとか、そんな些細な事は彼には関係など無い。

目の前にある戦いこそが全て。

身体を形成する物が全て闘争本能の様な男なのである、釈迦堂とは。

「良いねえっ、やれば出来るじゃねえか！ それでこそケンちゃんだぜ〜？」

「黙れ、ゴミ虫。不味そうな命だが……跡形も無く食い尽くしてやる」

謙信が陰の気を使い始めて、1分弱。

既に数え切れない程のクレーターを川神学園に残した2名の殴り合いは、尚も両者に傷を付ける事すら出来ずに拮抗状態を保ち続けている。

黒い残像と共にほぼ360度、フルスクリーンに放たれる謙信の連撃。その尽くを野生の勘と持ち前のセンスで回避し続ける釈迦堂を褒めるべきか。

それとも、その連撃を放とうと息切れすらしめない謙信を褒めるべきなのか。

寧ろ、この2名の戦いで壊れない校舎と言う建物を褒めるべきなのかもしれない。

ポケットから片腕を取り出し、徐に謙信へと歩を進める釈迦堂。

その釈迦堂の姿を尻目に、堂々と”食い尽くす”発言を口にする謙信。

最早この2名の戦いはホモサピエンスの男性最強決定戦と言っても差し支えは無い程に熱く、そして煮え滾っていた。

轟音に次ぐ、轟音。

周りを破壊し尽す超迷惑行為。

これが お互いに相手が気に入らないから行われた喧嘩だと知ったのならば、今やこの2名の対決を安全な校舎から見下ろして居る生徒たちは如何思うだろうか。

無論、その中には風間ファミリーの姿もあった。

完全に怒りの臨界点を突破し、たった1人の誰かに敵意をぶつける謙信の姿を見た事など有りはしない。赤黒く歪む気のオーラが、未熟なワン子にすら恐怖を与える。

プルプルと肩が己の意思に反して震え、その震えがやがては膝にも移動して行く。

「怖いよおつ、大和……お兄様が怖い……」

「あんなに怒った兄ちゃんを見るのは、俺様だって初めてだぜ……」

「如何にかして止められないの、大和！ このままじゃ学校ごとッ！」

モロの言葉は尤もである。

確かに、地球上最強人類の代表2名の戦いなどを直に食らえば建物は建物の形など保っている事すら不可能。幾ら頑丈な防波堤と言え、強大な波と言う自然の驚異を前にしては脆く、そして儂い物なのだ。もしもこの巨大な2つの波 謙信と釈迦堂 に対抗するのならば、それを防ぎ切るだけの防波堤 百代や鉄心 が必要となる。だが、百代はこの場には残念ながら居合わせてはいなかった。

いつもならば謙信が関わると呼んでも居ないのに現れると言うのに何故今回は？

そんな疑問が尽きない大和の答えは、至って単純な物。

「誰だ、お前」

「ケンちゃん、何処あ？」

……保健室でも、校庭と同じ様に女性最強を決定しようとして居たからである。

「行くぜ、ケンちゃああああんっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「薄気味悪い」

狂気に染まった笑みで謙信へと肉薄する釈迦堂と、それを迎え撃つ謙信。

2対の質量が校庭と言う狭い場所で炸裂する。

獣の本能を携えて、欲のままに暴れ狂う釈迦堂か。

人の道を外れ、修羅の道へと足を踏み入れた謙信か。

どちらかが、この勝負の支配者となる。引き分けなど有り得る筈も無い。

そうなり掛けた時、2名の間にか別々の質量を持った物が飛来した。巨大な何か ジャージに身を包んだ龍の子、ルー師範代である。

「ルー師範代!? 退いて下さい、奴はオレが ツ!!!」

「落ち着くネ、謙信! 此処で事を荒げる必要は無いヨ!」

ルー師範代が両の瞳にて謙信を射抜く。

あまりに強い眼力に一瞬疎む謙信だったが、それで易々と引き下がる男では無い。

ルー師範代を押し退けて尚、釈迦堂と戦おうとする事を選んだ謙信は

「がつ!?!」

突如として、その身体から力が抜けて行く。
ピクリとも動かなくなる謙信を尻目に、此度は釈迦堂がその頬を引き攣らせる。

「じじい、テメエ……義理とは言え、孫にも容赦がねえな」

釈迦堂の視線の先。

力無く倒れ伏そうとする謙信の身体を抱き止めた川神院最強の男、川神鉄心が佇んでいた。

最強の男がこの2人の闘争を止めに入る。

基本、決闘と言う荒事が許される川神学園でもある意味では異例の事態であるう。

だが ”孫” の為ならば、鉄心はその誇りすら喜んで捨て去る事が出来る男だ。縛られた校訓よりも、孫の誇りを護ろうとした。今回の件はそう言う事なのだろう。

「……釈迦堂」

「ケツ、この数相手じゃ分が悪いや。またチョツカイ出しに来るぜ、じじい。そんなに護りたきゃ ケンを確認しお守りしろよ」

狂気と闘争のみで形成された男は、最後にそれだけ告げて川神学園を後にする。

チラリと、一瞬謙信を振り返った釈迦堂の瞳に哀れみが込められていたのをルー師範代は決して見逃さなかったが。

「謙信、やはり……」

「このままでは謙信が自分で自分を食い殺してしまいマス。やっぱ

り……」

「ダメじゃ。謙信は決して見捨てん」

「しかし……ッ！」

「くどい……！……この子一人救えんで、何が武道家じゃ」

鉄心の胸の中で眠る謙信は、知りもしなかった。

自分の身体の中で何が起きているのか。

何故こんな身体になっているのか。

そして 南波流が背負った、長きに渡るあまりにも哀しき運命と宿命を。

第拾四之卷「慰安旅行・ふぁーすと」(前書き)

こちらが最新話です

第拾四之卷「慰安旅行・ふぁーすと」

第拾四之卷「慰安旅行ふぁーすと」

板垣亜巳はSM嬢である。

警察沙汰は、まだ無い。まだの部分が重要であるので、覚えて置く様に。

さて 如何してこうなったのだろうか。

・ステップ1

急に食べたくなった「うま 棒」を探しに外出

・ステップ2

ゲーセン前にて何故か天使に遭遇

・ステップ3

「亜巳姉が呼んでいる」と言う事で連行

目の前に座るこの板垣家の大黒柱である板垣亜巳を見詰め、謙信は

頬を引き攣らせた。

謙信の後方では辰子と天使が2人だけの世界を織り成している。必然的に、謙信と亜巳も2人だけの対談の様な格好になってしまったのはご愛嬌だ。

成る程、この状況の意味が全く分からん。

両手一杯に持っていた箸の「うま 棒コーンポタージュ味」は今では辰子と天使の両手一杯に掴まれており、謙信の食べる分など残される気すらしなかった。

ちくしょう、拉致だけじゃ無くして強奪もするのか。海賊か貴様ら。

警察を呼んでくれ、誰か。

いや、まあ、でも、どうせ警察なんて役に立たない訳ですね。

「お、お話って、何ですか……?」

「ああアンタには借りがあってねえ。それを返してやろうと思ったのさ」

「いやいやいやいやいや、SM嬢だろうアンタ。生憎と『ソツチ』の気は無い。

鞭で打つのも打たれるのも全然気持ち良く無いでしょう!? 痛い

よ、身体と心が!

大体何だ、拉致した拳句に借りを返すって。一昔前の不良か? 今時流行る訳が無い。

...

.....

.....

そうじゃねえよ!!

何だよ、オレが辰子と天使に何をした!?

お宅の妹さんは私の全力を持って丁重に扱い続けましたよ! 勤務時間だと言うのにベッドまで貸して、快適な休憩空間を作っていた

筈である。

だと言うのに世界は何と鬼畜外道。正直涙が枯れ果てそう怖い。ああそう言えば、返済方法は何ですか？ 拳ですか？ 足ですか？ 痛いのは勘弁な。

「何だい、そりゃ。折角旅行券があるからアンタを誘ってやること思っただけさ」

「え？ 普通のお礼？ 暴力による制裁じゃなくて？」

「壊して欲しいのかい？」

「いやいやいやいやいや、全力で遠慮します」

そうかい、などと残念そうに肩を竦める亜巳。

正直謙信の身体は傷が出来ても都合数秒で回復する超サンドバック向けなので亜巳の良い鞭打ち練習台にされちまうのである。

そうならなかったのは単に、謙信の運が飛び抜けて良かったのか。それとも前日に辰子が「ケンちゃんを苛めちゃダメだよ」と釘を刺して置いた事に直結するのか。恐らく後者だ、この手合いが出会ったばかりの野朗の話の聞いてくれる筈がねえのである。

「あー、えー……マジで？」

「マジだよ。何度も言わせるんじゃないよ、愚図」

ワオ、流石はSM界のサディスティックモンスターだぜ。

簡単に人の心をグチャグチャに壊して行きやがる。楽しいのか？ 嬉しいのか？ 弁償しろやチクショウ、オレの心は高いぞ。

それよか、辰子と天使の方が問題であった。教員の給金で自らの為

に買った「うま 棒」を食い尽くすつもりか。ポロポロ口からカスが零れています、キチンと拭きなさいね。お母さん後で掃除するのは嫌よ。

「それで……あの、出発日の方は……？」

「電話したらまた此処に来れば良いさ。行き先は心配するな、ただの旅館だから」

「ただの、旅館……？」

「ホラ、これ」

亜巳が無造作に突き出した紙切れには、見慣れない旅館の名前が書いてあった。

それをマジマジと見詰める謙信。暫し時を経て、謙信開口。

「超 高級 旅館 じゃないですか」

「そうなのかい？ まっ、別に良いさ」

とても教員の給金じゃ賄えない途轍も無い高級旅館の名が其処には連ねられていた。

だって、見てくれよ。概観に金箔が散りばめられているって……壁の一枚でも剥がして売り飛ばせば暫くは楽々と過ごせるのでは無いだろうか？

ああいや、そうじゃない、落ち着け、落ち着くんた。素数を数えて落ち着け、これには裏がある。見返りの無い親切程に後が怖い物は無いとおばあちゃんが言っていた様な気がする。三ツ星クラスの温泉旅行に無料で招待するアホがこの世界の何処に居るのだろうか。

そんな物は、道楽の類か余程の世間知らず程度であろう。

「ケンちゃんと温泉だー」

失敬、前述した人間グループにもう1つ追加。『天然』、と言う超常現象的な生物。

『うま 棒コーンポタージユ』を制覇したのか、次の『うま 棒チーズ』へと手を出していた辰子が嬉しそうに此方へ駆け寄って来るいや、駆け寄られても困るのだが……

あと口に『うま 棒』を咥えたままコツチに来ないで。零れるだけじゃなくて、何と言つか女の子が棒状のモノを口に咥えていると言うのは凄く卑猥なのだ。

それにしたって、正直此方は話に付いて行けて居ない件。

如何言う事なの？ 分かり易い説明プリーズ。

助けを求める様に謙信は天使へと視線を向ければ、天使は食べる手を一時的に止めて謙信へと視線を向けてくれる。話は聞いてくれるらしい。

「天使、オレにも分かり易く現状を教えてくれ」

「一泊二日の温泉旅行にGO、だろ」

「ですよねー」

簡潔に告げ、天使は咀嚼を再開。謙信は涙が大洪水。

良く言うだろう、『情けは人の為ならず』と。

あのことわざは良く『誰かに何かをしてあげても、その人の為にはならない』などと勘違いされている事が多いが、実際は『誰かに何かをしたら、その分だけ自分の下へも返って来る』と言う意味合いの方が強いのである。

そう言う話じゃ無い？ まあ聞いてくれ。

今まで謙信は辰子の面倒を昼間だけ見て来た。

主にベッドを提供するだけの事だったが、それにしても良く辰子に懐かれた物である。

それによつて天使とも知り合う事になる。よく2人からは板垣家の事を話に聞いて居たのだが、自分には何の関係も無いと思つていた人物たちの筈”だった”。

が、今日一緒に旅行へ行かないかと誘われた。

問題は此処だ。一緒に旅行へ『行かないか』。クエスチョンマークが無い、強制である。

あれー？

可笑しいない、選択肢何処で間違えたのかな。

具体的に言えばプールに行った辺りからオレの人生設計図が崩れ始めている気がする。

あの場で赤と黒のツートンカラーがオレの人生を改変したのだろう。主に悪い方向へ。取り込んだので摘出出来ない事が今でも強く悔やまれる。

「あー、いやー、でもー……」

「気に入らないのかい？」

是非ともご一緒させて頂きます。温泉楽しみだなー。

両目から流れ落ちる涙の量は宛らナイアガラ。涙で虹が出そうである。

わーい、と子供ながら騒ぐ辰子と此方に興味を示す事無く『うま棒』を貪り食う天使の2人を背に南波謙信のGWの予定は確定した。ワクワク、ドキドキ、SM嬢主催の温泉旅行。

日々の疲れを癒す為の温泉旅行が、何故か更に疲れを増加させる物になりそうである。

謙信は疲れた様に、やれやれと肩を竦める。

” なんとかなる”。

彼の心情がまさかこんな所で発揮するとは、彼本人ですら予測して居なかった事態だった。

それはとある2人の出会い。

少年は少女を見た瞬間、言い知れぬ感情を胸に抱いた。

草原を駆け抜ける風のように、夜空に煌く星の様に。

不可思議で不確定でそれが何なのかも分からない様な存在に彼は心を奪われた。

眠る少女は白雪姫、ならば自分は……小人ホビットが似合いだろうか。

今まで彼の周りに居たどんな者たちとも違う、サラリとした気配が心地良い。

芝生の上で気持ち良さそうに眠る少女の隣に少年は自然と腰を降ろした。

『 気持ち良さそうだな 』

顔を上げた少女は、此方を見下ろす男を見た。彼女の欲しがっていた可愛い弟、と言う存在とは少し違う筈なのに、その無垢ながらも鋭き瞳に心を奪われていた。今まで出会ったどんな男とも違う、根本的な差異は 少年の笑み。心の底を救う様な朗らかな微笑みは少女の胸に、安心と言う安定剤を分け与える。

『一緒に如何かなー？』

『残念、今から仕事だ』

本当に残念そうに苦笑を浮かべ、少年は腰を上げる。また出会える様な気がする。両者共に、お互いが惹かれ合う様な運命を感じていた。

『お前さん、名前は？』

『板垣辰子。そっちは……？』

『南波謙信だ。川神学園の保険医』

それは優しき世界、晴れやかな陽射しの下で行われた運命の出会い。2人の絆が生まれた、縁の苗^{ゆかり}。

寮に帰宅すると同時に、謙信はふとある事を思い出した。

結局『うま 棒』は全て板垣家の方々に略奪されちまった訳である。酷い話だ。

いや分かっているだろう。こう言う場面こそ素数を数えるべきシーンなのだ。

2、3、5、7、11、13、17、19、23、29、31、37、41、43……

素数は自分の数と1でしか割れない孤独な数字

47、53、59、61、71、73、79、83、89、97、101、103……

いつでもボクに元気をくれる。

「ハッ!? 103の次は……109?」

「いや、107でしょ」

「ぬおおおっ!? ヤ、ヤマ坊か……驚かせやがる。冷や汗物だぜ」

食堂にて独り次の素数を考えていた筈の謙信の隣に、ヒョッコリと大和が顔を覗かせる。

何と言ううステルス機能だろうか。此方が神父ごっこをして居る隙にはと言え、こんな距離まで気付かれる事無く進んで来られるとは貴様忍者か。流石忍者だ、忍者汚い。

「オレよりも兄さんの方が忍者らしいよ」

謙信が忍者？

いやいや、今までの謙信の闘い方を振り返ってみれば良く分かるだろう。分身も窃盗もしないの。回避率も限り無く0に近え。これで忍者？ 笑えるぜ、チクシヨウが。

忍者よりもヒーラーとかナイトとか、限り無くその辺りが適任だと思っただ。

後方支援は嫌いじゃ無いし。護りに徹するのも得意な方である。

流石は光り輝く騎士様。凄いなー、憧れちゃうなー。

「まっ、冗談は此処までにして置いて　オレに何か話があるのか？」

「！……分かる？」

「辛うじて、だけど。お前の様子がいつもと違うくらいだけなら」

「兄さん……」

大和。そんな感動した瞳で此方を見詰めても何の得にもならないのだ。

それと男にそんな視線を向けられた所で謙信は真つ当な男の子、トキメキもしない。

- 苦笑いで頬を掻く謙信を前に、何故か1人で納得し始める大和。いや、待てと。1人で解決しちまったらオレの立つ瀬が無いでしよう、と。

それでもまあ目の前の友人の悩みが1つ解決出来たのなら良いかと今を楽観視。

大和は謙信に懐いている。

これは周知の事実であるが、親しい人物だからこそ”切り出せない話題”と言う物があるのだ。相手は”それ”を覚えていないのであればわざわざ摘出する事も無いのでは無いか？

大和はふと、そう考えてみた。

これは自分が謙信に対して嫌われると言う事を恐れているのでは無く、ただ単純に話す必要の無い話だと自身の記憶や思いを改変したのだ。重要な話を如何でも良い話へと。

「そう言えばさ、兄さんゴールデンウィークに予定入れた？」

ならば如何でも良い話に時間を割く必要など何処にあるのだろうか？直ぐ様、大和にとつて目の前に控えているゴールデンウィークと言う長期の休暇へと話題を向けた。折角の長期休暇ならば、久しぶりに日本に帰って来た兄さんと仲間たちと旅行へでも行くのも悪く無いかも知れない。そう考え付いたのだ。

「予定？ …… ああ、うん。凄く悲しいけど、これって現実なのよね」

それに対する謙信の返事、以外に冷淡。

大和から明らかに視線を逸らせて、ブツブツと独り言を経文の如く唱え続ける。

想像してみれば良い。SM嬢に扱き使われる温泉旅行、これが楽しいだろうか？ 一部の歪んだ性癖を持つ野朗共から見れば大金積んでも行きたいシチュエーションかも知れない。が、此処で問題なのは謙信が至極一般的で初心な青年であると言う事であろう。

SM？ 鞭打ち？ 蝋燭攻め？ 三角木馬？ 拷問ですか、何それ怖い。

当たり前と言う現実が今では凄く恋しい物に思える。武道の道を進むと決めた時から常識からはきつと逸脱するとは分かっていたが、それにしたって酷い話である。

「なあ大和。凄く怖いお姉さんに怒られない様にするには如何すれば良い？」

「え？ そりゃ……模範生の様に振舞うか、その人に出会わないかの二択じゃない？」

「ダメだ、それ。両方却下、常識なんて投げ捨てて考えてくれ」

高級旅館へ泊まりに行く代償が僕仆となる事だと言うのであれば、それは謙信が最も恐ろしいと思う行為の1つ。心を”壊す”だけでは無く、その後には”従える”のだ。

ある意味では拷問の類に長けている亜巳だからこそ出来得る技能とも言える。

まあその対象にされちまうのであれば堪った物じゃねえが。

「……だったら、その人の前ではいつも低頭とか」

「それって下僕の類だろ？」

「でも、兄さんの場合って心は折れないでしょ？ 昔からそうだったし」

ニコリ、と暗黒スマイル。

ああ我が弟分ながらも大和の浮かべる黒い微笑は幾つになっても恐ろしい物がある。

昔から大和は子供と言う類から抜け出していた存在だった様に記憶し

ていた。『出来る・出来ない』では無く、『やるか・やらないか』
と言った思考には幾度も驚かされた。

大人から見れば可愛くない子供と思われるのかも知れないが、同い
年の子供たちから見れば確かに”軍師大和”と言う存在は定着する
様に思える。

成る程。つまり大和くんは超絶エリートボーイだった訳ですね。頭
が良いって懂れる。

だが、そんなエリートにも『怖いお姉さん対策』は出来ないそう
です。

そりゃそうか。毎日百代と言う『怖いお姉さん筆頭』に絡まれる大
和からすれば最も苦手とする類の出来事なのかも知れない。

教訓。そう言った類に常識や頭脳プレイは通用しない。当たって砕
ける、終わり。

謙信の場合は当たって砕けて、鞭で打たれて、蠟燭で苛められる気
がするけれど

変わりやしねえのだ。どうせ未来は変わらない。

今は高級旅館に泊まれると言う幸運を噛み締めよう、そうしよう。

「んじゃー、オレ戻るわ。クリスティアーネに『うま 棒買って来
る』って言ったきりだったからさ」

「兄さんの行動原理が時々キャップよりも分からないよ……」

「衝動だ、衝動。『動かなきゃ』って行動理念つつうの？ そう言
うのはシヨウと一緒に」

まあ此処で違いが出るとすれば『かき氷が食べたい』と言う理念が
あった場合に、キャップならば氷山に向かう。謙信ならばコンビニ
でかき氷を買って食べる。

つまり、理念に対するエネルギーが違い過ぎるのだ。だからこそ『氷山に向かう』と『コンビニに向かう』と言う差異が生じる事になる。

正直者は馬鹿を見る、が度を越えた正直者は馬鹿を見た事にすら気が付かない。

そう言う例文で、取り敢えず話を締め括ろうと思う。

「ただいま」

クリスと兼用する謙信の部屋。

相変わらず背徳感が自らを襲うが、もう此処まで来れば知ったことしちゃねえのである。

真面目に日々をコツコツと生きている謙信に隙は無かった。多分。四六時中寮を見張っている気配を感じるが、これも気のせいだろう。多分。

だが”うっかり”手を出してしまえば、その手が掻き消える事は確定的に明らかだった。

さて。

ブルーな謙信とは別に、クリスはお気に入りのぬいぐるみを抱きかかえたまま謙信を出迎えた。武士娘の筈だが何ともファンシーな趣味を持っていると思うが、それも何処か女の子らしくクリスの魅力を高めている。学園の友人が此処に来れば、そのギャップに驚くのではないだろうか？

出迎えられた謙信は微笑を浮かべてクリスの頭をポンポンと撫でる。時々ワン子やクリスの頭を撫でる時、オレは飼い主か？ と疑問に思う瞬間があるのだが、最早頑張った子の頭を撫でると言う行動が染み付いているので治そうにも治せない。

この行為で怒る奴は今の所居ないのだが、こう言うクセも修正したいと思う。

ホラ、社会に出て人を撫でるクセが付いているなんて可笑しいだろう？ 教師と言うのは真つ当な常識人を突き進まなければならぬのに プール破壊の一件で既に常識と言う単語はデストロイしているが 自らその枷を作っているなど笑えない。

でも、クリスにとっては逆にお兄ちゃんに褒めて貰えるから嬉しいらしいけれども。

そんな事あ、知らないのである。

「謙信、『うま 棒』は買って来られたのか？」

「ん？ ん〜……お気に入りの味が見付からなくて諦めたよ」

流石に『板垣さん家ちに全部食われたよ』と言う訳にもいかず、少々不自然な言動になったかも知れないが何とか誤魔化す為に嘘を吐く。こう言う時、大和の様に機転を利かせる事が出来れば、と凄く思う。でも大和は大和でオレはオレなので絶対に無理だろう。嘘偽りで塗り固められた言葉を口から吐露する事など正直者で優しいお兄ちゃ

んには出来ないのだ。

……出来ないのだ。

「……………そうか。残念だったな」

シユンツ、と頂垂れるクリ子。何故だか自分は今とても犬や猫の類を飼っている様な気分になって来た。確か出掛ける直前にクリスは『うま 棒』に興味津々だった事を覚えている。つまり『うま 棒』を食べたかったのか？

コーンポタージュ味やチーズ味の『うま 棒』を？

……………フランク中将に頼めば幾らでも沸いて出て来る気がするのだが、それも野暮か。

何か無いだろうかと自分のポケットを弄っていると、自らの左ポケットに棒状の何かが1つだけ入っている事に気付いた。

このポケットへ何か入れた記憶は全く無いのだが、入っているのだからそれを引き出す。

『うま 棒 チーズ味』

……………辰子の奴がやってくれた。

何とも嬉しい事をしてくれる奴だろうか。まさか駆け寄って来た一瞬の内に左ポケットへチーズ味を隠し入れて居たとは思ひもしなかった。流石は板垣家最強の次女、その才能はやはり格が違ったと言う事なのか。恐ろしい限りだ。敵じゃなくて良かった、本当に。

「そう言えば1本だけあったな。食べるかい、クリステイアーネ」

「1本？ 1本だけならばそれは謙信の物だ。自分は我慢出来る」

「いやいや、我慢は身体に良くないから。それじゃ、これを半分にしよう」

ポキッと袋から剥き出された『うま 棒』はアツサリ折れる。

片方をクリスの口の前に持って行くと、クリスは恥かし気ではありながらもオズオズと『うま 棒』を口に含んだ。いやー、卑猥。凄く卑猥。

こんな事をして居る自分が変態に思えて来た。

「ん……おいし」

ハムスターみたいに食べるな、等とは口が裂けても言えない。

クリスは可愛い物は好きだろうが、自分が可愛い物に例えられる事は慣れていないだろう。ハムスターみたいななんて比喻も、彼女にとつては侮辱へと変わる。

説明すれば分かってくれるから特に慌てる事も無いのだが。

「わ、私はハムスターでは無いぞ！」

おおっと。口が滑っていたか。

だが慌てる事は何も無いのだ。正直な感想を口に出して言えば、何の問題も無い。

ああだからこそクリスは真っ直ぐな良い子なのだ。良い子過ぎるのは如何かと思う時もあるが、その真っ直ぐな姿勢は好感が持てる。たまにだが、フランク中將の気持ち分かる時があるのだ。確かに彼女の様な可愛い娘ならば過保護になっても仕方ないのでは無いかと。

だからと言って軍隊を引き連れて良い事にはならないがね！！

「はっはっは、クリスティアーネは可愛いなー」

「なっ！？ コ、コラ、謙信！ 頭を撫で……うううっ！」

グルグルと腕を振り回すクリスの攻撃を避けながら、謙信は楽しそうに笑った。

本当に楽しかったのだ。

仲間が居て、友人が増えて、少しばかりイザコザがあっても 明日が来る。

大手を振って笑顔でバイバイを言えるから。

自分の中で何かが決定的に変わって行くとしても、謙信は今が楽しかった。

今が楽しいからこそ、人は未来を見据えない。未来を見なければ、準備を怠る事になる。

それはやがて、己や仲間を傷付ける刃に変貌するとも知らずに。

南波謙信は今日も生きている。

“今”を、生きている。

「じじい、1つだけ教える。南波の武は本当に”癒し特化”の家系なのか？」

川神院の道場。そこで瞑想を続けていた鉄心へ、百代が詰め寄っていた。

話の内容は南波の武について。

南波流 妻の死に際、無力だった自分を嘆き鍛え上げられた癒しの極意。

だが、それを継承する謙信の武は癒しの対極に位置する物と言える。創造と破壊、再生と再構築。

これだけ見れば、南波謙信は神の手とも言える才能を持っているだろう。

だが、あの赤と黒の気だけは違う。

異質過ぎる。一言で例えるのなら邪悪。巨悪の根源。混沌。ハッキリ言い切れるのは、あんな物は人の持つべき物では無いと言う事だけだ。

だが謙信はアレを取り込み、尚且つ適応した。

何故？ それがあの日、プールの一件から百代の脳裏に深く埋め付けられていたのだ。

「謙信の事は御主には関係の無い事じゃ」

「兄貴の事情を妹が知っちゃ悪いのか？ 家族の心配をしちゃ悪いのか？」

「……御主と謙信は実の家族では無かるっ」

「10年も一緒に居れば家族も同然だろうが!!」

百代の怒鳴り声に動じる事も無く、鉄心は百代へと視線を向けた。高齡の翁おきな。だがその強さは未だに衰えを知る事無く、天上へと向かい続ける。

百代も、それに負けまいと強く睨み返していた。

「百代、良く聞け。謙信は最早誰にも如何する事も出来ん、待つのがじゃ」

鉄心はそれだけ告げて、早々と道場を後にする。

勿論百代はそれを追い掛けようと考えたが、どれだけ詰め寄ろうが鉄心は百代にこれ以上口を割る事は絶対に無いと断言出来た。

これから先に起こる事は全て謙信が自ら解決すべき問題であり、そこに誰かが介入して良い訳が無い。鉄心はつまり、そう言いたいのだ。

それがどれだけ高く険しい山だろうと鉄心は謙信にそれを独りで上れと命じ、謙信はその頂上が何処にあるのか如何かも分からぬまま上り続けるしか無い。

何と言つ、孤独。

「……バカが」

今も尚、一人で背負い込むバカな兄貴の面を思い浮かべて、百代は力強く拳を握る。

多分 本人が誰よりも自分の変化を理解し、そして順応しているだろう。

もしも”染まれば”、百代の知る謙信は二度と彼女の前へと姿を現す事は無い。

ならば自分に何が出来るか。

ただ闇雲に、百代もその答えを探し続けることしか出来ない。それ

が今の彼女にとっては非常に歯痒いことだった。

南波謙信は武道家だ。

凄く強い。百代とタイムン出来るレベル程度には強い。

ただし百代の様に強い相手に飢えている訳では無く、「決闘？ 何それ面倒臭い、代打用意」と言った具合で相手をしてくれないのだ。ルー師範代と一戦交えた日から、実は謙信へ挑戦を挑む武道家が後を絶えない。

本人たちからすれば鉄心と戦う為に倒さなければならぬ百代と戦う為の練習台程度の気持ちで挑んでいるのだから、謙信からすれば良い迷惑であった。

「川神院から腕利きの医師が来ますから、その指示に従う様に」

今日もまた、謙信の拳の前に1人倒れ伏す。

顔面陥没。全治何週間だろうか？ どちらにせよ、南無阿弥陀仏で
ご愁傷様。

川原で大の字に寝そべる男を見て、嘆息する事しか出来なかった。日付を重ねる事に増える武道家。

近頃は謙信目当てで川神に来訪する者も少なくは無い始末。

しかも、断る事が出来ないと言うオマケまで付く始末である。酷い世の中になった。

そんな三下の奴等を片っ端から千切っては投げ、千切っては投げと繰り返していれば当然疲労と言う物は勝手に身体へと蓄積される物であろう。

現在南波謙信19歳、自身の身体の限界へと挑戦している真つ最中である。

「…………温泉かぁ」

と、言う訳で現在私の心は湯船の中へとプラグイン。

熱いお湯に肩まで浸かって日々の疲れを癒し、風呂上りには冷えた牛乳でも飲んでマッサージチェアにでも座りたいのである。あ、マッサージチェア欲しい。買おうかな？

などと思案している内に、いつの間にか場所は寮。

温泉旅行に必要ななるだろうと言う事で手提げを購入しに外へ出た帰り道、よく分からない武道家の方に挑戦を受けたと言う事になる。面倒ってレベルじゃねえ。

レベル上げて物理で殴ってやろうか？ プロテスですね、すみません。

「ただいま帰りました、麗子さん」

「お帰り、謙信ちゃん。ポストに謙信ちゃん宛ての手紙があったわよ」

帰ると同時にいつも通り、寮母の麗子さんへと挨拶。

元気な声が返つて来ると同時に、謙信は食堂のテーブルの上へと置いてあつた手紙を手にとつた。差出人が書いていない怪しげな手紙、これ、開いた瞬間に中から虫とか沸いて出ないだろうか？ もしくは一氣に自分以外の周りの時間が消し飛ばされるとか……流石にそれは無いが。

ありがとうございます、と麗子さんへと挨拶をした謙信はそのまま自室へと上がって行く。

ビリビリ

ガサガサ

封筒の中には紙一枚。

可愛い文字で『温泉旅行の準備物』と書かれて折、手紙の内容は確かに温泉旅行で必要になるだろう物が書き連ねてあつた。

しかし、着替えの類は分かるが愛用の枕って何だろうか？ 別に旅館に枕はあるだろうに。

それだと眠れないだろうから愛用している枕を持って来い、と。いやいやいやいや。そこまで眠ると言う行為に真摯な態度で挑めませんよ。

つうかコレの差出人辰子だろ!?

アイツ旅館先でも眠り続けるつもりか！ 三年寝太郎か、逸話になれよ!!!

と言う訳で南波謙信ですが、私は元気です。

ゴールデンウィーク初日から少しばかり 慰安旅行へ行つて来たいと思います。

第拾四之卷「慰安旅行・ふぁーすと」(後書き)

GW 編開幕話

第拾伍之卷「慰安旅行・せかんど」(前書き)

吉拾五話です

第拾伍之巻「慰安旅行・せかんど」

第拾伍話「慰安旅行・せかんど」

奇襲は唐突だからこそ成功するのだ。

唐突じゃない奇襲なんて奇襲じゃない。特攻とか突進の類でしょう、多分だけれど。

で、何でこんな話を始めたのか自分でも分からないが……

ああそうだった。

オレも奇襲された訳だ。突然目の前に人が居るとビックリするね、年甲斐も無く腰が抜けそうになったよ。まだまだ若い筈だけどねえ。

え？ 誰が目の前に居たのか？

そりゃ彼女しか居ないでしょう。

「旅行ねえ……いや、でも、オレ予定あるし……」

「何だよ、齒切れ悪いな。そんなのキャンセルで良いだろ」

「いや、奴さんやういからの誘いでね。それにホイホイ釣られたオレも悪いが」

島津寮の縁側。

そこで洗濯竿をグルグル振り回していた謙信の姿を退屈そうに見やりながら、百代が語る。何でも長期休暇だから旅行に行くらしい。で、風間ファミリーも行く訳だからテメエも来いと。ハツハツハ。残念だったな、モモ。オレには既に高級旅館な明日が待っているぜ。

「つうか何で旅行だよ。この時期に。あつ、いや、この時期だからこそ？」

「旅行する度に理由考えなきゃダメなのか、お前」

滅相も無い。

そんなクソ面倒な時代背景ならば、旅行会社はとっくの昔に店を畳んでいる。ただ謙信の言いたい事は単純明快であり、何故『オレを旅行に誘うのか』と言う事なのだ。

ラッキーの裏に隠れるアンラッキー！。

幸福の裏には不幸あり。人の不幸は蜜の味とはよく言った物である。メシウマ。

「裏の無い善意って怖くねえ？ 寧ろ善人過ぎて気色悪い」

「昔のお前がモロそれだろ。世界中回って人助け」

「貰う物は確り貰いましたよ。金なり食い物なり。こっちもボラン
ティアじゃねえし」

頭上で洗濯竿が大回転。

最早これは竿では無い、立派な凶器である。ギョングюн回転する
人力のこぎり。

触れる物なら何でも壊すが、触れたら最後で竿も壊れる諸刃の剣。
自主練には丁度良いが、自主練じゃなきゃ使えない。使えば壊れる
なんて効率が悪過ぎる。だったら拳や足の方が何倍も良い。寧ろ、
そっちの方が強い。

拳は自分の思う通り寸分狂わず、寸分違わずの位置とタイミングで
肉薄する。

が、武器はダメ。アレは使おうと思っただけからの時差が生じる。実戦
では致命的だ。

信じられるのは己の身体のみ。何処の拳法家だよ！ってね。拳法家
ですけれど。

つまり何が言いたいかって言うと、オレは旅行に行けない訳ですよ。

「本当は何で旅行なんて企画した？ お前ならもつと明確な理由が
あるだろ」

「ホントにないよ。ただ旅行に行きたかっただけだ」

暫しの沈黙。

人力のこぎりと化していた洗濯竿の回転を止め、縁側に座る百代を
見詰める。

いつもと変わらず、退屈そうに頬杖を付く彼女を見て 何かが違う
うと一瞬で悟った。長い事一緒に居ると相手の表情1つ処か挙動1
つで相手の事を理解しちまうから怖い。

迂闊に何か考えられないではないか。

向こうから見たとしてもそれは分かりきっている筈のことである。当てて見る、ということなのだろうか。今の心情を当てっこしようゲームの様な。面倒臭いだけだ。却下。

「……それよりも1つだけ良いか」

「ん〜？」

「オレの勘違いじゃなきゃ、マルギツテが居なかったか？」

話題の方向転換。360度回転して向き直ったら別の話題。

次の議題はマルギツテさんの来訪について。99.99999999%クリス関連と言う事は分かっている。此方が聞きたいのは何故マルギツテが出陣したのかと言う理由。

またバカ共が激突したのだろうか。

そうになると、結構大和たちが危ない？ ……いやいや、マルギツテは殲べき処は確り殲るタイプの規律に忠実な軍人である。民間人に危害を加える事は……ない、かな？

ああ〜 如何して空はこんなにも青いのか。

この空みたいに清々しく悩みも無く生きて行きたかった。もう無理だけどさ。

「居たな」

モモが笑いながら解答する。

ああそうですか、そうですね。お前はマルギツテとガチバトル繰り広げたいだけなのね。だから此処でこうしてオレと時間を潰している。

頼杖つきながら何をするかと思いきや、ただの時間つぶしかそうですか。死ね。

島津寮の中で気の波長が変わる。

それはマルギツテが動いたことを指し示し、結果としてはモモのスタートを表す。

つまりオレ受難開始。南波謙信の憂鬱、みたいな人生観。

絶望的ですね。

今から始まる怪獣大決戦に巻き込まれることになるのだから世話がねえぜ。

出来ることならば最後にお気入りのクリーム餡蜜を食べたかった。だが悲しきかな。神様の戯れはオレに対してだけ死球オンリー。選球もクソも無くDEAD。そんな人生で大丈夫か？

大丈夫じゃない、大問題だ。死にたくない。幸せなまま旅行に赴きたい。

「暴れたら怒るぞ」

「だったら止めてみせろ、”お兄ちゃん”」

…

…

…

……………このクソガキ。

皮肉たつぷりのお兄ちゃんという言葉に頬を思い切り引き攣らせ、スキップ混ざりで嬉しそうに大和の部屋へと向かうモモを見送るしかない人生のオレ。

デンジャラス・ザ・ライフ。

酷い扱いにはもう慣れた。だからオレが言いたい事はただ1つのみ。神様。アンタを信じた事は1度も無いが1つだけ願う。

頼むから、モモを止めてくれ。

大和の部屋で行われているモモとマルギツテの対談は音声のみでお楽しみ下さい。

ドガンッ！

バキヤーンッ！

バキバキバキバキ、ドドドドドッ！

ビシビシビシビシッ！ ガガガガガガガガッ！！

ズゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！！！

バリーンッ！！ バッ！！

キンコンカーン、島津寮完全破壊のお知らせ。

両の目から流れるのは涙？ それとも汗？ どちらにせよ、留まる事をしらない。

酷い話だ。いや、酷い”世界”だ。

何でモモがオレの妹になってしまうのか……ワン子を見ならっ
てダメでした。

あの子たちは2人揃ってバリバリの武道派だ。穏健派って知らない
のだろうか。

知らないだろうな、戦うこと大好きだから。

強過ぎるって寂しいからね。強い奴を見つけると飛び付きたくなっ
ちやう。

あーあー、発情期の犬ですかチクシヨウ共。

絶対にアイツら麗子さんに怒られるだろうねー。オレも監督不届き
でとばっちり食うかもねー、怖いなー、嫌だなー。

「止めるか……」

どこらせ、とおじさんスタイル。

縁側でのんびりSM嬢に苛められるまでの気力回復を狙っていたの

だが、如何やらそれも無駄であろう。酷い酷い。何が酷いって周りが武道家の女の子って言うのが酷い。
ネガティブに考える事はせず、常にポジティブで突き進んできたつもりだった。がそれも結局は無駄な訳でした。無駄無駄。

「トンファーキック！」

「よっ！」

「ん？」

無駄と言えども一つ。

オレは立ち上がらなくても良かったらしい。寧ろ、立ち上がらない方が良かった。

薄い戸一枚の向こうから聞こえる懐かしい技の名。

それを回避したのだろう百代の声。

そして、『戸を突き破るマルギツテの蹴り』を見て疑問の声を上げるこの私。

「げぶらあっ!?!」

タイムなし、待たなしで放たれた蹴りは見事に謙信の顔面を抉る。奇怪な奇声と共に弧を描く身体。

何が起こったかも理解出来ずに飛ぶボディ。ごめん、お前にはいつも迷惑を掛けるね。

空中で態勢を整えて何とか着地。

目の前ではオレに蹴りを入れたことにすら気付かないマルギツテとモモが楽しそうに戦闘続行。蹴られ損ですか、そうですか。

「兄さん、大丈夫!?!」

「おお〜 ヤマ坊。オレに話しかける前にアレ止めて来いや」

「いやいやいやいや、無理だよね!? あれ巻き込まれるよね!」

「根性論100%のお前なら出来るぜ、ヤマ坊」

「が、頑張ってください! 大和さん!」

「ええええええっ!? 普通は兄さんが身体を張って止めるシーンでしょ!」

「身体を張る……良いね」

「自重しろや、京。まゆちゃん、アレ止められるか?」

「え!?! お、恐れ多くも私がお2人の戦いに介入するなんて……」

『頑張れ、南波ティーチャー。ティーチャーの勇気が世界を救うと信じて!』

「結局オレか……」

頭が痛い話だ。

何で強い奴を見ると殴りかからなきゃいられないのだろうか。車かお前は。急に止まれないのか。アクセルを踏むなと言ってある訳じや無い。ブレーキを踏む努力をしろと言う事なのだが……アイツには何を言っても無駄だろう。

頑張れ、オレ。

出来るぞ。出来る。

頑張れ頑張れ出来る出来る絶対に出来るから頑張れ頑張れそこで諦めるなそこで。

もつと熱くなれよおおっ！！ いやいや、無理。もう無理。

ガタ下がりのテンションと、タダ下がりのモチベーション。もう0のライフ。

おのれ、蟲野朗。

オレのライフは一体何処だ。オレの常識を返すまで殴るのをやめないぞー。

「あー、はいはい。そこまで。お兄さんの言う事を聞きなさいねー」
だらけ切った声と、ヤル気の無い声量。

南波謙信がストッパーとして此処に降臨。これで止まる！？
これで終わる！？

いやいや、効果は期待するなって。

か

しっ。

「あー、はいはい。そこまで。お兄さんの言う事を聞きなさいねー」

面倒臭そうに、謙信は頭を掻きながら私とマルギツテの間に立つ。

その姿は一見無防備で、殴り掛ければ押し倒せそうな程に隙だらけだと言うのに両者共に動く事は適わない。気の放出による両者の動き牽制。然るべき処置は力による鎮圧。

この2名を相手にしてでも尚、南波謙信は戦う道を選んだ。

本能的な部分で親身な者同士の戦いを嫌っているのだ。

親しい者同士が戦うなど、有り得てはならない現実。それがこんな平和な川神市であるのなら尚のこと止めなければならぬ。

親が死に、兄と弟が土地を巡って殺し合う。

財産を残して死んだ夫の遺産を巡り、仲の良かった親族たちが睨み合う。

ダメだろう。嫌だろう。有り得るべきでは無いことだろう。

だから止める。

表面ヤル気の無さそうな彼ではあるが、やはり内面には正義の心が燃え滾っていた。

「Dr……ッ」

「謙信！？ このタイミングで止めるか、普通！！」

安堵の息を吐くマルギツテと、抗議の視線を送る百代。

いや、知らねーからと。抗議の視線など送られようが世間は人様の都合など考えて動いてはくれない。何かやりたかったとしても、やれない時は当たり前前のように存在するのだ。

甘ったれるな、川神の娘が！ このリスト！ 双子リス！ 可愛いな……リス。

あのリスってメスなのだろうか。

メス同士ならワン子と百代の姉妹イメージか。素敵じゃないか！
良いな、リスT。

オレも犬Tが欲しい。犬は良い、主人に絶対服従な処が最高だ。

つと、閑話休題。関係の無い話は一端置こうではありませんか。で？ つまり何だっけ。オレがこのタイミングで2人の戦いを止めた理由？ 簡単じゃないか。

「これ以上は死合いだろ。許さんぞ」

一喝、と言うよりは一蹴。

「下らないことしないでサッサと家に帰って宿題をしろ」、と口煩く言う面倒見の良い小学生時の担任だった先生。そんな感じだろうか。

それに対して口籠ってしまふ百代。

こうなってしまう後は謙信の独壇場である。喋れないのならオレが喋っちゃうぞーバリの。バリバリバリ頭から足の先まで食べちゃうぞ。言葉で。

「い、いや、だからさあ！」

「大体ね。お前は日常の生活からして可笑しいだろう。可愛い女の子を攫っては食い、攫っては食い、奢らせ、騙し、日々を過ごす。

アホか？ もしくは鬼畜か？ 別にそれに対してはお前の思う所もあるだろうからオレから何も言及しない。

たーだーし、今回は別だ。

マルギツテはオレの受け持つ患者の1人でもある。それを相手に死合い？ 冗談じゃ無い。お前じゃなければ永久凍土の彼方まで消し飛ばす類の愚考だぞ。バカ・アホ・まぬけ」

「デイ・モールト。デイ・モールトグッツェ」

謙信さん非常に満足。

その後ろで風間ファミリーと寮母の麗子さんが拍手喝采大喝采。

ほぼ実害無く、この2名を止められるのは世界広しと言えど謙信程度のも物だろう。

あの百代ですら頭を下げる『鬼いちゃん』。

確かに怖い。食べた物の味が全てブロッコリーになるとか、人のやる事とは思えない。

そんなの人のやる事じゃねえのである。

「ヒヤッホー！ 兄ちゃんのそこに痺れるウツ！ 憧れるウツ！」

「ガクトじゃ一生出来ないね。あんなこと」

「マルさんも無事。モモ先輩も無事。謙信も無事。うむっ、大団円だな！」

ハツハツハ。クリステイアーネ、オレは無事じゃないよ。

トンファークックで顔痛い。

今直ぐ泣きたい。けど泣けない。お兄ちゃんの辛い処である。

つと、そんなオレの下に麗子さんからの一報が届く。何でもオレ宛に電話が掛かって来ているらしい。最早誰から？ などと当たり前前の事は問わない。

時は満ちた。

世界は波乱をオレに寄越したと言う事か。宜しい、ならば戦争だ。

「んじゃー、麗子さん。後片付けはバカ2人に任せちゃって下さい」

「「なっ！...！」」

「最初からそのつもりだよ。謙信ちゃんはゆっくりしておいで」
ザマーミロ。

去り際のオレのダークな笑顔を前に、悔しそうに顔を歪ませるモモちゃんでした。

こりゃ今晚の飯が美味い事は間違いない。

今晚の飯は別に美味しくありませんでした。

電話の相手はやはり辰子。

「早く来てね」と言う招集令が掛かったので怖いSMお姉さんに怒られる前に直ぐ様、旅行鞆片手に島津寮から出発する事にした。去り際、既に旅行の話をしておいた風間ファミリーメンバーからは祝福の笑顔で送り出され、残った百代からは凄まじい形相で睨み付けられた。だから如何した、ハツハツハ。

こっちは最早お前の手が届かない場所に旅行に行くのだ。

貴様は最早手を出す事すら適わない事になるだろう。そうなれば全

て此方の思う壺よ。SM嬢にさえ気を付ければ人の世の頂に立てる！
ウマイツ、メシがウマイツ！！ 貴様にも土産程度は買ってきてや
ろうではないか。

そう余裕綽々に思っていた時期が私にもありました。

「ん？ 何だよ、旅行鞆なんか持って。出発は明日だぜ？」

「なん……だと……！？」

開幕お出迎えの天使に怪訝な顔をされ、そして伝えられた驚きの事
実。

旅行は明日。だと言うのに呼ばれてしまったのは今日。この2つか
ら推測できる事はただ1つだけ。そうっ、辰子の間違いであり

「あっ、ケンちゃんこっちっ！」

ありませんでしたね、そうですか。

トコトコとエプロンを着けた辰子が謙信に駆け寄り、その手を握る。
そのままトコトコと先程と同じ様に家の中へと謙信を連れ込むと居
間へ謙信を残して1人台所へと消えて行った。意味が分からない、
理解出来ない。

そう、理解出来ないと言えばもう1つばかりある。

それは俺の座っている向かい側に辰子の弟である板垣竜兵が鎮座し
ていることである。何も言わず静かに鎮座している事は喜ばしい
が、視線だけが妙に鋭い。

「こんばんは」

「……おう」

会話も続かず。竜兵は辰子の出す夕飯を黙って待ち、一方の謙信は誰も特に気にする事無く旅行鞆に詰められていた旅行先で読もうと思っていた本へと目を通す。

無言。重い重圧。特に気にする事無くお互いに無関心を決め込む。そんな2人の間に割って入る存在が居た。板垣家の良心的な存在である、天使だ。

「そー言や、なんで謙信はこっちに来たんだ？」

「……知らん。俺が聞きたいくらいだ」

「知らんって……あつ、そっか。タツ姉か！」

「だーっ！ 放って置いてくれ、我ながら馬鹿馬鹿しくて涙が出て来る……ッ！」

ゲラゲラ、バツカだ。

楽しげに笑う天使を憎々しげに睨み付け、齒軋りまでセットでしちやう僕。大人気無い？ バカにされることが大人の役目だと言うのならオレはいつまでも子供で結構だ。つうか何なの？ この人の心を平然と抉って行く様な会話。

聞いていて胸が痛い。心臓に悪い。頭痛い頭痛が。

かと言って怒鳴り散らす程に心が狭い訳では無いのがオレの悪い処だろう。何事も中途半端はいけないと言うが、今のオレはそれを絵に書いた様な存在であった。

まるで神様・仏様。でも奴らは決して人には加担しないがね。

アレは元々1人で事足りているからこそその全知全能。我々の様な人間なんてゴミ程度にしか見えていないことだろう。

閑話休題。現在夕飯を作っている辰子に何故か呼び出され、お泊り会と言う雰囲気になっっている現状に付いての説明を誰かに求めた

い。
求めても相手がいないと言う時点で非常に世知辛い世の中になっ
ちまったものである。
酷い世界だ。

「でもタツ姉のメシは美味いから、良かったじゃねえか」

「良かったのか……？ オレはゲンさんの作った料理が恋しいよ」

源忠勝、ツンデレ少年。

事ある毎に料理を作ってくれるアルティメット善人。見かけ強面、
中身親鳥。まるでパンダ　は愛玩動物。アレは子育てもやってく
れない怠け者でした。子供が死ぬ。

どちらかと言えば母親の様なポジション。一家に一台、の様な感覚。
最高の男の子。

大和も『ゲンさんを攻略したい』と訳の分からない事を言っていた
気がする。訳が分からない。攻略って如何言う事なのだろうか。な
に、ボスなの？

ああ見えて魔王なのか。そうかそうか、何それ怖い。

「　ゲン”さん”？」

と、このタイミングで竜兵がゲンさんの名に食い付いて来た。何故
か少しばかり目付きが鋭くなる始末。当社比増し、比べる対象が何
なのかは分からないけれども。

此方をジーツと睨み付けてガンを飛ばす竜兵くん。怖いねえ、流石
は不良のボスだ。辰子辺りが見ていたら「ケンちゃんを苛めちゃダ
メ」とか言う理由でボコボコにされそうなものなのだが、今の辰子
はクッキング中なので手出し出来ない状況なのである。竜兵のター
ン到来。いつから人生はターン制になったのだろうか？ いや知ら

ね。

「男か」

「お、おう。料理が出来てツンデレのカッコいい子だぞ」

「……女は？」

「あ？」

「女はいるのかよ、そいつに」

「女の子は……居ない、のかね。たぶんだけど」

ゲンさんに彼女が居る様子はあまり見られない。大和からもそういう類の事を聞いた事は無いので絶対に居ないとは言い切れないのだが、たぶん居ない。絶対じゃない辺りがミソ。ああ言うタイプは

好きな子が居る筈と相場が決まっているのだ。

おおブルジョワジーブルジョワジー、若いつて良いね。

「紹介しろ。今直ぐに、直ぐ様に、速攻で！」

「だが断る。嫌だね、面倒臭い」

ズイズイと此方に近寄る竜兵に臆する事無く、我等が保険医はパイっと顔を背けてしまう。お前は子供か？ Oh , yes. オレはいつまで経とうと子供なのだ。

命令形で「やれ」と言われて喜んでやる男が何処の世界に居ると言うのだろうか。少なくともオレは違う、絶対に違う。相手の方が絶対的に優位でなければ易々と頭を下げる事は絶対に無い、筈だ。そ

こっ！ 小賢しいとか言わない。戦略ですから。それにしても 何故男に食い付いたのだろうか。こう言った不良のトップならば、女の1人や2人は手に入るだろうに。それが何故男？ もしかすればスカウトするつもりなのだろうか。ゲンさんみたいな良い子を？ 有り得ない。

「お前さ、もしかして……”ホモ”？」

「……」

2名の間に舞い降りる重たい沈黙。ああ痛い、視線と言うよりも心が痛い。

ほぼ直球と真ん中の革新を射抜いてしまった自分のKY能力が酷く恐ろしく思えちまう。何これ、社会に出て平気なのだろうか？ 平気な訳が無いでしょう。

社会適合性0%のオレが何を今更心配する必要があるのでしょうか。このまま唯我独尊G o m y w a yで突っ走るしか道など残されてはいないのだ。後ろを振り返れば死ぬぞ。

「アンタには分からねえよ。あんな姉貴に囲まれたオレの面持ちなんざ」

分かる訳がねえでしょう。

だって波風立てぬ人生で過ごして来た男だぞ、オレは。それがまさか自分から波風を立てようとする事なんて考える訳も無い。有り得ない。平穩こそジャステイスなのだから。

つまる所、周りに居た女の我があまりにも強過ぎた為に男にしか欲情しなくなってしまうと言う事を言いたいのだろう。

そんな凶悪なカミングアウトは正直迷惑であろう。困る、ヒジョーに。なら如何すれば良いと言う明確な答えを与える事が出来ないの

だから。ああ嫌だ。面倒臭い。

「知るかよ、そんなこと。テメエの事はテメエで面倒見やがれ。誰かに甘えるな。テメエの性癖がどんな物だろうがそれを受け止めてくれる相手を探せば良いだけの事だろうが。まずは行動を起こしてみろ。その次に考えて、悩んで、それからオレの所に相談に来い。まあ経験はあまりと言つか皆無に近いが、話くらいなら聞いてやる」

ハア、と溜息と共に本を閉じる。

折角の休み期間だと言つのに、何だか重苦しい話をしちまった所為か如何にもお節介気質は収まる所を知らない様だった。困っちゃうな、この説教するクセ。

教師としては良いのかも知れないが、口煩いだけで良い事は何も無いのだ。そんな自分が時々少しばかり嫌になって来る。だからこそ気分を転換する為に、辰子が居るのであるう台所へと顔を出し

「ぐうっ……」

「ダメッー！！！！ 空鍋はダメエツ！！」

居眠りする彼女に結構マジでビビっちゃった訳でありました。

空鍋は勘弁してくれ。

夕飯を食べ終え、オレは辰子の部屋へと足を運ぶ事になった。部屋の真ん中にある布団以外は特にコレと言った物も無いシンプルな部屋だ。ある意味ではオレに近い物を感じる。

似た者同士だ、ワイワイ……そんな訳ねえだろうか！！

野朗を部屋に連れ込むなんて何て無防備なのでしょうか！？ 年頃の女の子と男の子が同じ部屋に入ると言うことはそれだけ危険だと言っ事なのだ。

いや、だから如何と言う訳では無いのだが……

オレも手を出すつもりは更々無いので向こうにそんな事を思われればそれはそれで結構クル物がある。主に精神的に、深々と刺さるナイフの如く。

「……寂しいな、ちょっと」

自分の旅行鞆を脇に追い遣り、窓から外の景色を眺め見る。

移り、変わり行く町並み。川神市は今や10年と言う歳月と共に新たな地へとその姿を変えて行くこうとしている。それをやめると止めるつもりは無いが、何処か寂しかった。

いつかは全てが無くなって、全てが新しく変わってしまうのだろうか？

それすらも当たり前となってしまうのだろうか。

あの秘密基地ですら潰されてしまう日が来るのだ。そうなった時にオレは如何思い、そして動くのだろうか。

「ケンちゃんは時々ずうっと遠くにいるみたいだね」

「……遠く？」

「空の向こう側とか。海のおち側とか」

膝を抱えて此方を見上げていた辰子が溜息を吐く。

いや、急に溜息など吐かれても此方は何が何だか分かった物じゃないのである。

知らないからね。喋られなければ人の内面など見えたものじゃない。人の心の底が見えたら何処かの島に住む女の子は苦労せずに安定した生活を送れたことでしょう。ああいや、オレ自身は別段彼女の事は如何でも 良くない。

「此処にはいないのか、オレ」

「此処にもいるけど、気持ちはあっちで……身体は此処でも中身は向こう」

「如何言う事だよ」

「ううっ……わかんない」

体育座りのままゴロゴロと横に転がり、最後には謙信の足元に寄り添う辰子お姉さん。アレだ、猫と言うか猫科と言うか。それに近い感覚がプンプンして来やがる。

猫じゃらしでも前に翳せばプンプンと踊り狂うのではなかるうか？

恐ろしきは板垣家。

この次女もまた長女と同じく変わり者の臭いが漂って来るぜ。

「まあ取り敢えず　旅行、誘ってくれてありがとう」

「うん。ケンちゃんと一緒に行きたいから」

ああキラースマイル。

この子の持つ笑みはある意味で最も悲惨と言うか、お財布の紐が緩むと言うか。百代とは別の攻めよりも癒しの効果が強いと言えば良いのだろうか。

つまりアレだ。骨の髄までしゃぶり尽されるとか何とか。豚骨ですかチクショー！

まあでも可愛いから許すしかない辺りがオレの甘っちょろい所であろう。

「ケンちゃん、お風呂入る」

「おお風呂か、風呂は　一人で入るからね」

「ちえ〜」

油断も隙もありやしねえ。

ケツの貞操の次は男としての誇りですか、そうですか。板垣家サマサマだな。

ああ、いや、でも……”家族”みたいだ。

ふとした瞬間に思った素晴らしき言葉。重く押し掛かる痛み、記憶。

朝は早い。

明日の為に、今は少しでも早く眠った方が良いだろう。

この家に泊まると言うのは……少々恐ろしくもあるのだが。

第拾伍之卷「慰安旅行・せかんど」(後書き)

奈々様のCDが777円

皆様、是非是非お手元に奈々様を1枚

………宣伝かよ

第拾六之卷「慰安旅行・さあど」

朝起きて

隣を見たら

辰子いる

訳も分からず

ウロウロする朝

作：南波謙信

第拾八之卷「慰安旅行・さーど」

「おはようございます」

「何だい、ケン。随分と無様な格好だねえ」

「いえ……お宅のお嬢さんが色々とやってくれちゃった訳ですよ」

朝。

誰にでも降り注ぐ朝陽がやけに鬱陶しく、何故だか額に浮かぶ大量の汗が光を反射している今日この頃。朝起きたら隣に寄り添う様に眠っていた辰子さんは完全放置。

自分だけで下に降りて来て、朝からSM女王とご対面と言う訳だ。何だよ、これ。罰ゲームかよ。

「今日が発ですよね。朝食の用意は」

「タツが起きてからで良いよ」

左様ですか。

もしかすればオレが作る事になるかと思って身構えちまったが、そんな事はないか。

暫く身体解し程度にストレッチを嗜んでいると辰子が降りて来た。やけに不服そうではあったが、オレは何も知らない。知りたくも無いと言うのも現状。

とりま、現在オレこと南波謙信は板垣一家と共に旅館へと向かう事になったのだ。

場所？

いや、知らん。その辺りは亜巳さんに一任してある。

「電車が……オレはてつきり奴隷に」

「何か言ったかい？」

「いえ、何も」

一抹の不安とほんの少しの希望を胸に、南波謙信旅行デビューである。

電車の中は至って平々凡々。

窓の傍で向かい合う形で座った天使と亜巳さん。その隣に控えるのはオレと竜兵。

最後にオレの隣で、通路側へと座るのが我らが辰子だ。

電車の振動が心地良かったのだらう。衝天しちまった辰子が身体を預けて来たが、取り敢えず実害は何も無いので読書に熱中。

天使は亜巳さんに質問攻めで、竜兵と言えば黙って寝て　　ねえ。

視線がたまにオレへと突き刺さるが、これも華麗にスルー！。何だ、此処はスルー検定会場なのか？

不安が募るが、それも見ないフリでそのまま旅館にまで持って行く。湯船にでも流しちまえば結局は何も無かった事に出来る。

温泉最高、ビバ温泉。

つう訳で

「着いたね。ケン、荷物持ちご苦労だったね」

「いえいえ、これ位は当然の義務と言うか役割と言いますか」

「だからってあの馬鹿みたいに長い坂、全員分の荷物持つてくか…」

「ケンちゃんとお風呂だー」

「……風呂、か」

見掛けの壮観っぷり。

庶民には手の届かないまでの壊れっぷり。

出迎えに出て来る女将以下数十名の従業員の方々による圧迫っぷり。総じて3点。

オレの顔を引き攣らせるには十分である。

亜巳さん……アンタ凄えよ。一斉に「いらっしやいませ」って頭を下げた人間が作り上げた道の上を女王宛らで歩くアンタは間違い無くナンバー1だ。SM嬢的な意味で。

オレなんて遠慮しがちに苦笑い浮かべながら歩いたもん。

事の重大さに気付いていない天使と辰子も亜巳さんに続き人道を闊歩。ヒューマンロード

竜兵は 不良の総代と言う事もあって動じちゃ居ない。

恐ろしいな、板垣家。案外とカリスマ性があるのではなからうか…

…？

ああ、いや、ダメ。

コイツらに一番持たせちゃいけないのはカリスマ と言うか集客率。

亜巳さんの奴隷（雄豚）に不良の群れ、それを更に増加させると…

…もう数えるのもイヤ。

案外、川神院ってピンチなのだろうか？

それより、オレは温泉である。
丁度良い感じに汗も掻いた事だし、此処は熱い湯船に浸かりたい。
そう言う訳で旅館に通されたと同時に竜兵に荷物を任せ、マイ桶片
手に即温泉に直行。
ルンルン気分で男湯へと視線を向ければ

『現在清掃中』

「Oh……」

頂垂れちゃうのはご愛嬌。

駄々っ子の様に地べた踏んで地団駄踏まなかつただけ褒めて欲しい
ぜ、まったく。

まあ両目から流れ出る涙の滝は止められませんでした。

暫く男湯の前で体育座りしていると、中から従業員の方が出て来た。
Q・使用OK？

A・OK

フウウウウウウウウツ!!!!!!

キタコレ！ オレの時代キタ！ 漸く時代がオレに付いて来た！
これで勝つる！！

そう思っていた時期が私にもありました。（悟りの領域

「……しかしまあ、アンタの身体って凄えよな」

竜兵の何気無い一言に、謙信は身構えた。

はい、そうです。

彼です。竜兵です。モーホーです。向かい側の女湯には板垣三姉妹
が控えている。

タイミング良く現れ、風呂に入ると言いやがったのだ。

何処に隠れて居やがった。此処に恥知らずな板垣家がいた……

それに、考えてもみてくれ。ホモと一緒に裸の付き合いと言っただけ
でも譲歩しているのに、更に身体の事まで話題にされちゃ嫌でも身
構えるわ。つつか身構えるなって言う方が無理だろう。

誰にだって護りたい物の1つや2つある筈だ。

オレはそれが、自身の貞操だったと言っただけの事なのだから。

「その傷、銃チャカか？」

竜兵の指差した先 謙信の肩口には皮膚が変色して居る部分があ
った。

ああ、そこは確かに内紛の戦闘地帯で撃ち抜かれた傷跡の1つであ

る。良く見ていると褒めるべきか。それとも気味悪がるべきなのか。どちらとも取れない笑みを浮かべ、謙信は懐かしそうに傷跡を撫でた。

9mmパラベラム弾によって抉られた肩の肉。355m/sにて飛んで来る8gの質量は肩を貫通し、骨を砕いて此方と向こうへ小さな穴を開けていく。

風通しの良い穴とは決して言えず、そこを抑えながら必死に安全地帯まで逃げ回った事は今でも尚胸高々に語る事の出来る自分の武勇伝の1つであった。あ、やっぱり訂正。あの時のオレの生き意地の悪さは誇れる物じゃありませんでした。

「ヤンチャした頃の思い出だな。今じゃ到底出来やしねえさ」

「いや、アンタ今でも十分ヤンチャだろ」

何を言う。今じゃ地雷原の中を突っ切る事も、治療の邪魔になるからって軍人を殴り飛ばす事もしないオレが今でも十分ヤンチャだと言うのか。

精々が子供心を忘れていない小僧とでも言っただけなのだが、世の中とは儘ならない物だと言うのは世間様を旅して来た謙信ならば十分に分理解出来る。

最早自分の常識が一般の常識に適應されないと言う事は否が応にでも認識した。ならば今の在りのままの自分ですら普通とは懸け離れているのだろう。

恐ろしい。ならば百代は一体どんなカテゴリに割り振られるのだろうか？

“モンスター”？ “プデター”とか、その辺りの気もするのだがね。

「しかしなあ、お前が未だに辰子の弟だとは信じ難いねえ。血気盛

んだし、ホモだし」

「アンタ分かってねえだろ。普通な、周りに化物しか居なければ対象は」

ズガンツッ！

恐ろしい事この上無い。そして竜兵、隣が女風呂である事を理解すべきだろうに。

柵の上から降って来るのでは無く、柵を貫通する辺りが一般との違いか。

湯気で恥部を隠した竜兵が目の前に横たわっており、謙信は頬を数度痙攣させながらも何とか平静を保つ為に肩からゆっくりお湯へと浸かった。

やべえ……超気持ち良い。

どんな世界だろうが、どんな場所だろうが、日本人であるのならはお湯に浸かると言う行為はやはり心も身体も安らがせてくれる物である。良い湯だな、アハハンなどと口から勝手に出て来ちまう言葉をそのままに肩へとお湯を掛けて最高の温泉を満喫する。

実に良い。マジで最高。

傷口に染み渡る様なお湯は最早この場に限って大金すらも凌駕する。まあ金は欲しいのだが、こう言った場所に来たのだから空気を読むべきではなからうか？

「ジーツ」

「タツ姉、見過ぎだろ」

「だってえ、ケンちゃんが掘られてないかなあって……」

「心配性だね。アイツならリュウが襲い掛かってきても返り討ちだよ」

「そんなことないよ！ ケンちゃんは子犬みたいにひ弱で、可愛いもん！」

誰が子犬じゃゴラツ。

あとね、そのブチ抜いた柵から此方側を見ないで頂きたい。女は其方で男は此方を決められているのだからその間にある敷居を壊しちや意味が無いでしょう。フリーダムも度が過ぎれば迷惑になると言う事を知って下さい。

壊れた柵の隙間から此方を見る辰子を見やり、シッシと狗を払う様に手を動かすと向こうは湯気越しからでも分かる程に此方を凝視して居た。”消える”ってジエスチャーしたよね？ 何で凝視するのが面白いでしょう、その理屈。

ああ分かったから、分かったからコツチを見るな。風呂出たらコーヒー牛乳買ってあげるから、ね？

「みんなにコーヒー牛乳買ってくれるって」

「サンキューな、謙信！」

「アタシは熱燗でも良いけどね。ケンツ、熱燗を買ってきな！」

テメエら全員じゃねえんですけどおっ！？

いや、良いよ。どうせ分かって居た事ですよ。買えば良い訳だろ。買ってやるぞ。

ブクブクと泡を立てながらお湯の中へと沈んで行く。

ああオレの財布よ。如何して君はそんなに女の子に弱いのかな？

……それはね、君の周りには怖い女の子しか居ないからだよ。
相変わらずの困った金巡りに同情ともとれる溜息を漏らし、取り敢えず今だけはこの効能アリアリな温泉で身体を癒す事に専念するべきだろう。

／休憩室にて

フルーツ牛乳片手に、マツサージチェアに座ろうと思っていた。思っていた筈なのだが、如何やら根本的からオレの常識と彼女たちの常識とは何かが違うらしい。いや、だってさ、風呂上りに辰子から「こっちおいで〜」って言われたからコーヒー牛乳でもせがまれるのかと思えば抱き締められた。役得ですぬ役得。

柔らかな感触と脳髓の奥まで蕩けさせる様な甘い香りを直接送り込まれ、一瞬だが意識が落ち掛けた自分に自分が一番ビックリである。此処で落ちれば危ないのは自分だ。落ちれば死ぬ、男として。

「ケンちゃんフカフカ〜」

「ちよつ、離せ！ 離してくれ、離して下さい！」

辰子の胸から逃れる為に身体を擦るのだが、辰子自身がそれを嫌って寧ろ余計に押し付けて来る。チョー困る、得と言えば得なのだが恥かしい物は恥かしい。

ホラッ、椅子に座っている老紳士が可愛い孫たちを見る様に此方へ微笑みを向けている。

やめてっ、見ないで！

こんなオレの痴態を見て何が楽しい！？ 笑わないで、頼むから！！

で。流石の無敵超人謙信くんでも色々と限界が来たのでマッサージ
チエア&フルーツ牛乳のコンボ攻撃を諦めて辰子にマッサージを頼
んだのでした。めでたし、めでたし。

「あつ、ああ……そこイイ……サイコー……」

「ここお？」

「そこつ、チヨー気持ちイイ……」

椅子に寝転がった謙信の上に馬乗りになる辰子。

力加減は分かっているらしく、謙信が気持ちのイイと言った場所を
例外無く丁度良い按配の力で刺激してくれる。これは マッサージ
ジチエアを越えたかも知れない。

「何だい、あの緩み切った顔。叩き直してやりたいねえ」

「でもさつ、タツ姉楽しそうだし。水差しちゃ悪いかもだぜ？」

「……タツがあそこまで懐くなんて、アイツも見所のある奴だね」

亜巳さまと天使ちゃんが第三者として謙信と辰子の様子を見守る。
そう言えば粗大ゴミ《りゅうへい》は一体何処へ棄てられたのだろ
うか？ 公害になりそうなので東京湾辺りに簀巻きにして沈めた方
が良いと思案するが。

それでも多分、アイツなら帰って来る。地球ホームに好物ソングがある限り。

……恐ろしい男だ。

ギャグ補正とかその他諸々を味方に付けたキャラ程に突破し辛い物
は無い。空気に。

オレも何かしらの特殊能力を身に付けるべきだろうか。

イベント戦のボスみたいに絶対に倒せないとか。常時防御とか。それはチートか。

「ぐうー……」

ところで辰子さん、オレの上で寝るな。

何処かしこでも眠るクセを如何にかして治せない物なのだろうか。これ危険ってレベルじゃ無いだろう。まあ中途半端な不良さんの群れに誘拐されてもコイツなら大手を振って平然と帰って来る気もするのだが、そう言う事に巻き込まれると言うのは我慢ならん。

不良と言うか、中途半端な奴等が悪者面すると言うのが納得出来ないのだ。中途半端な悪役など要らないだろう。どうせブツ飛ばされて終わりだと言うのならば『完全にして崇高なる悪』と言う物が必要になる筈である。

まっ、そんな器は川神には居ない。釈迦堂と言うクソツタレな例外はあるが、アレは支配よりも戦闘に比重を置く変態さんであるので除外。

「亜巳さん、辰子のヤツ何処に運びます?」

「部屋まで運んでおくれ。天、部屋まで案内してやりな」

「あいよ! 付いて来いよ、部屋凄えぜ!」

辰子をお姫様抱っこで抱き、先導する天使の後に付いて行く。

この旅館は1つ1つの部屋のセキュリティが凄まじい。指紋認証、カードキー、施錠ってどんなセキュリティだ。入るのも一苦労する旅館って如何なのだろうか。

それだけ重要な人物が泊まりに来ると言うのなら分かるが、来ないだろう? 多分。

……総理とかは、いそうだけれども。

と言う訳で案内された部屋は確かに予想の斜め上を突き進む物であった。

高い金払って泊まるのだから確かに部屋も豪華になるのは当然なのだが、それにしたってコレは如何なのだろうか。

部屋の真ん中にマライオンがある。必要性が分からん、水の無駄遣いだらう。

ベッドの脇にあるスイッチ。それを押すと降りて来る大型モニター。まるでそこが小さな映画館へと変貌した様にすら思えるではないか。あー、いやー、うん。これは酷いな。

何処の貴族だよ。一般市民には到底届かない領域にある珍百景じゃねえか。

凄いな？ 憧れちゃうな？ 憧れないでしょ、度が行き過ぎれば怪異だよ。

「外見和風で中身洋風って……これじゃ異世界だろ。VIP^{ルーム}部屋か？」

「なあ謙信、ガンシューしようぜ！ガンコン持って来たからさ！」

「ぐう」……」

それにしても、こんな異世界に来ようが板垣家は1μたりとも揺るがない。

豪胆と言うべきか、それとも間抜けと罵るべきか。

どちらにせよ、オレには真似など出来る筈も無いことなのである。無理でしょ。

辰子をベッドに寝かせ、顎が外れる程の大画面でゲームを起動する天使の隣に腰を降ろす。ああゾンビを撃ち殺すゲームですか。

確かに、こんな大画面でやれば迫力は満点だろう。

慣れた手付きでゲームを操作する天使の手を見て、「あつ、この子もやっぱり板垣家だね」と半ば思考はトリップ気味。常識が見えない。

亜巳さんは多分だが、休憩室か何処かのマッサージチェアでゆっくりしているだろう。

『オレの役目って、亜巳さんの時間を作る為の囿?』

Oh , my god. Holy shit!!

ですよ。予測だけの筈だったのに確定的な事実な気がムンムンと漂って来ている。

現に妹2人の面倒は全て謙信が引き受け、休憩所では亜巳さんがリラックス中。

作戦通り、ってヤツか。亜巳殿は頭がイイでござるな。ハッハッハッハッハッハ。

「笑えるかああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ズドンッ!!

謙信の身体に稲妻、奔る。

何だよ、やっぱり雑用の類じゃねえか! いや確かに温泉も入れて飯も食えるのだから多少の雑用は寧ろ喜んで受け入れるべきなのか? あ、いや、ちょっと待て!? これお礼だよ、確か。お礼って言われて此処にいるのよね。だったら雑用押し付けられる必要はねえだろうが! やっぱりオレ間違ってるねえ、何コレ茶番なの!?

「何だよ! オレちょっと下に」

「戻ったよ」

「行く必要性は無いから一緒にゲームしようぜ、天使!!!!」

女帝亜巳お姉さま帰還。反抗心とか立ち向かう気概がポツキリ根元から圧し折れ、血走った目で謙信は天使へと詰め寄った。

逆に驚くしかないのは天使だ。行き成り意味不明な事を叫んだり、急にゲームしようって詰め寄ったり、忙しい奴である。

だがまあ、天使としてはゲームの相手が居てくれると言っただけで嬉しい事なのだ。

「いいぜ、足引っ張るなよ！」

ガンコンをガチャガチャ弄りながら返答する天使を見て、本当に名前の通り板垣家では彼女が天使な気がしちまうのは何故だろうか？

SM嬢のお姉さまに何処でも眠る最凶の次女、最強のホモ。酷いラインナップだ。客が寄り付かない始末であるうに。

故に、此処で救いの一手があるとすれば天使のみ。天使ちゃんマジ天使。

天使マジ天使だろ。

ヤバイ、何か凄い道に目覚めそうな気がする。

具体的に言つと外道か修羅の道。どちらかと言つと社会的に抹消される立場の。

そんな気持ちを押し殺し、ゲームスタート。

見た事のある洋館が舞台のホラーゲーム、主人公はゴリラとショーアの美人さん。

「凄いな。全部HSか」

「へへんツ！ゲーセンで鍛えたからな」

「ふうん……あつ、LIFE見つけ」

「あつ謙信、お前体力満タンじゃねえかよ！ それはウチのだ！
！」

「鍛え抜いた腕見せて下さいよ、
天使先輩えんじえる」

「うっわっ、うぜえ！」

現在は順調にゲームを攻略中。

何だろうなー、こう言うのって……結婚式でやるケーキ入刀に近い
気がする。

別に初めての共同作業と言う訳じゃ無いが、無意識下で2人の共同
作業ですよ。的なアピールをしてしまうと言うか。まあそんな事を
すれば物理的な制裁が下るのだが。

「洋館デートだな。洋館デート」

「羊羹？ 羊羹食いながらデートするのか？ ギャハハ、気持ち悪
く！」

「洋館だ……良いだろ、和菓子。今度食わせてやろうか？ 滅茶苦
茶美味い店あるぞ」

「へえ〜。謙信って川神のこと何でも分かるな」

「そりゃ……好きだからな。棲み易いし」

徒歩で移動出来る範囲内にコンビニ・本屋・ゲーセンが揃っている

場所など易々とは見付からないだろう。それも武芸者ばかりの街ともなれば尚の事である。

昔はコンビに・本屋・ゲーセン処か、病院にすら数十km歩かなければ到着出来ない様な辺境とも言える場所に住んでいたので此処川神市の住み心地は極楽の一言だった。

欲を言えば、昔の町並みが今も残っていてくれれば……と言う事なのだが、その辺りは仕方の無い事だ。人も進化して行く様に、町並みだって人の生活に合わせて変化して行かなければ順応出来ないのだから。

「此処に来る前は海外だった？ 凄えよな、海外なんて行った事ねえぜ」

期待に目を輝かせている所悪いがね、天使。ゲームの画面見てくれないよ。

お前の画面さつきから血で真っ赤だけどね。それってGAME OVERじゃなくないのか？

いやいや、まさか天使ともあろう者が人と話をして居るだけでコントロールミスをする等と言う事はあるまいよ。

ならば何かのミスに違いない。孔明か？ 孔明の罠か。

「あつ、死んだ!？」

「……天使サンマジカッケー」

「うっせー！ お前があんなに回復アイテム取らなきゃ平気だったのに……」

言い訳はね、何処まで行こうが言い訳なのだよ。

死んだら終わりでしょうが。何処かの金髪でゲロ以下の臭いのする

吸血鬼も言っていただろう？ 『勝てば良かるう』、と。あれ、でもあの吸血鬼って確か……死んだよね。

「あつ、死んだ」

「お前だつて人のこと言えねえだろ」

「オレは良いの。ゲームなんて滅多にしないから」

そう言つてガンコンを床に置き、お尻のポケットに財布がある事を確認して起立。

あー、尻が痛い。床にベツタリはやはりオレの肌には合わないと言ふ事か。

軽く首を捻り、そのまま背伸び。

うーっと唸り、漸く本来の目的の為に足が一步前に出る。

百代たちへのお土産も考え、少しの散歩がてら探検ごっこでもしてみようか。

「私も行く」

のっそりと起き上がるベッドの上の辰子さま。

おい辰子。

お前さつきまでオレの背中とベッドの上で居眠りを……もう良いや、面倒臭い。

付いて来たいなら勝手にしやがね。

滝を見ることが出来る、と言うのでそこまで少し足を延ばしてみる事にした。

離れている筈だと言うのに感じる水飛沫の冷たさ。周りに居る観光客も楽しそうに携帯やカメラを構えて思い出を媒体へと記憶して行く。一時期のテンションとは恐ろしい物だ。

あれ、撮って帰った後に如何するのだろうか？

メモリに入れたままで放置じゃ無いのか、結局。

轟音が耳を駆け抜け、自然の力強さを如実に謙信と辰子の2人に見せ付ける。が、その驚異を前にしても当の2名は表情も変えずに滝壺を見下ろしながら

「竜兵のヤツ、あそこに落としたら……」

「たぶんダメだと思う」

と言う物騒な会話を続けていた。物騒である。人が居るだろう、せめて夜になさい。

まあ本人たちにとって竜兵はそこまで邪険な存在では無いのだが、やっぱり同性愛者と不良が混ざると色々と危機を覚え始めるのだ。如何にも、尻が気持ち悪い。竜兵に狙われているのではと錯覚しそのうになり、その恐怖を振り払う様に首をブンブンと振り回す。恐ろ

しい想像だ。二度と考えたくない。

その悪夢を振り払う為に、謙信は辰子へと視線を向けた。あちらも、楽しそうに此方を見詰めている。

ニコニコワクワク、次は一体何処へ行くのかな？ 次は一体何をするのかな？

まるで子供の様に動作各々に興味を示し、一喜一憂でフワリとした笑みを浮かべる。ああ竜兵と違って、彼女は見ていて飽きる事は無い。

たまに行き成り居眠りする事があるが、それを差し引いたって面白い子である。

あの日、あの川原でオレは彼女に出会った。運命的な出会いだったと気取るつもりは毛頭無い。オレはロマンチストでは無いのだから気の利いた言葉も思い浮かばない。

ただ もし、彼女との出会いに意味を見出すとすれば、それはきつとオレの『安らぎ』と『安息』以外に他ならない。

暴力と力が支配するこの世界に置いて、ただ川原で居眠りする自由気侷な少女の生き様は謙信と言う医師の端くれにとって羨ましい以前に素敵にすら思えた。

何て素晴らしい人生だろう、と。

こんな世界があるのならば、オレはオレとしてオレの為にオレであり続ける必要は無い。

自由に生きたとしても、誰に怒られる事は無い。

『一緒にお昼寝する？』と彼女に問われた事は何度あったか。それを断り続けても、彼女の傍を離れないのは何故だろうか。

そんな物は決まっているが、やはり確定的な答えは出て来ない。恥かしいけど、嬉しい。嬉しいけど、恥かしい。

そしてオレ自身は、そんな自分が何処か誇らしいのだ。

ありがとう、辰子

ありがとう。お前と出会えて本当に良かった。ありがとう。

この世界にお前と言う存在が居てくれる事をオレは心の底から嬉し

く思う。

ああやっぱり……オレはこの子に毒……毒……毒……されているのかもしれない。

クスクスと笑いながら、謙信は辰子へと手を差し出す。

ダンスをする場合に手を差し伸べるのは男から。女性に手を差し出させるなんて失礼に値する行為ではないか。故に、男性がリードしなければ男が廃ると言うものである。

あー、はいはい。

女性経験もペーパーの初心な坊やが言っても説得力は皆無ですね、すみません。

「行くか、辰子」

「うん。ケンちゃんとデートだ」

「デ、デデデデート!? ちゃ、ちゃうわー!」

ああ恐ろしきデートと言う単語。魔の響き。

現代っ子の持つ魔性とも言つべき特技の1つであろう。あの手この手で落とせなければ家に持って帰れば良いじゃない、そんなアホ真っ盛りの現代っ子。

その1部に自分もなろうとしているのだから堪った物では無い。

宗教とかに走ろうかなー、日々溜め込んだアレやコレやのフルコーズを一気に収縮・解放してやろうか。主に被害は物理的になるかも知れないが、その辺りはご愛嬌。

いやでも宗教ダメ絶対。

こんな自由な日本と言う国であろうと、悪い奴らは一杯居るのである。そんな奴らに捕まれば肉処か骨の髄までしゃぶり尽くされちまうのだ。現時点で百代と辰子の2名にしゃぶり尽くされている最中

だが、細けえ事あ気にしちゃいけねえ。
兎に角、ダメ宗教。キリストやイスラムとか仏教は良くて、怪し
げな物はダメなのよ。

まあそんな危ない思考を脳内で展開・拡張して居た謙信に飛びつい
て来る辰子。デートと言う単語に彼は顔を真っ赤に染めて反論しな
がら、そのまま背中に辰子を背負って探索　と言う名のデートを
再開したのである。遺憾ながらも。

次は土産屋にも行くでしょう。辰子に何かせがまれるかも知れな
いが、お財布の中にある現実的な数字を直視しない為にスルー推奨。
ビバ灰色の夢世界、現実なんて腐ってやがる。もう夢だけしか見ら
れない。

お酒って良いよね。現実を逃避する為にはとびつきりな飲み物だ。
今夜は亜巳さんに付き合っ自分も少々拝借する事にしましょうか。

それでは早速、今日も今日とて何処に行こうか。

風の吹くまま気の向くまま。

自由気侷な1人旅。

背中に乗つけた風来坊と、今日も楽しく旅をする。

今日も今日とて何処に行こうか。

2人で1人の自由旅。

第拾六之卷「慰安旅行・さあと」(後書き)

遅くなってしまって申し訳ありませんでした

中々、中身が浮かばない……

まじ恋やろっ

もっかいやろっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8453q/>

真剣で兄貴を愛しなさい！

2011年9月5日21時26分発行